

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

野崎遺跡は、米代川水系・下内川と乱川に挟まれた釈迦内台地の北東部、南に向かって延びる舌状台地南端の段丘先端部に立地する。調査区は標高約76～82mの丘上の平坦面と南東端の斜面部である。主に平坦部の南側から縄文時代（早期、中期、後期）の遺構・遺物が検出され、北側から古代（平安時代）、中央部からは中世（室町時代）の遺構・遺物が検出された。遺構の分布は検出された大きな溝遺構を挟んで南と北に分かれ、北側では縄文の遺構はほとんど見られず、逆に南側から平安の遺構は見受けられない。また、その溝をまたいで中世の建物跡があった。遺物から近世にも利用されていたことが窺え、今現在も畑として使用されている。野崎遺跡は縄文時代早期から室町時代までの複合遺跡であり、人が断続的ではあるが利用し続けた地であるようだ。台地上の平坦面は調査範囲をこえて北に延びていることから、遺跡はより北に広がると考えられる。

第2節 調査の方法

確認調査の結果に基づき、表土除去から全て移植・スコップ等を利用し人力で作業を行った。排土置き場は南西端部と東斜面下の平坦部を利用した。

作図用のグリッド配置は、調査区内の工事用中心杭No.6を原点(MA 50)とし、この点を通る真北方向のラインをMAライン、このラインに直交する東西方向のラインを50ラインとする基準線を設け、これに平行する4mラインを原点から東西南北に必要数設定し、これらのラインの交点に杭を打設して4m×4mのグリッドとした。グリッドの表記は、東西方向を表す2組のアルファベットと南北を表す数字で示している。2組のアルファベットは左を母単位、右を子単位として、20単位で1母単位という表記法である。グリッドの名称は、東から西に向かって東西方向を示す・・L S・L T・MA・M B・・というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す・・48・49・50・51・・という2桁の数字を組み合わせて、各グリッドの南東角に打設されている杭の名前を付けた。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィルム及び必要に応じデジタルカメラで行った。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入した袋に入れ、取り上げた。

遺構の確認は平安時代がⅢ層上面を中心とし、縄文時代はV層上面を中心に行った。遺構番号は、確認毎に1から通し番号を付した。

第3節 調査の経過

平成18年6月6日から10月31日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。本調査に先立ち5月25日よりグリッド杭打設を開始した。

【第1週】6月6日～6月9日

作業員に作業内容の説明や諸注意を行い、器材の搬入、環境整備を行った。調査前風景写真を撮影。人力による雑草除去から開始した。調査区北東側から表土除去を人力で開始。

【第2週】6月12日～6月16日

確認調査トレーニングの掘削を始め、精査の結果、調査区北東側と南西側の基本層位を確認した。

【第3週】6月19日～6月23日

Ⅲ層上面での遺構検出作業を開始。調査区北東部、中央部において竪穴住居跡を検出した。

【第4週】6月26日～6月30日

Ⅲ層面での遺構検出作業を続行。新たに溝跡や土坑を確認。南西部から縄文土器が出土。

【第5週】7月3日～7月7日

調査区南側基本層位図を作成。調査区南西側で縄文時代の土器埋設遺構を検出した。

【第6週】7月10日～7月14日

調査区北東側で南西～北東方向に延びる溝跡を確認。中央部の竪穴住居跡から入り口と思われる張り出しを確認。

【第7週】7月18日～7月21日

遺構検出、調査を進め、Ⅲ層での検出終了箇所からⅣ層検出へ向け掘り下げを開始。

【第8週】7月24日～7月28日

調査区南西側からⅣ層での遺構検出作業を開始。石器出土集中区を確認。

【第9週】7月31日～8月4日

調査区北東側もⅣ層での遺構検出作業を開始。中央部から焼失したと思われる竪穴状遺構を検出。

調査区南側では2基目の縄文時代の土器埋設遺構を確認。

【第10週】8月7日～8月11日

調査区南西側で地山面での遺構検出作業を開始。西北方向から東南に向けて調査区を横断する溝跡を確認。調査区南側で縄文時代の竪穴住居跡を検出。

【第11週】8月14日～8月18日

盆休み

【第12週】8月21日～8月25日

調査区南側でプラスコ状土坑を検出。また石器集中区では石器剥片が多数出土。

【第13週】8月28日～9月1日

新たに調査区南側でプラスコ状土坑を検出。

【第14週】9月4日～9月8日

調査区中央の斜面の縁に南西から北東へ、建物跡と思われる7基の柱穴が連なる柱列を確認。

【第15週】9月11日～9月15日

空中写真撮影を週の半ばに行った。そのため各遺構を精査し、後半は精査完了状態の遺構の写真撮影を行った。

【第16週】9月19日～9月22日

南東側調査区外に広がる焼土の広がりをつかむため、その周辺を重機で掘削し、精査。調査終了区域の地形図作成を開始。

【第17週】9月25日～9月29日

調査区南側で1×3間の掘立柱建物跡を確認。

【第18週】10月2日～10月6日

調査終了に向けて、各遺構等を多方面から撮影。

【第19週】10月10日～10月13日

調査区全域で地山面による遺構検出、遺構精査を行った。

【第20週】10月16日～10月20日

地山面上での遺構精査、写真撮影を行った。

【第21週】10月23日～10月27日

調査区全域の調査終了。終了写真、遠景写真を撮影。

【第22週】10月30日～10月31日

危険箇所の埋め戻し。現場の撤収と引き渡し。

第4節 整理作業の方法と経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせ、適宜縮尺を変更し第二原図を作成した。第二原図の作成は平成18年11月～平成19年2月にかけて行い、トレースは平成19年2月～3月にかけて行った。

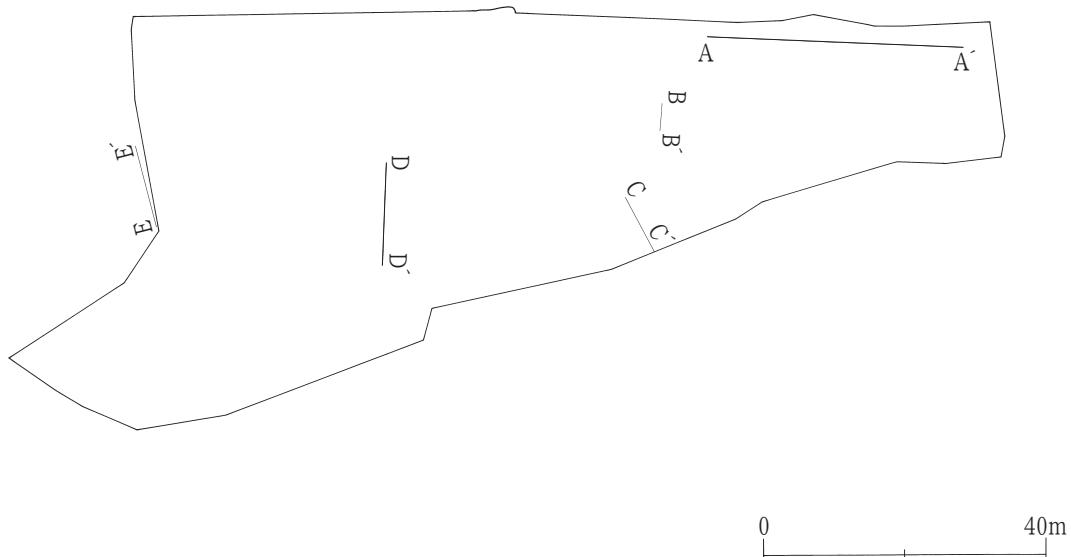
遺物の整理は、平成18年11月～平成19年9月にかけて秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行った。洗浄・注記・接合・復元作業・実測・写真撮影を行った。ある程度復元された土器は実測図を作成し、必要に応じて拓本を探った。実測図は基本的に1／1で作成した。

第4章 調査の記録

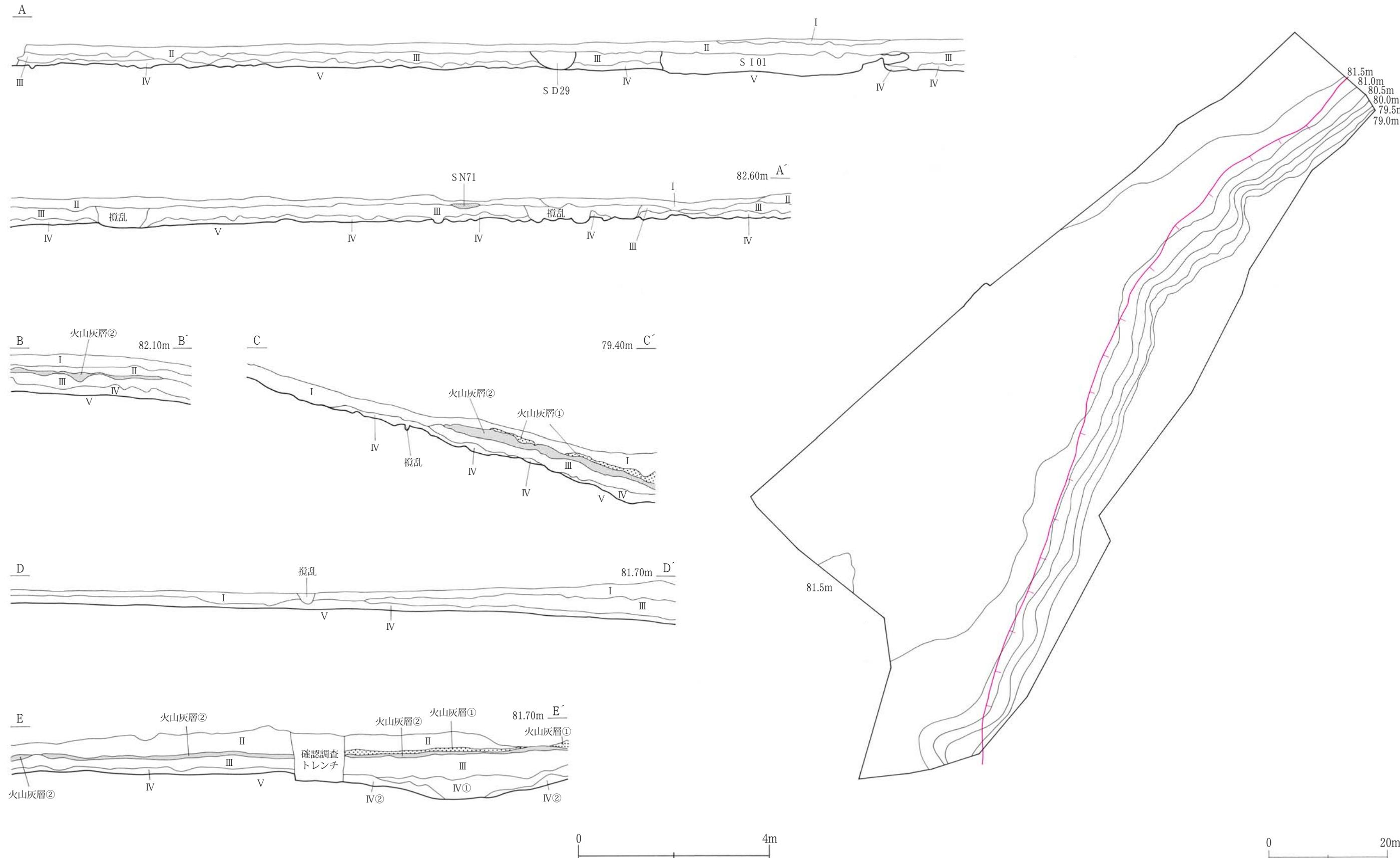
第1節 基本層序

遺跡の地形は、台地平坦部とその南東側にある傾斜地で構成される。平坦部は畠地として利用されていたため攪乱されており、特に南側が深く削平されていた。傾斜部は、斜面下に行くほど層厚を増す。基本層序は次のようである。

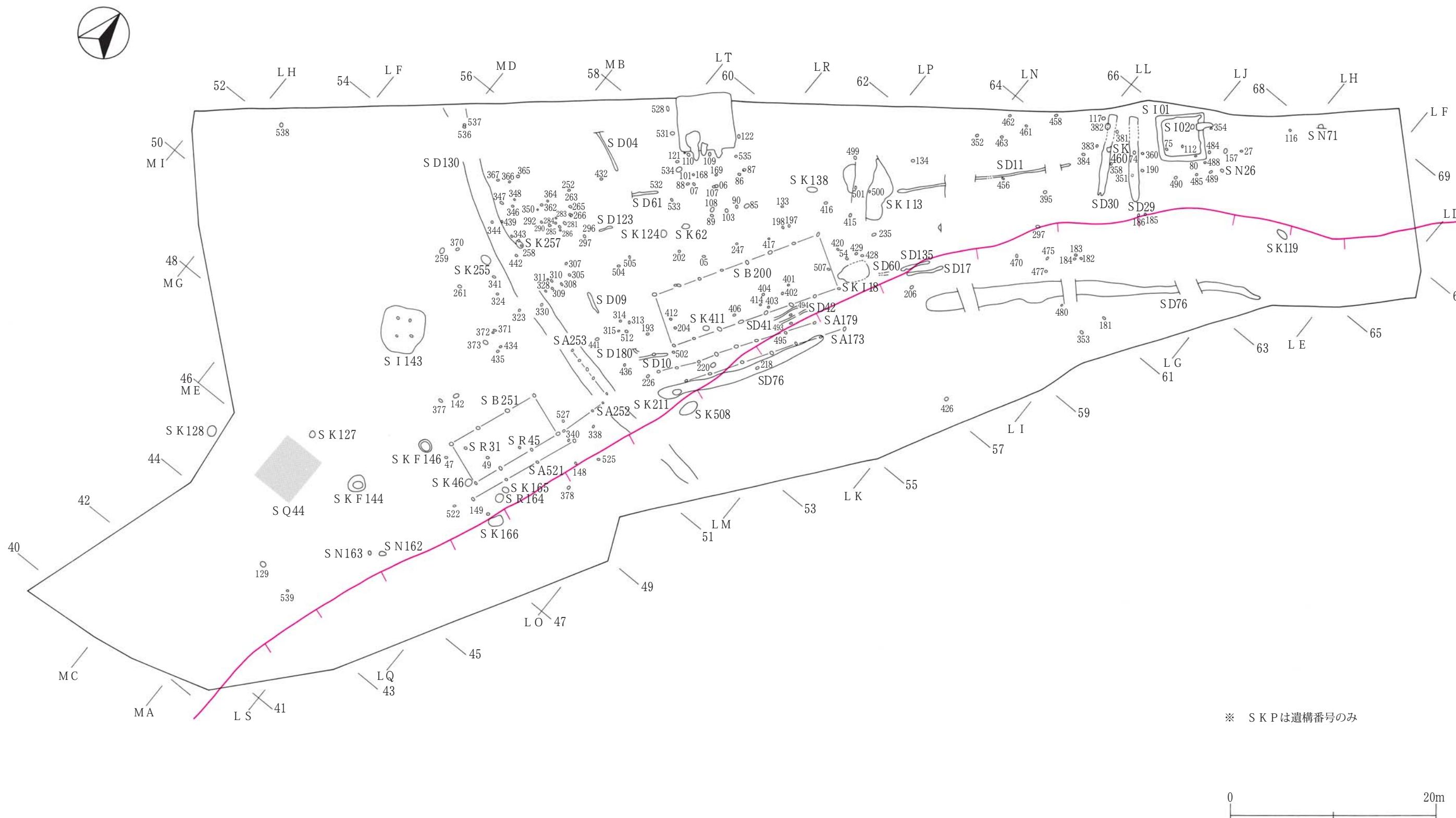
- I層 黒色土 (10YR 2/1) シルト質。草根が混入する表土。
- II層 黒色土 (10YR 2/1) シルト質。径1~7mm程度の軽石が全体に混入する耕作土。
- 火山灰層① 褐色 (10YR 4/6) の火山灰粒子と黑色土 (10YR 2/2) が混合する層位。火山灰粒子は915年に降下した十和田a火山灰と思われる。
- 火山灰層② 黒色土 (10YR 2/2) 十和田a火山灰降下時の熱により被熱したと思われ、他の層位と比べて少し赤くなっている。特に調査区東側の斜面下で強く被熱していた。
- III層 黒色土 (10YR 1.7/1) シルト質。上層部で平安時代の遺物、下層部で縄文時代の遺物が出土する。
- IV層 黒褐色土 (10YR 2/2) ~暗褐色土 (10YR 3/3) シルト質。黒色土から地山土への漸移層。平坦部で見受けられる。
- IV層① 黒褐色土 (10YR 2/2) 砂質土の多いシルト質土。とても堅くしまっており、2~3cmの小石が混入している。斜面や沢部で見受けられる層位である。
- IV層② 暗褐色土 (10YR 3/3) 砂質土の多いシルト質土。とても堅くしまっており、2~3cmの小石が混入している。斜面や沢部で見受けられる層位である。
- V層 褐色土 (10YR 4/6) 2~3cmの小石が混入する地山土。



第4図 調査区基本土層作成地点



第5図 調査区基本土層図・地形図



第6図 グリッド・遺構配置図

第2節 検出遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

本節の遺構を縄文時代と特定した根拠は、縄文時代の遺物が出土したことのほか、基本層位と遺構の覆土と照らし合せた結果による。縄文時代の遺物は、主に第Ⅲ層（黒色土）下位から見つかっているので、それよりも下層である第Ⅳ層土（黒褐色土～暗褐色土等）を基調とした遺構群は縄文以前のものとして、本節で扱うこととした。

（1）竪穴住居跡

S I 143（第7・8図、図版3）

〈位置・確認状況〉 調査区南側平坦部、MA・MB 49・50グリッドの第Ⅳ層で、確認調査時のトレーナーで切られた黒褐色土の不整形の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 重複関係は見られない。

〈堆積土〉 覆土は、自然に堆積したものと思われ、3層に分けられた。1層は第Ⅲ層に由来する黒色土、2層は第Ⅳ層①に由来する黒褐色土と思われ、小石とともに砂質土を多く含み、とても堅くしまっている。3層は第Ⅳ層②に由来する暗褐色土と思われ、2層と同様に小石と砂質土が多く、堅くしまっている。

〈平面形・規模〉 床面は長軸3.60m、短軸3.32mの隅丸方形であるが、上面は長軸4.55m、短軸4.13mの不整形を呈している。確認面からの深さは53cmである。

〈床・壁〉 床面は平坦で、壁は緩やかに外反して立ち上がる形状である。

〈柱穴〉 4基見つかった。円形ないし楕円形で径25～31cm、深さ18～30cm、北側床面（P 1）、東側床面（P 2）、南側床面（P 3）、西側床面（P 4）に位置している。

〈炉〉 炉や焼土は検出されなかった。

〈出土遺物〉 遺物は、石籠の未製品（8図1）とともに、下層部から床面に集中して無数の石器剥片が見つかった。また、P 3出土の炭化物は、年代測定の結果BC 7,589～BC 7,465という数値が示された。

〈性格・時期〉 遺物の出土状況や年代測定の結果から、本遺構は、縄文早期の石器製作が行われた竪穴住居跡と判断する。

（2） フラスコ状土坑

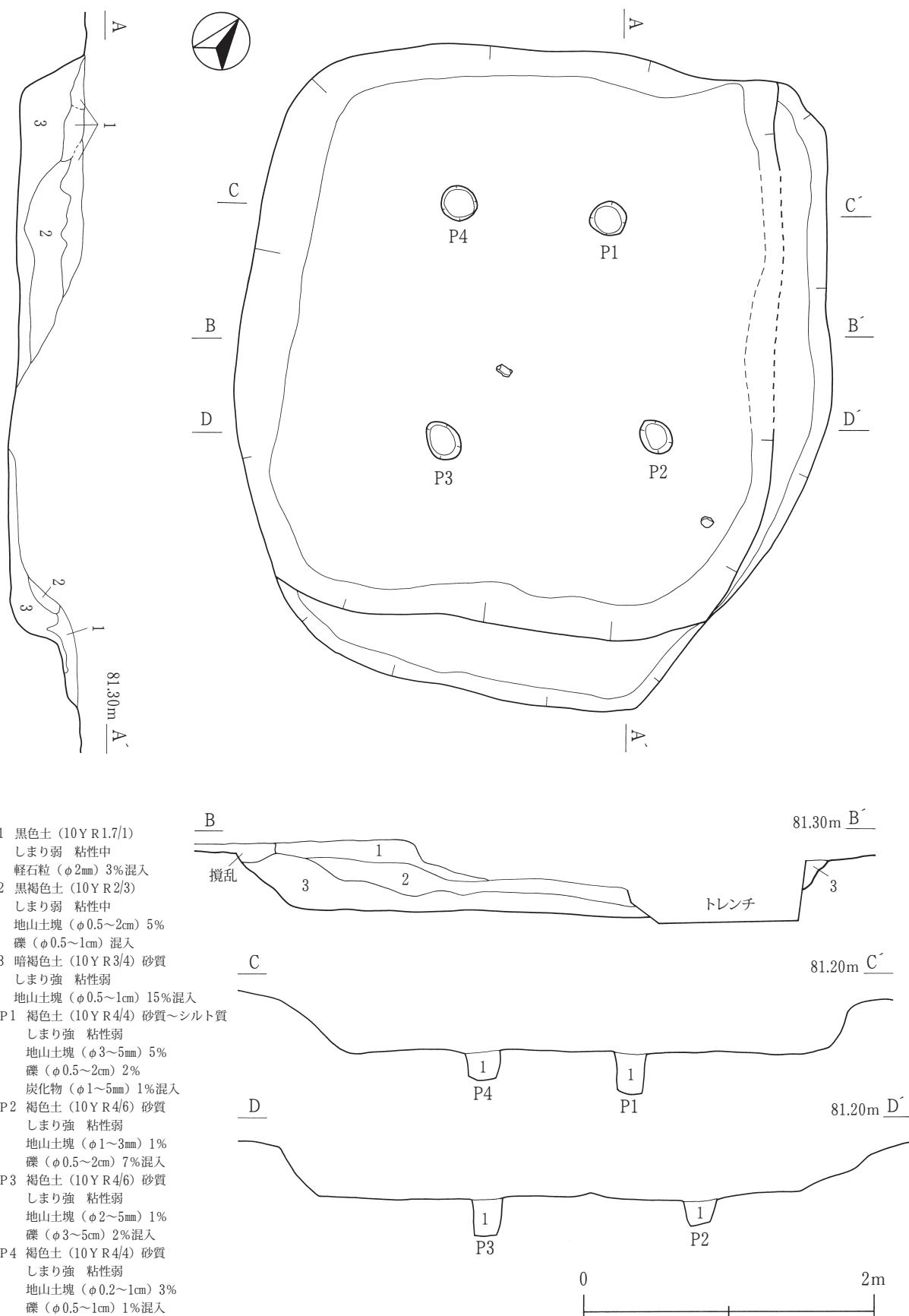
S K F 144（第9～13図、図版4・15）

〈位置・確認状況〉 LT 46グリッドの第Ⅳ層で黒色土の楕円形の広がりとして見つかった。

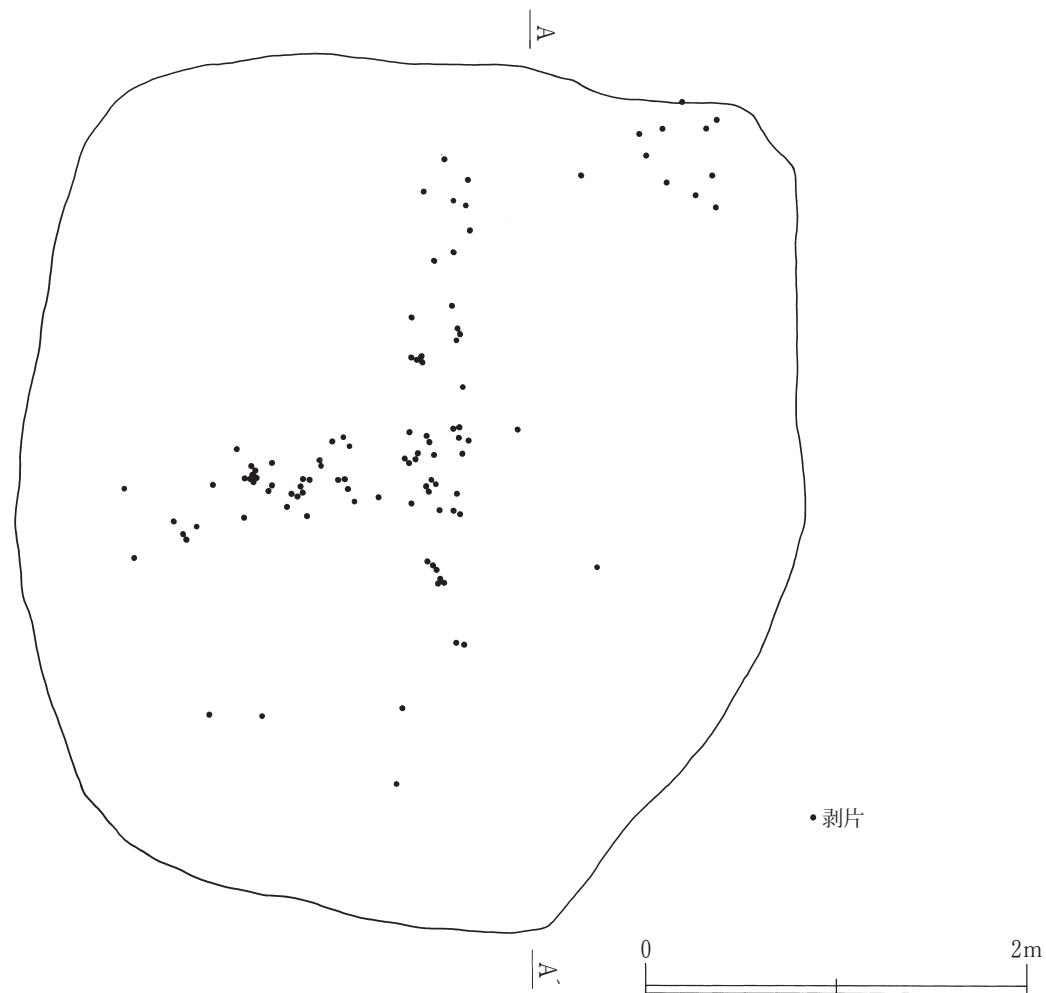
〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は、第Ⅲ層に由来すると思われる黒色土の単一層で、壁の崩落土は認められなかった。

〈平面形・規模〉 開口部は、径0.93～1.03m、底面径1.64～1.72mの不整な楕円形を呈しており、確認面からの深さは1.14mである。



第7図 S.I. 143 壇穴住居跡

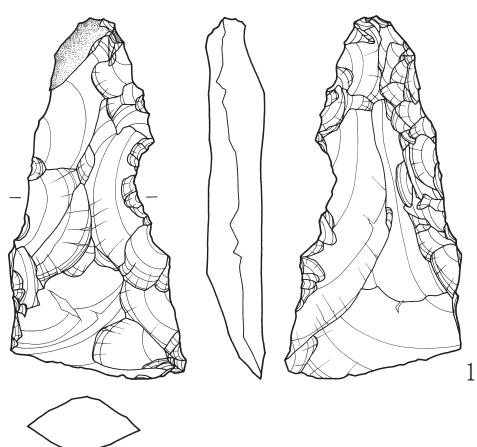


第2表 S I 143 柱穴計測一覧表

柱穴番号	規模 (m)			底面標高 (m)
	長軸	短軸	深さ	
P 1	0.25	0.25	0.30	80.38
P 2	0.25	0.20	0.18	80.45
P 3	0.25	0.24	0.22	80.46
P 4	0.30	0.23	0.29	80.37

第3表 S I 143 出土石器計測一覧表

挿図番号	第8図1	最大長 (mm)	95.0
図版番号	—	最大幅 (mm)	47.0
器種	石鏃	最大厚 (mm)	16.0
		重 量 (g)	60.0



第8図 S I 143 積穴住居跡遺物出土位置図・出土遺物

〈床・壁〉底面は概ね平坦で、壁は底面付近の最大径からオーバーハングして立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 遺物は、縄文土器片249点、半円状扁平打製石器1点、磨石2点、研磨痕のある大型の石2点、石器剥片12点、石1点、被熱石1点が底面付近に集中して見つかった。

出土した縄文土器片から深鉢3個体が復元できた。これらは平縁の口縁部から、ほぼ直線的に胴部に至り、胴部下半から底部に向かってわずかに窄まる円筒形で、縄文が施された口唇部と、集中的に施文された低い突帯のある狭い文様帯がある。内面はヘラミガキが施され、胎土には砂粒と纖維が微量に混入する。いずれも円筒下層d式土器に比定される。

(11図3)は、口縁部が緩やかに内湾し、胴部上半はわずかに膨らんでいる。口唇部にR原体の斜縄文が施文されている。口縁部文様帶にはL原体の撚糸圧痕文が、右からの刺突が連続する低い突帯を挟んで、上位に3条、下位に1条施され、その直下に横位に連続するR原体の綾絡文が施文されている。胴部は、結束のある羽状縄文(上:LR原体、下:RL原体)が底部まで9条施文されている。内面にはヘラミガキが施されている。

(10図1)は、口縁部から胴部まで残存していた。口唇部にはLR原体の単節斜縄文が施文されている。口縁部文様帶には、L原体による横位の撚糸圧痕文7~8条が突帯まで施文された後、L原体による縦位の撚糸文が、2条1単位で等間隔に施されている。この縦位の撚糸文は、7単位しか確認出来なかったが、欠損部にもう1単位あったと推測する。その直下には横位に連続するL原体の綾絡文があり、胴部にL原体の単軸絡条体による縦位回転で撚糸文が施文されている。

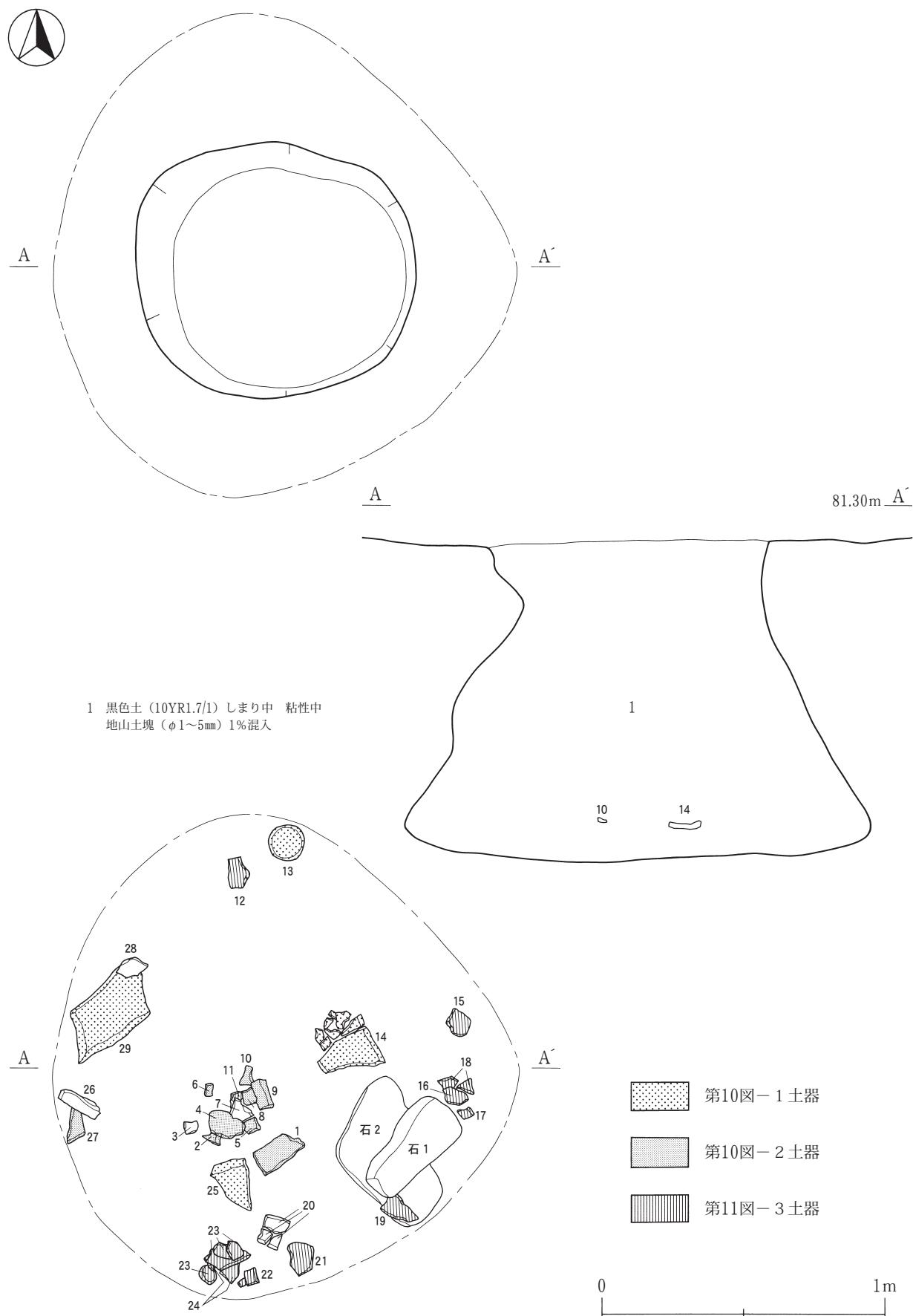
(10図2)は、口唇部はLR原体の単節斜縄文が施されている。口縁部文様帶は、LR原体による撚糸圧痕文が施文された突帯を境として、上位はL原体とR原体を交互に巻き付けた単軸絡条体の横位回転による施文が認められ、下位にはRL原体とLR原体の撚糸圧痕文各1条が施文されている。胴部から底部にかけては、結束のある羽状縄文が横位に10条施文されているが、上位から6条目と8条目には上位がLR原体、下位がRL原体で構成された結束のある羽状縄文が認められた。

半円状扁平打製石器(11図4)は、扁平な礫を素材としており、全ての縁部に両面からの剥離が連続する。

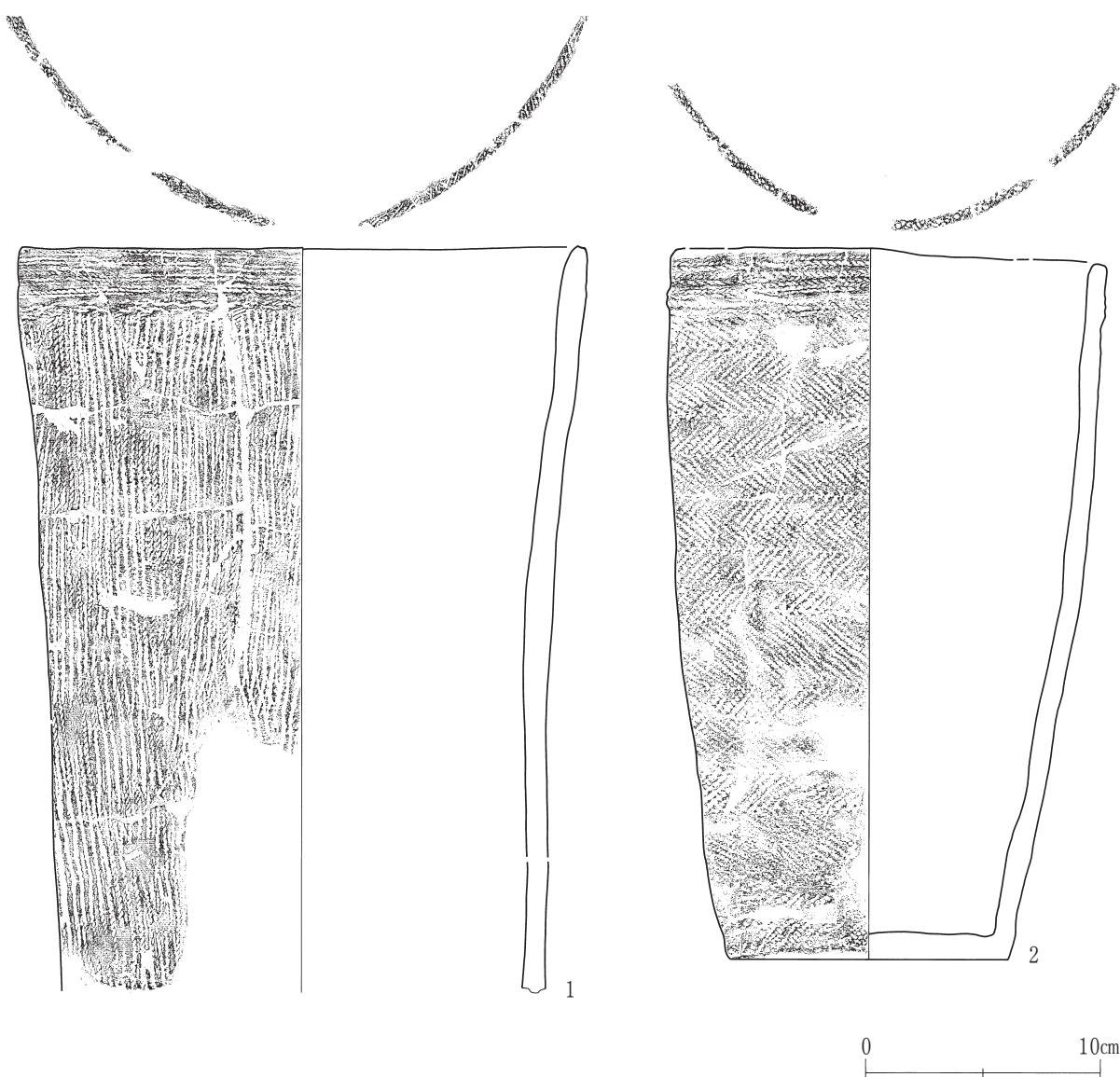
磨石は2点出土した。いずれも全ての面に磨りが認められ、頂部の連続した剥離を磨面として使用している。(12図6)の断面形は三角形で、(12図5)は扁平な石を素材としている。

(12図7)は、厚い板状断面が隅丸方形で、表面と左側面に使用痕があり、特に表面中央部が著しく使用されている。表面に被熱が認められる。(13図8)は、裏面と下面を除いた面を使用しており、特に左側面の使用が著しい。

〈性格・時期〉 覆土の堆積、遺物の出土状況から、本遺構は廃絶時に土器、石器を廃棄した縄文前期後葉の貯蔵穴であると判断する。



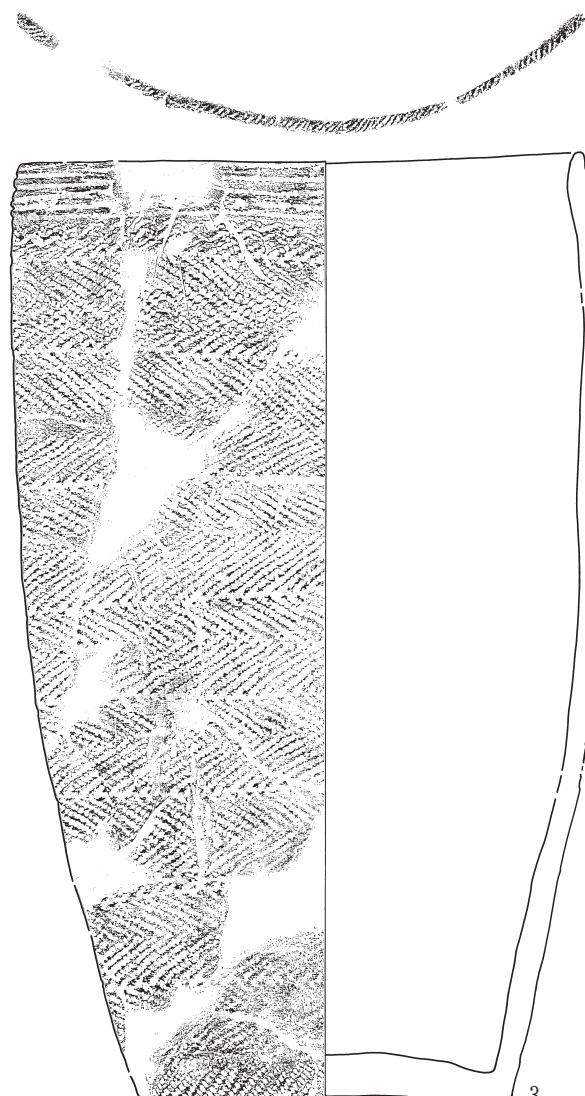
第9図 SKF 144 フラスコ状土坑・遺物出土位置図



第10図 SKF 144 フラスコ状土坑出土遺物（1）

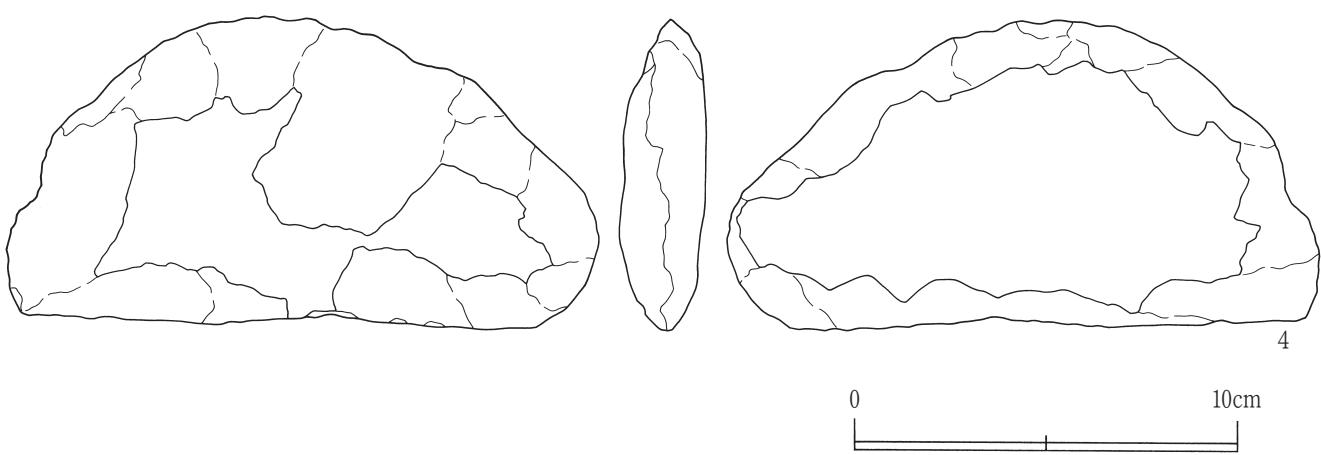
第4表 SKF 144 出土縄文土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土位置	器種	部位	口径×器高×底径(cm)	特徴	備考
第10図1	15-1	1・2・4~6・8~10・27	深鉢	口縁部～胴部	23.8×31.3×—	口唇部：LR原体単節斜縄文 口縁部文様帶：L原体燃糸圧痕文横位に7~8条 突帶 綾絡文 縦位のL原体燃糸圧痕文2条1單体で等間隔に7単位施文 胴部：L原体による縦位の燃糸文 内面：ヘラミガキ	円筒下層d式 胎土に砂粒・繊維微量混入
第10図2	15-2	13・14・25・29	深鉢	完形	17.9×30.0×11.6	口唇部：LR原体単節斜縄文 口縁部文様帶：燃糸圧痕文(L原体とR原体の単軸絡条体の横位回転) 主としてLR原体の燃糸圧痕文を施文された突帶 胴部：結束のある羽状縄文 5・7段目は反転 内面：ヘラミガキ	円筒下層d式 胎土に砂粒・繊維微量混入

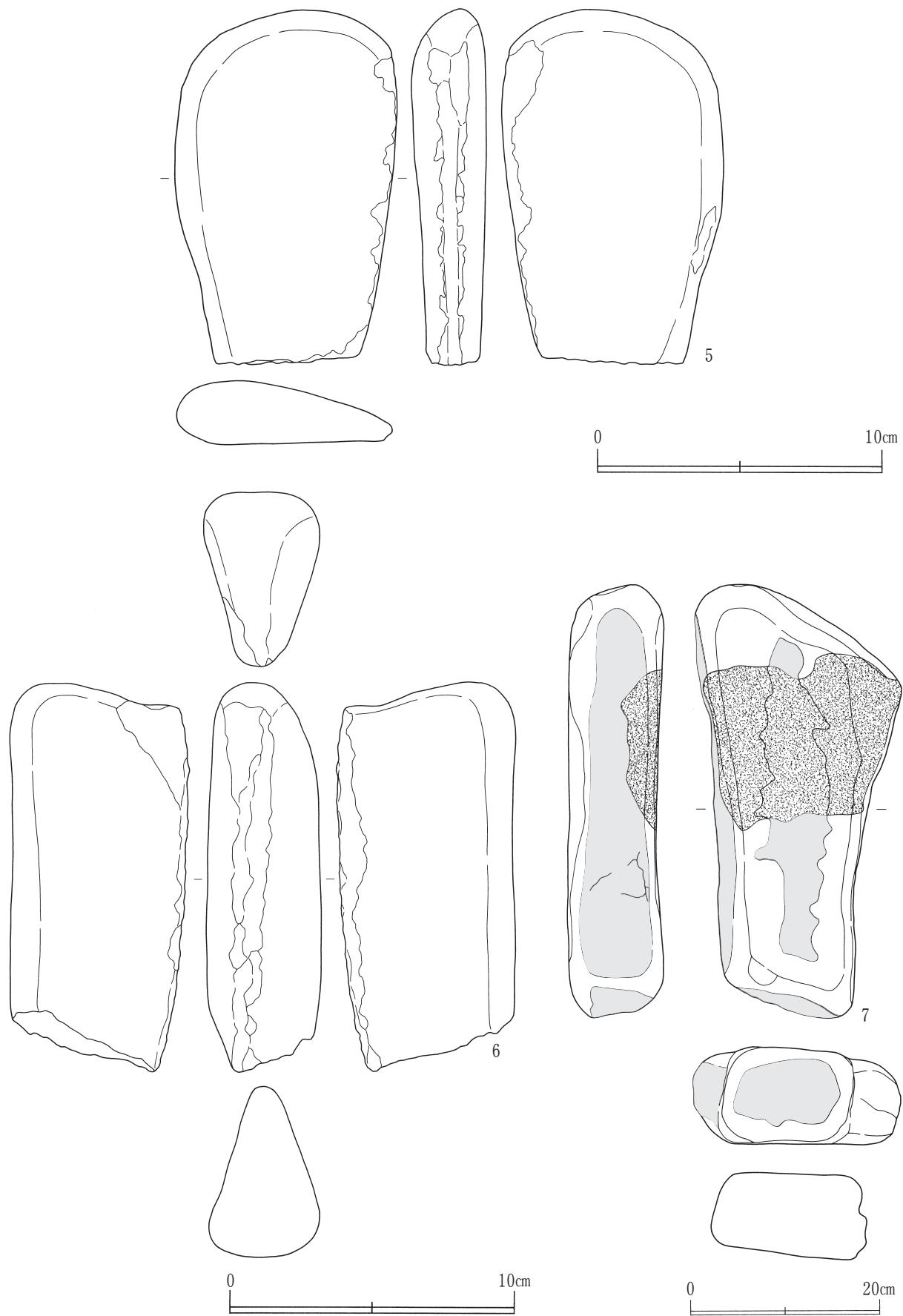


第5表 SKF 144 出土縄文土器観察表 (2)

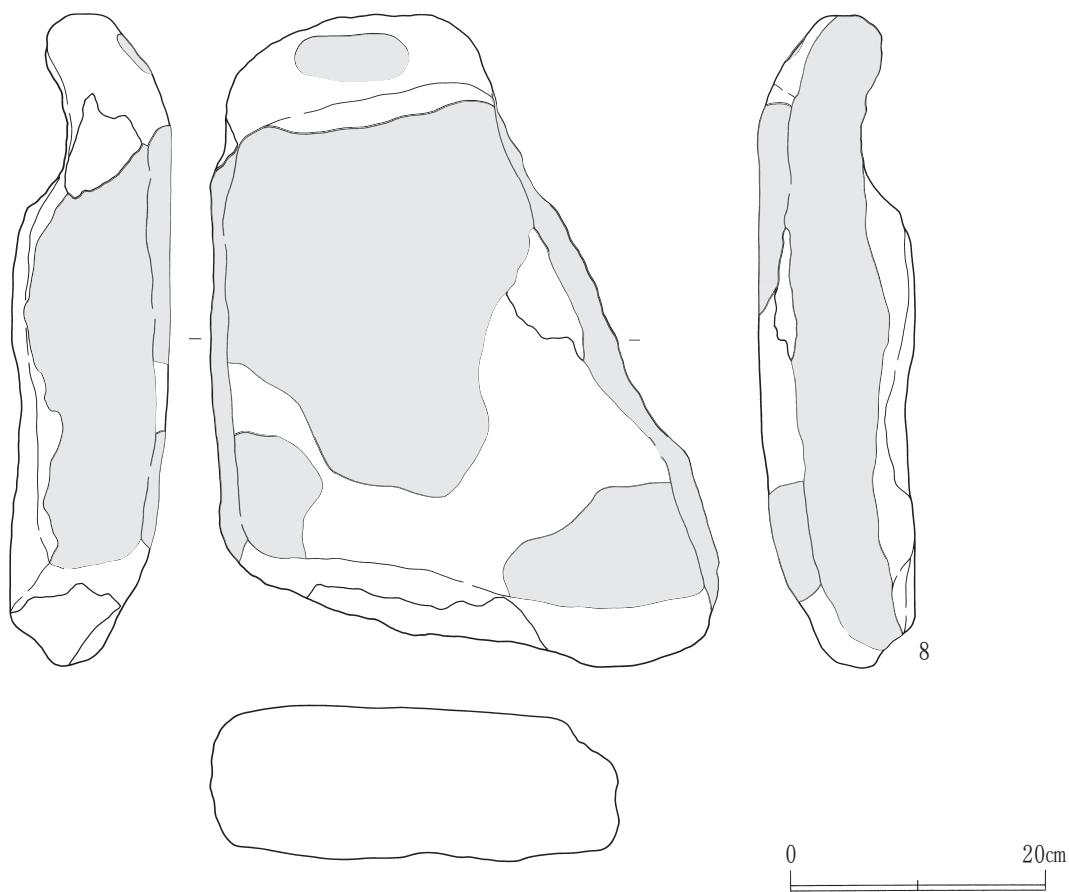
挿図番号	第11図3
図版番号	15-3
出土位置	11・12・15・16・18・19・22～24
器種	深鉢
部位	完形
口径×器高 ×底径(cm)	21.6×36.8×16.6
特徴	口唇部：R 原体無節斜縄文 口縁部文様帶：L 原体横位撚糸圧痕文 突帯に刺突 綾絡文 胴部：結束のある羽状縄文(上位 LR 原体、下位 RL 原体) 内面：ヘラミガキ
備考	円筒下層d式 胎土に砂粒・纖維微量混入



第11図 SKF 144 フラスコ状土坑出土遺物 (2)



第12図 SKF 144 フラスコ状土坑出土遺物（3）



第13図 SKF 144 フラスコ状土坑出土遺物（4）

第6表 SKF 144 出土石器計測一覧表

挿図番号	図版番号	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
第11図 4	15-4		半円状扁平打製石器	82.0	157.0	23.0	353.0
第12図 5	15-6		磨石	126.5	79.0	27.0	362.0
第12図 6	15-5		磨石	138.5	64.5	41.5	512.0
第12図 7	—	石①	研磨痕のある大型石	458.0	218.0	102.0	14000.0
第13図 8	—	石②	研磨痕のある大型石	505.0	396.0	124.0	27500.0

S K F 146 (第14図、図版4・15)

〈位置・確認状況〉 L S 48 グリッドの第IV層で黒色土の円形の広がりとして見つかった。

〈重複関係〉 重複関係はない。

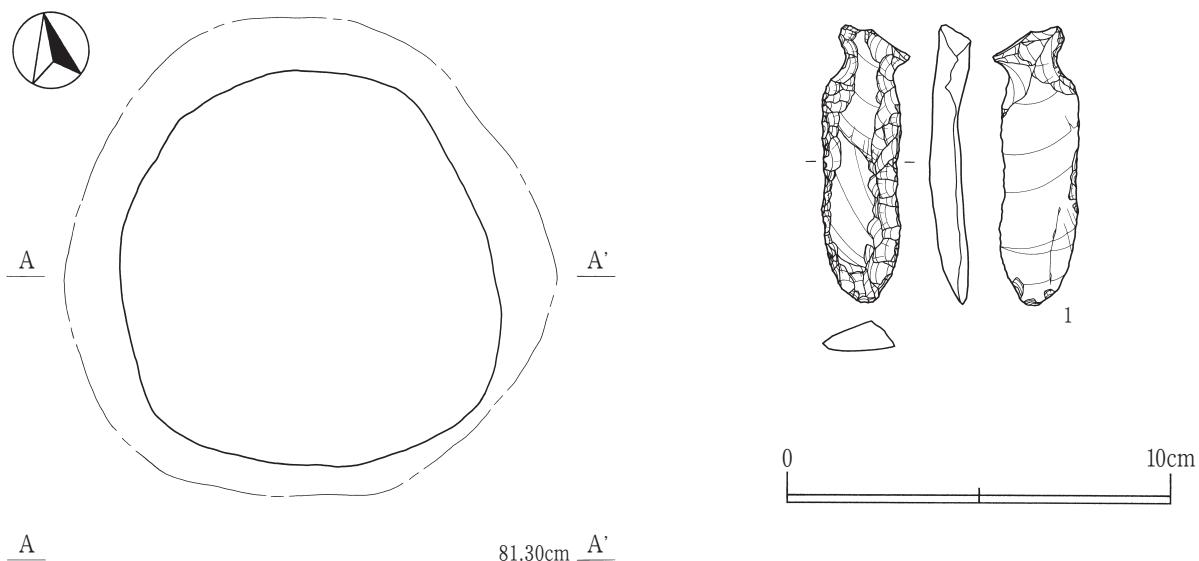
〈堆積土〉 覆土は、2層あり、1層は第III層に由来するものと思われる黒色土で、中央部に幅38cm、厚さ10cmの焼土ブロックが認められた。2層は地山ブロックが混入する黒褐色土である。

〈平面形・規模〉 開口部は、径1.06～1.07m、底面径1.26～1.29mの不整円形で、確認面からの深さは73cmである。

〈床・壁〉 底面は概ね平坦であるが、東側が約8cm浅くなっている。壁は、底面付近の最大径からオーバーハングして立ち上がる形状である。

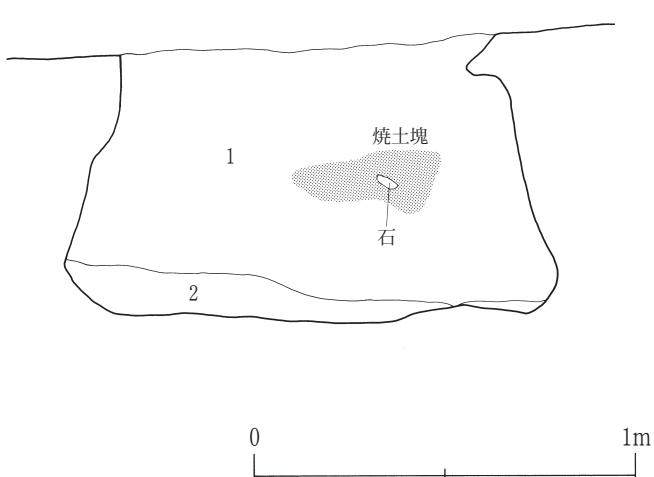
〈出土遺物〉 遺物は、縄文土器片4点、石匙(14図1)1点、石器剥片1点、石1点が出土した。石匙(14図1)は末端部が尖った細長型である。

〈性格・時期〉 本遺構は、出土遺物等から縄文時代の貯蔵穴と判断する。壁崩落土が混入していないほぼ単一層という覆土の堆積状況から、SKF 144廃絶時と同時期に埋められたものと推定する。



第7表 SKF 146
出土石器計測一覧表

挿図番号	第14図1
図版番号	15-7
器種	石匙
最大長(mm)	73.0
最大幅(mm)	23.0
最大厚(mm)	11.0
重量(g)	13.9



1 黒色土 (10YR 1.7/1) しまり中 粘性中
地山土塊 (ϕ 1～5mm) 1% 焼土塊 (褐色土 (7.5YR 4/6)
粘土質 しまり強 粘性強 炭化物 (ϕ 1～5mm) 1%) 混入
2 黒褐色土 (10YR 2/2) 砂質～シルト質 しまり強 粘性弱
地山土塊 (ϕ 0.3～1cm) 15% 混入

第14図 SKF 146 フラスコ状土坑・出土遺物

(3) 土器埋設遺構

S R 31 (第15図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L S 48グリッドの第IV層で確認した。土器は倒立状態で埋設され、体部から底部は欠損していた。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は2層あり、土器と掘り込みには黒褐色土(1層)、その下層には褐色(2層)が充填されていた。これら覆土は第III～IV層に由来するものと思われる。

〈平面形・規模〉 土器埋設のための掘り込みは、長軸36cm、短軸32cmの橢円形で、確認面からの深さは12cmである。

〈出土遺物〉 使用された土器(15図1)は、円筒下層d式の深鉢形土器である。後世の削平により胴部から底部が欠損していた。L S 48・49グリッドの第IV層で出土した土器片も接合した。平縁の口縁部から胴部まで垂直な器形である。口唇部にはL原体の斜縄文が施文されている。わずかに張り出した口縁部文様帶には、L R原体の撚糸文が横位に3～5条と、その直下に右からの刺突が横位方向に連続している。胴部はL原体とR原体を用いた単軸絡条体の縦位回転によって木目状撚糸文が施されている。内面には全体にヘラミガキが施されていた。

〈性格・時期〉 使用された土器から縄文前期後葉の遺構と判断したが、性格は不明である。

S R 45 (第15図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L Q 49グリッドの第IV層で確認した。土器は正立状態で埋設され、口縁部から体部は欠損していた。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は第IV層に由来する黒褐色土で、土器内と掘り込みで確認した。

〈平面形・規模〉 土器埋設のための掘り込みは長軸26cm、短軸25cmの円形で、確認面からの深さは12cmである。

〈出土遺物〉 使用された土器(15図2)は、深鉢形土器である。後世の削平によって胴部上位は失われている。L Q 48グリッド第IV層で出土した土器片も接合した。胴部から底部にかけて直線的に窄まる器形で、外面には、L原体を用いた単軸絡条体の縦位回転による木目状撚糸文が施文されている。内面は、胴部で煤が付着し底面にはヘラミガキが施されていた。胎土には微量の纖維と砂粒が混入している。胴部上半を失っているが、本遺構で使用された土器は円筒下層d式土器であると思われる。

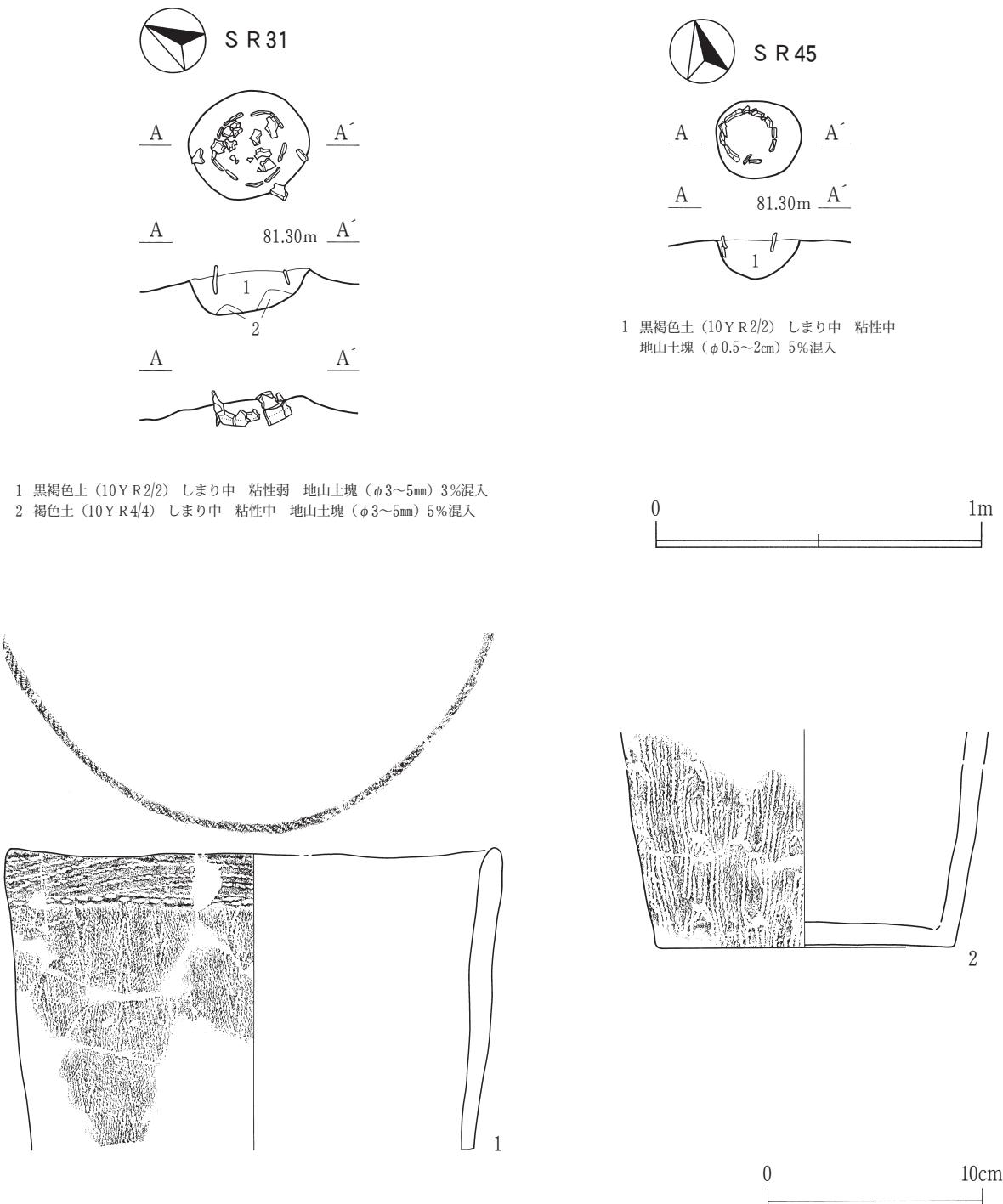
〈性格・時期〉 使用された土器から縄文前期後葉の遺構と判断したが性格は不明である。

(4) 石器製作跡

S Q 44 (第16～18図、図版6・17)

〈位置・確認状況〉 調査区南側平坦部の第III層を精査中、MB 45グリッドの石器と剥片が集中して見つかった。その後周辺を徐々に掘り下げて第IV層を精査した結果、MA 45・46、MB 45・46グリッドで碎片の広がりを確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。



第15図 SR 31・45 土器埋設遺構・埋設土器

第8表 SR 31・45 出土縄文土器観察表

捕図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	口径×器高×底径(cm)	特徴	備考
第15図1	—	SR31 LS48・ 49IV層	深鉢	口縁部～胴部	24.0× —× —	口唇部：0段多条のL原体の斜縄文 口縁部文様帶：LR原体撚糸文3～5条横走 連続する右からの刺突 胴部：L原体・R原体による木目状撚糸文 内面：ヘラミガキ	円筒下層d式 胎土に砂粒・繊維微量混入
第15図2	—	SR45 LQ48IV 層	深鉢	胴部～底部	—× 8.4× 13.8	胴部：L原体による木目状撚糸文 内面：ヘラミガキ 煤付着	円筒下層d式 胎土に砂粒・繊維微量混入

〈規模・出土遺物〉 石器及び剥片出土区域は、標高 81.1～81.4m の約0.6m の範囲から石籠 2 点（17 図 1・2）、スクレイパー 7 点（17 図 3～9）、二次加工のある剥片 2 点、剥片 9 点が見つかり、標高 81.1～81.2m の約4m の範囲から碎片が無数に見つかった。特に MA46 グリッドの南西部周辺に集中して出土している。

石籠（17 図 1）は細長い台形で、裏面の調整は側縁部に集中する。石籠（17 図 2）は厚みのある橢円形で、全面に調整が施されている。

スクレイパーは平面形から、I 類：縦長形を呈するもの（17 図 3）、II 類：幅広丸形を呈するもの（17 図 4～7）、III 類：小型のもの（17 図 8～9）に分類した。I 類（17 図 3）は表面側縁部と末端部を調整加工され、中央に自然面が残存する。II 類のうち（17 図 4～6）は、石器末端部を主な刃部としており、側縁にかけて連続した調整加工が認められる。（17 図 6）は表面に自然面が残存する。（17 図 7）は打面周辺から右側縁に調整加工が連続し、左側縁に自然面が残存する。III 類（17 図 8）は、裏面左側縁に主なる刃部が作られ、末端部まで調整加工が及ぶ。（17 図 9）は、打面周辺から左側縁に調整加工が連続しており、右側縁には自然面が残存する。

磨石（18図10）は、全体的な研磨で作り出された鋭角部分に剥離を加え、その部分を研磨面として使用している。

〈性格・時期〉 碎片が多く出土したことから、本遺構は、石器製作の最終段階の作業を行った区域であると考える。詳細な時期は不明である。

（5）土 坑

S K127（第19図、図版 6）

〈位置・確認状況〉 MB47 グリッドの第V層で、地山と酷似した褐色の円形の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は 2 層あり、2 層は第IV層②に由来すると思われる暗褐色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は、長軸（北東－南西）66cm、短軸（北西－南東）62cm の不整円形で、確認面からの深さは 14 cm である。

〈床・壁〉 中央に向かって緩やかに傾斜した底面から、壁が緩やかに立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 出土しなかった。

S K128（第19図、図版 6）

〈位置・確認状況〉 MC 46 グリッドの第V層で、暗褐色土の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は褐色土の単一層である。

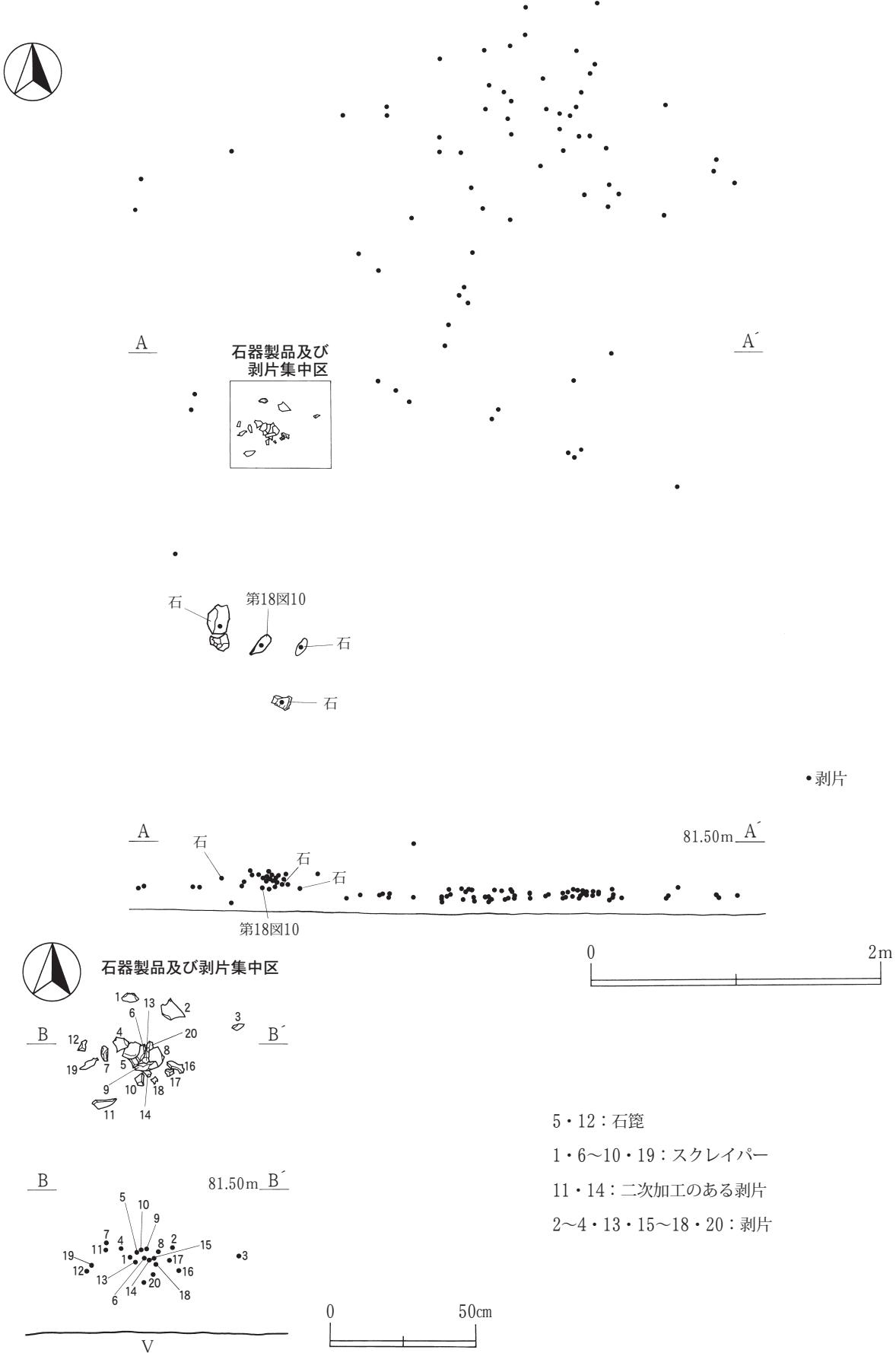
〈平面形・規模〉 平面形は長軸（北西－南東）91cm、短軸（北東－南西）82cm の橢円形で、確認面からの深さは 16 cm である。

〈床・壁〉 底面は平坦で、壁は外反して緩やかに立ち上がる形状である。

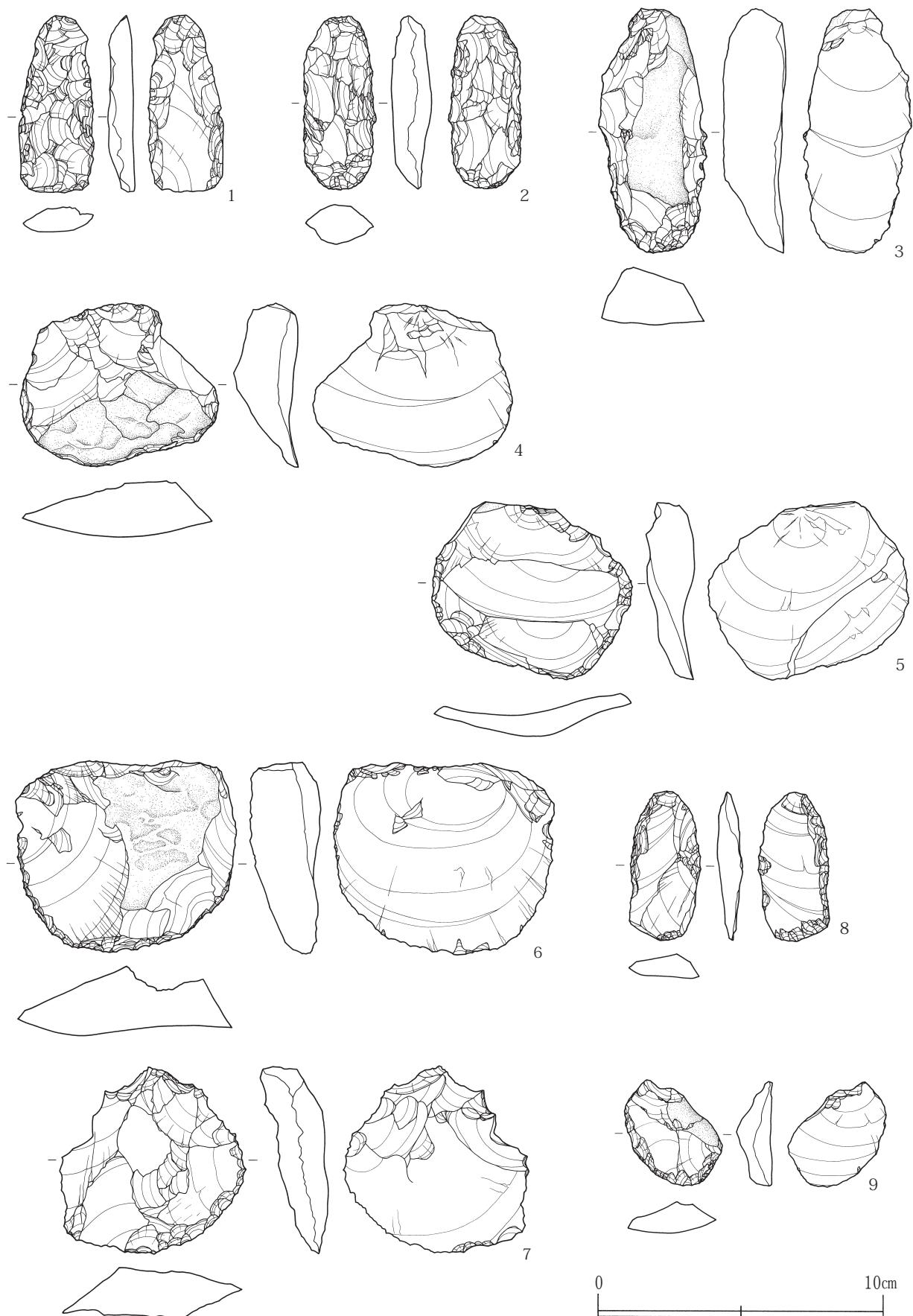
〈出土遺物〉 出土しなかった。

S K165（第19図）

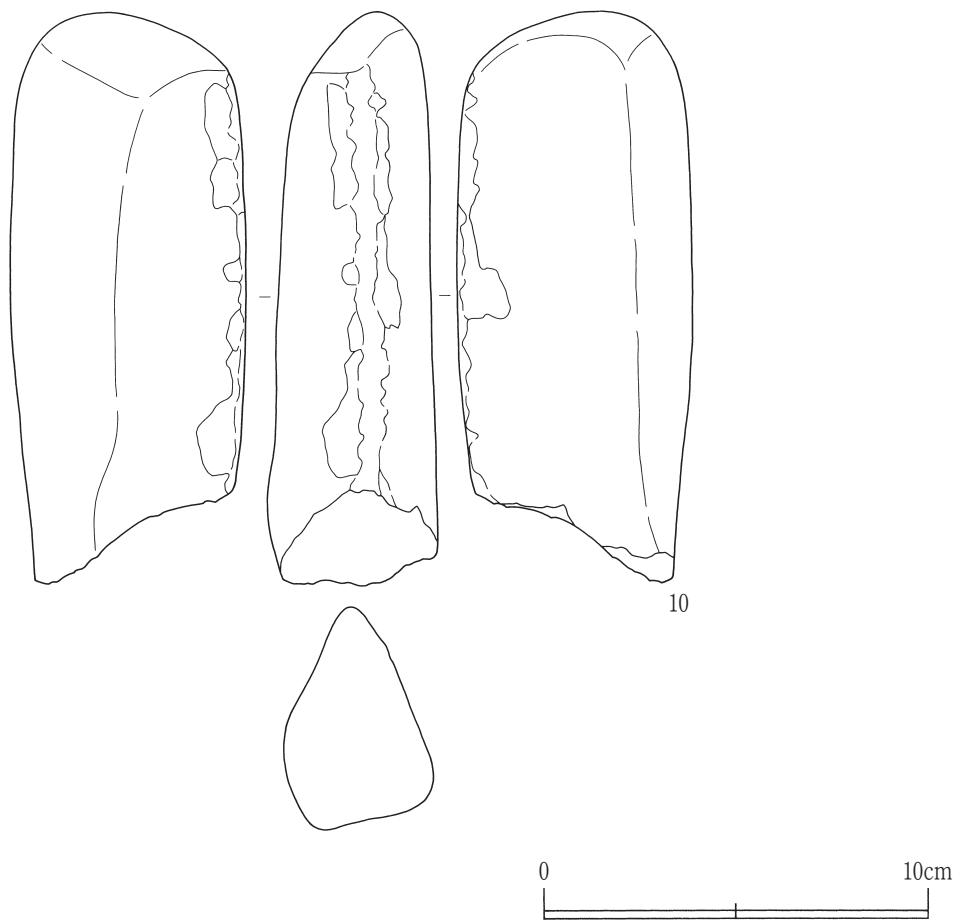
〈位置・確認状況〉 L Q 48 グリッドの第IV層で確認した。



第 16 図 S Q 44 石器製作跡・遺物出土位置図



第17図 S Q 44 石器製作跡出土遺物（1）



第18図 SQ 44 石器製作跡出土遺物（2）

第9表 SQ 44 出土石器計測一覧表

捕団番号	図版番号	出土位置	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
第17図1	17-1	12	石籠	63.0	27.0	10.0	17.1
第17図2	17-2	5	石籠	62.0	26.0	15.0	23.1
第17図3	17-3	9	スクレイパー	87.0	39.0	22.0	79.2
第17図4	17-4	6	スクレイパー	58.0	71.0	23.0	67.4
第17図5	17-5	8	スクレイパー	68.0	71.0	17.0	50.5
第17図6	17-6	19	スクレイパー	68.0	78.0	25.0	133.4
第17図7	17-7	1	スクレイパー	66.0	66.0	24.0	70.1
第17図8	17-8	7	スクレイパー	53.0	25.0	9.0	11.9
第17図9	17-9	10	スクレイパー	38.0	35.0	13.0	10.8
第18図10	17-10	92	磨石	151.0	62.5	46.0	556.0

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は第IV層に由来すると思われる黒褐色土の単一層である。

〈平面形・規模〉 平面形は、長軸（東－西）61cm、短軸（北－南）52cmの橢円形で確認面からの深さは8cmである。

〈床・壁〉 底面は平坦で壁は外反して緩やかに立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 出土しなかった。

S K166（第19図、図版6）

〈位置・確認状況〉 L Q 47・48 グリッドの第V層で確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は第IV層に由来すると思われる黒色土の単一層である。

〈平面形・規模〉 平面形は長軸（北東－南西）144cm、短軸（北西－南東）94cmの橢円形で、確認面からの深さは19cmである。

〈床・壁〉 底面は平坦で、壁は南東側が急に立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 繩文土器片1点が出土した。

S K257（第19図）

〈位置・確認状況〉 L T・M A53グリッド、S D 130の底面で暗褐色土の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 SD 130・SK P 258と切り合うが、本遺構が最も古い。南西側の一部に搅乱を受けている。

〈堆積土〉 覆土は2層あり、それぞれ第IV層に由来すると思われる暗褐～褐色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は長軸（北東－南西）79cm、短軸（北西－南東）67cmの橢円形で、確認面からの深さは13cmである。

〈床・壁〉 底面は平坦で、南東壁は急に立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 出土しなかった。

S K382（第19図）

〈位置・確認状況〉 L K 64 グリッドの第V層で、少し濃い色の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 約0.4m上層でSD 30が確認されており、新旧関係はSK 382が古い。

〈堆積土〉 覆土はとても堅くしまった灰黄褐色土の単一層で、小石が混入している。

〈平面形・規模〉 平面形は、長軸（北西－南東）60cm、短軸（北東－南西）50cmの橢円形で、確認面からの深さは20cmである。

〈床・壁〉 底面は北西側が深くなっており、南東壁は緩やかに立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 出土しなかった。

S K411（第19図、図版6）

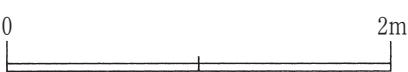
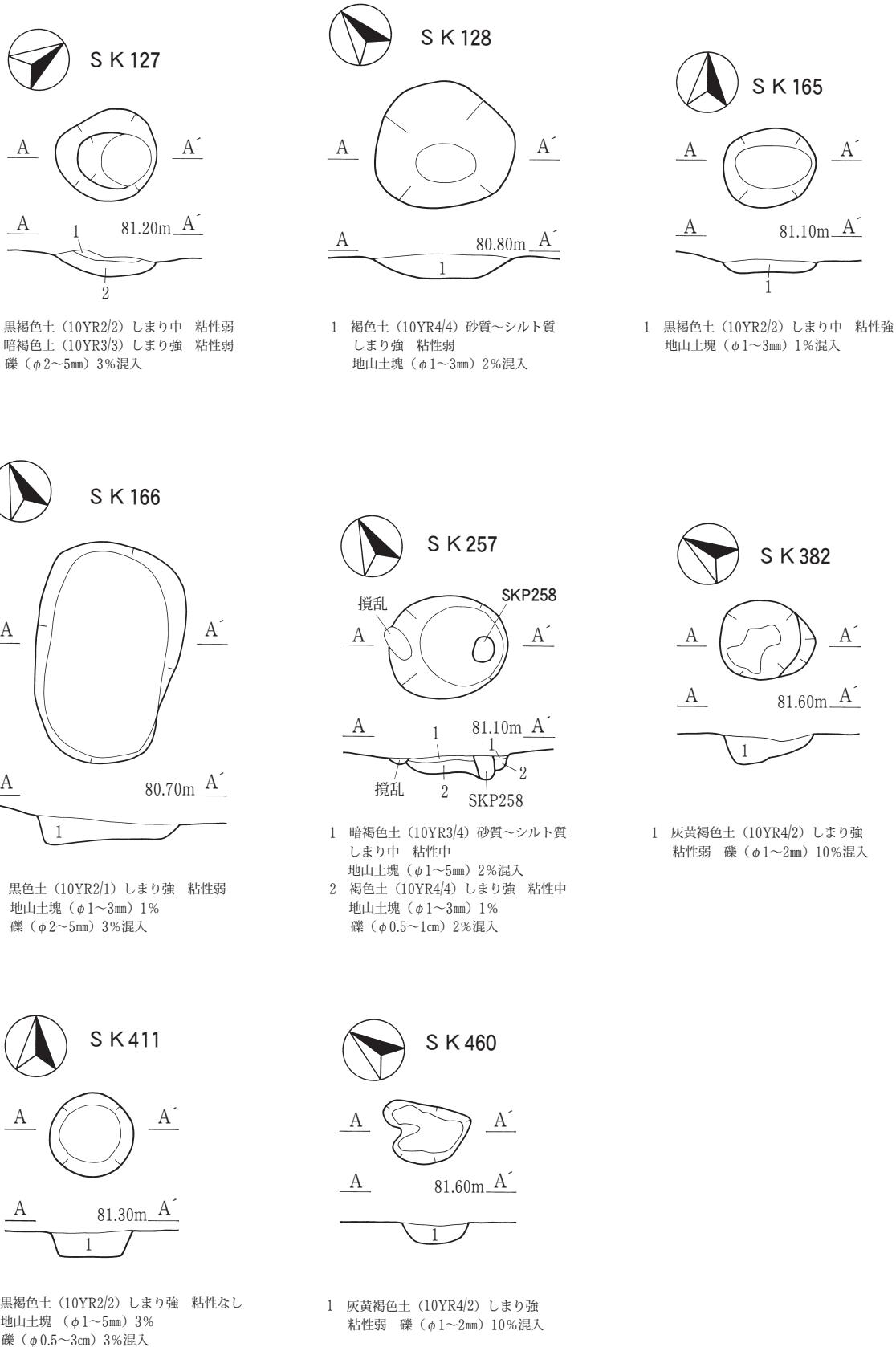
〈位置・確認状況〉 L P 54グリッドの第V層で確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 覆土は第IV層に由来すると思われる黒褐色土の単一層である。

〈平面形・規模〉 平面形は径55cmの円形を呈し、確認面からの深さは17cmである。

〈床・壁〉 底面は平坦で、壁は外反して立ち上がる形状である。



第19図 SK 127・128・165・166・257・382・411・460 土坑

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

S K460 (第19図)

〈位置・確認状況〉 LK64グリッドの第V層で少し濃い色の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 約0.4m上層ではSD30が確認されており、新旧関係はSK460が古い。

〈堆積土〉 覆土はとても堅くしまった灰黄褐色土の単一層で、小石が混入している。

〈平面形・規模〉 長軸(北西-南東)60cm、短軸(北東-南西)40cmの不整形で、確認面からの深さは10cmである。

〈床・壁〉 中央に向かって緩やかに傾斜した底面から、壁が緩やかに立ち上がる形状である。

〈出土遺物〉 出土しなかった。

(6) 焼土遺構

LR・LS45グリッドの第IV層を精査中、平坦で被熱した研磨痕のある大型の石(32図65)とともにSN162とSN163が近接して見つかった。SN162では縄文土器が出土していることをふまえつつ、検出層位が同じSN163もSN162に関連が深いと判断し縄文時代として扱った。

S N162 (第20図)

〈位置・確認状況〉 LR45グリッドの第IV層で確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈平面形・規模〉 長軸(北東-南西)70cm、短軸(北西-南東)38cmの不整橢円形状に被熱面が広がっており、その厚さは17cmである。中央部上面は強く、その周りは弱く焼けている。

〈出土遺物〉 遺物は中央上面で縄文土器1点を確認した。

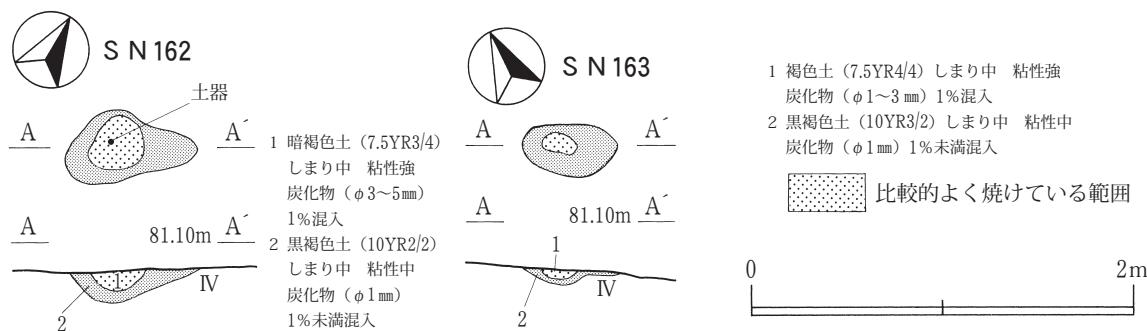
S N163 (第20図)

〈位置・確認状況〉 LS45グリッドの第IV層で確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈平面形・規模〉 長軸(北西-南東)49cm、短軸(北東-南西)29cmの橢円形状に被熱面が広がっており、その厚さは8cmである。中央部上面は強く、その周りは弱く焼けている。

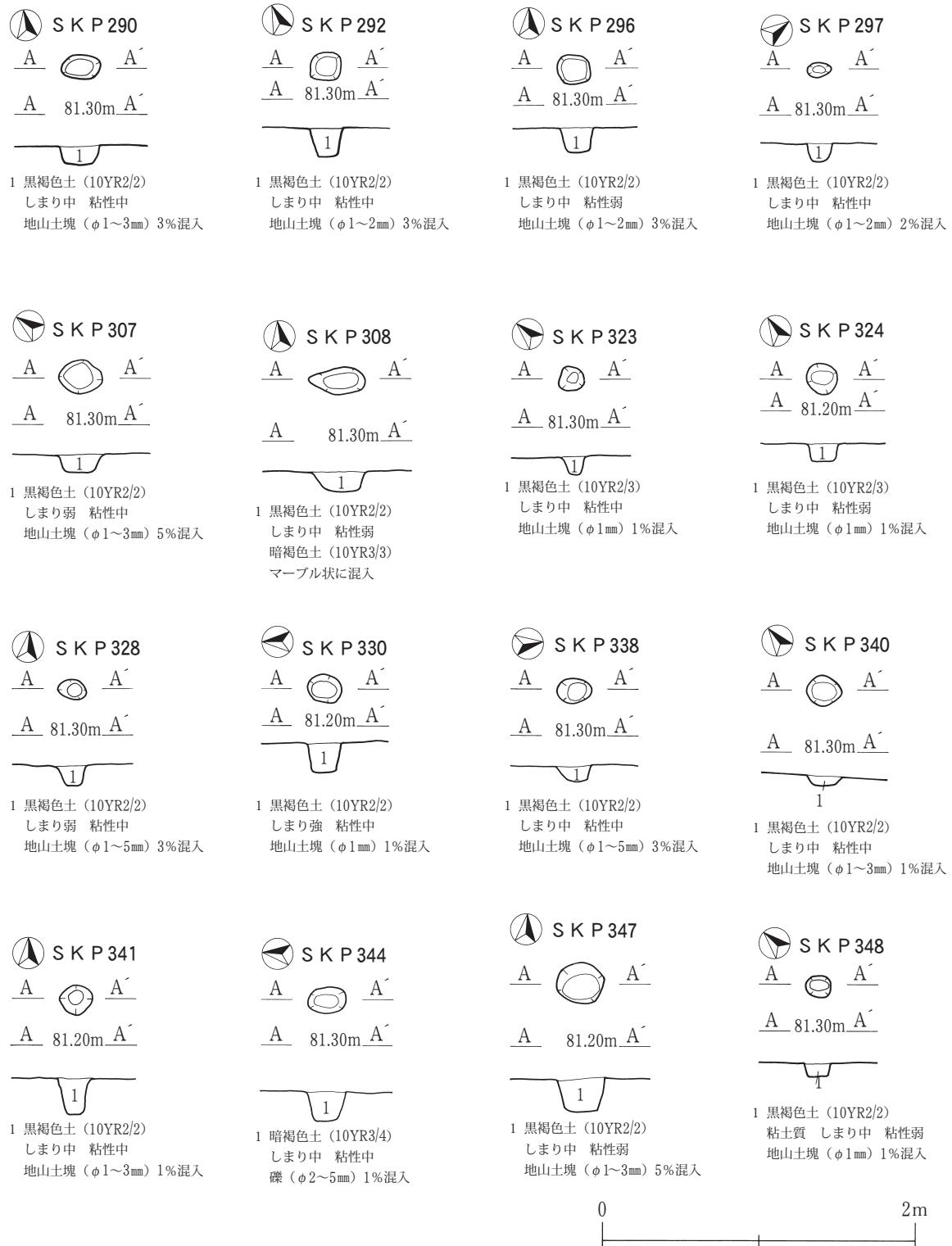
〈出土遺物〉 見つからなかった。



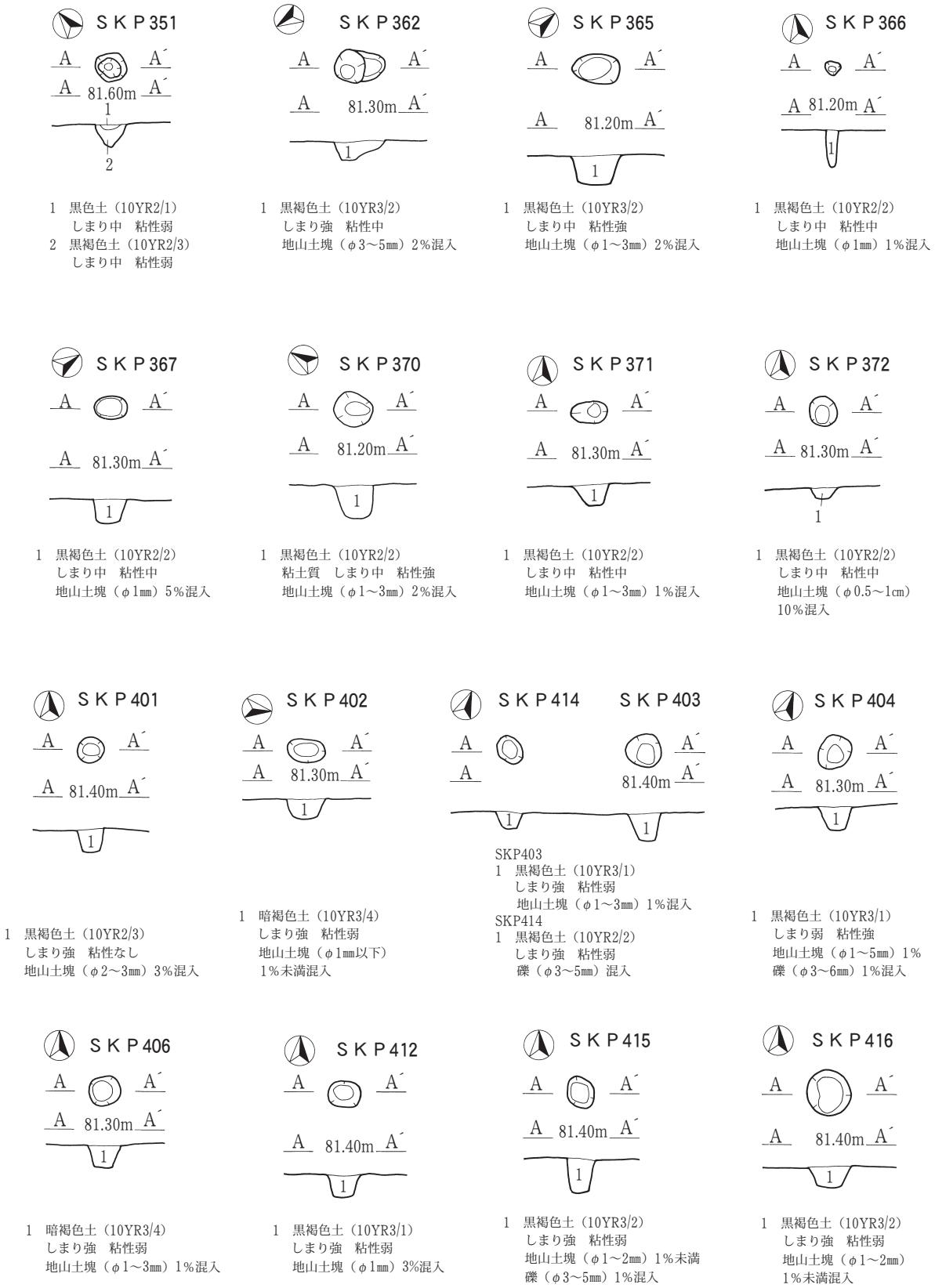
第20図 S N 162・163 焼土遺構

(7) 柱穴様ピット(第21~24図)

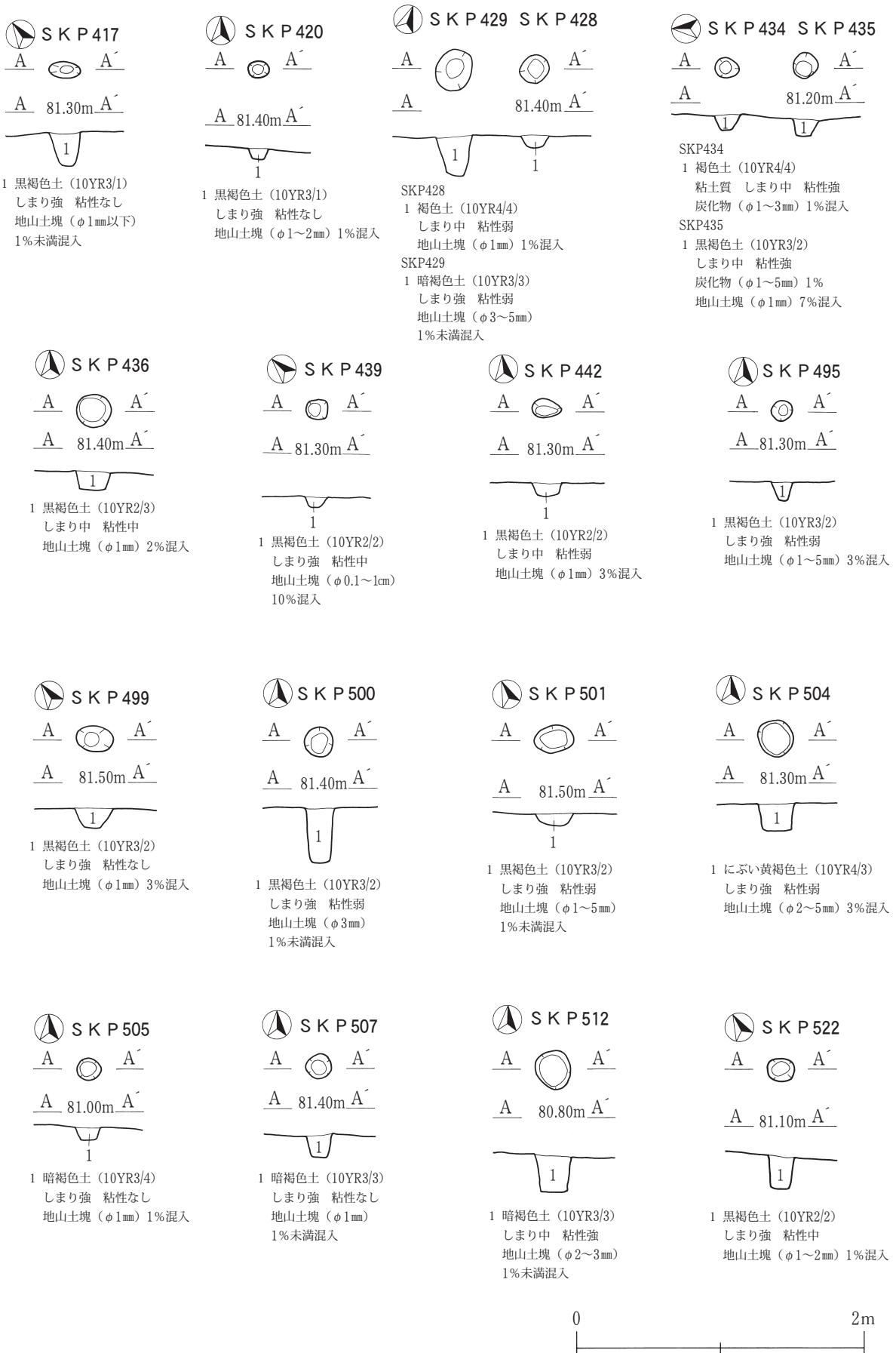
柱穴様ピットは、台地上の南側で多く見つかっており、それらはすべて第V層で検出した。平面形は円～橢円形がほとんどで、規模は径14~42cm、深さ6~38cmである。遺物は出土しなかったが、覆土が第IV層に由来する黒褐色土～褐色土であることから縄文時代以前のものとした。



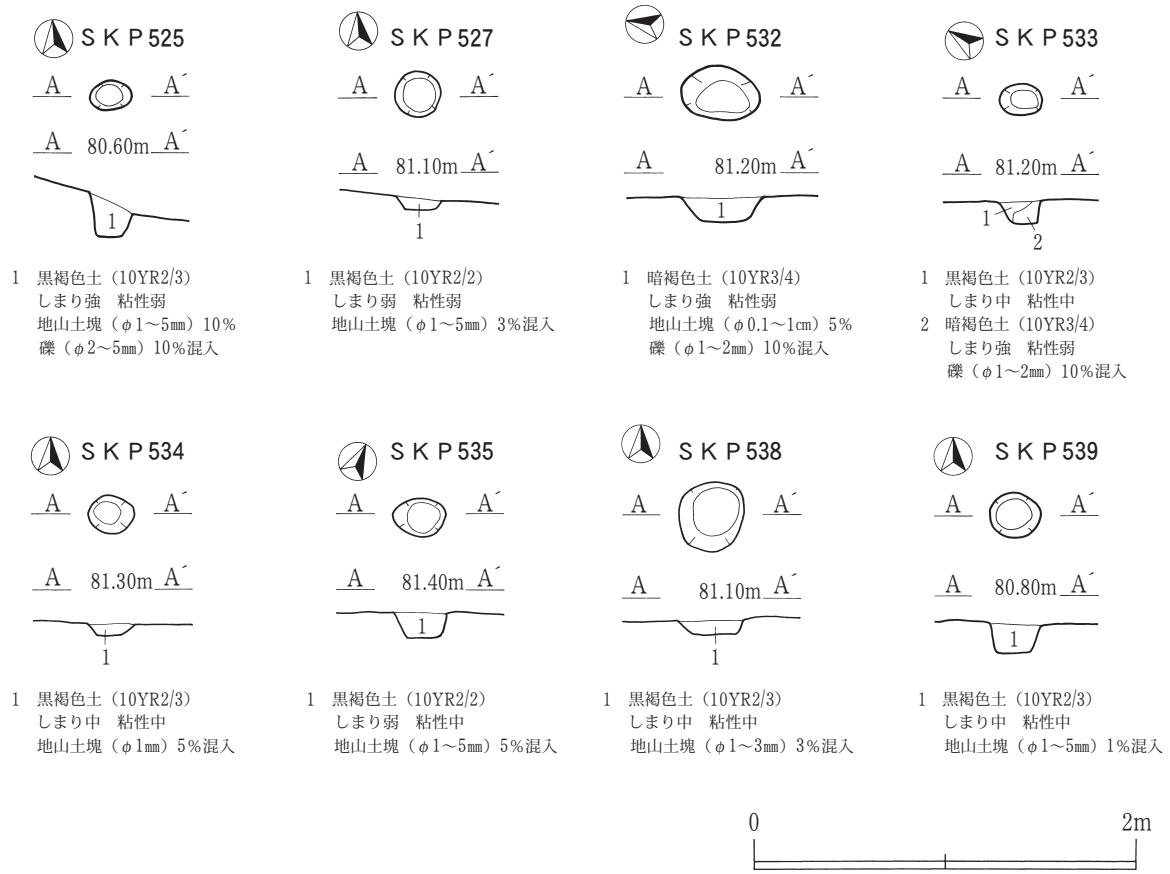
第21図 柱穴様ピット(縄文1)



第22図 柱穴様ピット（縄文2）



第23図 柱穴様ピット（縄文3）



第24図 柱穴様ピット（縄文4）

第10表 柱穴様ピット計測一覧表（縄文）

柱穴 番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)	柱穴 番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)
		長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ	
290	LT54	0.25	0.16	0.12	80.97	414	LO56	0.20	0.15	0.12	81.08
292	MA・LT54	0.22	0.20	0.19	80.93	415	LO59	0.20	0.18	0.23	81.03
296	LT・LS54	0.22	0.21	0.16	81.00	416	LO59	0.31	0.30	0.14	81.11
297	LS54	0.16	0.10	0.12	81.00	417	LP57	0.22	0.11	0.23	80.92
307	LS53	0.28	0.22	0.11	80.99	420	LN58・LO58	0.14	0.12	0.07	81.16
308	LS53	0.35	0.18	0.12	80.97	428	LN58	0.20	0.18	0.08	81.12
323	LT52	0.15	0.14	0.12	80.99	429	LN58	0.30	0.25	0.28	80.95
324	LT52	0.20	0.19	0.11	80.88	434	LS51	0.18	0.13	0.10	81.00
328	LS53	0.17	0.12	0.13	80.98	435	LS51	0.17	0.16	0.11	80.96
330	LS52	0.22	0.17	0.19	80.90	436	LQ52	0.25	0.24	0.13	81.11
338	LP51	0.22	0.16	0.10	81.00	439	MA53	0.16	0.15	0.08	80.92
340	LQ50	0.22	0.20	0.12	81.08	442	LT53	0.20	0.13	0.10	81.01
341	MA52・LT52	0.20	0.19	0.23	80.75	495	LN55	0.14	0.14	0.12	80.94
344	MA53	0.24	0.17	0.19	80.81	499	LP60	0.26	0.18	0.14	81.18
347	MA・MB54	0.31	0.26	0.21	80.79	500	LO59	0.20	0.20	0.38	80.88
348	MA54	0.16	0.15	0.09	81.00	501	LO59	0.28	0.18	0.08	81.30
351	LJ64	0.20	0.20	0.15	81.25	504	LR54	0.27	0.23	0.19	80.96
362	MA54	0.35	0.22	0.12	80.98	505	LR54・55	0.17	0.16	0.10	80.80
365	MB54	0.32	0.20	0.20	80.82	507	LN57	0.18	0.17	0.16	81.06
366	MB54	0.09	0.09	0.25	80.84	512	LQ53	0.26	0.24	0.26	81.28
367	MB54	0.22	0.16	0.16	80.83	522	LR47	0.19	0.16	0.23	80.66
370	MB52	0.27	0.24	0.23	80.77	525	LP50	0.22	0.16	0.21	80.15
371	LT51	0.24	0.16	0.14	80.99	527	LQ50	0.25	0.24	0.06	80.90
372	LT51	0.19	0.19	0.09	81.01	532	LS56	0.42	0.28	0.13	80.94
401	LO56・57	0.18	0.18	0.15	81.03	533	LR56	0.22	0.17	0.12	80.94
402	LO56	0.20	0.16	0.13	81.03	534	LS57	0.24	0.21	0.06	81.05
403	LO56	0.24	0.22	0.19	81.00	535	LR58	0.27	0.21	0.14	81.14
404	LO56	0.24	0.20	0.16	81.04	538	MG52	0.37	0.34	0.08	80.90
406	LO55	0.20	0.20	0.15	81.04	539	LT43	0.26	0.24	0.16	80.49
412	LQ54	0.22	0.18	0.15	81.08						

(8) 遺構外出土遺物(第25~32図、図版16~18)

1 土器

出土した土器は、縄文早期・前期・中期・後期に属するが、早期と前期が多く、中期と後期は少ない。それらは、縄文時代の遺構が集中する調査区南側台地上のⅢ層下位からⅣ層にかけて見つかり、なかでも縄文中期の土器はL P 52グリッド周辺に集中して出土した。

縄文早期の土器(25図1~6)

(25図1)は、深鉢の胴部から底部にかけての土器である。外面全体に貝殻条痕文を施文後、左上から刺突を連続させている。胎土に微量の纖維と砂粒が混入する。

(25図2)は口縁部の破片である。わずかに肥厚する口縁に縦のキザミと短い横走沈線が施文されている。口縁部文様帶には横走沈線2条を境として、上位に刺突文4条、下位に同じく刺突文2条が横走する。胴部に貝殻条痕文が施文されている。内側には煤が付着している。

(25図3)は口縁部の破片である。横走沈線10条とその間に刺突文が2条認められる。

(25図4)は、深鉢口縁部の破片である。口唇部にキザミが連続して施文される。外面には貝殻条痕文施文後、斜位に連続した約1cmの撚糸文が、不規則に施文されている。胎土は微量の纖維と砂粒が混入する。補修孔がある。

(25図5)は深鉢の胴部の破片である。破片上位には、主として縦位の沈線文に平行して細い刺突が連続し、破片下位には、横位の沈線文に平行して横からの刺突が連続している。文様から物見台式土器に近似すると思われる。

(25図6)は口縁部から胴部の破片である。口縁部外面にキザミが連続しており、体部には貝殻条痕文が認められる。

縄文前期の土器(25図7・8)

(25図7)は、深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部と外面に、LR原体の撚糸圧痕文が横走し、突帯には右からの刺突文が連続する。胴部上位にはRL原体とLR原体の単節斜縄文、胴部下位には結束のある羽状縄文が施文されている。内面にはミガキが認められる。円筒下層d式である。

(25図8)は深鉢の胴部である。上位は3つの0段多条原体を結束した羽状縄文によるもので、途中から反転させて施文している。下位は多軸絡条体の縦位回転による施文である。胎土には微量の纖維と砂粒が混入する。

縄文中期の土器(25図9~12)

(25図9・10)は、深鉢の口縁部である。撚糸文が施文された隆帯を横位、又は斜位方向に貼りまわして区画を作っている。区画の内側には楕円~半円状の刺突文が連続するが、(25図9)では馬蹄状の撚糸圧痕文もみられる。胎土は砂粒が微量混入している。円筒上層c式である。

(25図11・12)は、同一個体の深鉢の口縁部である。(25図11)は口縁部文様帶と波状口縁の頂部にある隆帯に、それぞれ平行して刺突文が連続する。(25図12)には貫通する孔がある。円筒上層c式土器である。

縄文後期の土器(25図13・14)

(25図14)は、縄文時代後期前葉(十腰内I式)の深鉢の胴部文様帶の破片で、蛇行する沈線文が

描かれている。

(25図13) は、縄文後期の深鉢の口縁部と思われるが、弥生時代の可能性もある。R原体による縦位の撲糸文が施文されている。

2 石器 (26～32図)

石器は調査区全域から出土したが、主として縄文土器と同様に調査区南側に集中しており、トランシェ様石器、石槍、石錐、石匙、石籠、スクレイパー、打製石斧、石核、磨石、砥石が見つかった。分類は多く出土した石籠とスクレイパーのほか、トランシェ様石器を分類した。

トランシェ様石器は側縁部の形状より、I類：頭部に向かって広がる側縁が直線的なもの(26図15～17)、II類：側縁が膨らむもの(26図18)、III類：外反する側縁をもつもの(26図19)に分類した。

I類のうち、(26図15)は基部が尖っており、(26図16)は表面のみ調整されている。(26図17)は調整が側縁に集中し、基部が欠損している。(26図19)は、幅の広い基部に自然面を残している。

石槍(27図20)は、頭部が尖っており、基部は丸く調整されている。表・裏面ともに調整が及ぶが、裏面には若干自然面が残る。

石錐(27図21)は、主要剥離面を多く残し、尖った剥片の先端を両側から調整加工し、錐部としている。

石匙(27図22～24)は頭部に、つまみ状の小突起を持ち、両側縁に刃部が作られている。(27図22)は細長く、表面全体に調整が及んでいる。(27図23)は木葉形で、両側縁に調整加工が集中しており、主要剥離面が多く残っている。先端部は欠損している。(27図24)は台形状のもので、表面を調整加工している。先端部は欠損している。

石籠は平面形より、I類：全体に細長いもの(27図25～28図35)、II類：台形状で頭部にやや幅があるもの(28図36～39)、III類：全体的に短く、頭部を丸く調整しているもの(28図40)に分類した。I類のうち、(27図26・29、28図31～34)の刃部は表面のみ調整加工した片刃で、裏面に主要剥離面が多く残っている。(27図29、28図31～35)は頭部を欠損している。II類(28図36・38)は両面を調整されているが、(28図37・39)は表面のみ調整されている。(28図38)は頭部を欠損している。

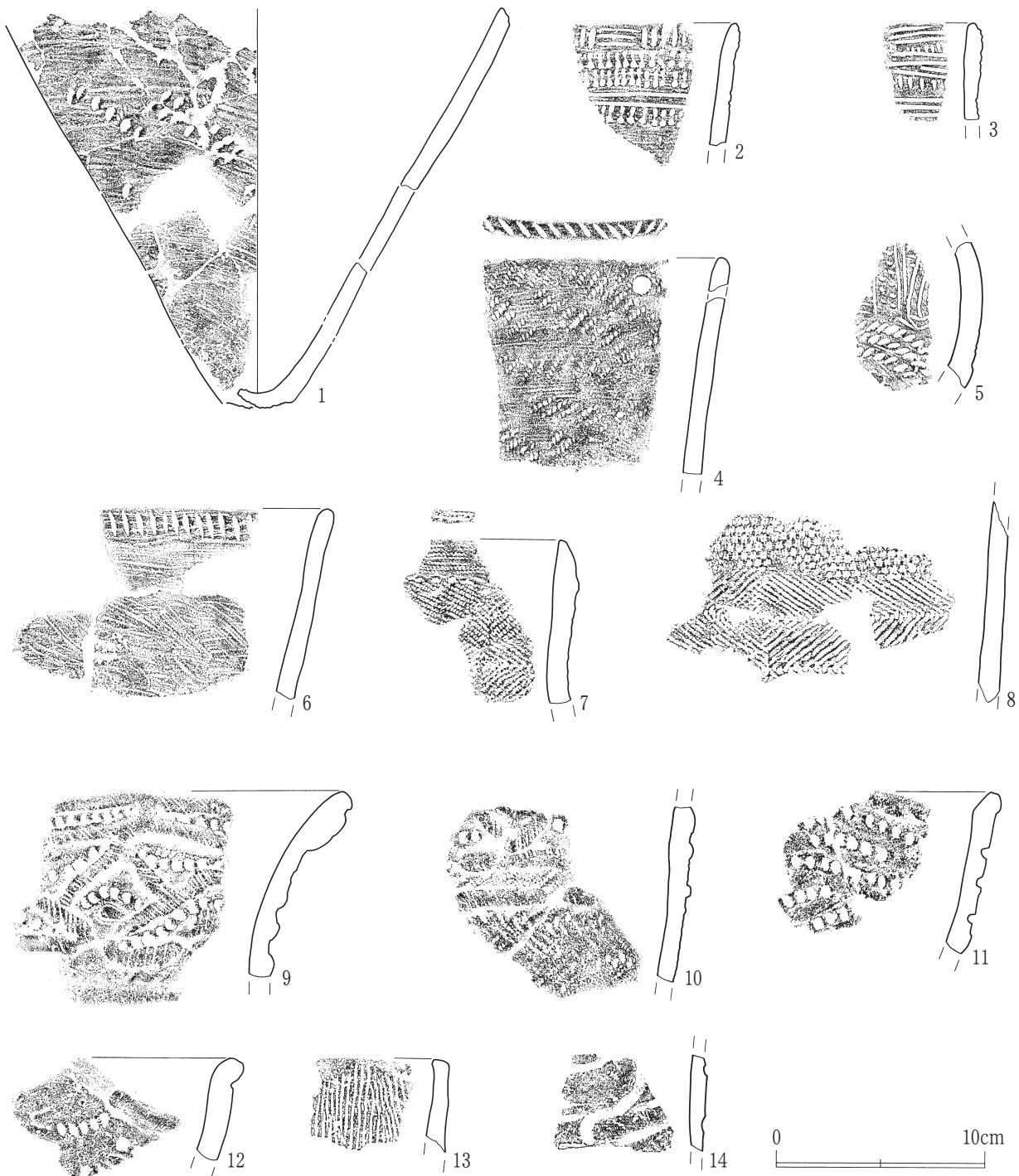
スクレイパーは、打面に対する刃部の位置から、I類：平面形が木葉形で、表面に調整が集中し、打面を除く全ての縁部に刃部加工が認められるもの(29図41・42)、II類：打面の反対側に刃部が作られたもの(29図43～50)、III類：両側縁部に剥離が連続し、刃部を作っているもの(29図51～30図53)、IV類：片側縁部に剥離が連続し、刃部を作っているもの(30図54～56)、V類：打面周辺と反対側に刃部があるもの(30図57～31図60)に分類した。I類のうち(29図41)は先端部に欠損が認められる。II類(29図43～45)は石匙のつまみ部が破損したものであろうか。(29図46・48)の刃部の調整は小さい剥離の連続により、(29図48)は裏面に刃部を作っている。(29図47)は抉れた刃部である。III類(29図51)は右に曲がった剥片を素材とし、左側は先端部まで刃部が作られていない。(30図52)は先端部に自然面が残っており、両側に細かい剥離が連続し刃部としている。(30図53)は主要な刃部は左側で、右側は裏面から狭く刃部加工されている。IV類(30図54～56)はいずれも細かい剥離が連続し刃部としており、(30図55)は裏面から調整されている。V類(30図57・58)は打面側刃部が両面から調整されており、打面反対側刃部は片側からの調整である。(30図57)の打面反対側の刃部は中ほどに調整が集中し抉れている。(31図59)は両面から刃部を調整している。(31図60)はすべ

て片側からの調整である。

打製石斧（31図61）は、第一剥離による剥片を素材としており表面には自然面が多く残っている。直刃型の刃部と右側縁部は、表面から調整され、左側縁部は両面から調整を受けている。

磨石（31図62～32図64）は全面的に磨りが施されている。（31図62・63）は面幅の狭い側縁部や頂部も磨面として利用している。（32図64）は、四面を研磨されて断面形が隅丸方形になっている。

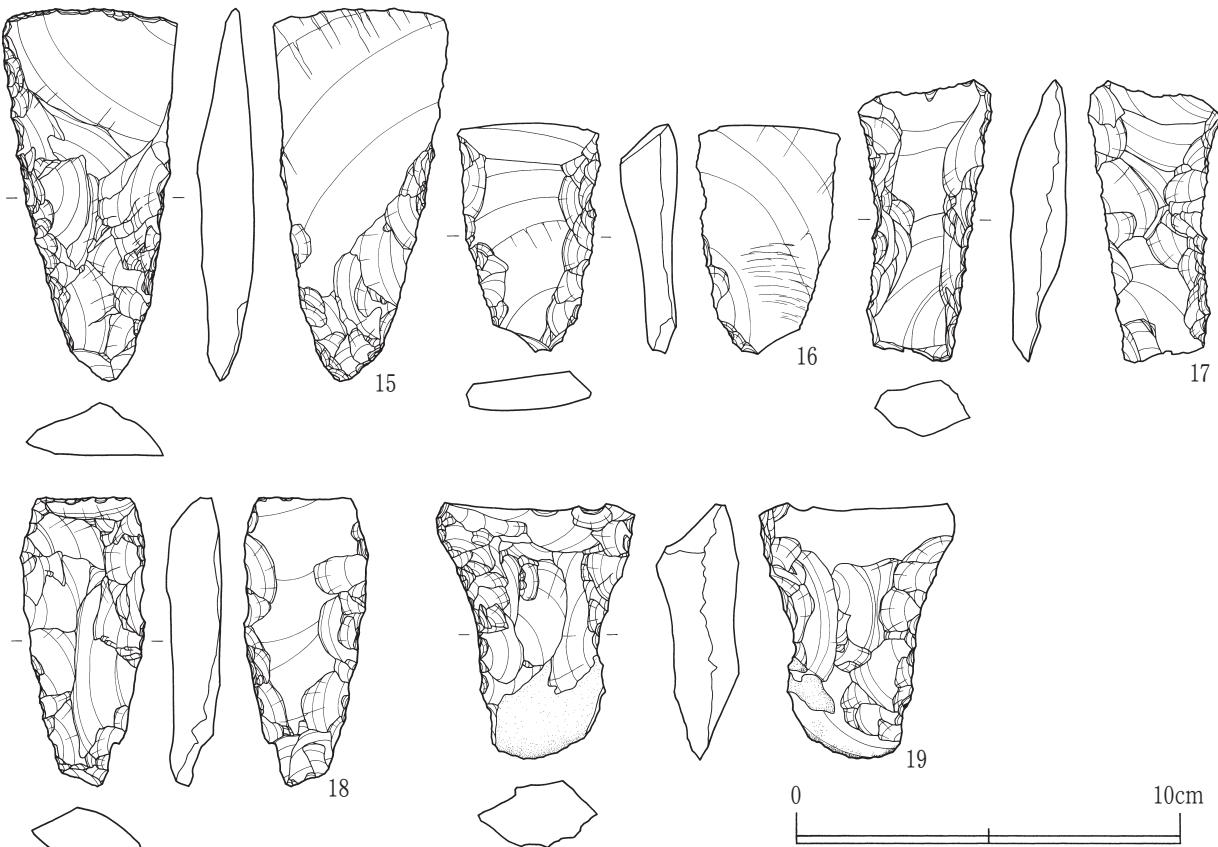
研磨痕のある大型の石（32図65）は、SN 162・163と近接して出土した。研磨痕は中央部に認められ、上端部が被熱している。右側側縁部には石を切り離すための打裂痕が連続している。



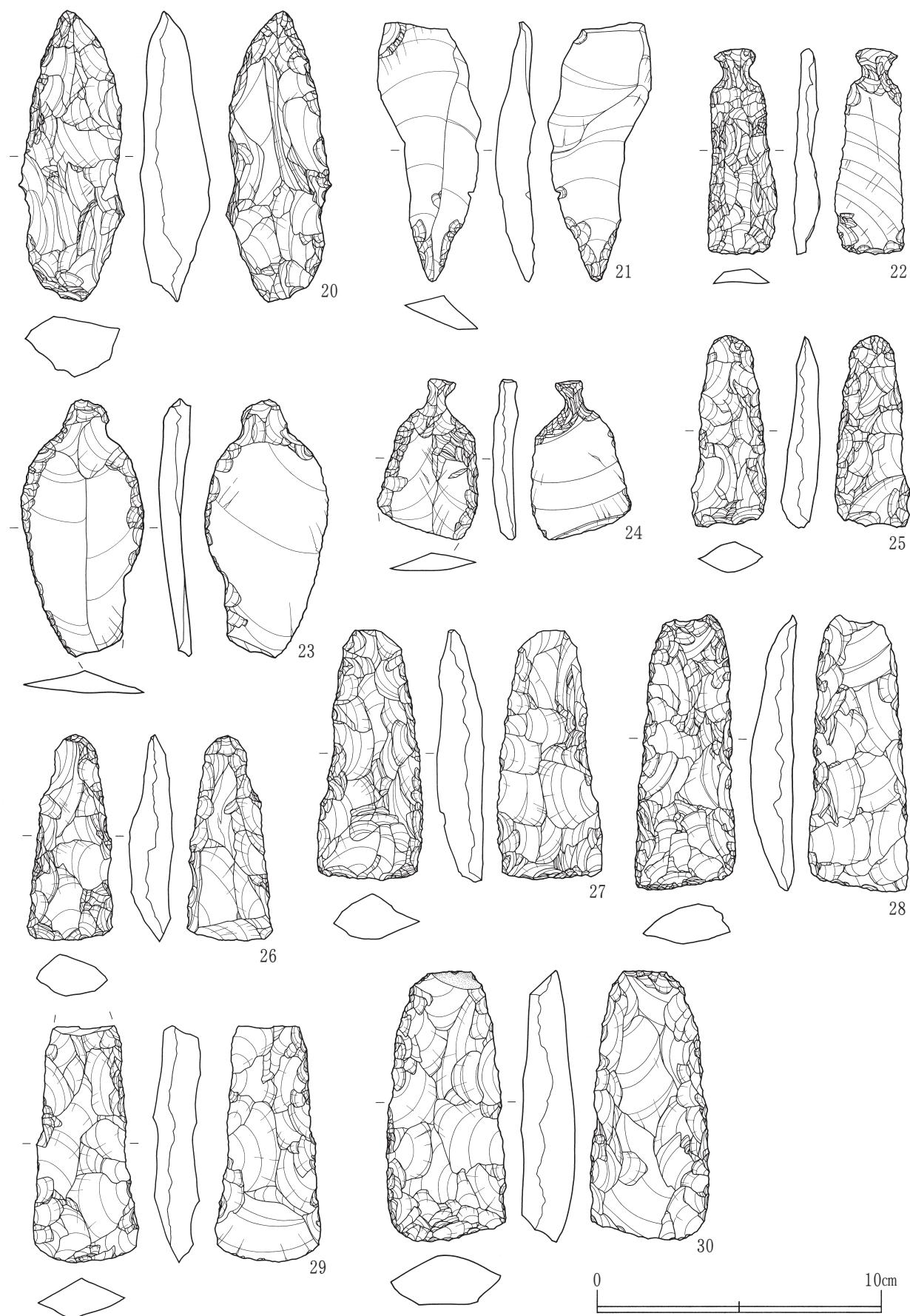
第25図 遺構外出土遺物（縄文1）

第11表 遺構外出土縄文土器観察表

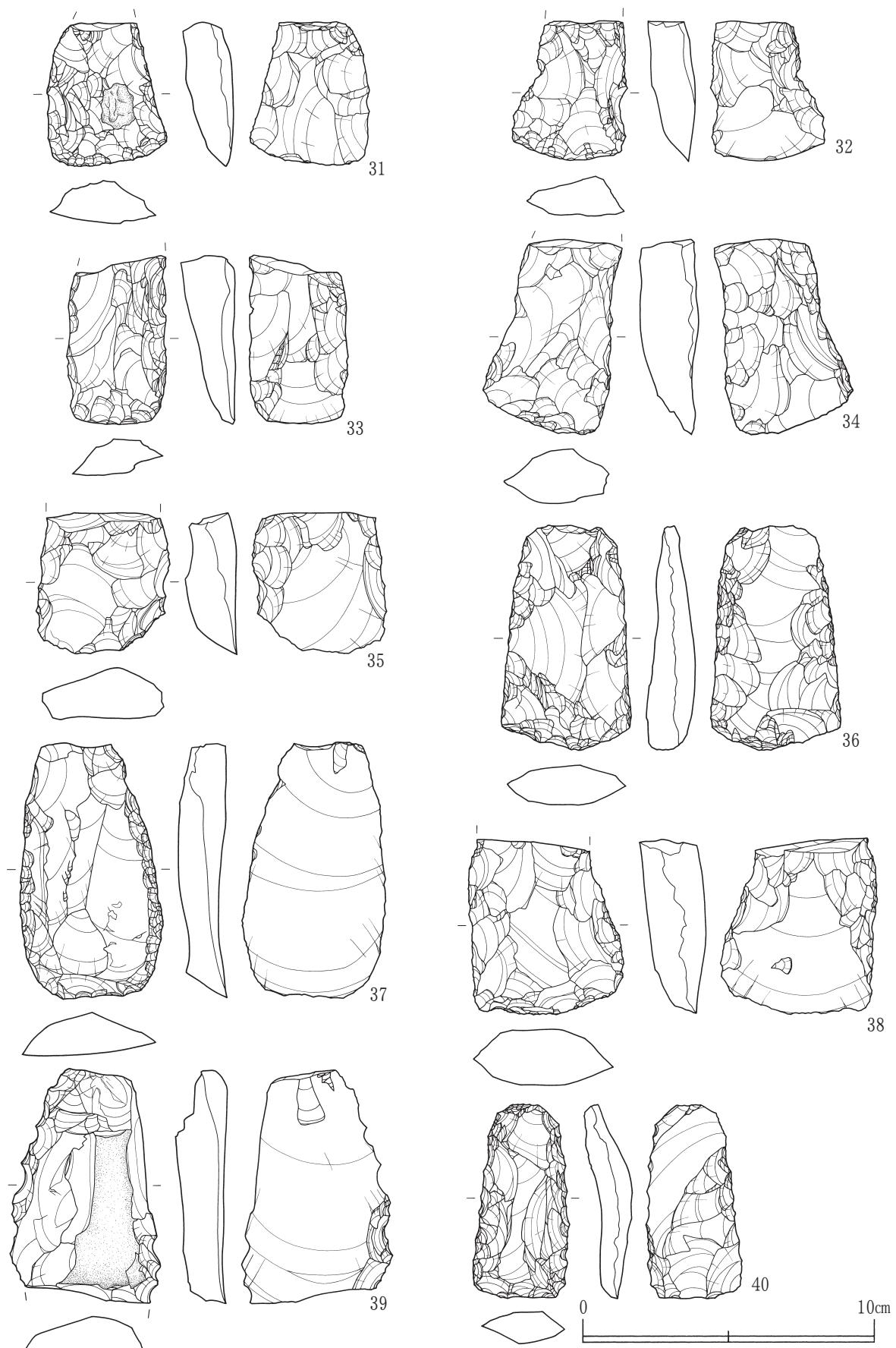
挿図番号	図版番号	出土位置	器種	部位	特徴	備考
第25 図1	17-11・15	LT44 LQ47IV層	深鉢	胴部 ～底部	貝殻条痕文 左上から連続する刺突文	胎土に砂粒微量混入
第25 図2	17-12	LS46IV層	深鉢	口縁部 ～胴部	口唇部周辺：キザミ 6条 短い横走沈線3条 口縁部文様帶：横走沈線2条、横位に連続する刺突 上位に4条、下位に2条 胴部：貝殻条痕文	胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図3	17-13	LI63IV層	深鉢	口縁部	横走沈線10条 連続する刺突2条	胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図4	17-16	LE66	深鉢	口縁部 ～胴部	口縁部：口唇部に斜方向に連続するキザミ 胴部：貝殻条痕文→L原体による撲糸圧痕文	補修孔あり 胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図5	17-14	MB46 撹乱	深鉢	胴部	上位：縦位の沈線周辺に上からの刺突が連続する。 下位：横位沈線周辺に横からの刺突が連続する。	物見台式？ 胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図6	17-17	LT44III層 LI65III層	深鉢	口縁部 ～胴部	口縁部外面：貝殻条痕文 キザミ 胴部：貝殻条痕文	胎土に砂粒微量混入
第25 図7	18-1	LR47III層	深鉢	口縁部 ～胴部	口唇部：LR原体による撲糸圧痕文 口縁部：LR原体の単輪絡条体による撲糸圧痕文 連続する右からの刺突文がある突帶 胴部上位：RL原体（右側）とLR原体（左側）の単節斜縄文 胴部下位：結束のある羽状縄文 内面：ミガキ	円筒下層d式 胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図8	-	ME47III層 ME48III層	深鉢	胴部	胴部上位：0段多条原体による結束のある羽状縄文 途中から反転 胴部下位：多輪絡条体	胎土に砂粒・繊維微量混入
第25 図9	18-2	LP52III層	深鉢	口縁部	口縁部文様帶：LR原体横位回転単節斜縄文 撲糸文のある隆帯 棒状工具による半円状 刺突文 馬蹄状撲糸圧痕文	円筒上層c式 胎土に砂粒微量混入
第25 図10	-	LP52III層	深鉢	口縁部文様帶 ～胴部	口縁部文様帶：撲糸文のある隆帯 刺突文	円筒上層c式 胎土に砂粒微量混入
第25 図11	18-4	LF52III層	深鉢	口縁部	口縁部文様帶：隆帯 連続する刺突文	円筒上層c式 第25図12と同一個体 胎土に砂粒微量混入
第25 図12	18-3	LQ53II層	深鉢	口縁部	口縁部文様帶：隆帯 連続する刺突文 貫通孔	円筒上層c式 第25図11と同一個体 胎土に砂粒微量混入
第25 図13	-	LR46IV層	深鉢	口縁部	R原体縦位撲糸文	胎土に砂粒微量混入
第25 図14	-	LH66III層	深鉢	胴部 文様帶	蛇行する沈線文	十腰内I式 胎土に砂粒微量混入



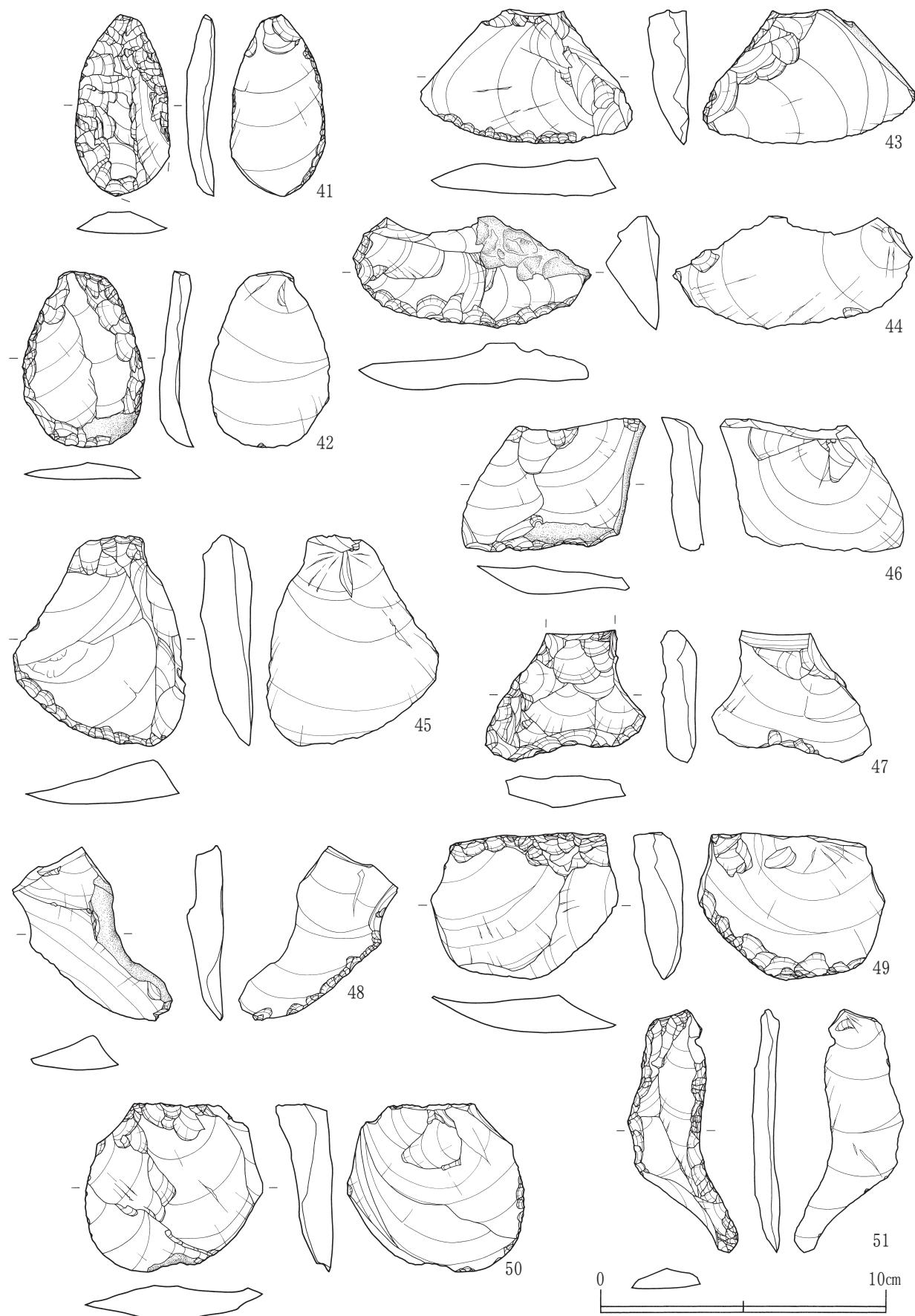
第26図 遺構外出土遺物（縄文2）



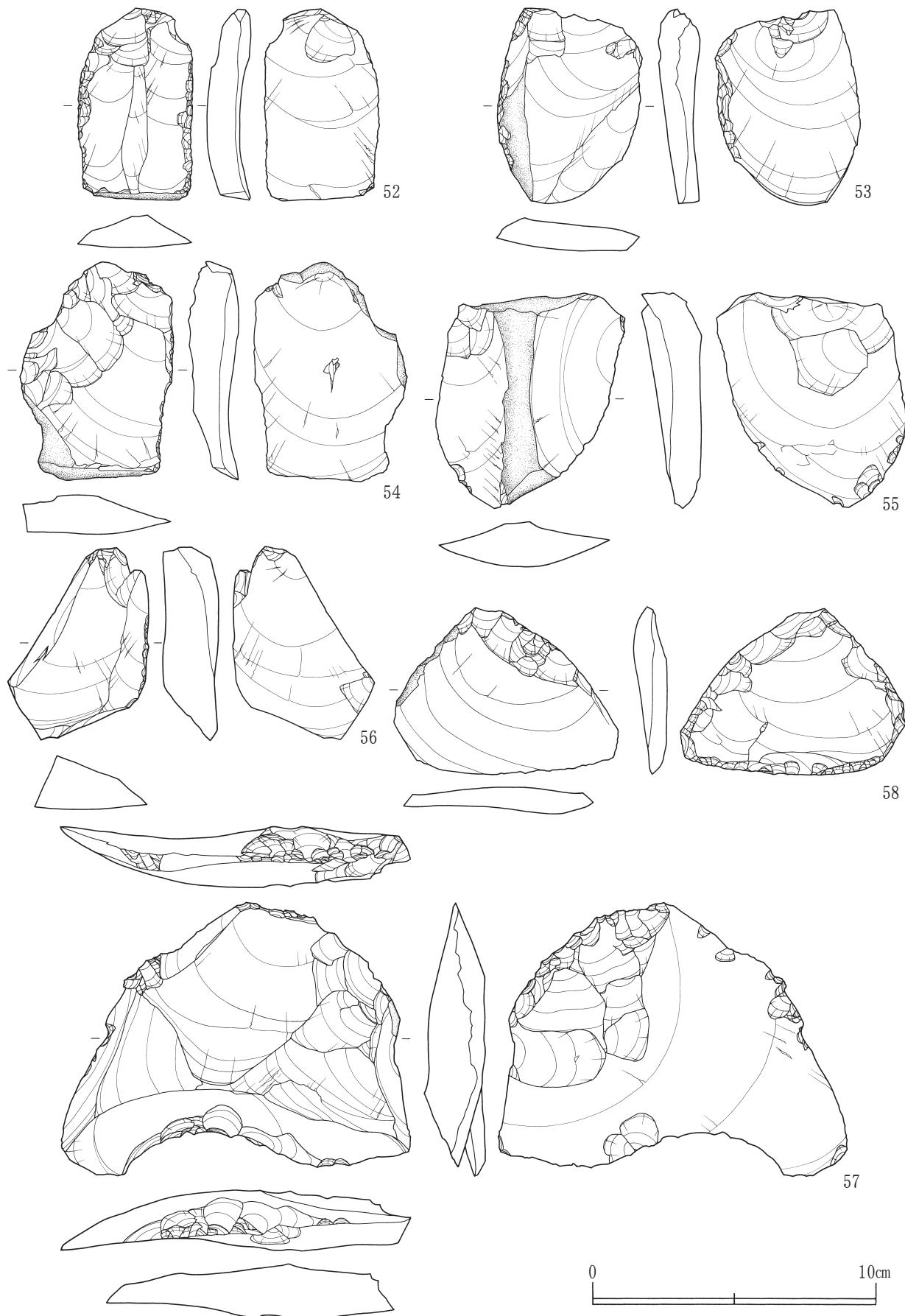
第27図 遺構外出土遺物（縄文3）



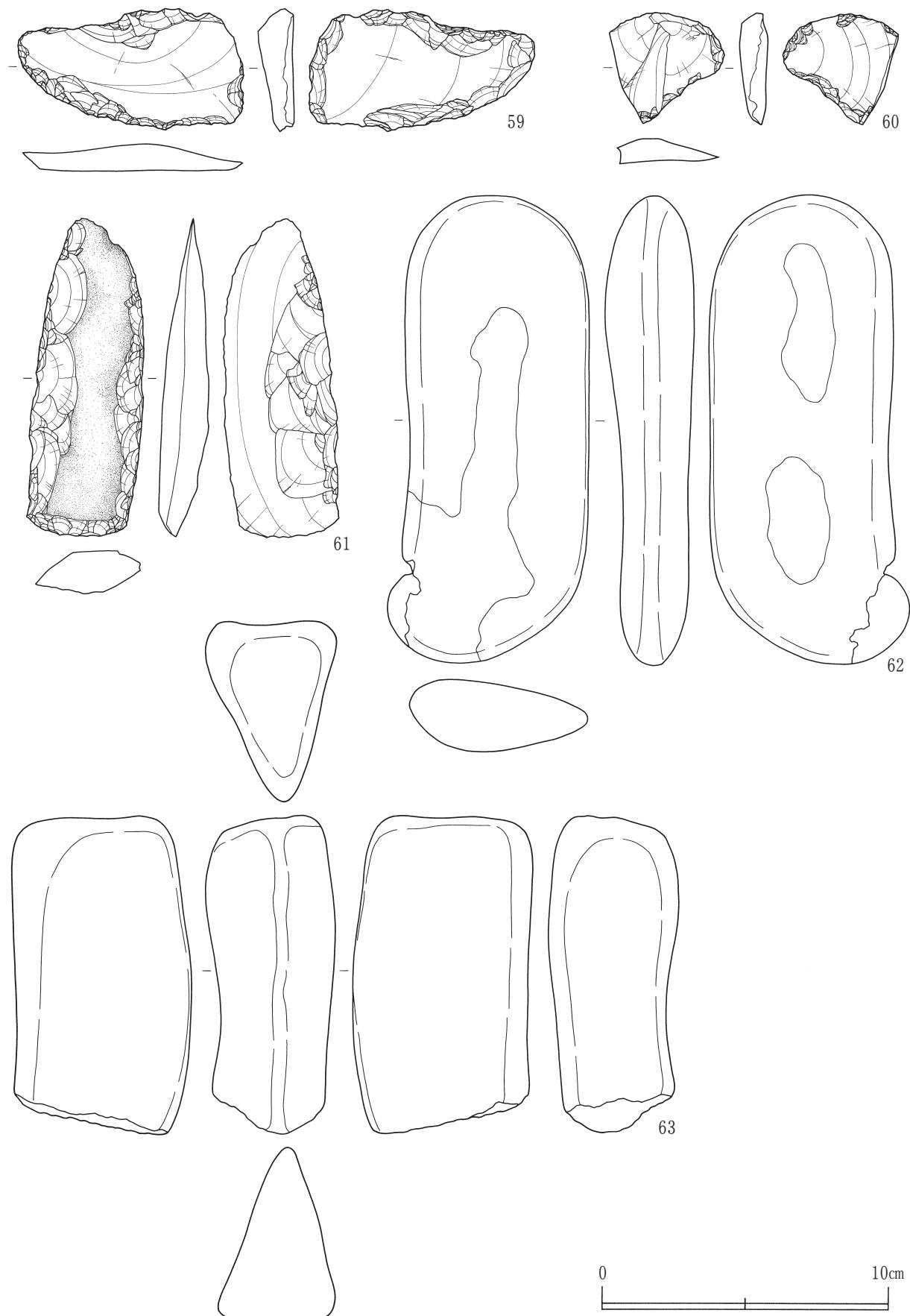
第28図 遺構外出土遺物（縄文4）



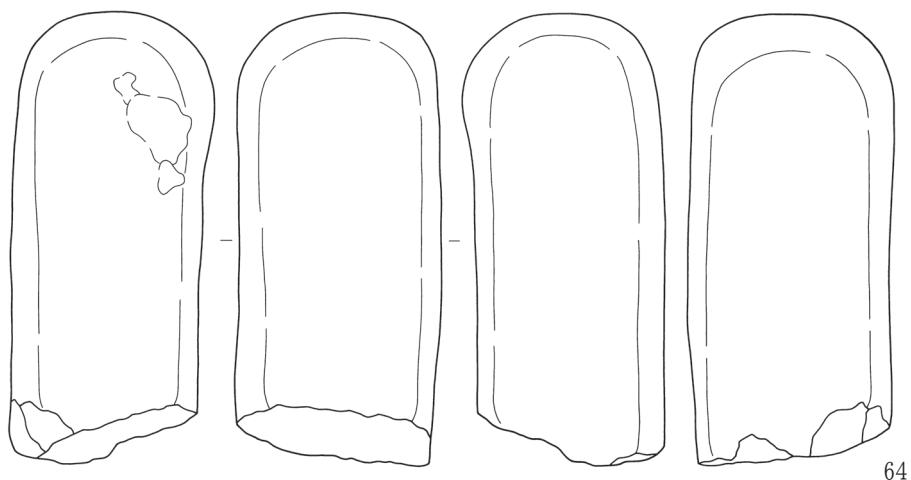
第29図 遺構外出土遺物（縄文5）



第30図 遺構外出土遺物（縄文6）

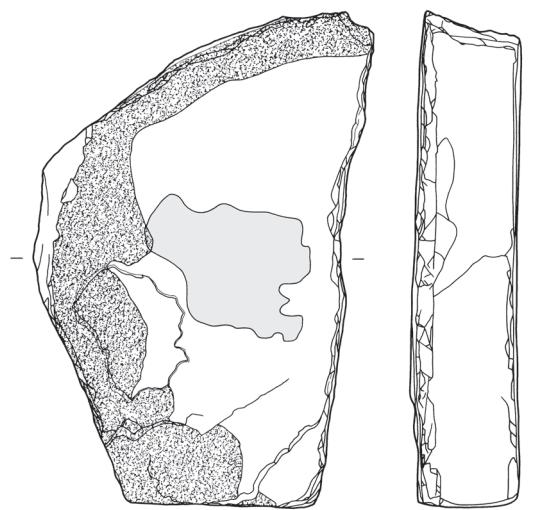


第31図 遺構外出土遺物（縄文7）



64

0 10cm



65



0 20cm

第32図 遺構外出土遺物（縄文8）

第12表 遺構外出土石器計測一覧表

()内の数値は残存値

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第26図15	16-1	MC 46 III層	トランシェ様石器	99.0	46.0	15.0	37.1	
第26図16	16-2	LJ 64 III層	トランシェ様石器	60.5	38.0	15.0	30.4	
第26図17	16-3	LG 67 IV層	トランシェ様石器	75.0	35.0	14.0	30.6	
第26図18	16-4	LH 66 II層	トランシェ様石器	76.0	33.0	15.0	33.6	
第26図19	16-5	LH 67 IV層	トランシェ様石器	67.0	52.0	22.0	55.2	
第27図20	16-6	MB 44 II層	石槍	104.0	38.0	25.0	77.6	
第27図21	16-7	LQ 66 III層	石錐	93.0	37.0	14.0	25.0	
第27図22	16-8	MF 47 III層	石匙	73.0	25.0	10.0	16.2	
第27図23	16-9	LP 58 IV層	石匙	(92.0)	43.0	12.0	(28.3)	欠損
第27図24	16-10	LN 51 IV層	石匙	(57.0)	36.0	9.0	(13.5)	欠損
第27図25	16-11	LS 50 II層	石籠	68.5	27.0	14.0	19.8	
第27図26	16-12	LI 64 II層	石籠	73.5	30.5	16.0	30.7	
第27図27	16-13	MC 46 III層	石籠	89.0	37.0	16.0	52.0	
第27図28	16-14	LT 44 II層	石籠	99.0	36.0	16.0	53.0	
第27図29	16-15	LS 43	石籠	(85.0)	37.5	17.0	(47.0)	欠損
第27図30	16-16	LK 64 III層	石籠	97.0	43.0	19.5	85.1	
第28図31	-	LR 45 IV層	石籠	(50.0)	42.0	17.5	(32.1)	欠損
第28図32	-	LR 46 IV層	石籠	(49.0)	40.5	16.5	(27.7)	欠損
第28図33	-	LR 45 IV層	石籠	(59.0)	35.0	19.0	(31.5)	欠損
第28図34	-	LQ 47 IV層	石籠	(68.0)	49.0	21.0	(61.8)	欠損
第28図35	-	LF 68 III層	石籠	(49.0)	47.0	18.0	(49.5)	欠損
第28図36	16-17	MC 48 II層	石籠	78.0	46.0	17.0	57.4	
第28図37	16-18	MG 50 I層	石籠	89.0	50.0	22.0	69.2	
第28図38	-	LH 65 III層	石籠	(61.0)	54.0	23.0	(79.0)	欠損
第28図39	-	MC 45 III層	石籠	82.0	52.0	18.0	76.2	
第28図40	16-19	MC 46 III層	石籠	68.0	33.0	12.0	28.9	
第29図41	18-5	LH 67 IV層	スクレイパー	(65.0)	34.0	10.0	(18.1)	欠損
第29図42	-	LP 58 IV層	スクレイパー	63.0	43.0	12.0	22.7	
第29図43	18-6	排土	スクレイパー	48.0	75.0	15.0	43.0	
第29図44	-	LI 66 II層	スクレイパー	40.0	85.0	24.0	46.4	
第29図45	-	MB 45 I層	スクレイパー	75.0	61.0	19.0	65.0	
第29図46	-	MA 45 IV層	スクレイパー	48.0	66.0	20.0	33.2	
第29図47	-	表採	スクレイパー	(47.0)	57.0	13.0	(30.3)	欠損
第29図48	-	LG 65 III層	スクレイパー	62.0	57.0	13.0	23.2	
第29図49	-	LH 65 IV層	スクレイパー	53.0	66.0	18.0	50.4	
第29図50	-	LH 65 IV層	スクレイパー	60.0	63.0	20.0	51.3	
第29図51	-	LP 56 II層	スクレイパー	87.0	39.0	10.0	17.7	
第30図52	18-7	LF 68 III層	スクレイパー	69.0	46.0	16.0	37.3	
第30図53	-	LP 61 III層	スクレイパー	70.0	52.0	15.0	45.9	
第30図54	-	MB 46	スクレイパー	79.0	55.0	18.0	68.7	
第30図55	-	LH 65 IV層	スクレイパー	77.0	62.0	22.0	83.1	
第30図56	18-9	LH 66 II層	スクレイパー	69.0	51.0	20.0	55.2	
第30図57	-	MC 47 II層	スクレイパー	98.0	125.0	22.0	206.3	
第30図58	-	LG 66 IV層	スクレイパー	60.0	81.0	12.0	45.5	
第31図59	18-8	MC 46 II層	スクレイパー	43.0	80.0	13.0	37.4	
第31図60	-	MB 41 IV層	スクレイパー	40.0	41.0	15.0	13.3	
第31図61	18-10	LL 58 I層	打製石器	113.0	41.0	18.0	76.0	
第31図62	18-11	LJ 64 III層	磨石	166.0	71.5	32.0	432.0	
第31図63	-	表採	磨石	113.0	64.0	47.0	426.0	
第32図64	-	MB 55 攪乱	磨石	119.0	55.0	55.0	669.0	
第32図65	-	LS 45 III層	研磨痕のある大型石	389.0	266.0	80.6	1150.0	

4 平安時代の遺構と遺物

平安時代の集落を構成する遺構は、主に調査区中央部を横断している溝跡 S D 130 の北東側に分布している。土師器等を出土する遺構もあるが、一部を除き、そのほとんどは時期決定の明確な根拠を欠く。これらの遺構は検出状況や埋土の堆積状況から平安時代のものと推定した。

(1) 穫穴住居跡

3軒の竪穴住居跡はすべて S D 130 の北東側から検出されている。これらは、主軸方位や構造が似通っており、決め手には欠けるが比較的近い時期の住居であろうと考えられる。

S I 01 (第33~35図、図版 7・19)

〈位置・確認状況〉 L I 65・66、L J 65・66、L K 65グリッドに位置する。トレント断面、及び第Ⅲ層中位で火山灰粒を含む若干褐色がかかった黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 住居内に一回り小型の住居跡 S I 02がある。床面の粘土の状況から S I 02の方が古いものと考えられ、S I 02を拡張して S I 01を建てたものと判断した。また、S I 01が埋め戻された後に掘られた S K P 75・80・112・354 と重複している。

〈堆積土〉 6層あり、1層は若干の地山土塊を含む黒褐色土で、遺構内を全て埋め尽くしている。2層は貼床の土である。1層は地山土塊の他に白色砂粒を含み、その堆積状況から、十和田 a 火山灰が降下した後で、本住居跡は廃絶後人為的に埋め戻されたと考えられる。4~6層はトレントに出てきたカマドの土である。

〈平面形・規模〉 平面形は対角線がほぼ東西南北を向く正方形形状を呈する。各壁の長さは、北東壁 4.7m、北西壁 4.6m、南東壁 4.5m、南西壁 4.5m である。

〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、北東壁 40cm、北西壁 42cm、南東壁 36cm、南西壁 42cm である。立ち上がりはいずれの壁もほぼ垂直である。

〈床〉 掘形底面は凸凹があり、南西側を中心に底面全体に地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めて平坦にしている。これは S I 02 の壁溝や柱穴を埋めるのにも使用されている。カマド周辺と南東壁付近と南西壁溝付近に粘土塊が分布していた。

〈壁溝〉 北西側の溝が浅く確認しづらいが、ほぼ全体を巡る。幅 10~20cm、床面からの深さは、浅いところで 3cm、深いところで 11cm である。北西側の南部分が浅く広がっているがこの部分には貼床土が多く盛られており、壁を貼床土で押さえていたのではないかと考えている。

〈柱穴〉 床面、貼床下から柱穴と考えられるピットを 16 基検出したが、貼床下のものは S I 02 のものと判断し、壁溝に添う 5 つの柱穴を S I 01 のものとした。P 1・3・4 は住居跡隅に位置する柱穴である。西隅のみ柱穴が見られないが、壁溝と同様に貼床土を多く盛ってある部分のため、本来は柱があり、貼床土で支えたのではないかと思われる。P 2・5 はそれぞれ北東壁溝、南西壁溝の中央近くにあり、補助柱ではないかと考えられる。

〈カマド〉 北東壁の北寄りの位置でトレントに断面が見られ、黒褐色・黄褐色粘土の広がりで確認した。規模は、長さ 170cm、幅 80cm で、主軸は北東を向いている。煙道天井部分、及びカマド南側

袖の一部と燃焼部が残存していた。煙道は、両側を粘土によって構築しており、壁から1mほど北東へ延びている。検出面からの深さは40cmで、緩やかに傾斜する断面形である。袖は主に煙道と同じ黄褐色の粘土で作られており、内壁には白灰色の凝灰岩とみられる石の板が使用されている。この石は被熱を受け下部は黒く焦げ、脆くなっていた。残存した燃焼部を含め全体を覆っていた粘性の強い暗赤褐色土が、袖において黄褐色粘土の上も覆っており、カマド本体はこの土により作られていたと推測される。燃焼部は地山土の上に粘土が盛られている。この丘状の燃焼部の煙道寄りの位置に、支脚に使われた土器が逆位の状態で置いてあった。燃焼部から南西の床面には広く黄燈色粘土が敷かれており、その下からS I 02のカマド跡が検出された。これは古いカマドを覆うために敷かれたものと考えられる。堆積土は9層に分けられた。1～3層は倒壊した部分も含めカマドの構築土である。4層は流入土、5～9層は燃焼部の被熱の状況である。10層は床に貼られた粘土、11～14層はS I 02のものである。

〈出土遺物〉住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の甕約250片、支脚、刀子2本と鉄製品が出土した。そのうち、土師器甕（35図1）、支脚（35図2）、刀子2本（35図3・4）、鉄製品（35図5）を図下した。支脚用土器は高さが7cmほどの小型の湯飲み状の土器で内外面口縁部にヨコナデ、胴部は上から下へケズリ調整が施されている。土師器は、口縁部が外傾する甕で、内面胴部にナデが見られるが、基本的には無調整である。刀子はカマドから出土した。鉄製品はその形状から釣り針と思われる。

〈時期〉本住居跡は、堆積土中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以後に埋められたのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考えられる。カマド手前の床面粘土中から採取した炭化材の放射性炭素年代測定では $1,228 \pm 35$ B Pの測定値が得られた。

S I 02（第34・36図、図版7）

〈位置・確認状況〉L I 65・66、L J 65・66グリッドに位置する。S I 01の床面に一回り小さい溝跡が認められ、カマド手前に広がる粘土の下から別のカマド火床面が検出されたことから、住居跡として確認した。

〈重複関係〉S I 01と重複しており、本住居の方が古い。

〈堆積土〉本住居跡上面にはS I 01があるため、本住居跡の堆積土はない。

〈平面形・規模〉平面形はほぼ正方形を呈する。各壁の長さは、壁はないので壁溝の範囲で規模をとらえると、北東壁3.5m、北西壁3.5m、南東壁3.5m、南西壁3.5mである。

全て、S I 01の壁溝とほぼ平行である。

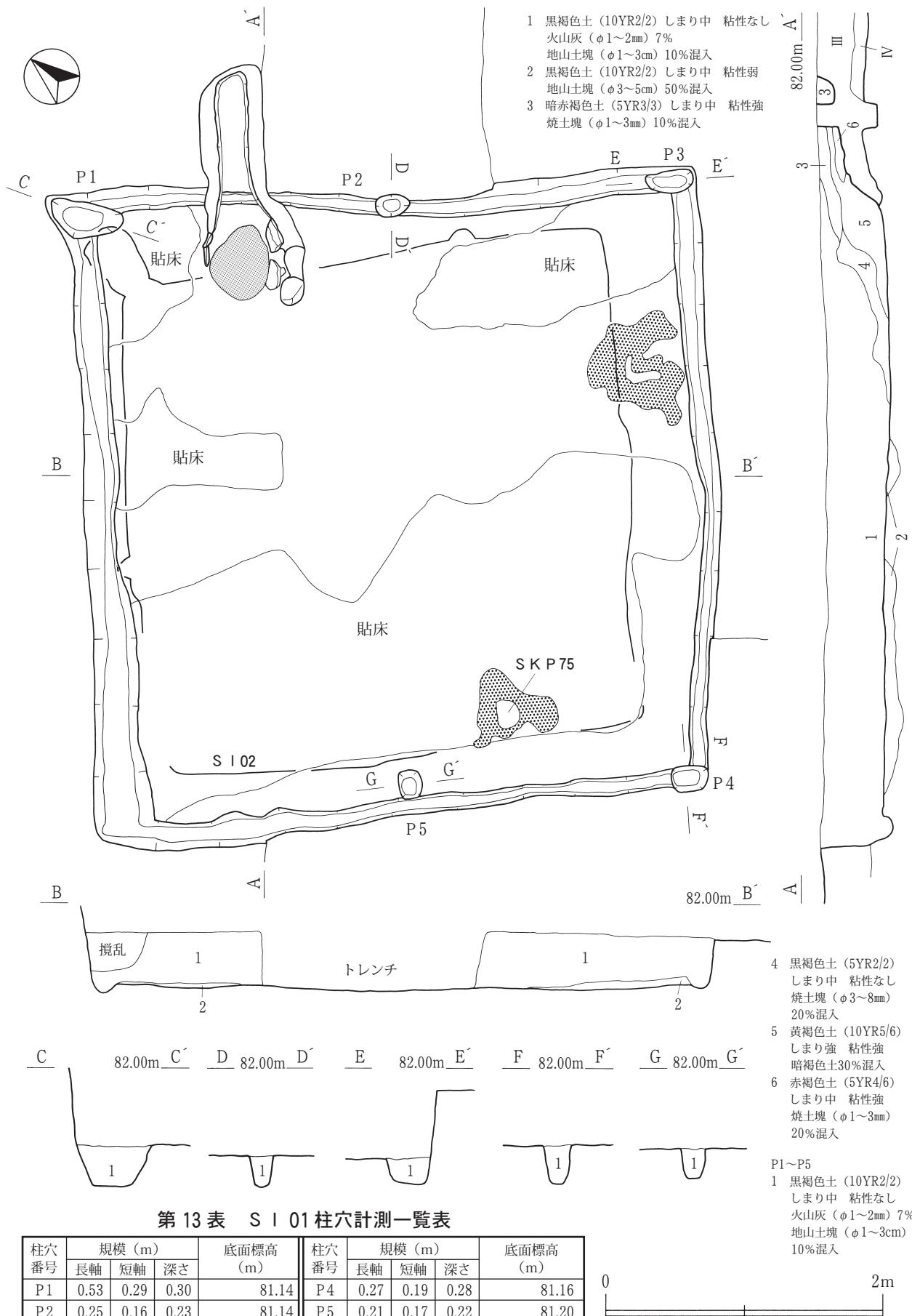
〈壁〉全ての壁は失われており、高さ等は不明である。

〈床〉基本的にS I 01と同じ床面を共有するものと思われる。掘形底面は凸凹しており、本住居の段階から床を地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めて平坦に整えていたと思われる。

〈壁溝〉S I 01と同様に北西側の溝が浅く確認しづらく南部分が見分けられない。カマド付近と南東側南端部分でも一部失われているが全体を巡っていると思われる。幅10～20cm、床面からの深さは、浅いところで1cm、深いところで6cmである。全てS I 01の貼床土で埋められていた。

〈柱穴〉貼床下から11基が検出された。P 1～7は壁溝に添う位置にあり、P 1とP 2、P 5とP 6

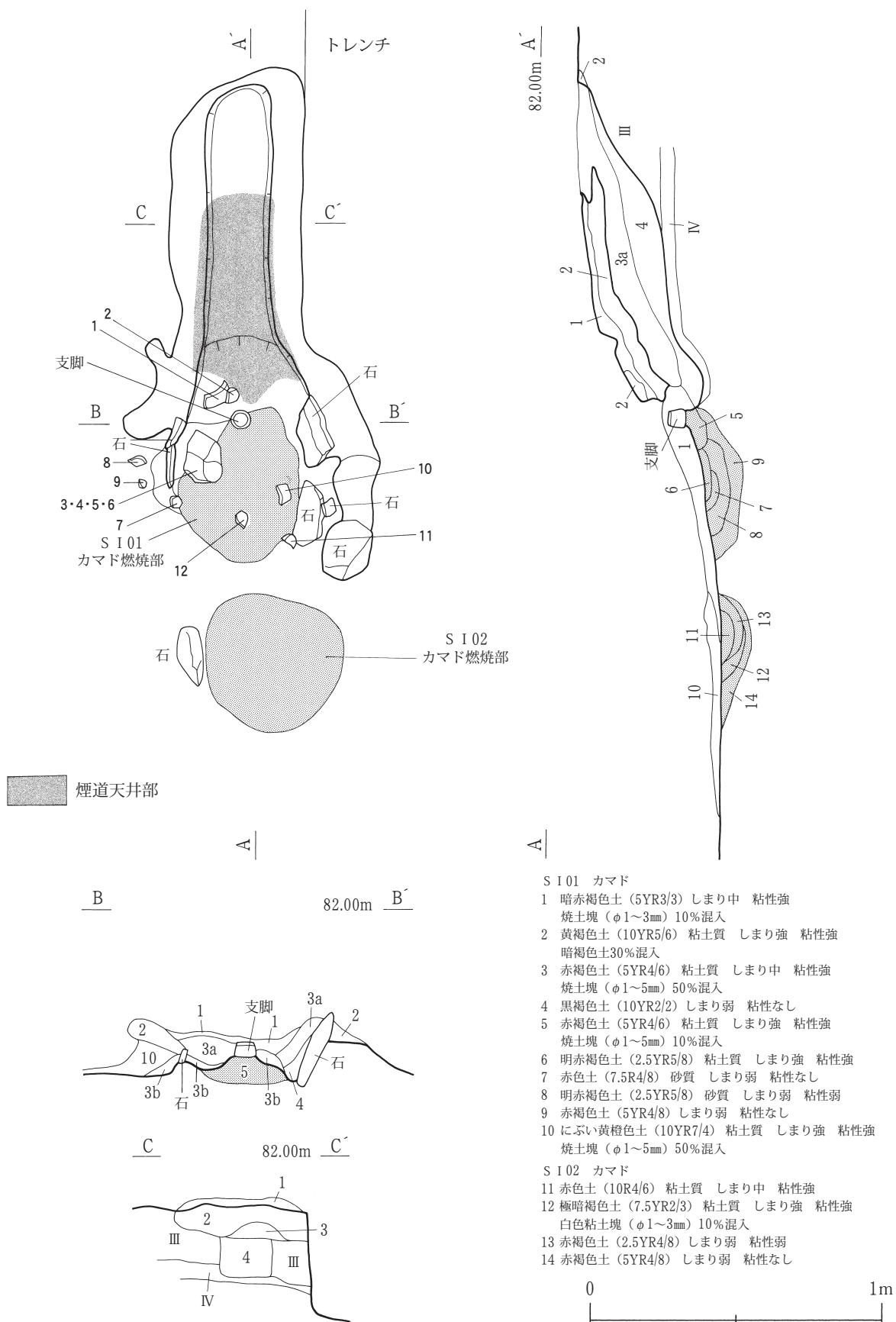
第2節 検出遺構と遺物



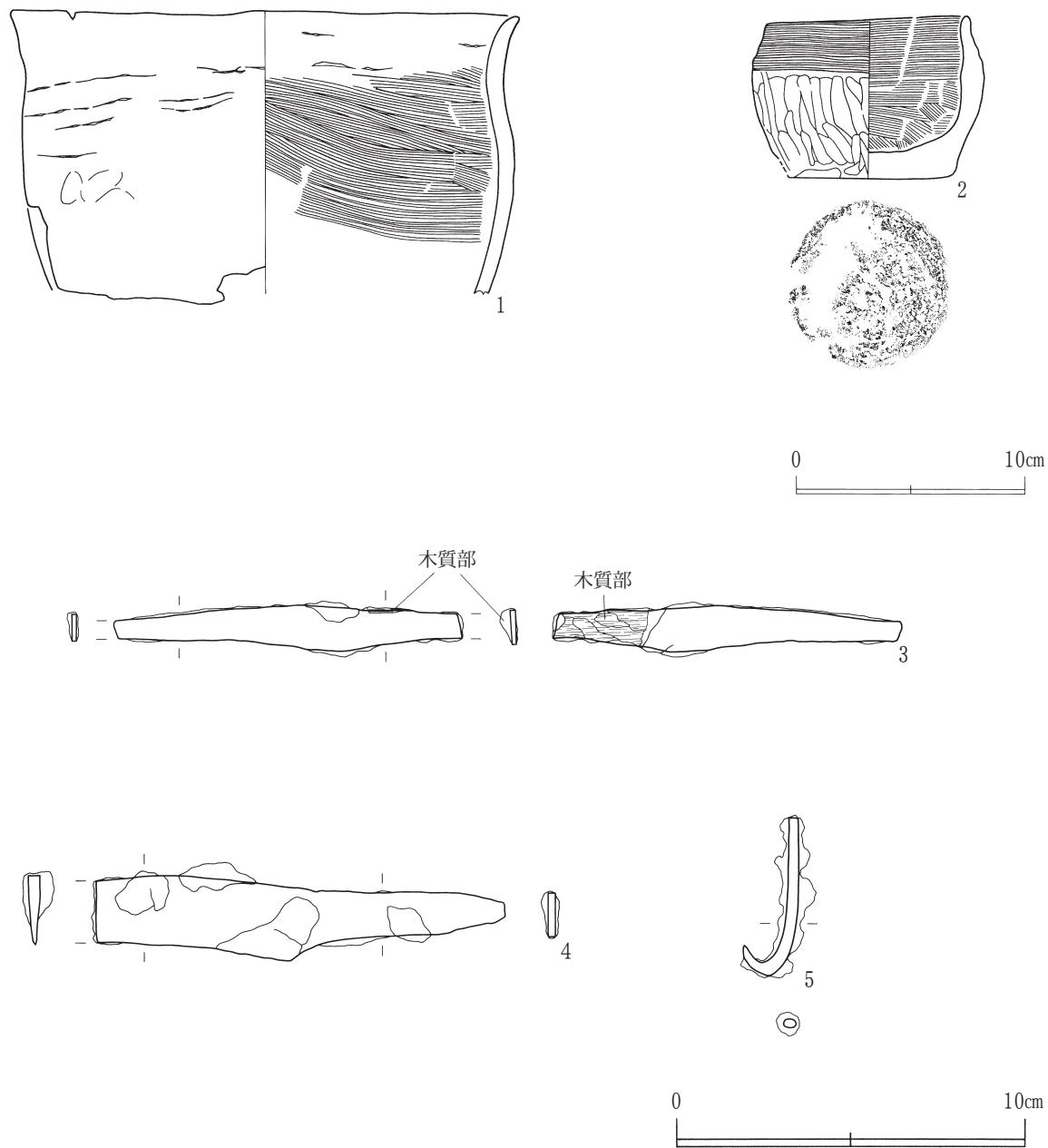
第13表 S.I.01柱穴計測一覧表

柱穴 番号	規模 (m)			底面標高 (m)	柱穴 番号	規模 (m)			底面標高 (m)
	長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ	
P1	0.53	0.29	0.30	81.14	P4	0.27	0.19	0.28	81.16
P2	0.25	0.16	0.23	81.14	P5	0.21	0.17	0.22	81.20
P3	0.34	0.17	0.20	81.16					

第33図 S.I.01 竪穴住居跡



第34図 S I 01・02 積穴住居跡カマド



第35図 S I 01 竪穴住居跡出土遺物

第14表 S I 01 出土土器観察表

()内の数値は推定値

挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	口径×器高×底径(cm)	特徴		外底部
							外面	内面	
第35 図1	—	カマド1・3~6	土師器	甕	口縁部~胴部	(22.0)×—×—	輪積み痕	輪積み痕 ヘラナデ	—
第35 図2	19— 1	カマド燃焼部	土師器	甕	完形	8.6×7.1×7.1	口縁部:ヨコナデ 胴部:ケズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラナデ	砂底

第15表 S I 01 出土鉄製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物名	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
第35図3	19—2	刀子	102.0	16.0	12.0	8.1	柄の木部残存
第35図4	—	刀子	120.0	29.0	15.0	25.0	
第35図5	—	鉄製品	47.0	22.0	13.0	3.3	

は重複している。これらは位置関係から壁の補助柱ではないかと考えられる。P8～11は北東壁沿いに4基並んでいるが使用意図は不明である。全てS I 01の貼床土で埋められていた。

〈カマド〉 S I 01のカマド火床面から南西に0.6mほどずれた位置に貼られた粘土の下から火床面と残った袖石の一部が確認された。壁溝も0.6mほどのずれであることから、住居を拡張する際カマドも壁と平行に北東へずらし、旧カマドは粘土を貼って隠したものと思われる。S I 01の第34図に掲載したこのカマドの堆積土11～14層は燃焼部の被熱の状況である。燃焼面は、地山土をそのまま利用している。

〈出土遺物〉 本住居跡に伴うと考えられる貼床の土からは、遺物が出土しなかった。

〈時期〉 本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 01の時期から平安時代(10C中葉)に属すると考えられる。

S I 03 (第37～40図、図版8・20)

〈位置・確認状況〉 L T 59、L S 57・58・59、L R 58・59グリッドに位置する。トレンチ断面と、第Ⅲ層中位で地山土塊、火山灰粒を含む若干褐色がかかった黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 9層あり、基本的には1～3層が主な堆積土で、微妙な堅さや地山土塊を含む量の違いはあるが、いずれも十和田a火山灰起源と考えられる軽石粒や白色砂が混じる黒色土である。4～9層は壁際のもので、堆積状況から周囲の壁のⅢ層土からの崩落土と考えられる。自然堆積の様子は見られず、S I 01と同じく、十和田a火山灰が降下した後で、本住居跡は人為的に埋め戻されたと考えられる。

〈平面形・規模〉 平面形は、対角線がちょうど東西南北の方向と合致する一辺5m強の正方形である。各壁の長さは、北西壁5.17m、北東壁5.19m、南西壁5.38m、南東壁5.30m。南東壁中央よりやや東側の黒色土中に幅約60cm、長さ約100cm、深さ約0～25cmの緩やかなスロープ状の張り出しがあり、踏み固められた黒土が見られることから入り口跡と考えられる。

〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、北西壁で60cm、北東壁61cm、南西壁60cm、南東壁50cmである。立ち上がりは、いずれの壁もほぼ垂直である。

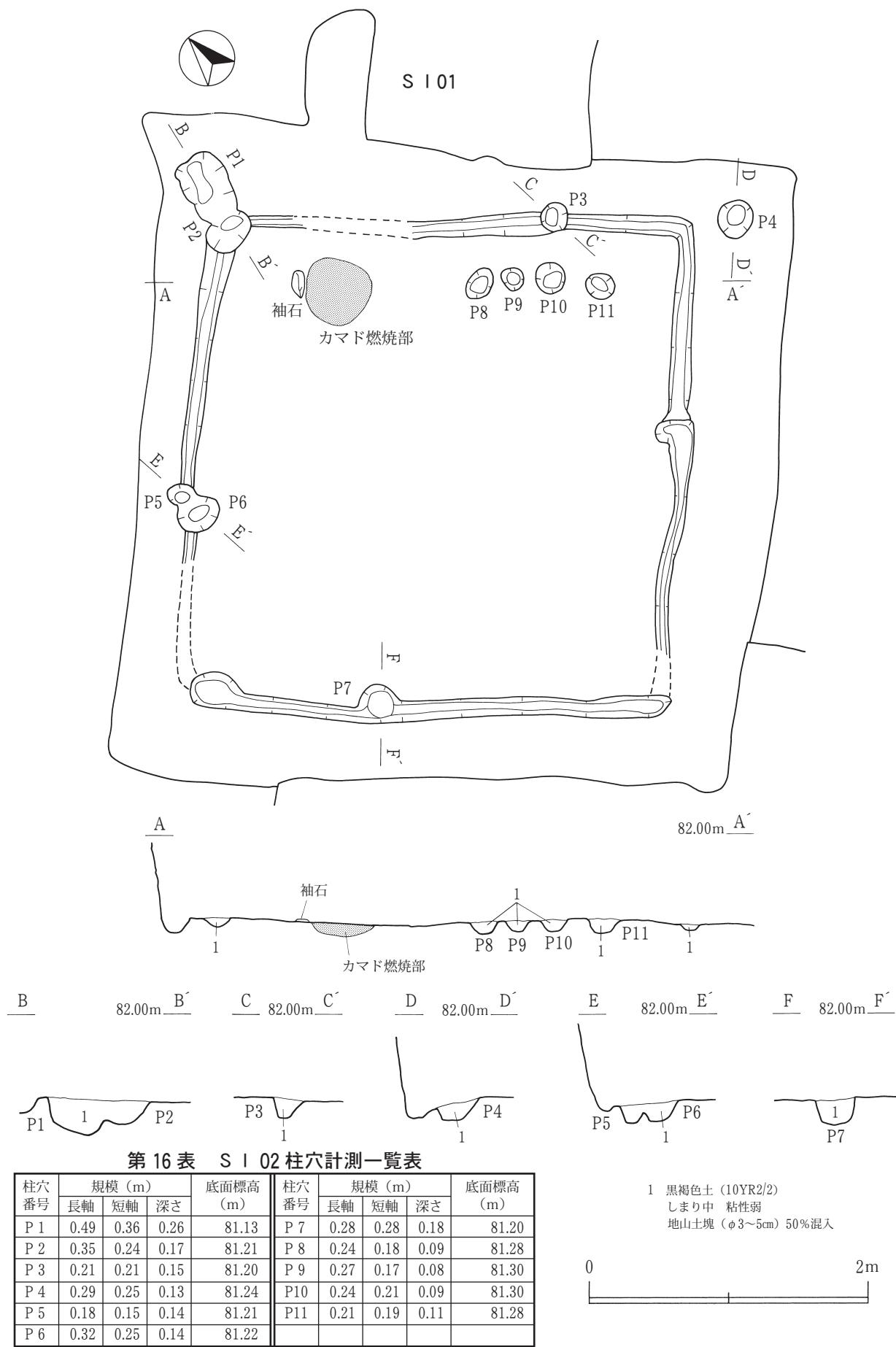
〈床〉 掘形底面の窪んでいる部分に、地山土塊と黒色の混合土を埋めて平坦に整えている。カマド1の焼床部を含む前庭部分は、長軸約160cm、短軸約140cmの楕円形の範囲にわたり深さ30cmほどで大きく掘り込まれている。

〈壁溝〉 全体を巡っている。幅10cm～20cm、床面からの深さは、浅いところで8cm、深いところで20cmである。

〈柱穴〉 本住居跡の床面で柱穴は確認できなかった。外部壁沿いに、SKP 109・110・121・122があるが、本住居跡との関連を証明する根拠が得られず除外した。

〈カマド〉 南東壁の中央から南よりの位置で、にぶい黄褐色粘土と焼土の混じった黒褐色土の広がりで確認した。確認時点では大きな一つの広がりだったが、2つに分かれており、横に並んだ2基のカマド跡と判明した。

(カマド1) カマド2に並んでその南西側に位置し、規模は、長さ170cm、幅72cmである。煙道のほか、袖の一部と燃焼部が残存していた。煙道の長さは80cmほどで、にぶい黄褐色粘土を貼って作られている。



第36図 S I 02 壇穴住居跡

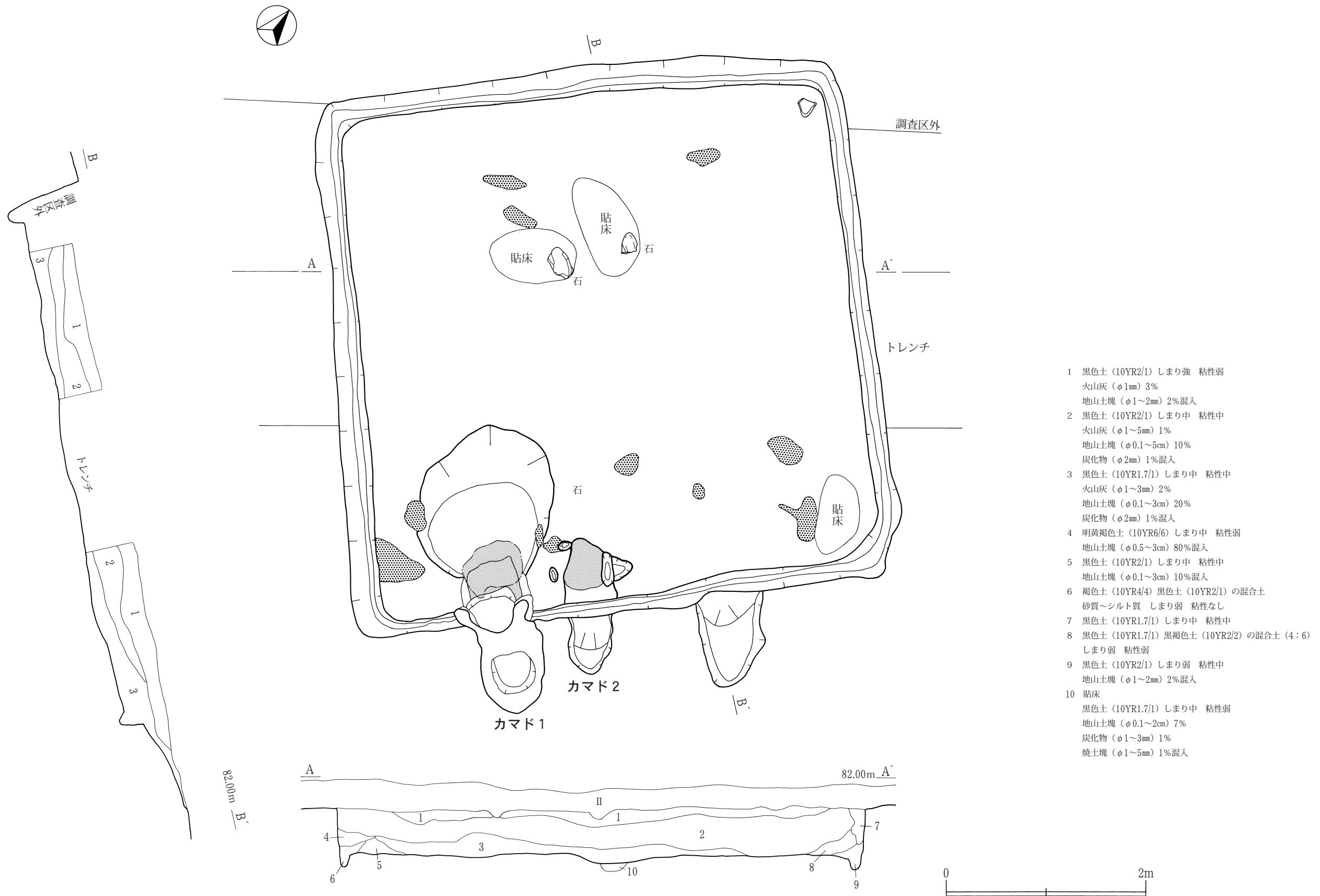
断面は燃焼部にむかって緩やかな斜面上になっている。崩れかかっていたが、煙道出口が確認でき、白色の石が煙道を塞ぐように埋められていた。これは、廃棄の際人為的に置かれたものと思われる。袖は、黄褐色粘土の他に、粘性の強い黒褐色土を用いて作られ、内壁には白灰色の凝灰岩とみられる石の板が使用されている。石の一部は蹴り倒されたように内側に倒れており、人為的に壊された様子が窺える。カマド本体も同じ土を用いて作られていたと考えられるが、崩壊が著しく、構築土は押しつぶされ拡散している状況だった。燃焼部は2面に分かれており、地山面を利用した燃焼面があり、その上に粘土を盛り上げた新しい燃焼面がある。何らかの理由で作り変えたものと思われる。本カマドで使用されている土や袖石、盛り上げた燃焼部等は、S I 01のカマドとたいへんよく似た構造をしており、主軸方向は異なるが時期的に近い物ではないかと考えられる。特徴としては、前庭が前述のように大きく掘り込まれていることがあげられる。堆積土は18層に分けられた。1層は構築土。2~9、12~13層は流入土及び破壊された構築土である。10層は前庭部の土、11層は10層と異なるためカマド構築後床面に貼られた土と考えられる。14~18層は燃焼部の被熱状況である。

(カマド2) カマド1に並んでその北東側に位置し、規模は長さ140cm、幅40cmで、煙道部と燃焼面が残存していた。煙道の長さは50cmほどで、カマド1と同じにぶい黄褐色粘土を貼って作られ、緩やかに傾斜した断面をしている。袖は残存していない。燃焼面は地山面をそのまま利用しており、上から黒褐色の粘土が貼られていた。カマド1に比べ全体的に小さく、残存部は少ない。煙道を切るように壁溝が掘られ、壁より住居側に構築材は見られず、燃焼面には粘土が貼られていることから、カマド2の方が古く、カマド1を新しく横に構築した時に壊されたものと考えられる。堆積土は8層に分けられた。1層は煙道構築土、19・20層は被熱した煙道構築土が崩落したもの、21・22層は流入土、23~25層は燃焼部の被熱状況である。

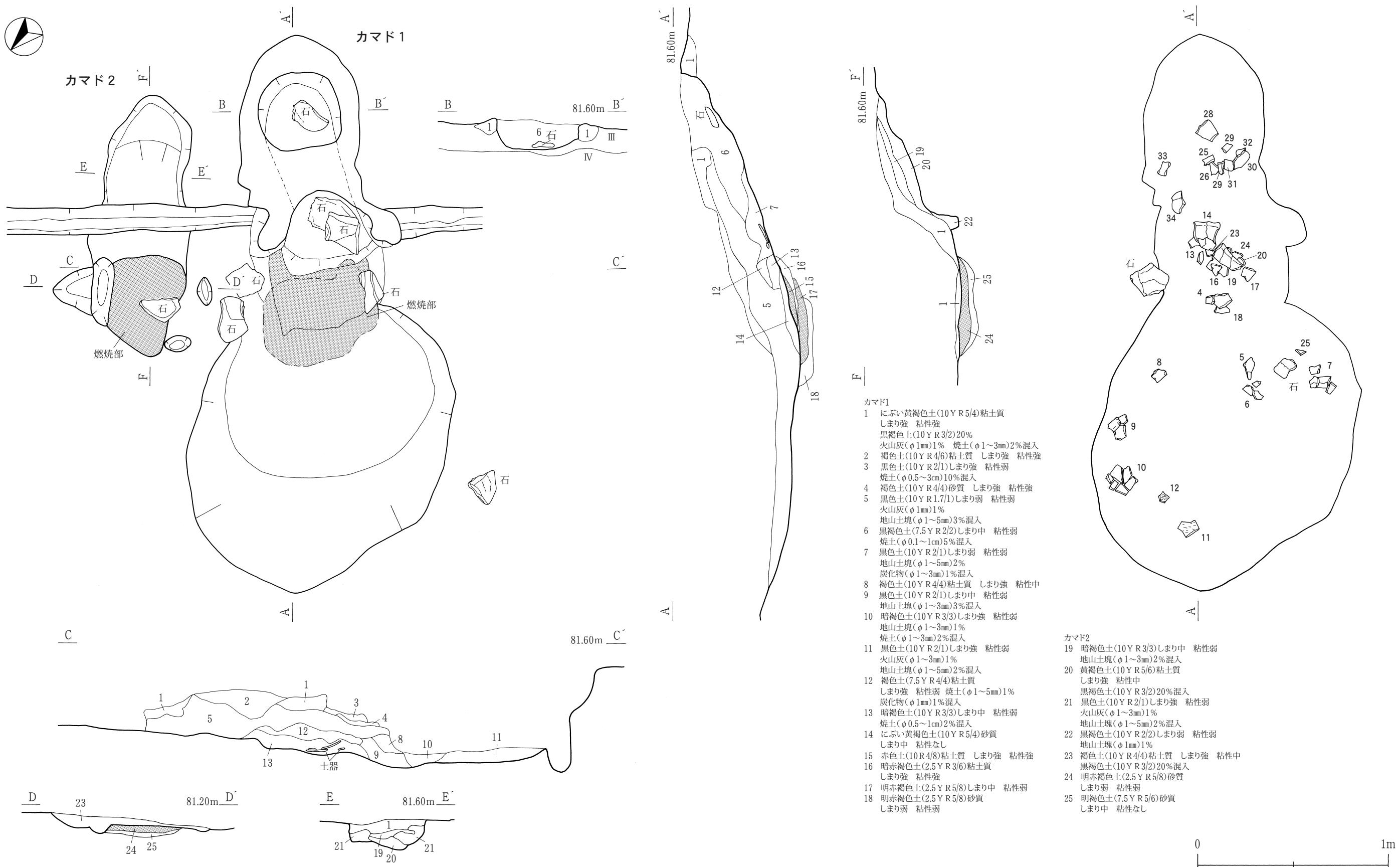
〈出土遺物〉 住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の甕358片、須恵器甕2片、鉄製品、砥石が出土した。このうち、土師器甕(39図1~6)、須恵器甕(39図7・8)、砥石(40図9)を図下した。土師器は全て甕で、(39図1~4)は外面のケズリが見られず、口縁部が内外共にヨコナデされ大きくは外反せず胴部に輪積み痕を残すものである。(39図2)は粒の大きな砂が全体に混ぜられ、基本的に無調整である。(39図5~6)は外面のケズリが強く残っており、底部外面は砂底状になっている。須恵器片の特徴として、(39図7・8)の内面に当て具痕は認められない。

(40図9)は表面・右側面・裏面に砥痕が認められる。

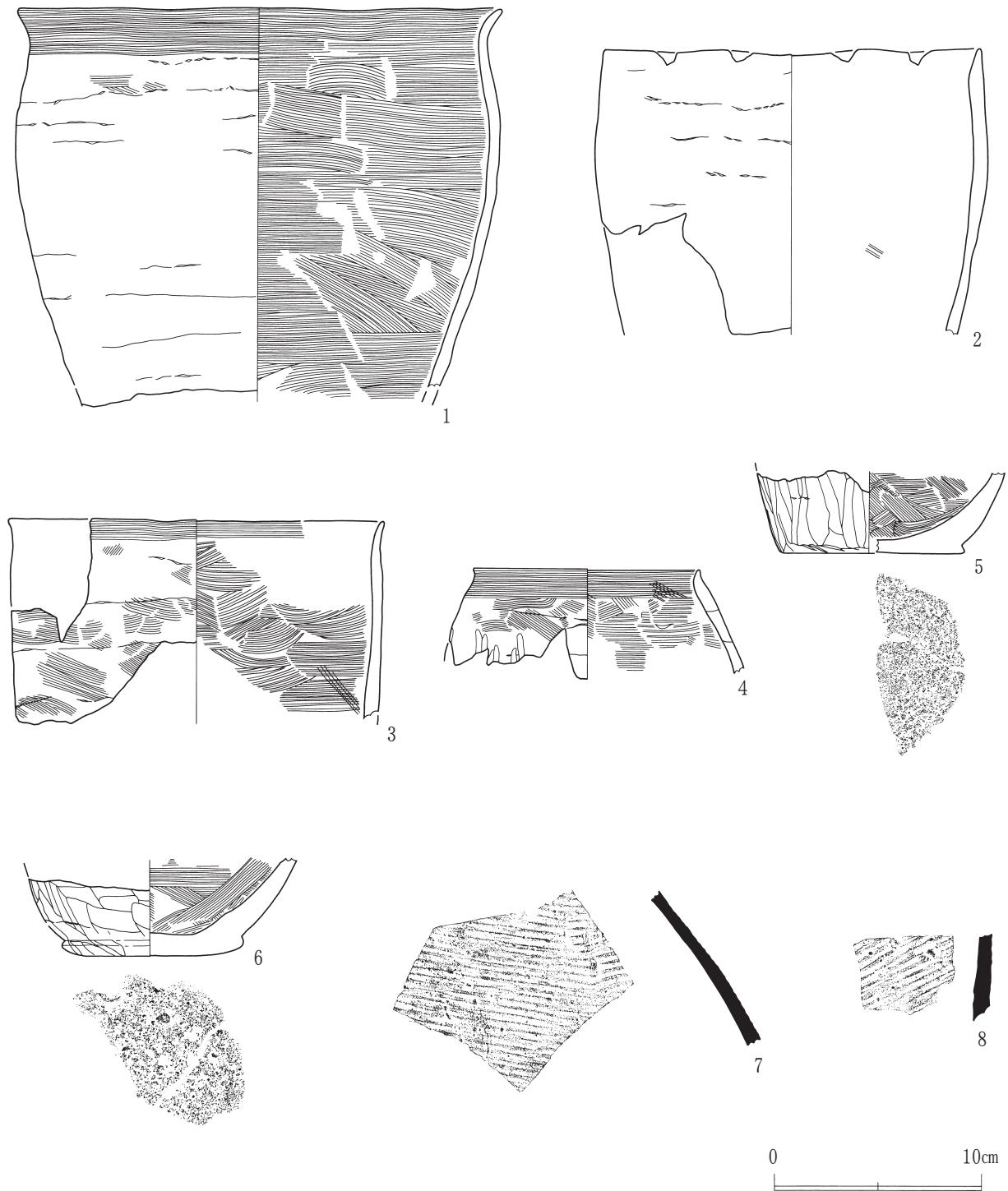
〈時期〉 本住居跡は、人為堆積土である1~3層中に十和田a起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降の埋没である。出土遺物の特徴から判断すると、平安時代(10C中葉)に属すると考える。カマド1の袖から採取した炭化材の放射性炭素年代測定においては $1,232 \pm 32$ B Pの測定値が得られ、ほぼS I 01と同時期のものであった。



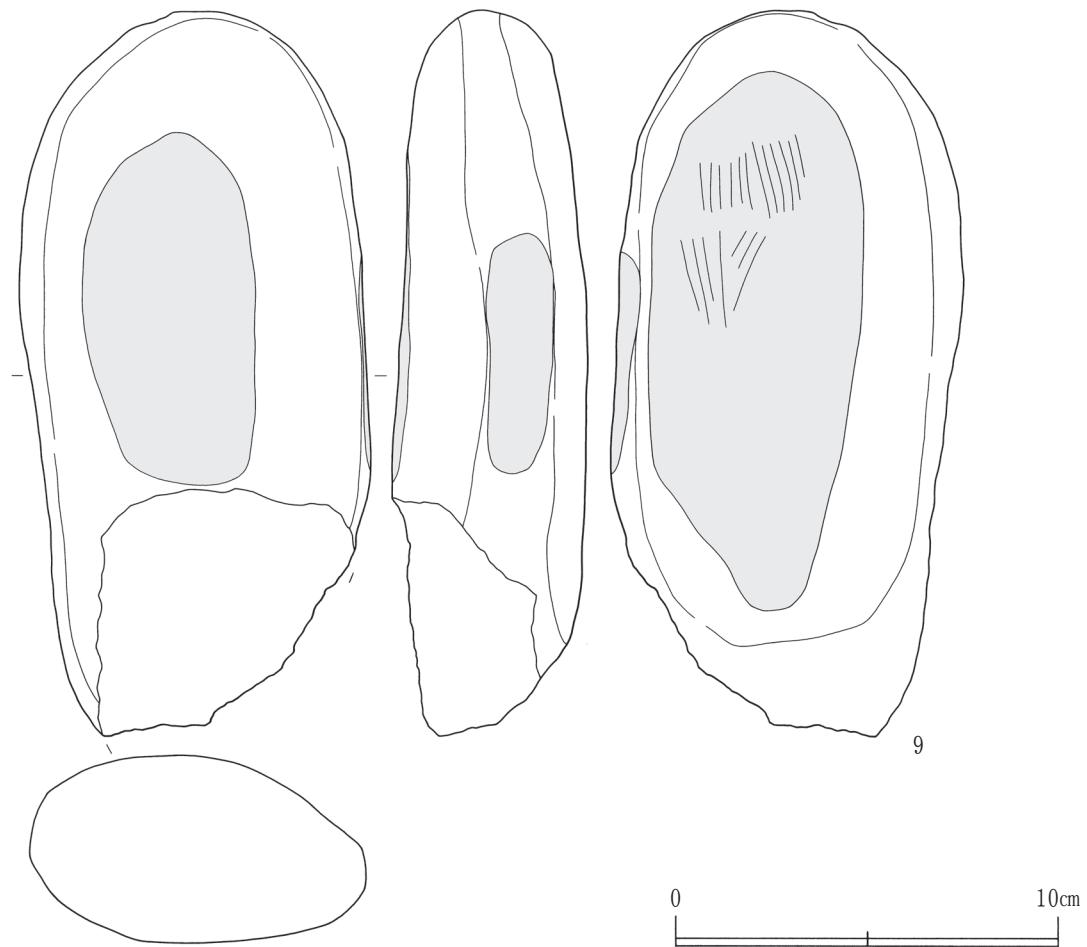
第37図 S.I.03 壇穴住居跡



第38図 S-03 穫穴住居跡カマド・遺物出土位置図



第39図 S I 03 壁穴住居跡出土遺物（1）



第40図 S I 03 竪穴住居跡出土遺物（2）

第17表 S I 03 出土土器観察表

()内の数値は推定値

挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	口径×器高×底径(cm)	特徴		外底部
							外面	内面	
第39 図1	—	カマド1 —14・15・16・19・34	土師器	甕	口縁部～胴部	(23.0)×—×—	口縁部：ヨコナデ 胴部：一部ナデ 摩滅 輪積み痕	口縁部：ヨコナデ 胴部：ヘラナデ	—
第39 図2	20— 1	カマド1 —5・6・28・30	土師器	甕	口縁部～胴部	(18.0)×—×—	口縁部：一部ヨコナデ 摩滅 胴部：一部ハケメ 輪積み痕	口縁部：一部ヨコナデ 摩滅 胴部：一部ハケメ	—
第39 図3	—	カマド1—21・55	土師器	甕	口縁部～胴部	(17.9)×—×—	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ 輪積み痕	口縁部：ヨコナデ 胴部：ハケメ	—
第39 図4	20— 2		土師器	甕	口縁部	(10.8)×—×—	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ→ミガキ 輪積み	口縁部：ハケメ→ヨコナデ 胴部：ヘラナデ→ハケメ 輪積	—
第39 図5	—	カマド1—2	土師器	甕	底部	—×—×(8.7)	粗いケズリ 輪積み痕	ハケメ→ヘラナデ	砂底
第39 図6	—	33	土師器	甕	底部	—×—×8.6	ケズリ	ヘラナデ 一部摩滅	砂底
第39 図7	20— 3	カマド1	須恵器	甕	胴部	—	タタキメ	なし	—
第39 図8	—	カマド2	須恵器	甕	胴部	—	タタキメ	なし	—

第18表 S I 03 石製品計測一覧表

挿図番号	図版番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大幅(mm)	重量(g)	備考
第40図9	—	砥石	191.0	93.0	52.0	802.0	

(2) 道路跡

調査区北東端 L F 63 グリッド地点より、S D 130 と交わる L P 52 グリッド地点まで斜面を登るように溝跡が地山面に断続的に確認された。中央部の L K 58・59 グリッド付近では黒色土の中に踏みしめられた黒土層を確認。平面上で連続するものと判断し、溝跡の連続を道跡と判断した。

S D76 (第41・42図、図版11)

〈位置・確認状況〉 L P 52 グリッドから北東方向へ L F 63 グリッドまでの第Ⅲ～V層で確認された。

北東側と南西側は第V層で、中央部は第Ⅲ層での検出である。中央から南西側 32mほどが急勾配のためか失われている。

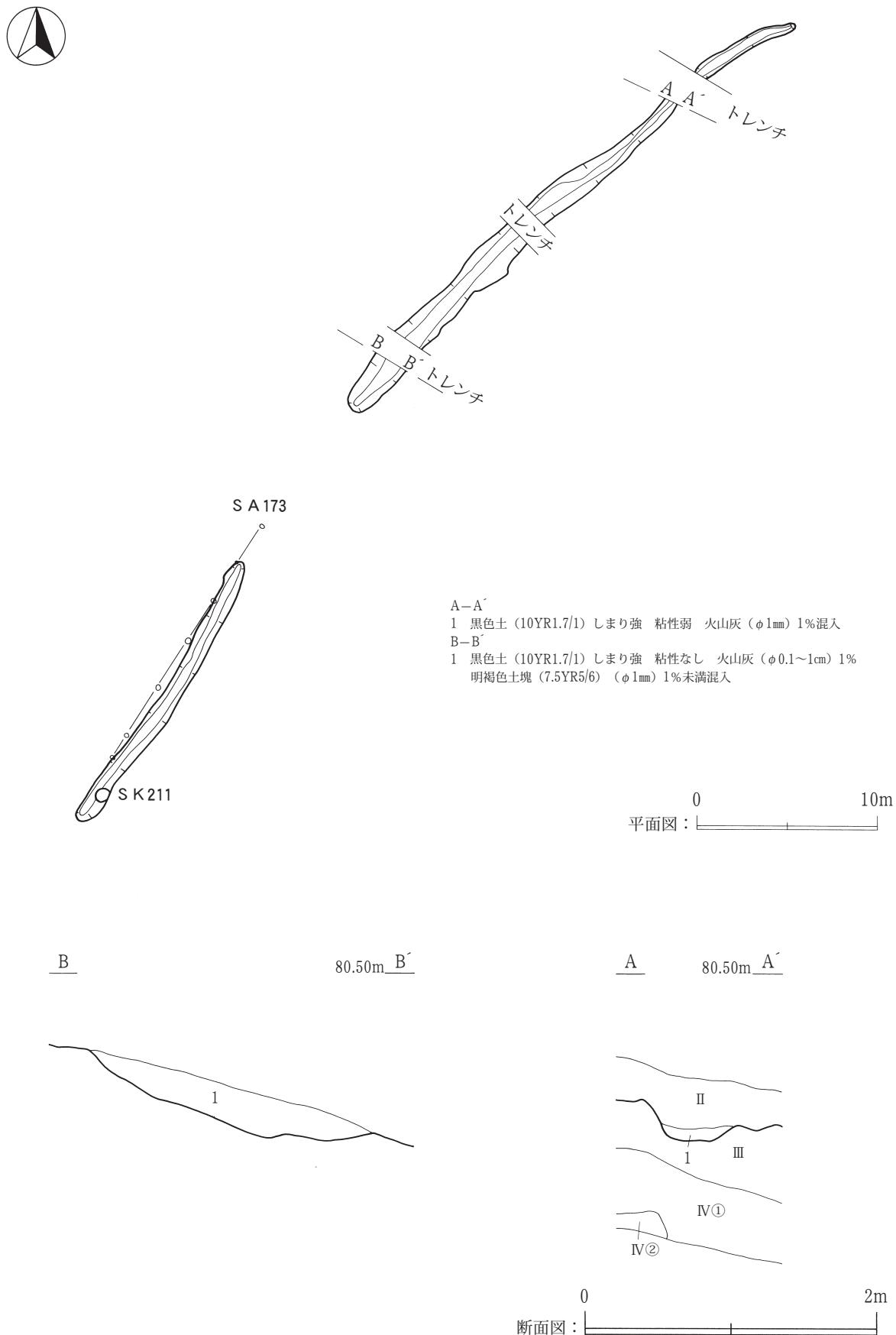
〈重複関係〉 斜面を登り終わった南西側の部分で、山手側に平行に S A 173 が並び、道の端と重複している。また、同じく南西の端 L O 53 付近で S K 211 と重複している。S A 173 は中世のものだが、その時代においてもこの道は使用されていたものと思われる。

〈堆積土〉 堆積土は、踏み固められた黒色土である。十和田 a 火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が混入している。南西側では地山面を掘り込んであるが、中央部分は第Ⅲ層土上にあり、そのまま踏み固めたものと考えられる。

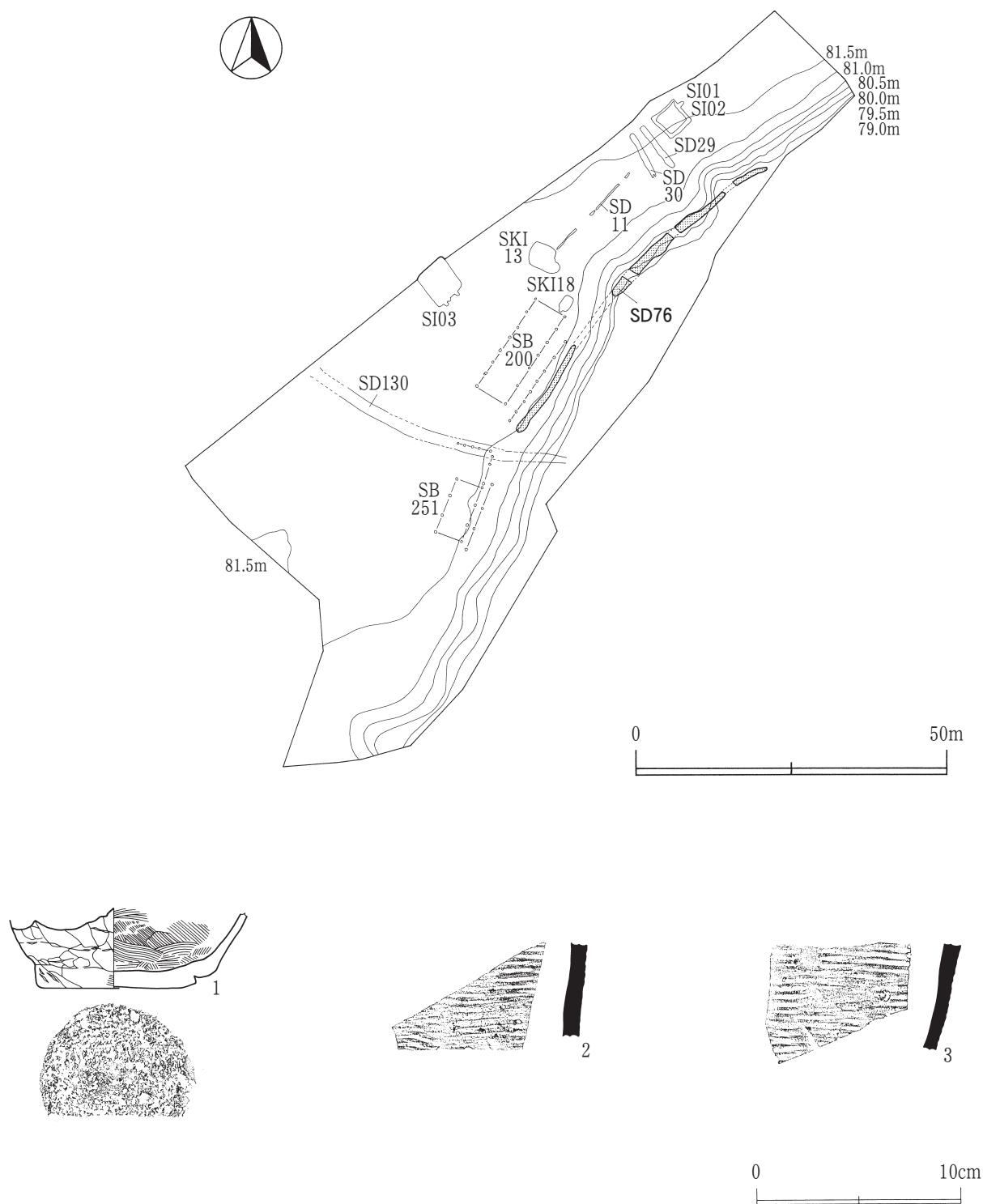
〈平面形・規模〉 総延長 59.68 m、幅は 80cm～200cm、掘り込みの深さは 5～27cm 程である。北東端標高 78m の L F 64 地点から斜面を緩やかなスロープを描きながら南西方向へ登り、標高 81m の L P 53 地点で登り切る。登り切ったところから北側に台地が広がり、集落への入り口として利用されたと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は土師器甕片 540 点、須恵器甕片 2 点が出土した他に、道路の上面からは、石器剥片や寛永通宝片が出土しており、そのほとんどが山側からの流れ込みと思われる。このうち、土師器甕 (42 図 1)、須恵器甕片 (42 図 2・3) を図下した。土師器はケズリ痕が残る、いわゆる砂底である。須恵器は野崎遺跡に多く見られる、外面がタタキ調整され、内面に当て具痕が見られないものである。

〈時期〉 本道路遺構は、基本土層中の位置関係や堆積土中に十和田 a 火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められること、また道の底面からも土師器などの遺物が認められることから、集落とほぼ同時期の平安時代 (10 C 中葉) から使用されていたと考えられる。ただ、寛永通宝が表面から出土していることもあり、近世まで長期にわたり、台地上に登る山道として利用され続けていたのであろう。



第41図 SD 76 道路跡



第42図 SD 76 道路跡位置図・出土遺物

第19表 SD 76 出土土器観察表

挿図番号	図版番号	種別	器種	部位	口径×器高×底径 (cm)	特徴		外底部
						外面	内面	
第42図1	-	土師器	甕	底部	-×-×7.7	一部ナデ 一部ケズリ	ハケメ→ヘラナデ	砂底
第42図2	-	須恵器	甕	胴部	-	タタキメ	なし	-
第42図3	-	須恵器	甕	胴部	-	タタキメ	なし	-

(3) 溝 跡

調査区内からは溝跡が16条検出され、覆土の特徴から平安時代のものと判断した。

S D 04 (第43図、図版 9)

〈位置・確認状況〉 L T56、MA 56 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多量に含む黒褐色土の筋として確認した。北西-南東に延びており、南西に S D 130、北東に S I 03 が隣接する。軸方向は、集落を囲んでいたと考えられる S D 130 とほぼ一致し、S I 03 を南西方向から遮っていた板塀ではないかと考えられる。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は4.24m、幅15cm、掘り込みの深さは8cm程である。西端がトレーナーで切られそのまま調査範囲外になるので、本来の長さは不明である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 幅、深さ、堆積土が S D 11 と似ており、火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。

S D 09 (第43図、図版 9)

〈位置・確認状況〉 L S 53、L R 53 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。北西-南東に延びており、軸方向は、南西に並ぶように掘られた S D 130 とほぼ一致する。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は2.20 m、幅18cm、掘り込みの深さは4cm程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。

S D 10 (第43図、図版 9)

〈位置・確認状況〉 L P 53、L Q 53 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。北東-南西に延びており、軸方向は、西に並ぶように掘られた S D 61 とほぼ一致し、斜面沿いに立てられた板塀かと思われる。

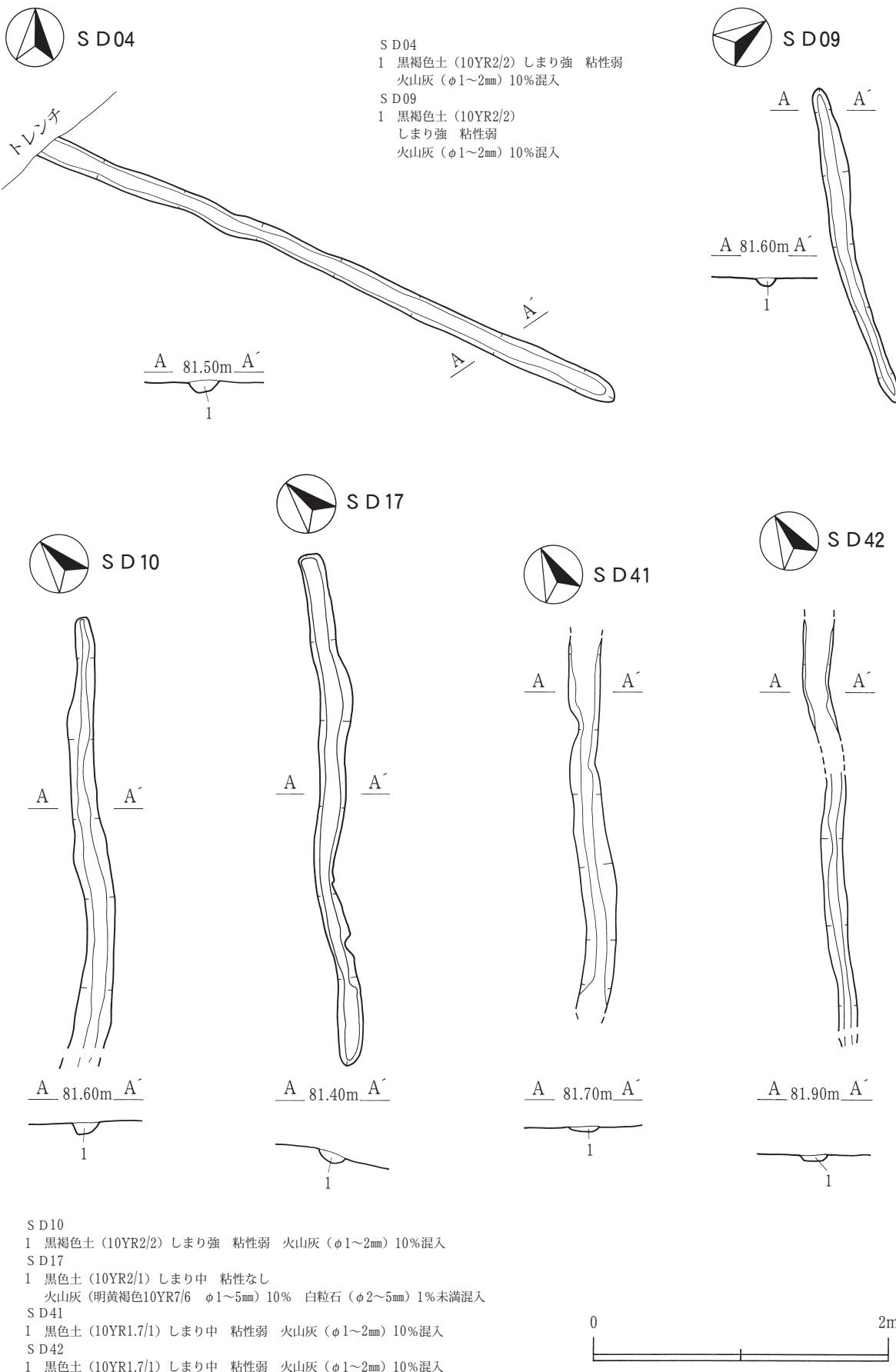
〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は3.08 m、幅25cm、掘り込みの深さは8cm程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 幅、深さ、堆積土が S D 61 と似ており、火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。



第43図 S D 04・09・10・17・41・42溝跡

S D11 (第44図、図版10)

〈位置・確認状況〉 LL 62・63、LM 62、LN 60・61・62グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多量に含む黒褐色土の筋として確認した。東端はSD 30の西3mほどから、西端はSK I 13まで延びており、南東の斜面縁に平行に掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 総延長は17.0m、幅15~17cm、掘り込みの深さは1~10cm程である。トレンチや攪乱により寸断されているが、北東-南西方向に斜面から北西側の台地上を遮るように延びている。中間部分の途切れから微妙に軸がずれており、この部分はつながっておらず、人ひとり通れる隙間があった可能性がある。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代(10C中葉)のものと考えられる。その位置関係から斜面と集落を区画する板塀である可能性が高い。

S D17 (第43図)

〈位置・確認状況〉 LM 58・59、LL 59グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認。北東-南西方向に、東側の斜面に沿うように掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 火山灰を多量に含む黒褐色土1層で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は3.53m、幅17cm、掘り込みの深さは8cm程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 火山灰降下前に掘られた平安時代(10C中葉)のものと考えられる。その位置関係から斜面と集落を区画する板塀であった可能性が高い。

S D29 (第45・46図、図版10)

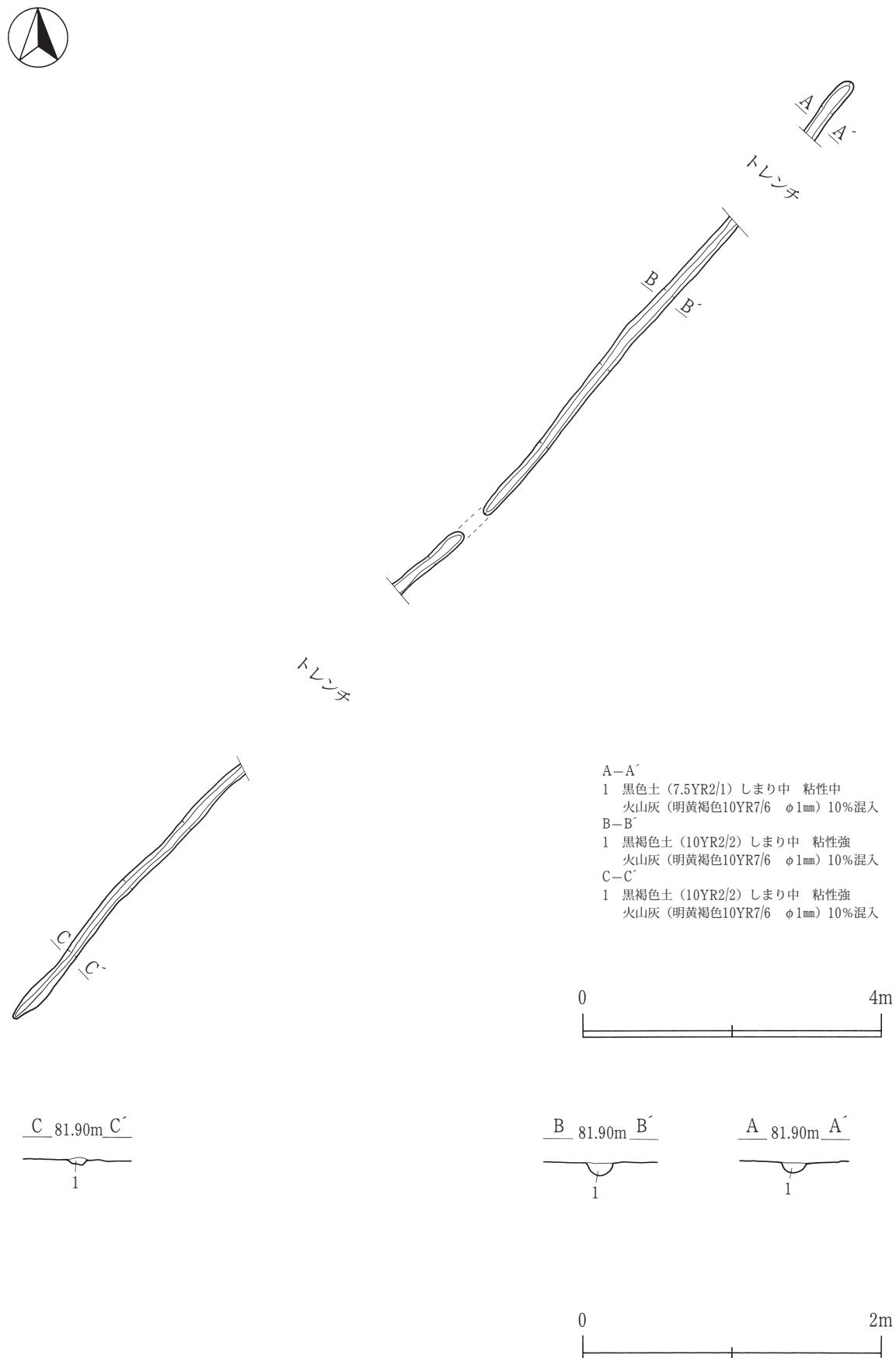
〈位置・確認状況〉 LJ 63~65、LK 64・65グリッドに位置する。調査区圏外から南東方向へ延びている。トレンチに断面で検出され、第Ⅲ層で火山灰を含んだ黒色土のつながりで確認した。SI 01の南西壁に隣接し、東南の斜面に直交する方向でSI 01と平行に掘られている。

〈重複関係〉 SK P 74と切り合う。SK P 74は堆積土中を掘り込んでおり、新しい。

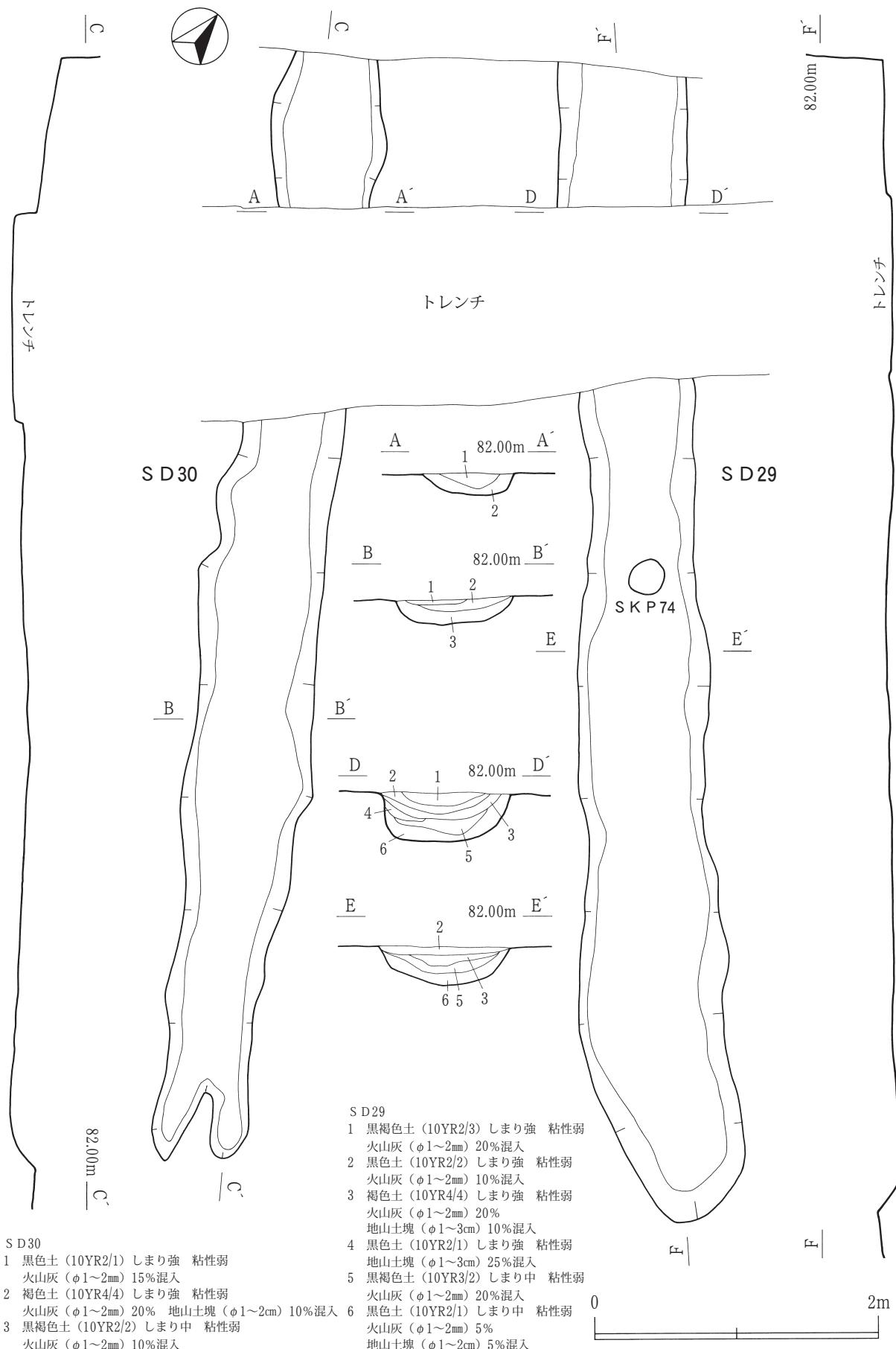
〈堆積土〉 6層あり、火山灰を含む量が異なる黒色土、黒褐色土が順に椀状に堆積している。他の遺構に比べ火山灰を含む量が全体に多いことから、火山灰降下時に雨などの水とともに周囲の土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された部分の総延長は8.2m、幅90cm、掘り込みの深さは15~20cm程である。底面は椀形で、壁も緩やかに立ち上がる。北西方向に調査区圏外へと続いている。

〈出土遺物〉 土師器甕片が80点出土した。周囲からの流れ込み、もしくは、本遺構に破棄したものと思われる。このうち、土師器甕(46図1)を図示した。ケズリ痕が残り、底部は砂底であるが一部ケズリも見られる。



第44図 SD 11溝跡



第45図 SD 29・30 溝跡

〈時期〉 堆積土に多くの十和田a火山灰起源と考えられる火山灰があり、火山灰降下後に自然に埋まっていたと思われるため、火山灰降下前に掘られた平安時代（10C中葉）のものと考えられる。若干斜面に向かって傾斜して掘られていることと、流れ込んできたと思われる遺物が多いことから、排水に利用されていた可能性がある。その場合、南東先端部が掘り足りないのかもしれない。もしくは区画のための溝の可能性もある。

SD30（第45図、図版10）

〈位置・確認状況〉 L J63、LK63・64・65グリッドに位置する。調査区圏外から南東方向へ延びている。トレーナーに断面で検出され、第Ⅲ層で火山灰を含んだ黒色土のつながりで確認した。SD29の西に隣接し、SD29とほぼ平行に掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 3層あり、火山灰を含む量が異なる黒色土、黒褐色土が順に椀状に堆積している。他の遺構に比べ火山灰を含む量が全体に多いことから、火山灰降下時に雨などの水とともに周囲の土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された部分の総延長は78.8m、幅70cm、掘り込みの深さは10~12cm程。底面は椀形で、壁も緩やかに立ち上がる。北西方向に調査区圏外へと続いている。

〈出土遺物〉 土師器甕片が7点出土した。その他に石器剥片、縄文土器片も1点ずつ出土している。すべて周囲からの流れ込み、もしくは本遺構に破棄したものと思われる。

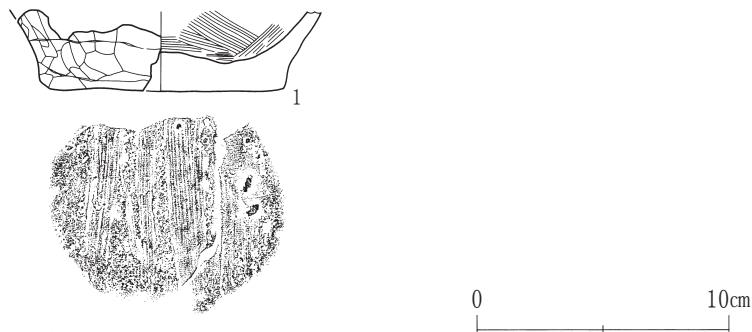
〈時期〉 火山灰降下前に掘られた平安時代（10C中葉）のものと考えられる。

SD41（第43図、図版9）

〈位置・確認状況〉 LN56、LO56グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。北東-南西方向に延びており、東側の斜面に沿うように掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。



第46図 SD 29 溝跡出土遺物

第20表 SD 29 出土土器観察表

捕図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	口径×器高×底径(cm)	特徴		外底部
							外面	内面	
第46図1	-	SD29床面	土師器	甕	底部	-×-×9.6	ケズリ 輪積み痕	ハケメ→ヘラナデ	砂底一部ケズリ

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 2.66m、幅 20cm、掘り込みの深さは 3cm 程である。両端が削平により失われていることから本来の長さは不明である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代（10C 中葉）のものと考えられる。その位置関係から斜面と集落を区画した板塀であった可能性が高い。

S D42（第43図、図版 9）

〈位置・確認状況〉 LN 56 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。西側の S D41 に平行して北東－南西方向に延びており、東側の斜面に沿うように掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく 1 層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 2.66m、幅 20cm、掘り込みの深さは 3cm 程である。両端と中央部が削平で失われている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代（10C 中葉）のものと考えられる。S D41 とは新旧関係は不明だが建て替えられたものと思われる。

S D60（第47図）

〈位置・確認状況〉 LN 58 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。S D17 の延長線上に東側の斜面に沿うように北東－南西方向に掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく 1 層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 0.63m、幅 20cm、掘り込みの深さは 4cm 程である。両端が削平で失われている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代（10C 中葉）のものと考えられる。位置関係から S D17 から S D41 につながる溝と考えられる。

S D61（第47図）

〈位置・確認状況〉 LS 56 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多量に含む黒褐色土の筋として確認した。北東－南西に延びており、北西に S I 03 が隣接する。両者とも切れているが、延長すると S D04 と交差し、S I 03 を囲む壁となる。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく 1 層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 2.65m、幅 24cm、掘り込みの深さは 6cm 程である。南端がトレンチで切られているため、本来の長さは不明である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 幅、深さ、堆積土が S D 11 と似ており、火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。

S D123（第47図）

〈位置・確認状況〉 L S 55グリッドに位置する。第III層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。北東－南西方向に掘られ、ほぼ S D 11 の延長線上にある。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく1層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 1.43m、幅 10cm、掘り込みの深さは 4 cm 程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

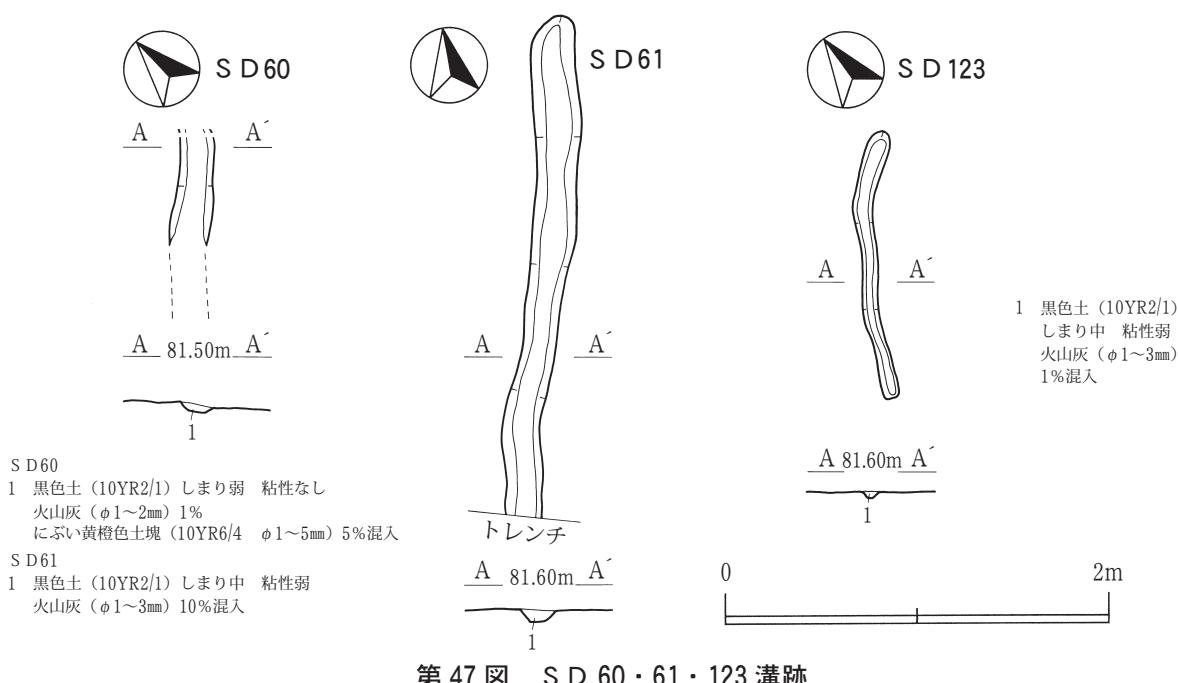
〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。位置関係から S D 11 と同様に集落を区画するためのものと思われる。

S D130（第48図、図版11）

〈位置・確認状況〉 MD55グリッドから南方向へ弧を描き東方向へ延び、LN 51 グリッドまで調査区を横断している。トレント断面で検出され、第III～IV層で火山灰を含んだ黒色土のつながりで確認された。

〈重複関係〉 SA 253がLR・LQ 52グリッド付近で溝の中央部に同軸上に重複している。SA 253の方が新しい。

〈堆積土〉 堆積土は、A-A' 断面で4層に分けられ、上面には火山灰層が堆積している。1層は火山灰層②に由来する土、2・4層は第III層に由来する土、3層は第IV層に由来する壁の崩落土であり、いずれも火山灰が混入する黒ないしは黒褐色土である。その堆積状況からすべて流れこんできた土による自然堆積と考えられる。他所では上面が大きく畑などで搅乱され削られており、



第47図 SD 60・61・123 溝跡

1層の黒色土のみ確認できた。

〈平面形・規模〉 確認された部分の総延長は 51.58m、幅は 1.84m、掘り込みの深さは 20～30cm 程である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。トレントと攪乱のため 5か所で寸断されているが、台地上面から、斜面を下りきる所まで延びている。調査区を完全に横断し、西端部分は調査区圏外へまだ続いている。

本溝跡を境にその南北では、平安時代の遺構の分布状況が一変しており、南側に平安時代の遺構は見られない。一方、全ての遺構は北側にあり、地形的にも調査区を越えて北には台地上の平坦面が広がっている。このことから、本溝跡は平安の集落を囲み、境界としていた溝であることが想定される。

〈出土遺物〉 土師器甕片が 73 点出土した。

〈時期〉 堆積土状況から十和田 a 火山灰起源と考えられる火山灰層の下に本遺構があり、火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。

S D 135（第49図）

〈位置・確認状況〉 LM 58・59 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。S D 17 の西側に平行して北東－南西に延びており、東側の斜面に沿うように掘られている。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく 1 層しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 2.87m、幅 27cm、掘り込みの深さは 8 cm 程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 幅、深さ、堆積土が S D 17 と似ており、火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。その位置関係から S D 17 と同様に斜面と集落を区画する板塀である可能性が高く、新旧関係は不明だが、S D 17 とは建て替え関係にあることが考えられる。

S D 180（第49図）

〈位置・確認状況〉 L Q 53 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を多く含む黒褐色土の筋として確認した。中央で 90 度に折れ曲がり、西端は北西を向き、東端は北東を向く。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 残存している深さが少なく 1 层しか見られない。火山灰を多量に含む黒褐色土で、火山灰降下時、土が流れ込み埋まっていたものと考えられる。

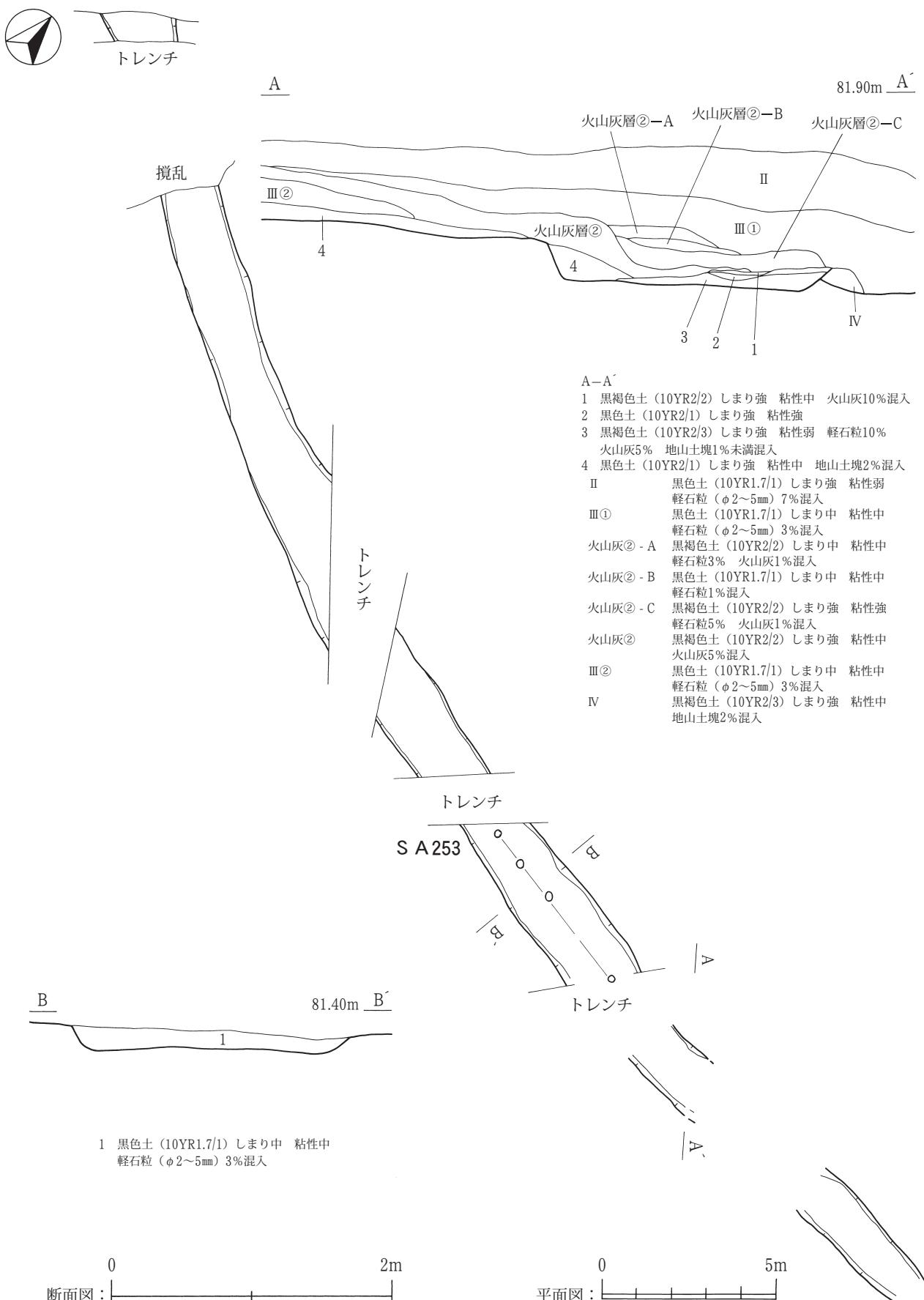
〈平面形・規模〉 確認された総延長は 0.50m、幅 18cm、掘り込みの深さは 5cm 程である。西端はトレントに、東端は削平により失われている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から火山灰降下前に掘られた平安時代（10 C 中葉）のものと考えられる。

（4） 土坑

土坑は 19 基検出されている。このうち 5 基を検出状況や覆土の特徴、出土遺物から平安時代のもの



第48図 S D 130 溝跡

と判断した。時期決定の根拠に欠くものは、第5節に掲載した。

S K46 (第50図、図版14)

〈位置・確認状況〉 L R 48グリッドに位置する。第IV層上面で火山灰を含む黒色土の広がりで確認。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

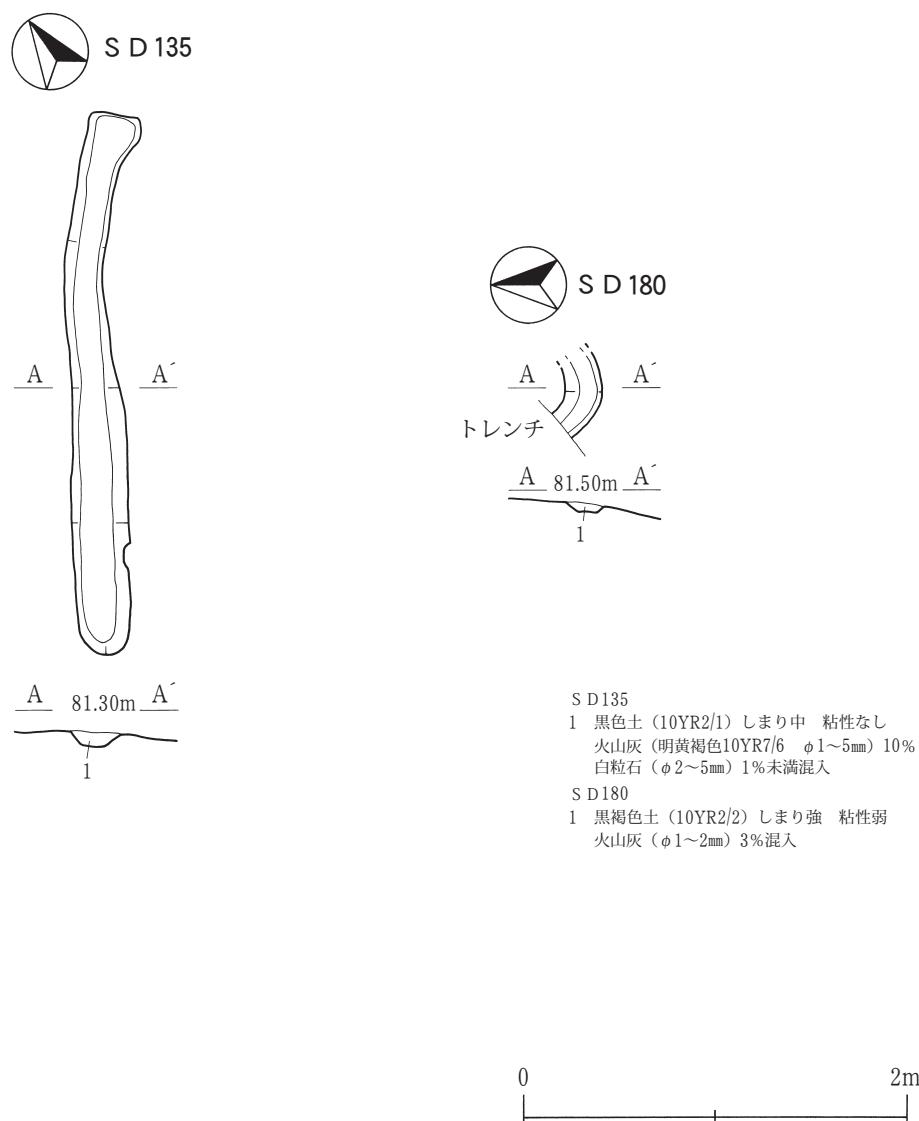
〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰、炭化物を含む黒色土である。人為的に埋め戻されたと思われる。

〈平面形・規模〉 平面形は北西から南東方向へ主軸をもつ橢円形である。規模は長軸69cm、短軸66cm、

深さ14cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。



第49図 S D 135・180 溝跡

〈時期〉 堆積土状況がS I 01・03等に似ており、十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降に埋め戻されたものであると判断した。平安時代（10C中葉）に属するものと考える。

S K53（第50図、図版14）

〈位置・確認状況〉 LM 60グリッドに位置する。トレンチ断面で検出され、第Ⅲ層上面で火山灰を含む黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰を含む黒色土である。人為的に埋め戻されたと思われる。

〈平面形・規模〉 トレンチにより、半分しか残っていないが、平面形は北西から南東方向へ主軸をもつ橢円形であると予想される。残存部分の規模は長軸58cm、短軸18cm、深さ35cm程である。

〈壁・底面〉 底面は北西端が最も窪んでおり、北西の壁はそのまま外傾し立ちあがる。床面も緩やかに傾斜してそのまま壁で立ち上がる。

〈出土遺物〉 土師器甕片が1点出土した。

〈時期〉 堆積土状況が近隣のS I 01・03等に似ており、十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降に埋め戻されたと思われる。出土遺物の特徴から、平安時代（10C中葉）に属すると考える。

S K62（第50図、図版14）

〈位置・確認状況〉 LR 56グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で火山灰を含む黒色土の広がりで確認した。S I 03の南東4mにあり、関連が想起される。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰を含む黒色土である。人為的に埋め戻されたと思われる。

〈平面形・規模〉 平面形は北東から南西方向へ主軸をもつ隅丸方形である。規模は長軸67cm、短軸59cm、深さ20cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾し立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土状況が近隣のS I 01・03等に似ており、十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降埋め戻されたと思われる。

S K124（第50図）

〈位置・確認状況〉 LR 55・56グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で火山灰、地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。

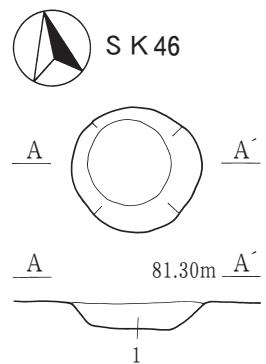
〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰と地山土塊を含む黒褐色土である。人為的に埋め戻されたと思われる。

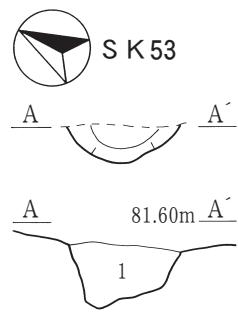
〈平面形・規模〉 平面形は北西から南東方向へ主軸をもつ不正橢円形である。規模は長軸76cm、短軸62cm、深さ31cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦だが小さく、壁は大きく外傾しながら立ち上がる。

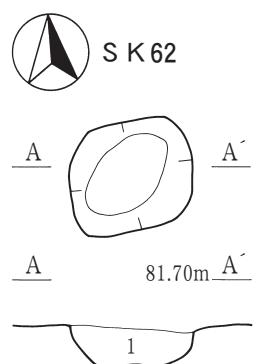
〈出土遺物〉 出土遺物はない。



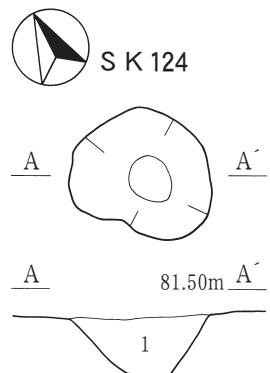
1 黒褐色土 (10YR2/2)
しまり中 粘性中 火山灰 ($\phi 1\sim 3mm$) 1%
地山土塊 ($\phi 1\sim 5mm$) 1%
炭化物 ($\phi 1\sim 3mm$) 1%未満混入



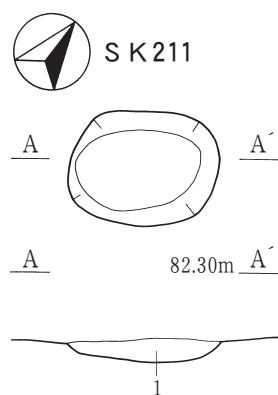
1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性なし
火山灰 (10YR8/3) ($\phi 1mm$) 1%
白色粒子 ($\phi 1mm$) 1%混入



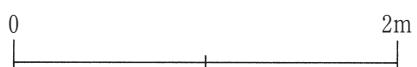
1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性弱
火山灰 ($\phi 1mm$) 10%混入



1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中
火山灰 ($\phi 1\sim 2mm$) 1% 地山土塊10%混入



1 黒色土 (10YR2/1) しまり強 粘性なし
火山灰 ($\phi 1\sim 2mm$) 1% 磯 ($\phi 0.5\sim 3cm$) 1%混入



第50図 SK 46・53・62・124・211土坑

〈時期〉 堆積土状況が近隣の S I 01・03 等に似ており、十和田 a 火山起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田 a 火山灰降下以降に埋め戻されたと思われる。

S K211 (第50図、図版14)

〈位置・確認状況〉 L O 53 グリッドに位置する。第V層上面で火山灰を含む黒色土の広がりで確認。

〈重複関係〉 S D76 の北端で重複している。新旧関係に確証はないが、覆土は、道路遺構のものと異なり、その印象から道路脇を掘り込んで作られているように思われる。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰を含む黒褐色土である。自然堆積か、人為堆積かは不明である。

〈平面形・規模〉 平面形は北東から南西方向へ主軸をもつ橢円形である。規模は長軸79cm、短軸62cm、深さ12cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で広く、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 土師器甕の破片が1点出土した。

〈時期〉 堆積土状況が近隣の S I 01・03 等に似ており、十和田 a 火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田 a 火山灰降下以降に埋め戻されたと思われる。

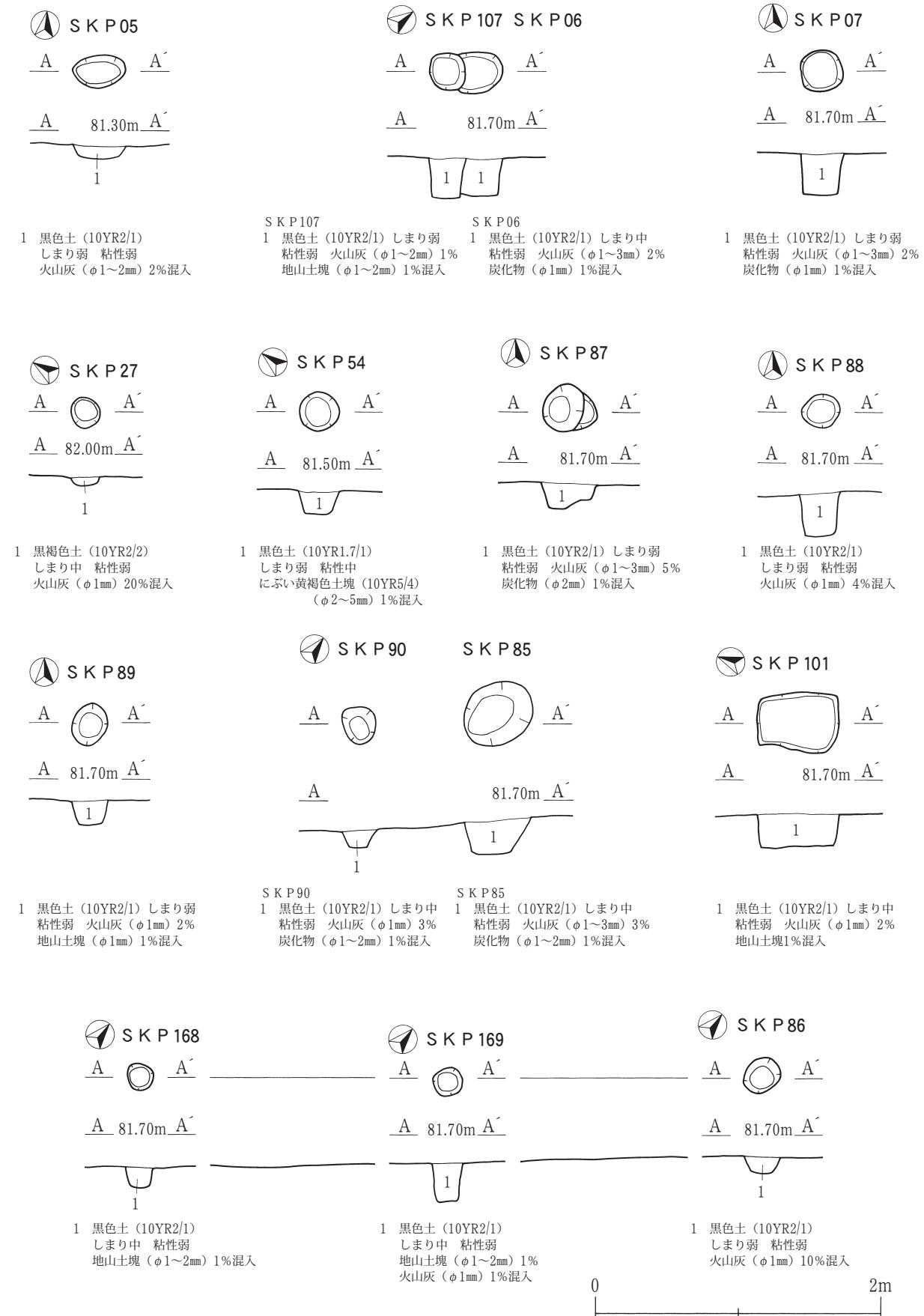
(5) 柱穴様ピット (第51・52図)

調査区内から計173基の柱穴様ピットが検出されているが、このうち31基を、検出状況や覆土の色や火山灰を含む様子から平安時代のものと判断した。その全てのものを図下し第21表として一覧とした。SKP168、SKP169、SKP86の3基については、S I 03の南東壁から3mほどの所に平行に2m間隔で並んでおり、SD11とも軸方向が一致することから柱列である可能性を考えられる。なお、時期決定の根拠に欠くものは、第4節に掲載した。

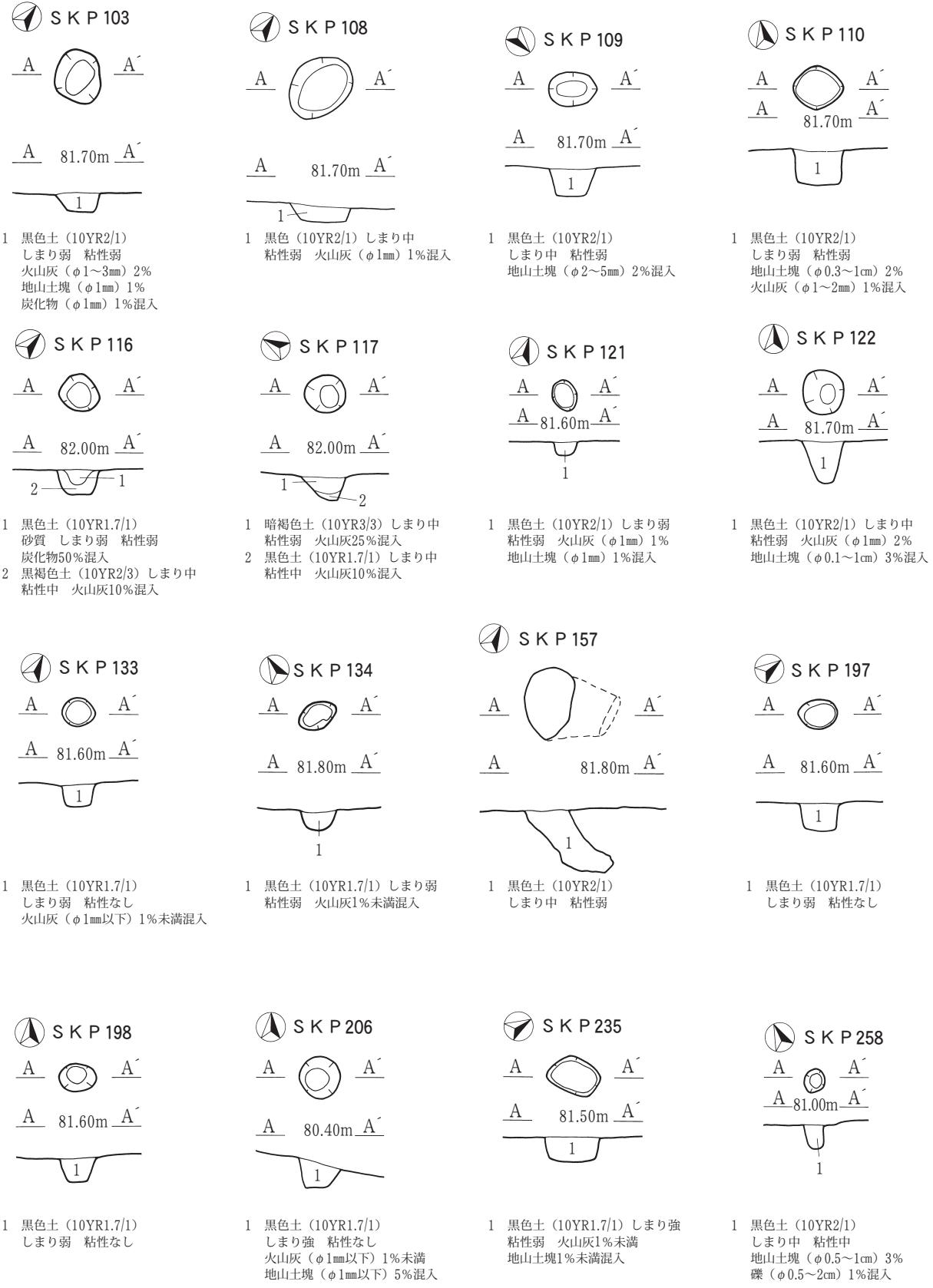
第21表 柱穴様ピット計測一覧表 (平安)

() 内の数値は残存値

柱穴番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)	備考	柱穴番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)	備考
		長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ		
05	L Q 56	0.38	0.24	0.08	81.10		110	L S 57	0.34	0.30	0.23	81.24	
06	L R 57	(0.28)	0.29	0.26	81.23	土師器甕1点出土	116	L H 67	0.28	0.26	0.18	81.71	土師器甕3点、土師器片9点出土
07	L R 57	0.30	0.29	0.29	81.19	土師器甕2点出土	117	L K・L L 64	0.28	0.27	0.16	81.67	土師器甕1点出土
27	L H 66	0.21	0.20	0.07	81.78		121	L S 57	0.22	0.18	0.11	81.38	土師器甕1点出土
54	L N 58	0.29	0.28	0.16	81.18		122	L R 58	0.30	0.29	0.28	81.33	
85	L Q 57	0.52	0.44	0.22	81.32	土師器片2点、土師器甕8点出土	133	L P 58	0.23	0.20	0.15	81.26	
86	L Q・L R 58	0.27	0.22	0.11	81.43		134	L N 61	0.28	0.19	0.13	81.40	
87	L S・L R 58	0.38	0.34	0.18	81.37	土師器甕1点出土	157	L I66	0.50	0.33	0.43	81.12	
88	L R 57	0.28	0.24	0.30	81.18		168	L R 57	0.18	0.18	0.16	81.32	
89	L Q 57	0.30	0.24	0.16	81.39		169	L R 57	0.20	0.19	0.28	81.23	
90	L Q 57	0.27	0.22	0.22	81.38		197	L P 58	0.27	0.21	0.19	81.20	土師器甕1点出土
101	L S 57	0.57	0.40	0.23	81.23		198	L P 57	0.26	0.19	0.22	81.22	
103	L Q 57	0.37	0.35	0.13	81.37		206	L M 58	0.30	0.28	0.19	80.04	
107	L R 57	0.26	0.26	0.27	81.20	土師器甕1点出土	235	L N 59	0.32	0.24	0.17	81.21	
108	L Q・L R 57	0.49	0.37	0.11	81.39	土師器甕1点出土	258	MA 53	0.16	0.14	0.16	80.71	
109	L R 58	0.33	0.22	0.19	81.36								



第51図 柱穴様ピット (平安1)



第52図 柱穴様ピット（平安2）

(6) 遺構外出土遺物（第53～55図、図版20）

遺構内から出土した遺物については、本節において、各遺構ごとに主な出土遺物を図示し、これらの法量等を観察表に記載している。ここでは、遺構外で出土した平安時代の遺物について、まとめて記載する。

1 土師器（53・54図、図版20）

土師器壺は10世紀頃の壺が2点出土した。（53図1）は外面は剥がれ落ちているが、内面にミガキと黒色処理が認められた。外底部の糸切り痕は削られている。（53図2）は底部のみ見つかった。内面は黒色処理され、外底部に糸切り痕が認められる。

土師器甕は、口縁部はわずかに外反または内湾するものが全てで、大きく外反するものは見つかなかった。体部上半に最大径をもつ器形と思われ、器面において口クロの痕跡は認められず、外面はヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラナデとハケメが認められる。さらに外面からは輪積み痕と胎土中の小石粒が認められ、外底部は砂底を主としている。これらの全体的特徴をふまえつつ外面器面等の特徴から3類に分類した。

I類：外面のケズリが強く残っていないもの（53図3～11・54図15）。II類：外面のケズリが強く残るもの（54図12～14・16～19）。III類：内面を黒色処理された甕（54図20）。

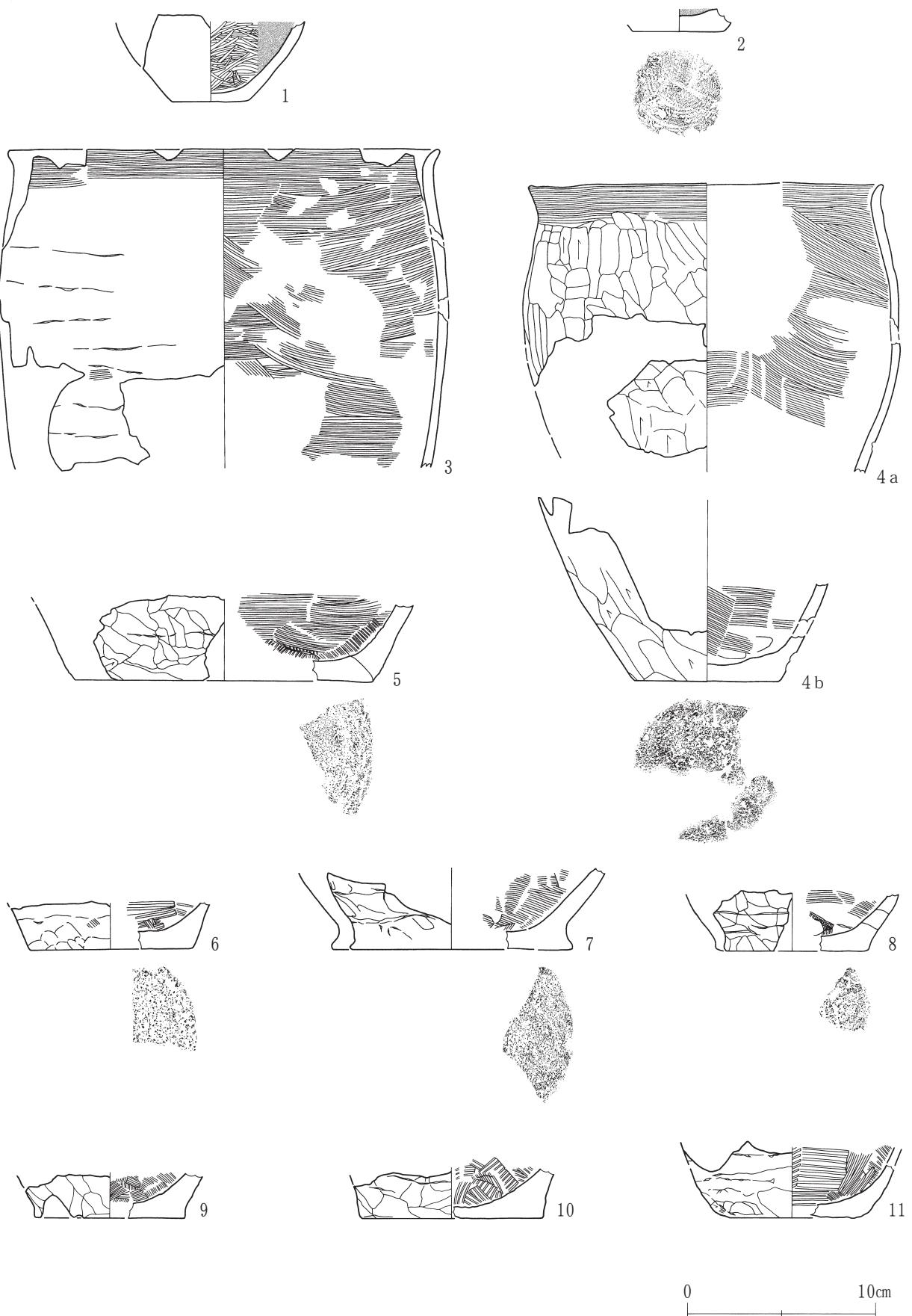
I類のうち（53図9～11）は砂底ではなく、特に（53図11）は底部を削りとった痕跡がある。II類のうち（54図12）は、外面を幅の狭い（5～10mm程）工具で削られており、最も粗い外面である。

2 須恵器（54図）

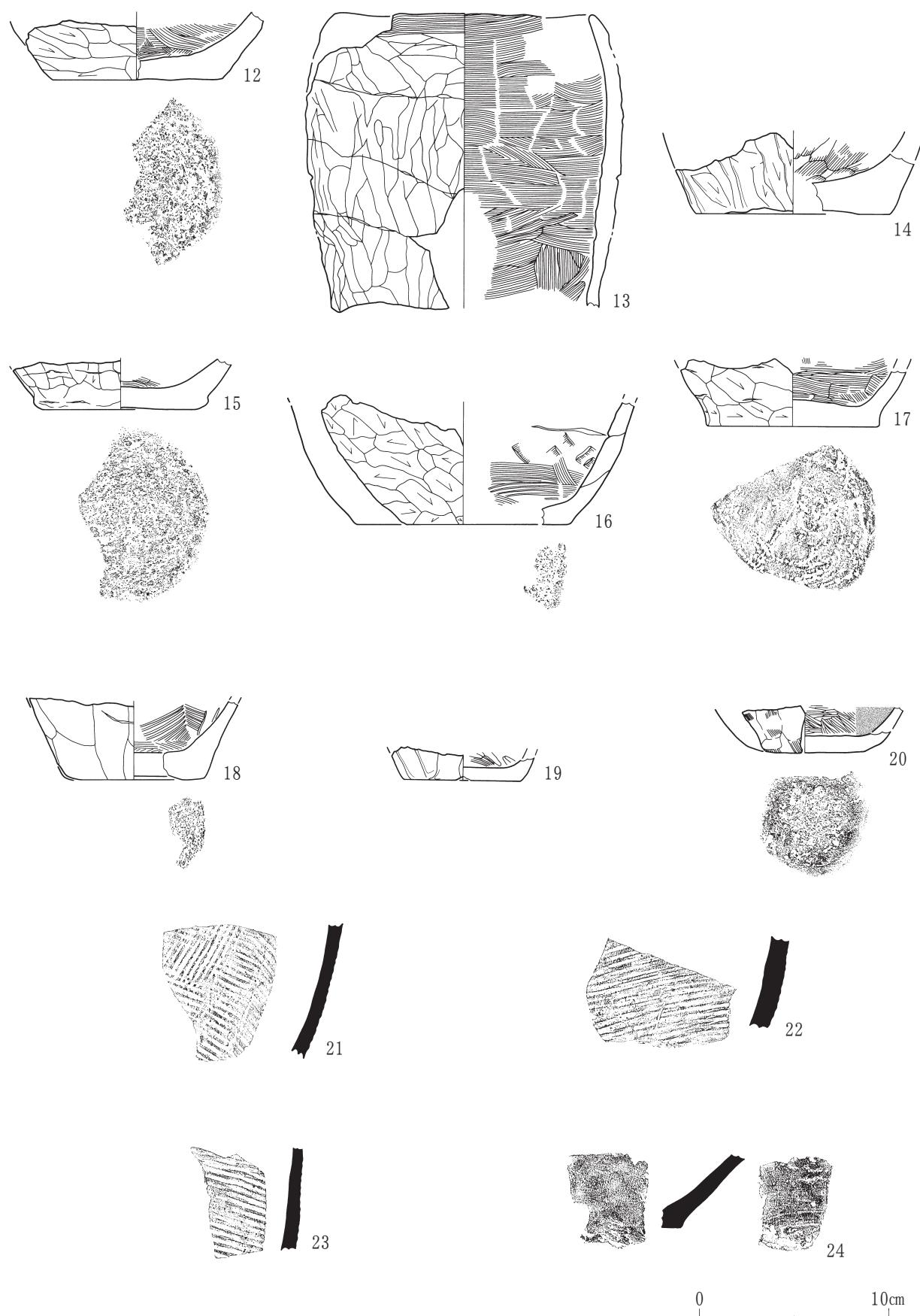
須恵器は甕の破片のみ出土した。（54図21～23）は外面にタタキメがあるが、内面の当て具痕は認められない。（54図24）は内外面ともに調整が認められなかった。

3 椭形鍛治滓（55図）

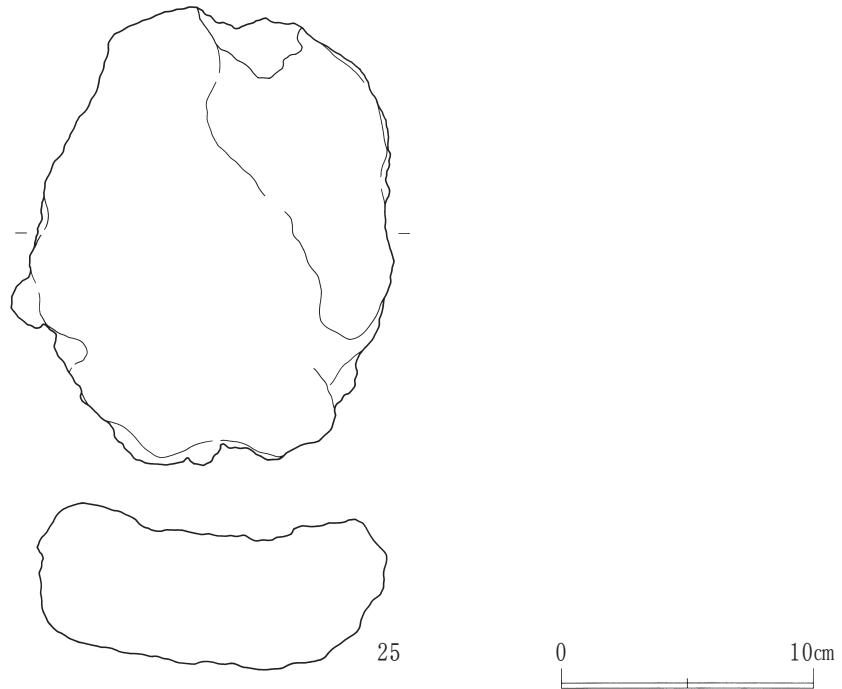
平面形は橢円形で、丸みを帯びた底面の椭形鍛治滓（55図25）である。木炭痕などは認められなかった。



第53図 遺構外出土遺物（平安1）



第54図 遺構外出土遺物（平安2）



第55図 遺構外出土遺物（平安3）

第22表 遺構外出土土器観察表

()内の数値は推定値

挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	口径×器高×底径 (cm)	特徴		外底部
							外面	内面	
第53 図1	—	MC55攪乱	土師器	壺	胴部～底部	—×—×(4.0)	剥離により不明	ミガキ 黒色処理	ケズリ
第53 図2	—	LF67 II層	土師器	壺	底部	—×—×(5.0)	—	黒色処理	回転系切り
第53 図3	20— 5	LN58 III層 LM58	土師器	甕	口縁部～胴部	(22.6)×—×—	口縁部：ヨコナデ 胴部：一部ナデ 輪積み痕	口縁部：ヨコナデ 胴部：ヘラナデ：一部摩滅	—
第53 図4a 図4b	—	LN55 III層 LN58 II層 LOS9 III層	土師器	甕	口縁部～底部	(18.6)×—×7.6	口縁部：ヨコナデ 胴部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ 胴部：ヘラナデ	砂底
第53 図5	—	調査区外東側II層	土師器	甕	底部	—×—×(15.7)	ヘラケズリ 輪積み痕	ヘラナデ ハケメ	砂底
第53 図6	—	L164 IV層	土師器	甕	底部	—×—×(8.6)	一部ナデ 輪積み痕	ハケメ	砂底
第53 図7	—	LM59 I層	土師器	甕	底部	—×—×(16.0)	輪積み痕	ヘラナデ	砂底
第53 図8	—	LL57 I層	土師器	甕	底部	—×—×(8.0)	ヘラケズリ 輪積み痕	ヘラナデ ハケメ	砂底
第53 図9	—	LH62 I層	土師器	甕	底部	—×—×(8.0)	ヘラケズリ	ハケメ	調整なし
第53 図10	—	トレンチ埋土	土師器	甕	底部	—×—×(9.4)	ヘラケズリ 輪積み痕	ハケメ	調整なし
第53 図11	—	LN57 III	土師器	甕	底部	—×—×(11.0)	ヘラケズリ 一部摩滅	ナデ 一部摩滅	ケズリ
第54 図12	—	LJ59 I層	土師器	甕	底部	—×—×(9.0)	ヘラケズリ	ヘラナデ ハケメ	砂底
第54 図13	20— 4	LL59 I・III層 LK59 III層	土師器	甕	口縁部～胴部	(13.2)×—×—	口縁部：ヨコナデ 胴部：粗いケズリ 輪積み痕	ヘラナデ	—
第54 図14	—	トレンチ埋土	土師器	甕	底部	—×—×(11.0)	ヘラケズリ 一部摩滅	ナデ 一部摩滅	砂底
第54 図15	—	LP56 III層	土師器	甕	底部	—×—×(9.1)	ヘラケズリ 輪積み痕	ナデ	砂底
第54 図16	—	排土中	土師器	甕	底部	—×—×(11.2)	ヘラケズリ	ヘラナデ ハケメ	砂底
第54 図17	—	MA53 II層	土師器	甕	底部	—×—×(9.0)	ヘラケズリ 輪積み痕	ヘラナデ ハケメ	砂底
第54 図18	—	LK56 III層	土師器	甕	底部	—×—×(7.4)	ヘラケズリ 輪積み痕	ハケメ ヘラナデ	砂底
第54 図19	—	調査区外	土師器	甕	底部	—×—×(6.2)	ケズリ	ハケメ ヘラナデ ミガキ	—
第54 図20	—	LT53攪乱	土師器	甕	底部	—×—×(7.0)	一部ハケメ？	ミガキ 黒色処理	砂底
第54 図21	—	排土中	須恵器	甕	体部	—×—×—	タタキメ	なし	—
第54 図22	—	LT56 III層上面	須恵器	甕	体部	—×—×—	タタキメ	一部 ナデ	—
第54 図23	—	LH57	須恵器	甕	体部	—×—×—	タタキメ	なし	—
第54 図24	—	LJ63 I層	須恵器	甕	底部	—×—×—	調整なし	調整なし	調整なし

第23表 遺構外出土鉄製品観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	遺物名	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
第55図25	—	トレンチ埋土	楕形鍛冶滓	101.0	121.0	47.0	611.0

3 中世の遺構と遺物

調査区中央部に掘立柱建物跡2棟、それに付随する柱穴列5列、竪穴状遺構2基が検出された。位置や形状、及び放射性炭素年代測定の結果から中世（室町時代）のものと判断した。中世の遺物は出土していないが遺構内から古代の遺物が出土している。

（1）掘立柱建物跡と付随する柱穴列跡

掘立柱建物跡は、これを構成する各柱穴の形状・規模・埋土の特徴・配置、柱間距離の他に、建物方位と、斜面に対する方向、柱穴列などの他の遺構の主軸方位との対応関係などを総合的に検討して、調査中に現地において検出し確認した。確認した2棟の掘立柱建物跡は、調査区のほぼ中央付近から、平安時代の集落を区画したと思われる溝跡SD130を挟み、南西側へ並び立っている。若干主軸方位は異なるが、それぞれの建物跡東側はすぐに斜面となっており、斜面の縁に添う方向で建てられている。斜面沿いには建物跡を斜面から隠すようにそれぞれ柱穴列があり、SB200には北東から登ってくる道路遺構と考えられるSD76も斜面沿いに平行に並んでいる。また、2棟の掘立柱建物の間の中ほどにも、ちょうど2棟を分けるように柱穴列が確認された。本報告書では、これらの柱穴列も掘立柱建物に付随するものとして、一括して図面にし説明することとした。この2棟は堆積土中からの遺物もほとんどなく、時期特定は困難である。平安時代のものであることも否定することはできないが、比較的規模が大きい長方形型であることや、平安時代の区画用の溝SD130に対してSB251が唯一外側の南側にあり、SA253はその溝の中央を切っていることから、この溝を使用していた時代よりは新しいことが推測される。中世の遺構と断定できるSKI13との位置関係からもおそらくは中世のものであろうと判断した。なお、掘立柱建物跡及び柱穴列跡を構成する各柱穴の規模等については、各挿図の柱穴計測一覧表に掲載した。

SB200とSA173、179（第56図、図版12）

◎ SB200

〈位置・確認状況〉 LN 56・57、LO 55～58、LP 54～57、LQ 54・55グリッドに位置する。台地の縁辺の形状に沿って建てられている。P14はⅢ層で検出、その他はV層で検出した17基の柱穴様ピットから構成される。

〈重複関係〉 重複はないが、東側主列から東に2.2mの位置にSA179、3.8mの位置にSA173が柱列と平行にある。また、SA173は、北東方向からこの建物へ上ってくる道路と思われるSD76南端部に沿って立てられており、平行に並んでいる。

〈規模〉 桁行7間、梁行1間の北東、南西に伸びる長方形の平面形をしている。P2とP17が切り合っており、P2の方が新しいためこの1本のみ立て直されたのではないかと思われる。桁行総長は17.0m、柱間距離は、東側柱列で見ると北からP16～P15間2.48m、P15～P14間2.52m、P14～P13間2.52m、P13～P12間2.52m、P12～P11間2.44m、P11～P10間2.44m、P10～P9間2.20m。西側柱列で見ると北からP8～P7間2.48m、P7～P6間2.52m、P6～P5間2.48m、P5～P4間2.60m、P4～P3間2.28m、P3～P2間2.40m、P2～P1間2.20m。

梁行総長は北側で 5.52m、南側で 5.44m である。

〈出土遺物〉 P 7 から流れ込みと思われる土師器甕片 1 点が出土した。

◎ S A 173

〈位置・確認状況〉 L O 53・54、L N 55・56、L M 56・57 グリッドに位置する。S B 200 の東側柱列から東に 3.8m の位置に台地の縁辺の形状に沿って北東、南西方向に並んでいる。V 層で検出した 7 基の柱穴様ピットから構成される。

〈重複関係〉 道路遺構と思われる S D76 の北西端の線に（道路山側端） P 26 と P 30・31 が重複する。新旧関係は不明であった。S A179 との新旧関係は不明だが、建て替えられたか、登り道である S D 76 から S B 200 の間に二重に板塀を建てていた可能性も考えられる。

〈規模〉 総長 16.20m。柱間距離は、北から P 32-P 31 間 2.53m、P 31-P 30 間 2.36m、P 30-P 29 間 2.71m、P 29-P 28 間 3.07m、P 28-P 27 間 3.24m、P 27-P 26 間 2.29m である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

◎ S A 179

〈位置・確認状況〉 L P 53、L O 54・55、L N 56 グリッドに位置する。S B 200 の東側柱列から東に 2.2m の位置に台地の縁辺の形状に沿って北東、南西方向に並んでいる。P 25 はⅢ層で検出、その他はV 層で検出した 8 基の柱穴様ピットから構成される。この位置関係から S B 200 の目隠し塀ではないかと思われる。

〈重複関係〉 重複はない。

〈規模〉 総長 13.96m。柱間距離は、北から P 25-P 24 間 2.96m、P 24-P 23 間 2.84m、P 23-P 22 間 2.21m、P 22-P 21 間 1.92m、P 21-P 20 間 1.88m、P 20-P 19 間 2.08m、P 19-P 18 間 1.84m である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

S B 251 と S A 252、253、521（第 57 図、図版 12）

◎ S B 251

〈位置・確認状況〉 L Q 49・50、L R 48～50、L S 48・49 グリッドに位置する。S B 200 の南西、S D 130 をはさんで約 14m 先の台地の縁辺に沿って建てられている。P 1・3 はⅣ層で検出、その他はV 層で検出した 8 基の柱穴から構成される。

〈重複関係〉 重複はないが、東側柱列から東に 1.2m の位置に S A 521、東側柱列の延長線上に北へ続くように S A 252 がある。また、北側柱列の約 5.8m 北の位置に平行して S A 253 がある。

〈規模〉 衍行 3 間、梁行 1 間の北東、南西に延びる長方形の平面形をしている。衍行総長は 9.22m。

柱間距離は、東側柱列で見ると北から P 8-P 7 間 3.03m、P 7-P 6 間 3.38m、P 6-P 5 間 2.92m。西側柱列では北から P 4-P 3 間 2.85m、P 3-P 2 間 3.37m、P 2-P 1 間 3.00m。梁行総長は北側で 4.36m、南側 4.50m である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

◎ S A 252

〈位置・確認状況〉 L Q 50・51 グリッドに位置する。S B 251 の東側柱列の北延長線上にすぐ続くよう並んでいる。V 層で検出した 3 基の柱穴から構成される。全体の位置関係から考えると、登

り道の終わり部分は、SD 130の北寄りであるため、集落への入り口から南側のSB 251を隔てるための板塀と思われる。

〈重複関係〉重複はないが、SD 130がトレンチで削られている部分のため確証はないが、P 15は本来SD 130を切っていることが位置から考えられる。

〈規模〉P 13とP 14間の間隔が大きいが、その部分は攪乱のため柱穴を確認できなかった。本来はこの部分にもう1本あり、4本の柱による柱列と考えられる。総長4.61m。柱間距離は、北からP 15-P 14間1.24m、P 14-P 13間3.36m。SB 251北東隅柱P 8とSA 252南端のP 13間の距離は0.64mである。

〈出土遺物〉出土遺物はなかった。

◎ SA 253

〈位置・確認状況〉LR 52、LQ 52グリッドに位置する。SB 251の北側柱列から5.8m北に平行に東西方向へ並んでいる。V層で検出した5基の柱穴から構成される。全体の位置関係から考えると、SB 200とSB 251のちょうど中間地点にあり、かつ、集落入り口からは南方向を隠す位置にあるため、SB 200とSB 251を隔てるための板塀ではないかと考えられる。

〈重複関係〉SD 130と重複し、溝の中央部に並ぶ。証拠はないが溝の中に後からSA 253を建てたものと判断した。

〈規模〉P 16とP 17間の間、及びP 20より西側にも柱穴があった形跡が若干見られたが削りすぎのため確認できなかった。本来はもう少し長い柱列と考えられる。残存する総長は5.26m。柱間距離は、東からP 16-P 17間1.94m、P 17-P 18間1.01m、P 18-P 19間1.21m、P 19-P 20間1.10mである。

〈出土遺物〉出土遺物はなかった。

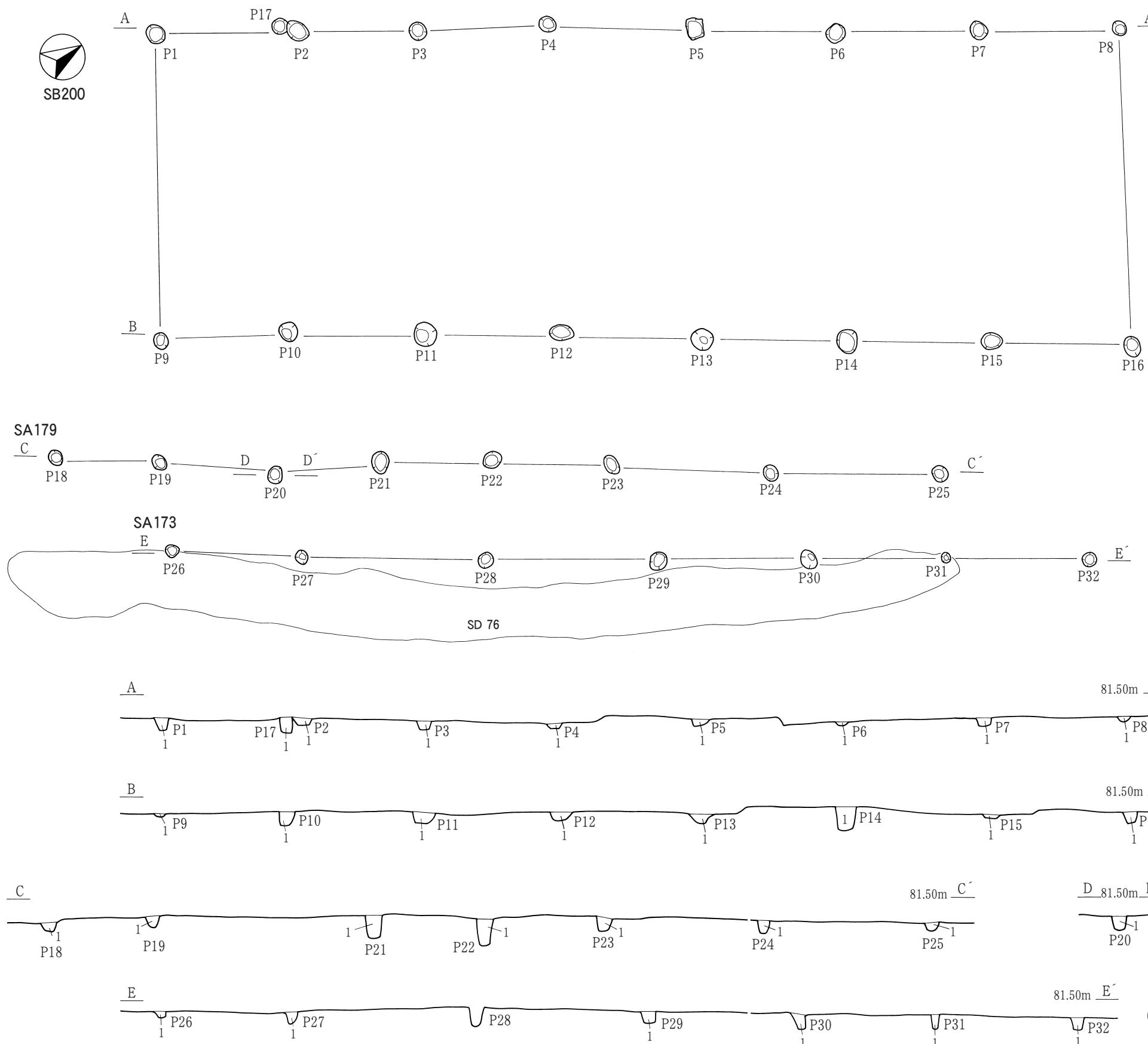
◎ SA 521

〈位置・確認状況〉LQ 48~50、LR 48、LP 50グリッドに位置する。SB 251の東側柱列から東に1.2mの位置に台地の縁辺の形状に沿って北東、南西方向に並んでいる。V層で検出した4基の柱穴から構成される。この位置関係から斜面沿いにSB 521の目隠し塀ではないかと思われる。

〈重複関係〉重複はない。攪乱のため遺構としては確認できなかったが、この柱列のすぐ東側の斜面にも若干、道路状遺構の土と思われる土があったことからSA 173と同様に南西からの登り道と隔てる板塀だった可能性がある。

〈規模〉総長11.26m。柱間距離は、北からP 12-P 11間4.09m、P 11-P 10間3.50m、P 10-P 9間3.67mである。

〈出土遺物〉出土遺物はなかった。



第24表 S B 200・S A 179・173柱穴計測一覧表

SB200		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P 1	1	0.38	0.32	0.26	81.04	
P 2	1	0.41	0.30	0.11	81.13	
P 3	1	0.32	0.30	0.17	81.04	
P 4	1	0.30	0.28	0.15	81.06	
P 5	1	0.40	0.32	0.17	81.13	
P 6	1	0.36	0.31	0.08	80.92	
P 7	1	0.33	0.30	0.17	81.11	
P 8	1	0.30	0.24	0.21	81.23	
P 9	1	0.32	0.28	0.07	81.58	
P 10	1	0.35	0.34	0.22	81.03	
P 11	1	0.42	0.40	0.22	81.17	
P 12	1	0.45	0.28	0.16	81.05	
P 13	1	0.39	0.38	0.16	81.02	
P 14	1	0.46	0.38	0.39	81.00	
P 15	1	0.38	0.32	0.11	81.08	
P 16	1	0.40	0.30	0.24	81.01	土師器裏片1点出土
P 17	1	0.30	0.30	0.22	81.00	

SA179		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P18	1	0.32	0.26	0.18	80.93	
P19	1	0.30	0.27	0.19	81.00	
P20	1	0.32	0.28	0.26	80.94	
P21	1	0.43	0.33	0.44	80.79	
P22	1	0.35	0.30	0.38	80.80	
P23	1	0.34	0.24	0.25	80.88	
P24	1	0.36	0.28	0.28	80.87	
P25	1	0.31	0.28	0.18	80.89	

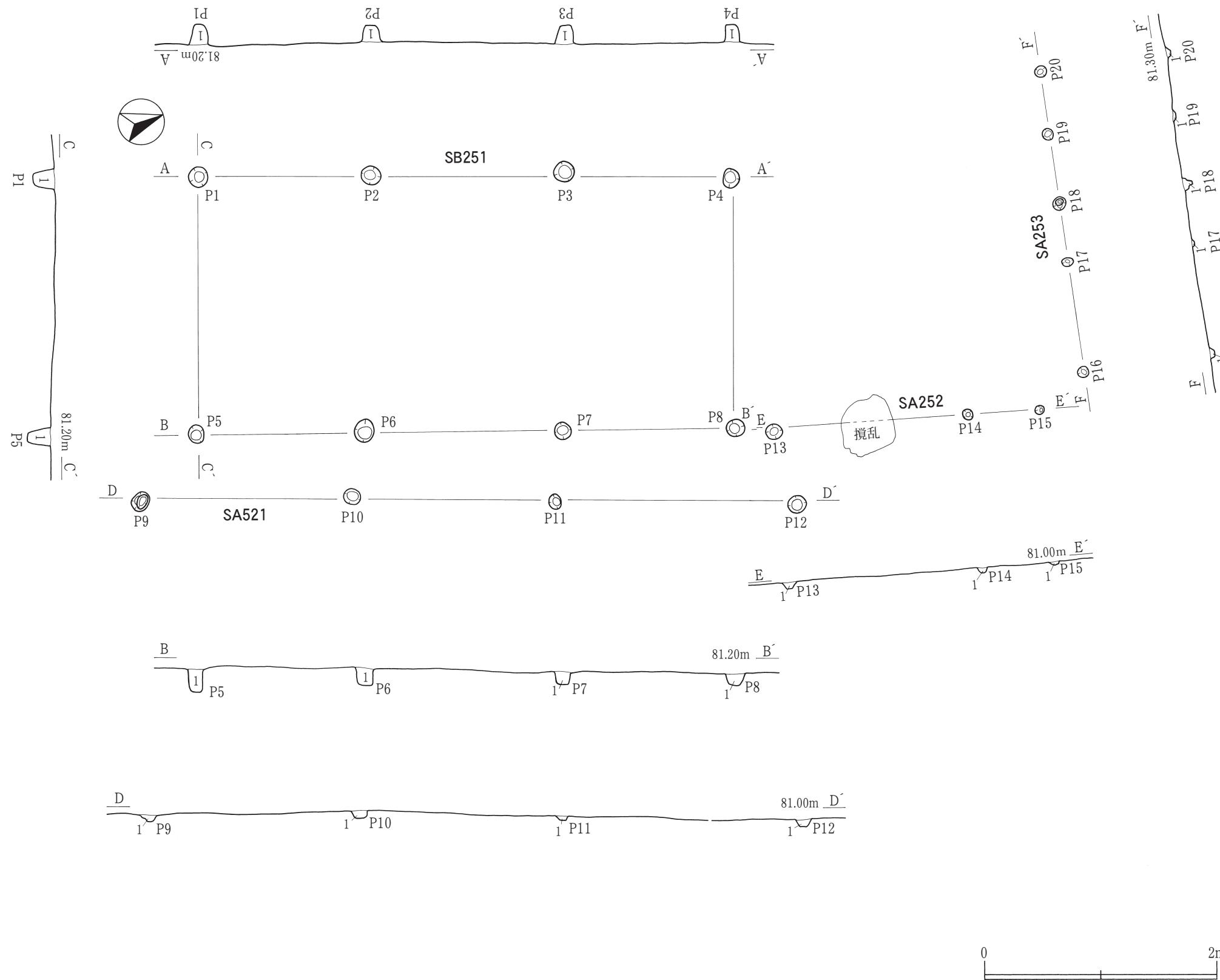
SA173		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P26	1	0.22	0.21	0.11	80.90	
P27	1	0.22	0.21	0.21	80.79	
P28	1	0.24	0.23	0.32	80.74	
P29	1	0.32	0.32	0.21	80.78	
P30	1	0.31	0.31	0.28	80.67	
P31	1	0.18	0.18	0.27	80.67	
P32	1	0.27	0.26	0.23	80.66	

SB200		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P 1	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満	礫1個混入
P 2	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱		
P 3	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊5%混入	
P 4	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満混入	
P 5	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊5%混入	
P 6	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり強	粘性弱	地山土塊5%混入	
P 7	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり強	粘性弱	火山灰1%	地山土塊10%混入
P 8	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%混入	
P 9	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満	
P 10	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満混入	
P 11	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり中	粘性弱	地山土塊1%未満混入	
P 12	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満	
P 13	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊3%混入	
P 14	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊3%混入	
P 15	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊10%混入	
P 16	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%未満混入	
P 17	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性中	地山土塊1%未満混入	

SA179		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P18	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性中	地山土塊1%	礫1%混入
P19	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊5%	礫1%混入
P20	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%	礫1%混入
P21	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊3%混入	
P22	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊3%混入	
P23	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊10%混入	
P24	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性弱	地山土塊1%混入	
P25	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性なし	地山土塊1%混入	

SA173		規模(m)			底面標高 (m)	備考
柱穴番号		長軸	短軸	深さ		
P26	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性なし	地山土塊(Φ0.5~1cm) 1%混入	
P27	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性なし	地山土塊(Φ1mm) 1%混入	
P28	なし				地山土塊(Φ1mm以上) 5%混入	
P29	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性中	地山土塊(Φ0.1~1cm) 1%未満混入	
P30	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり強	粘性なし	地山土塊(Φ1mm) 5%混入	
P31	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり弱	粘性なし	地山土塊(Φ1mm) 10%混入	
P32	1	黒色土 (10YR1.7/1)	しまり強	粘性なし	地山土塊(Φ1mm) 1%混入	

第56図 S B 200 堀立柱建物跡と S A 173・179 柱穴列跡



第57図 SB 251掘立柱建物跡とSA 252・253・521柱穴計測一覧表

第25表 SB 251・SA 252・253・521
柱穴計測一覧表

柱穴番号	規模(m)			底面標高(m)
	長軸	短軸	深さ	
P 1	0.36	0.32	0.35	80.74
P 2	0.34	0.31	0.27	80.76
P 3	0.36	0.35	0.31	80.76
P 4	0.34	0.28	0.31	80.75
P 5	0.32	0.26	0.38	80.60
P 6	0.40	0.33	0.31	80.71
P 7	0.30	0.29	0.23	80.73
P 8	0.32	0.29	0.21	80.72
SA521				
P 9	0.35	0.29	0.12	80.74
P 10	0.28	0.28	0.13	80.80
P 11	0.26	0.21	0.09	80.77
P 12	0.32	0.30	0.15	80.67
SA252				
P 13	0.29	0.26	0.11	80.83
P 14	0.19	0.17	0.11	80.82
P 15	0.16	0.14	0.07	80.84
SA253				
P 16	0.21	0.19	0.09	80.99
P 17	0.21	0.20	0.06	81.07
P 18	0.22	0.22	0.16	80.97
P 19	0.20	0.15	0.05	81.06
P 20	0.19	0.19	0.09	81.03

SB251
P 1 1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強 粘性強
P 2 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 0.3~1cm) 3%混入
P 3 1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性中 地山土塊30%混入
P 4 1 黑褐色土 (10YR2/3) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 3~5mm) 5%混入
P 5 1 黑褐色土 (10YR2/3) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 1~3mm) 5%混入
P 6 1 黑褐色土 (10YR2/1) しまり強 粘性強
2 黑褐色土 (10YR2/2) しまり強 粘性弱 地山土塊50%混入
P 7 1 黑褐色土 (10YR2/3) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 0.3~1cm) 2%混入
P 8 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 3~5mm) 1%混入
SA521
P 9 1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱 粘性中 地山土塊 (ϕ 1mm) 1%混入
P 10 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性弱 地山土塊 (ϕ 1mm) 3%混入
P 11 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性弱 地山土塊 (ϕ 1mm) 3%混入
P 12 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性強 地山土塊 (ϕ 1mm) 1%混入
SA252
P 13 1 黑色土 (10YR1.7/1) しまり弱 粘性弱 地山土塊 (ϕ 0.1~1cm) 2%混入
P 14 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 1~3mm) 1%混入
P 15 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 1~5mm) 5%混入
SA253
P 16 1 黑色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 1~5mm) 5%混入
P 17 1 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質 しまり中 粘性弱 地山土塊 (ϕ 1mm) 1%混入
P 18 1 褐色土 (10YR4/6) 砂質 しまり中 粘性弱 地山土塊 (ϕ 1~5mm) 10%混入
P 19 1 黑褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 2cm) 3%混入
P 20 1 黑色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性中 地山土塊 (ϕ 1mm) 1%混入

(2) 壇穴状遺構

平面形が方形で、壇穴状に掘り込まれた跡が2基検出された。一方の焼失建物跡は規模もあり、住居跡とも思えるがカマドの遺構は見られず、壇穴状遺構とした。

SK I 13 (第58・59図、図版13)

〈位置・確認状況〉 LN 59・60、LO 59・60 グリッドに位置する。トレンチ断面、Ⅲ層段階で焼土遺構として検出し、Ⅳ層上面において黒色土と焼土、及び炭化材の広がりで全体を確認した。

〈重複関係〉 SKP 500 と重複する。新旧関係は SKP 500 の方が古いものと考える。

〈堆積土〉 12層あり、1・2層は焼土である。3~12層は微妙な色の違いや混入物量の差はあるが、いずれも黒色土で十和田a火山灰の混入は見られない。8・11層は壁溝内堆積土である。本遺構は焼失家屋で、床上面には炭化材が散在しており、その上に炭化した茅、そのまた上に焼土が折り重なるように堆積している。

〈平面形・規模〉 残存部が少なく正確にはわからないが、柱穴の位置、残存する壁から推定すると一辺約4.2mの正方形である。南東壁部分に南東へ1.5mほどの張り出しがある。

〈壁〉 上面の搅乱、トレンチによる掘削のため、壁の残存部は少ない。残存している壁の高さは、北西壁10cm、北東壁20cm、南西壁13cm、南東壁12cmほどである。残存している部分からだけ見ると緩やかに広がるように立ち上がっている。

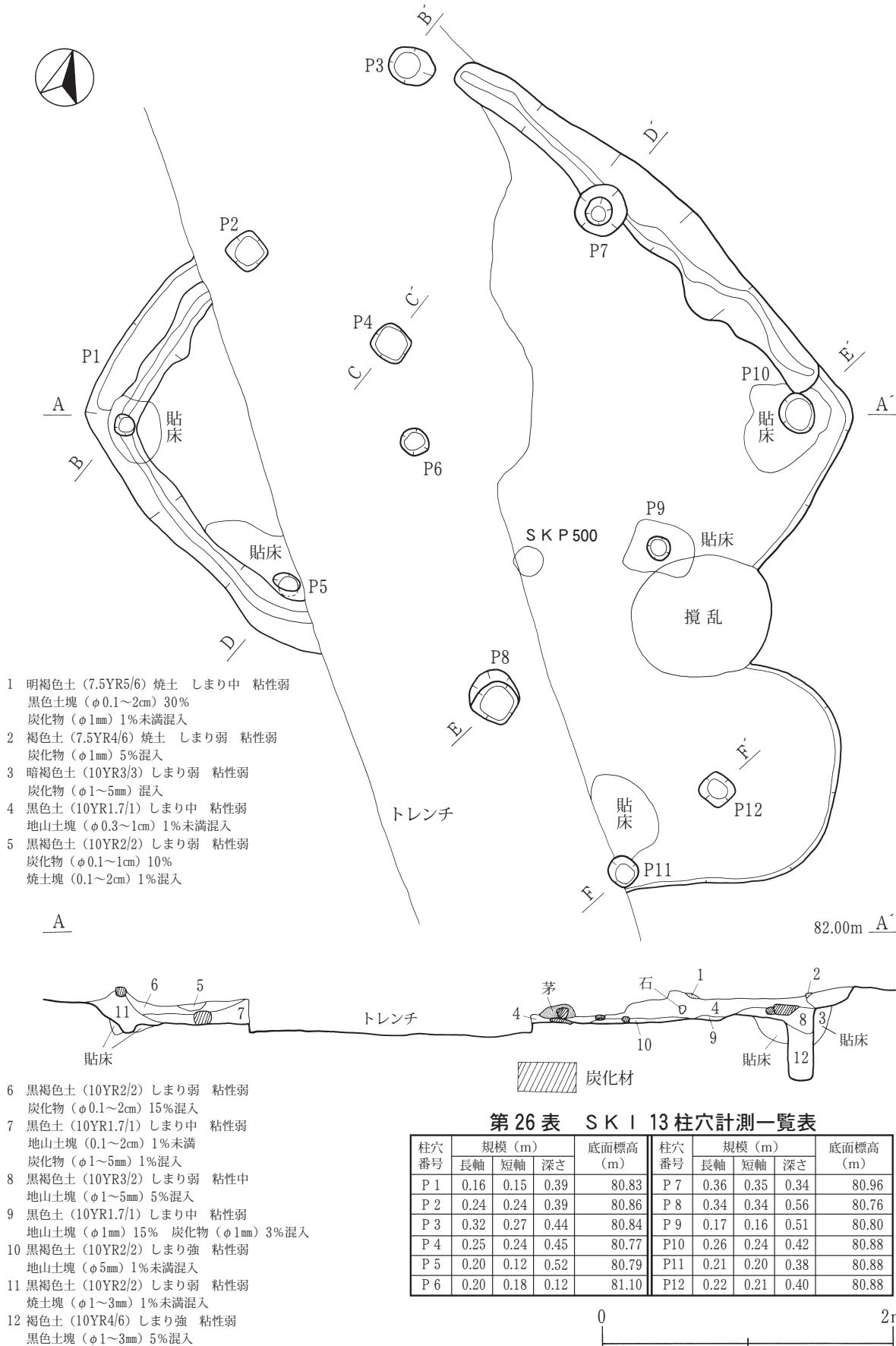
〈床〉 掘形底面は全体的に地山面を平坦に整えてある。柱穴を中心に、柱を支えるように5か所ほど貼床が見られた。床面上には、家屋の焼失に伴う炭化材と焼土が散布していた。炭化材は細長い柱状の建築部材とその上を覆うように堆積した茅材に分けられる。茅は屋根材と考えられるが、その上を覆うように焼土が堆積しており、この焼土は茅の上の土葺きであろうと考えられる。火事による家屋の倒壊時、柱、茅、土葺きの順で崩れ落ちたことが推定される。また、家屋南東壁沿いに、後世の搅乱により正確な形状は不明だが、南東に向け約1.5mの張り出しがあり、入り口として利用されていたと考えられる。

〈壁溝〉 壁溝は北東壁と残存している北西壁と南西壁沿いに見られる。南東壁側は搅乱や張り出しがあるため壁溝は確認出来なかった。残存している部分の幅は14cm~20cm。床面からの深さは、浅いところで4cm、深いところで9cmである。

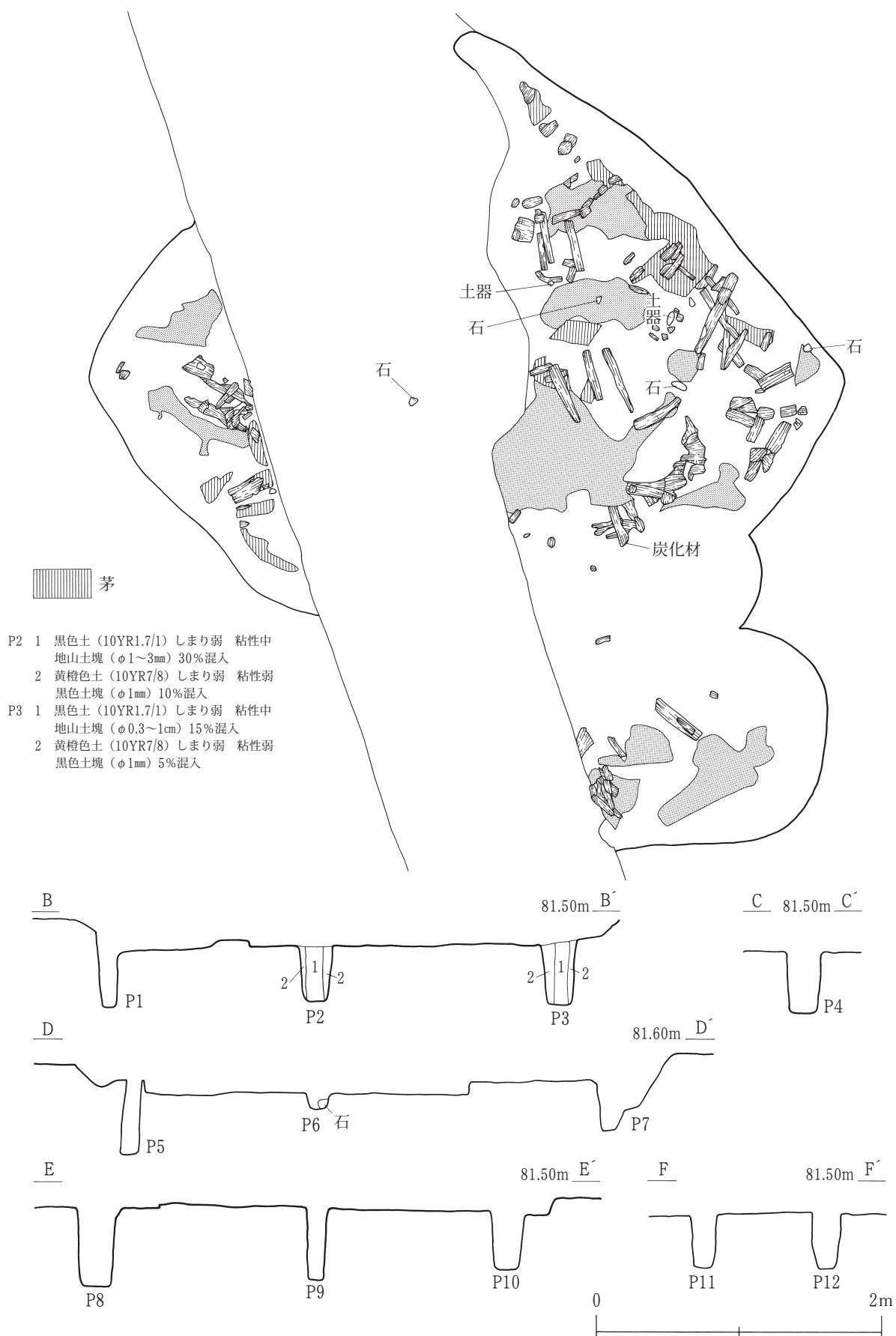
〈柱穴〉 床面から柱穴を12基検出した。遺構四隅と各壁中央部床面、及び中央部に位置するP1~10は、上屋を構築するための柱穴と考えられる。P11・12は張り出し部分の上屋構築材の柱穴と思われる。P2・4・8・11・12の平面形は方形をしている。床面からの深さは、浅いもので10cm、深いもので54cmあるが、総じて40cm前後である。P2・3の覆土の様子から、径12cm前後の柱が立てられていたものと考えられる。

〈出土遺物〉 覆土中から、須恵器甕破片1点、土師器甕破片3点が出土した。埋め戻しの際の混入と思われる。覆土中からの出土遺物がほとんど見られない状況から、本遺構は物資を持ち出した後で人為的に焼却処分されたことが考えられる。

〈時期〉 炭化した柱材と茅の放射性炭素年代測定では、柱 529 ± 33 BP、カヤ 530 ± 32 BPの測定値が得られ、中世の建物とわかった。規模から推測し住居跡とも考えられたが、カマド等は見つかっ



第58図 SKI 13 壇穴状遺構



第59図 SK I 13 壁穴状遺構炭化材・焼土分布図

ておらず、竪穴状遺構とした。

S K I 18 (第60図、図版14)

〈位置・確認状況〉 L N57・58グリッドに位置する。S B 200 の北東面に隣接、軸方向も一致し、西側斜面の縁と平行に掘られている。トレンチ断面から検出、IV層において黒色土の方形の広がりとして確認した。

〈重複関係〉 重複はない。

〈堆積土〉 11層あり、1・9・10層は周囲のⅢ層からの流れ込み、11層は床の焼土である。その他の層は微妙な堅さや地山土塊を含む量の違いはあるが、いずれも十和田a火山灰起源と考えられる軽石粒や白色砂が混じる黒色土である。自然堆積の様子は見られず、本遺構は廃絶後人為的に埋め戻されたと考えられる。

〈平面形・規模〉 平面形は北東－南西方面に延びる隅丸方形状を呈する。南西壁中央部に幅56cm、長さ64cm、深さ14cm程の緩やかなスロープを描く入り口跡が張り出している。トレンチにより北西壁と南東壁は一部失われているが、残存する部分から想定すると、各壁の長さは、北東壁1.50m、北西壁2.40m、南東壁2.43m、南西壁1.45mである。

〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、北東壁40cm、北西壁30cm、南東壁34cm、南西壁38cmである。いずれの壁も緩やかに外傾して立ち上がっている。

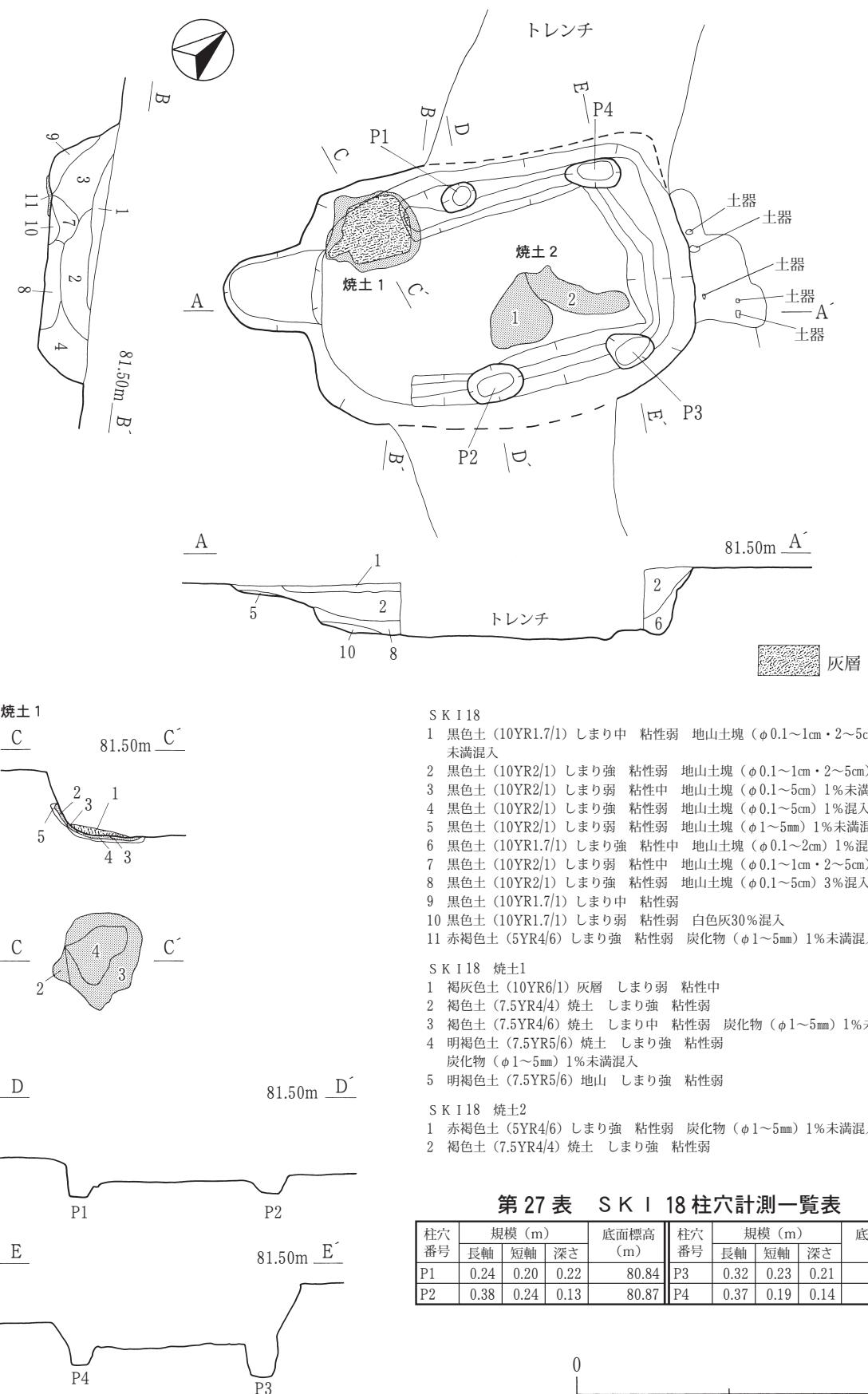
〈床〉 掘形底面は地山土を平坦に整えている。西隅の角と中央部やや東寄りの床面2か所に地床炉と思われる焼土面がある。その上に若干の炭化物が点在していたが、使用意図は不明である。

〈壁溝〉 南西側にはないが、北西壁、北東壁それぞれ南西から60cm程のところから北東壁に回り込むコの字形に壁溝が浅く巡っている。幅20～30cm、床面からの深さは、浅いところで1cm、深いところで5cmである。

〈柱穴〉 壁溝内の北東壁両脇と北西壁中央付近、南東壁中央付近の4か所で柱穴と考えられるピットを検出した。南西壁には壁溝と同様に柱穴もなかった。底面からの深さは、P 1－10cm、P 2－8cm、P 3－20cm、P 4－14cmである。

〈出土遺物〉 覆土中から、土師器甕の破片45点が出土した。また遺構外の北東壁の外側に地山土がまとまってある場所があり、土師器甕の破片が出土した。この土は遺構掘削した當時地山を掘った土をそのまま置いてあったものと思われる。

〈時期〉 本竪穴状遺構は、その入り口が張り出した形状と床面の焼土の状態から中世のものであると想定された。SK I 13との位置関係や形状の類似から同時期のものであろうと判断した。



第60図 SKI 18 竪穴状遺構

4 時代不明の遺構と遺物

野崎遺跡では、縄文時代と平安時代、中世の遺構が混在しているうえ、台地上面は近世の耕作による搅乱が激しく、時代の判明した遺構と覆土状況が類似していない場合、時代特定の根拠に欠ける。

そのため確証のないものは時代不明とした。また、切り合いから平安時代以後と判断されるものも、中世とも現代のものとも断定できないものはここに掲載した。

(1) 焼土遺構

竪穴住居などの他の遺構の外にあり、関連付けが明確でない焼土遺構はⅢ層上面検出においても時代特定の根拠に欠けるため、時代不明遺構として扱った。

また、本調査区の東斜面裾の平坦地部分には、確認された所まででも北東－南西方向に400m以上、北西－南東方向へ80m以上の規模にわたる火山灰層直下の巨大焼土層が調査区外まで広がっている。人為的な様子は見られないため自然災害等によるものとして遺構としては扱わず、調査区内の東斜面状に点在する同質な焼土も同様に遺構としては扱わないととした。

S N 26 (第61図)

〈位置・確認状況〉 LH 65 グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で赤褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土・被熱状況〉 掘り込みが伴わない単層焼土である。2層に分けているのは被熱状況である。

当時の大地上面で焚かれたものと思われる。

〈平面形・規模〉 平面形は北西から南東方向へ主軸をもつ不整橢円形である。規模は長軸40cm、短軸30cm、深さ4cm程である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 SI 01 の東1.6mにあり、同時に検出されたが、近隣に現代の遺構もあり、時代決定の要素に欠く。SI 01との関連から平安時代の可能性もある。

S N 71 (第61図)

〈位置・確認状況〉 LG 68 グリッドに位置する。トレンチ断面で検出され、第Ⅲ層上面で赤褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土・被熱状況〉 掘り込みが伴わない単層焼土である。2層に分けているのは被熱状況である。

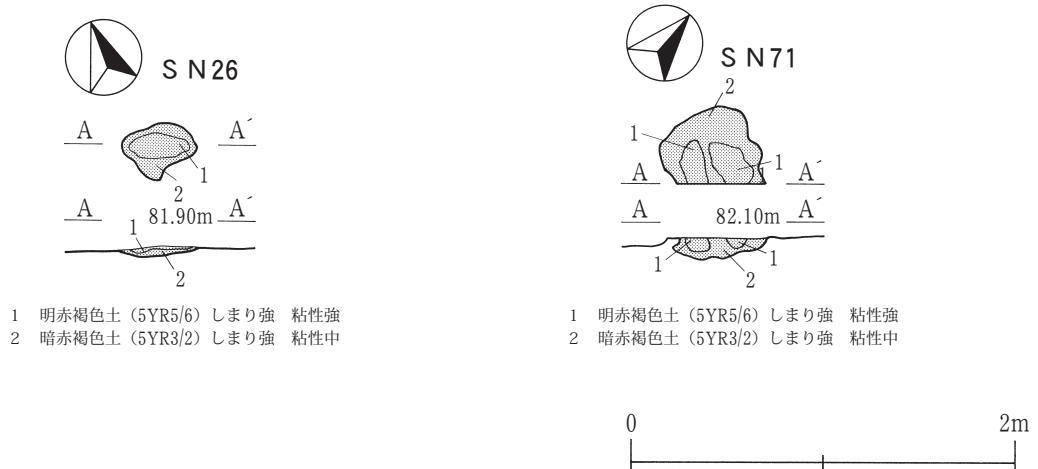
当時の台地上面で焚かれ、被熱状況から搅乱を受けていると考えられる。

〈平面形・規模〉 トレンチにより切られている。残存箇所の規模は長軸54cm、短軸40cm、深さ20cm程の不整形である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 SI 01 と同時にⅢ層上面で検出されたが、近隣に現代の遺構もあり、時代決定の要素に欠く。

SI 01との関連から平安時代の可能性もある。



第61図 S N 26・71 焼土遺構

(2) 土坑

SK 119 (第62図)

〈位置・確認状況〉 LG 68 グリッドに位置する。第V層上面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は3層あり、地山土塊の量の違いはあるが、いずれも黒色土であり、人為的に埋め戻されたと思われる。

〈平面形・規模〉 東西方向に主軸をもつ橢円形で、長軸100cm、短軸60cm、深さ36cm程である。

〈壁・底面〉 底面は鋭角的に尖り窪んでおり、壁はそのまま大きく外傾し立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 SI 03 の堆積土に似てはいるが、時代決定の確証に欠く。近くにあった、現代の土坑や、倒木の攪乱とも堆積土が違い、性格も不明である。

SK 138 (第62図)

〈位置・確認状況〉 LP 59 グリッドに位置する。第V層上面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰を含む黒色土である。

〈平面形・規模〉 東西方向に主軸をもつ橢円形で、長軸106cm、短軸58cm、深さ18cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、壁は椀状に外傾し立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 SI 01 の堆積土に似ているが、時代決定の確証に欠く。性格も不明である。

SK 164 (第62図)

〈位置・確認状況〉 L Q48 グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、火山灰を含む黒色土である。

〈平面形・規模〉 北西-南東方向に主軸を持つ橢円形で、長軸87cm、短軸74cm、深さ19cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾し立ちあがる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 時代決定の確証に欠く。性格も不明である。

S K255 (第62図)

〈位置・確認状況〉 MA 51グリッドに位置する。第V層上面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は2層あり、混入物の違いはあるが、いずれも黒色土である。

〈平面形・規模〉 東西方向へ主軸をもつ楕円形で、長軸108cm、短軸84cm、深さ31cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で小さく、一度急傾斜で立ち上がり、その後大きく外傾しながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 時代、性格共に不明である。

S K259 (第62図)

〈位置・確認状況〉 MB 52グリッドに位置する。第V層上面で黄褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、炭化物が混入する砂質の土である。

〈平面形・規模〉 北西-南東方向へ主軸をもつ楕円形で、長軸60cm、短軸49cm、深さ13cm程である。

〈壁・底面〉 底面は中央に向かって緩く傾斜、壁もそのまま外傾しながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土状況が縄文時代のものとも、平安時代のものとも言い難く、時代決定の確証に欠く。

S K508 (第62図)

〈位置・確認状況〉 LO 52・53グリッドに位置する。第V層上面で黒色土の広がりで確認した。SD76の東斜面方向に隣接する。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

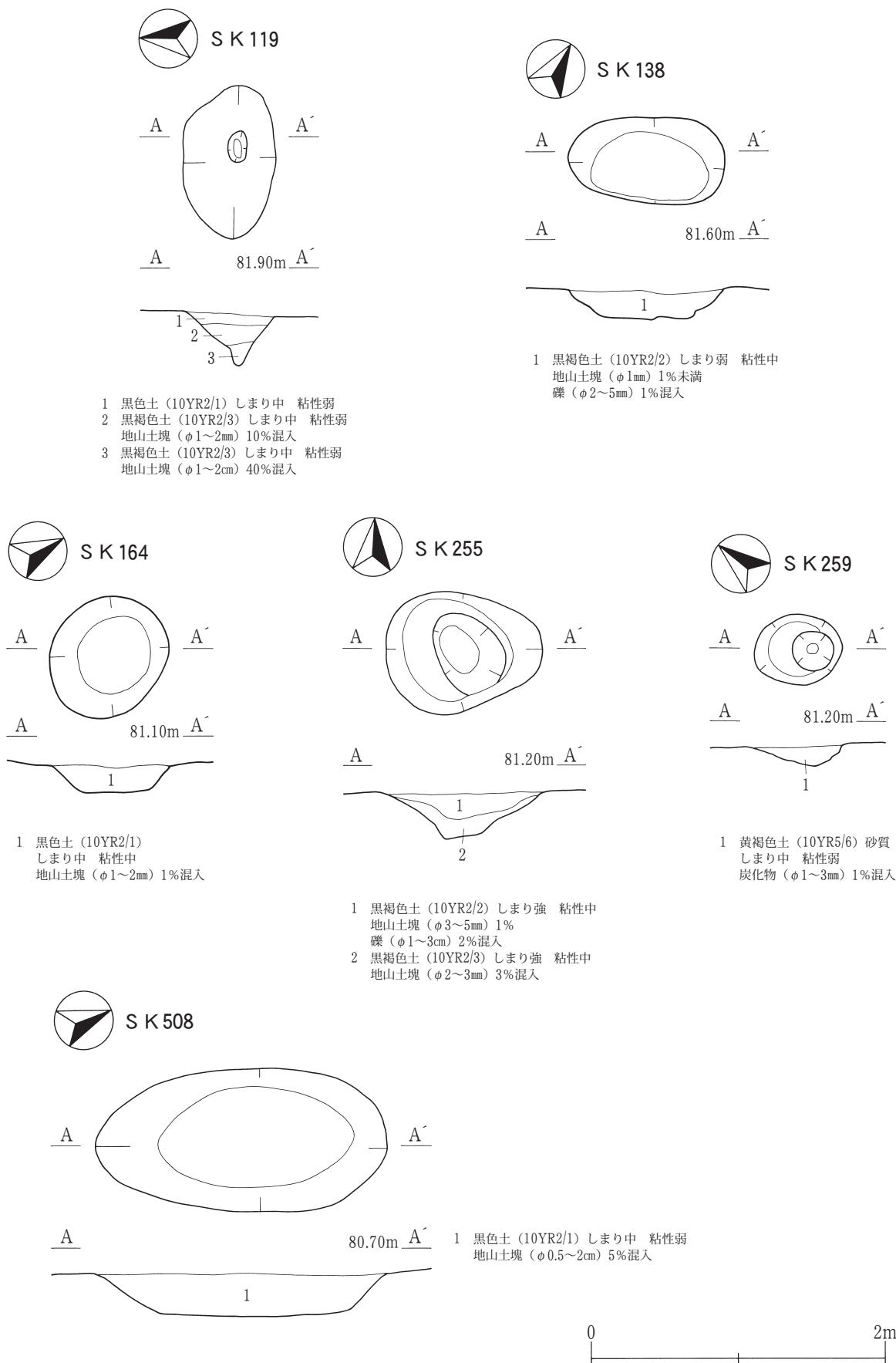
〈堆積土〉 堆積土は単層で、地山塊が混入する黒色土である。

〈平面形・規模〉 北東-南西方向へ主軸をもつ楕円形で、長軸197cm、短軸96cm、深さ28cm程である。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 堆積土から平安時代のものと推測できるが、確証に欠く。



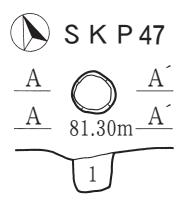
第62図 SK 119・138・164・255・259・508 土坑

(3) 柱穴様ピット(第63~67図)

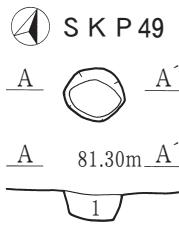
覆土の状況等から、時代確定の根拠に欠く柱穴様ピットの全てのものを図下し第28表として一覧とした。明らかに現代のものとわかるものは除外した。平安時代以降の中世・近世においても人が生活し、田畠として利用していた状況が想定され、第Ⅲ層検出のSKP 75・80・112・354はS I 01の、SKP 74はSD 29の覆土を切っているため明らかに平安時代の住居や溝が埋まつた後に掘られているのだが、覆土は現代の柱穴とは異なっており、また中世のものとも断定する根拠に欠けている。遺物のない小規模な柱穴に見られる覆土の様子だけでは、時代決定の根拠に欠け、その多くが時代不明とならざるを得なかった。

第28表 柱穴様ピット計測一覧表(時代不明)

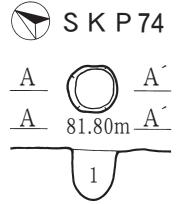
柱穴番号	グリッド	規模(m)			底面標高(m)	柱穴番号	グリッド	規模(m)			底面標高(m)
		長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ	
47	LS 48	0.22	0.22	0.18	80.97	346	MA 54	0.24	0.13	0.13	80.97
49	LR 49	0.32	0.27	0.12	81.01	350	MA 54	0.21	0.14	0.13	81.36
74	LJ 64	0.26	0.24	0.28	81.43	352	LN 62	0.24	0.18	0.12	81.30
75	LJ 65	0.24	0.16	0.28	81.38	353	LI 60	0.18	0.16	0.10	78.14
80	LI 65	0.20	0.16	0.10	81.59	354	LI 66	0.14	0.14	0.10	81.29
112	LJ 65	0.20	0.10	0.10	81.59	358	LK 64	0.17	0.13	0.15	81.29
129	LT・MA 43	0.63	0.53	0.13	80.82	360	LJ 64	0.18	0.14	0.09	81.30
142	LS 49	0.51	0.38	0.12	80.84	364	MA 54	0.22	0.19	0.13	80.98
148	LP 50	0.22	0.16	0.24	80.26	373	LT 51	0.38	0.34	0.11	80.88
149	LQ 47・48	0.23	0.23	0.24	80.45	377	LT 49	0.21	0.12	0.10	80.91
181	LH 61	0.27	0.20	0.13	79.19	378	LP 49	0.24	0.20	0.10	80.74
182	LJ 61	0.17	0.16	0.13	80.46	381	LK 64	0.20	0.20	0.11	81.31
183	LJ 61	0.23	0.22	0.17	80.46	383	LK 64	0.18	0.16	0.12	81.31
184	LJ 61	0.21	0.20	0.17	80.40	384	LK 63	0.19	0.15	0.09	81.37
185	LI 63	0.14	0.12	0.07	81.33	395	LK 62	0.26	0.20	0.14	81.10
186	LI 63	0.14	0.11	0.09	81.13	397	LK 61	0.28	0.20	0.24	80.75
190	LJ 64	0.19	0.13	0.15	81.24	426	LJ 57	0.28	0.27	0.21	79.42
193	LQ 53	0.22	0.17	0.20	81.06	432	LT 56	0.18	0.16	0.11	80.90
202	LQ 55	0.27	0.21	0.19	80.96	441	LR 52・53	0.42	0.29	0.20	80.98
204	LP 54	0.17	0.17	0.18	81.06	456	LL 62	0.20	0.10	0.12	81.23
218	LN 54	0.26	0.21	0.20	80.61	458	LL 64	0.18	0.14	0.12	81.33
220	LO 54	0.37	0.34	0.21	80.72	461	LM 63	0.14	0.14	0.80	81.31
226	LP 53	0.36	0.21	0.22	80.86	462	LM 63	0.16	0.10	0.60	81.44
247	LP・LQ 56	0.20	0.19	0.08	81.10	463	LM 63	0.16	0.16	0.80	81.37
261	MA 52	0.28	0.26	0.20	80.82	470	LK 60・61	0.26	0.13	0.20	80.84
262	LT 55	0.25	0.25	0.22	80.80	475	LJ 61	0.23	0.15	0.16	80.84
263	LT 55	0.30	0.23	0.13	80.97	477	LJ 61	0.16	0.15	0.11	80.14
265	LT 54	0.23	0.19	0.11	81.01	480	LI 60	0.17	0.16	0.20	80.98
266	LT 54	0.26	0.21	0.13	80.99	484	LI 65	0.26	0.22	0.24	81.41
281	LT 54	0.35	0.28	0.11	80.98	485	LI 65	0.16	0.16	0.10	81.53
283	LT 54	0.21	0.14	0.12	80.98	488	LI 65	0.24	0.20	0.30	81.32
284	LT 54	0.21	0.18	0.09	80.99	489	LI 65	0.30	0.20	0.20	81.34
285	LT 54	0.28	0.25	0.13	80.96	490	LI 64	0.24	0.16	0.24	81.32
286	LT 54	0.25	0.18	0.15	80.96	493	LN 56	0.17	0.15	0.13	81.04
305	LS 53	0.25	0.24	0.13	80.99	494	LN 56	0.16	0.14	0.11	81.08
309	LS 53	0.23	0.21	0.16	80.94	502	LP 53	0.21	0.18	0.12	81.08
310	LS 53	0.25	0.21	0.08	80.98	503	LP 53	0.20	0.20	0.20	80.67
311	LT・LS 53	0.10	0.07	0.10	81.00	528	LT 58	0.32	0.16	0.31	81.29
313	LT 53	0.13	0.13	0.07	80.94	531	LS 57・58	0.42	0.41	0.09	81.21
314	MA・LT 53	0.18	0.15	0.12	80.88	536	MC 54	0.29	0.22	0.06	80.97
315	LT 53	0.27	0.22	0.09	80.93	537	MC 54	0.25	0.22	0.07	80.93
343	MA 53	0.17	0.16	0.10	80.98						



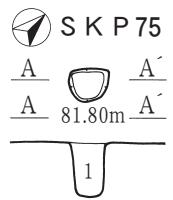
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり中 粘性強
地山土塊3%混入



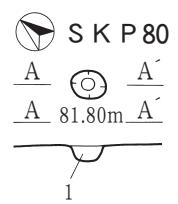
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり強 粘性強
地山土塊1%混入



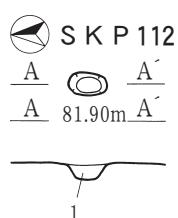
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



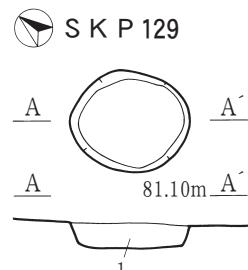
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



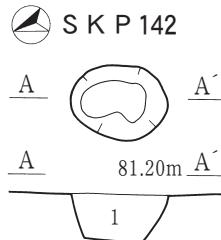
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



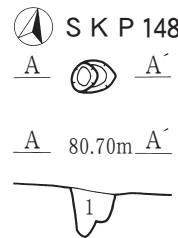
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



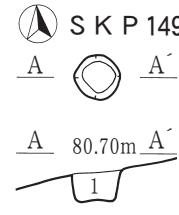
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



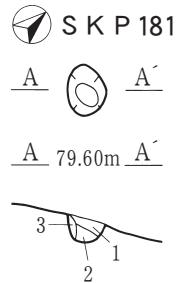
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり中 粘性中



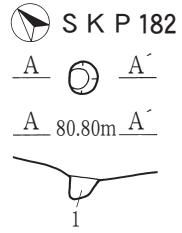
1 黒褐色土 (10YR2/2)
しまり中 粘性中
地山土塊 (ϕ 1~3mm) 1%混入



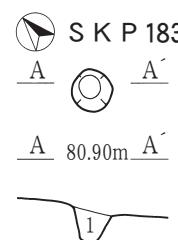
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱
地山土塊 (ϕ 1mm) 2%混入



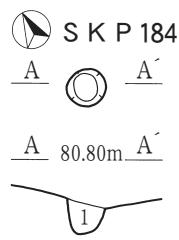
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱
2 暗褐色土 (10YR3/3)
しまり中 粘性弱
地山土塊 (ϕ 5mm) 30%混入
3 暗褐色土 (10YR3/3)
しまり中 粘性弱
地山土塊 (ϕ 1cm) 60%混入



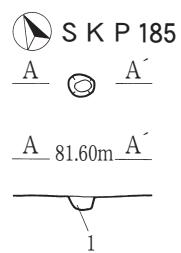
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



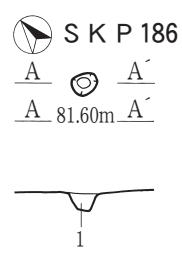
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



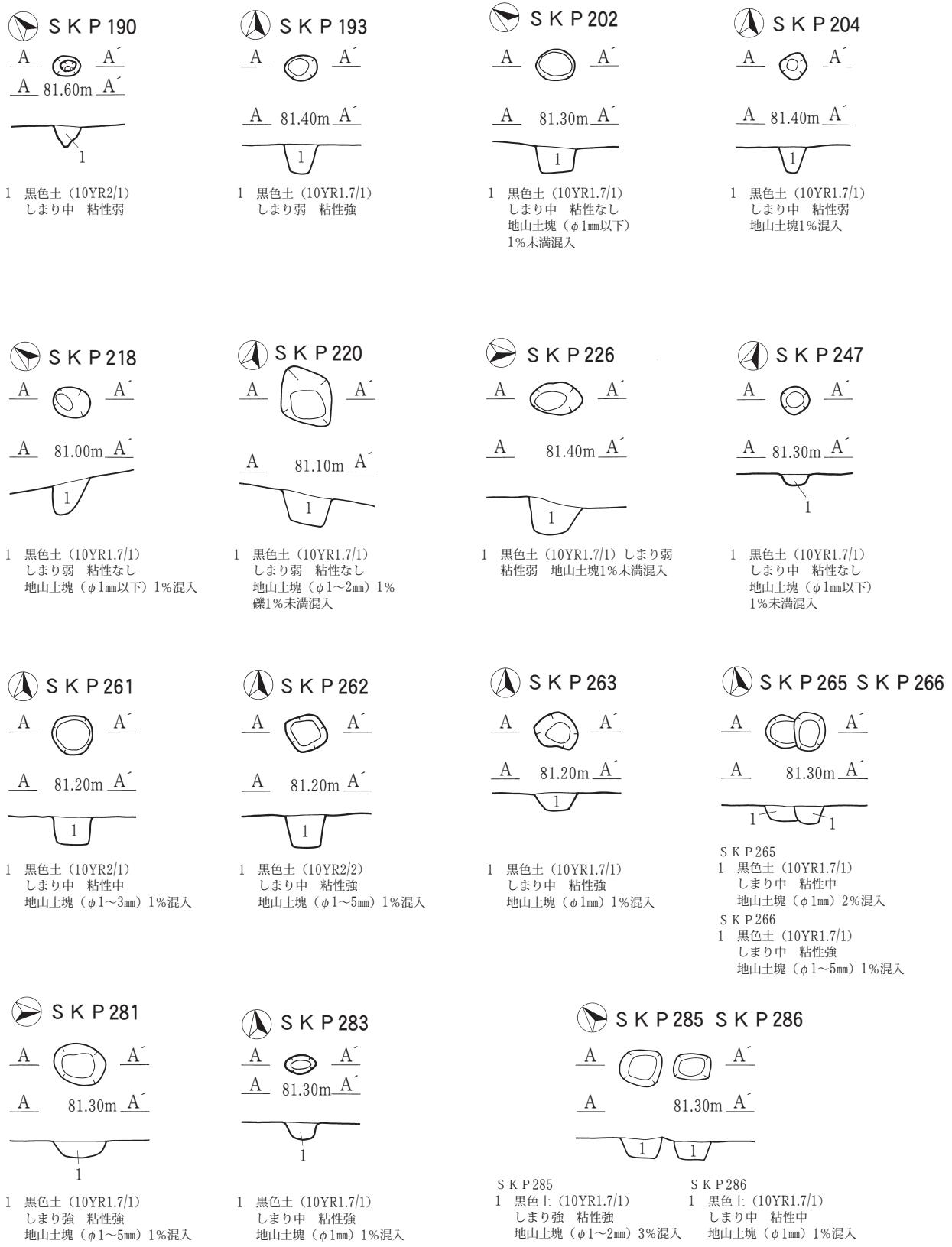
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



第63図 柱穴様ピット（時代不明1）



第64図 柱穴様ピット（時代不明2）

S K P 284

A  A'
A 81.30m A'

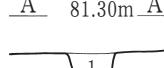
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり強 粘性中
地山土塊 (ϕ 1~2mm) 1%混入

S K P 305

A  A'
A 81.30m A'

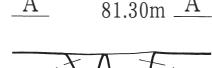
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり中 粘性中

S K P 309

A  A'
A 81.30m A'

1 黒色土 (10YR2/1) 粘土質
しまり中 粘性強
礫 (ϕ 1~3cm) 1%混入

S K P 311 S K P 310

A  A'
A 81.30m A'

S K P 310
1 黒色土 (10YR2/1) しまり弱 粘性中
地山土塊 (ϕ 0.5~1cm) 10%混入
S K P 311
1 黒色土 (10YR2/1) しまり中 粘性強
地山土塊 (ϕ 0.5~1cm) 20%混入

S K P 313

A  A'
A 81.30m A'

1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性中
地山土塊 (ϕ 1~3mm) 10%混入

S K P 314

A  A'
A 81.30m A'

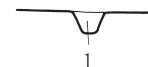
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり中 粘性強
地山土塊 (ϕ 1~5mm) 1%混入

S K P 315

A  A'
A 81.30m A'

1 黒色土 (10YR2/1) 粘土質
しまり中 粘性強
地山土塊 (ϕ 1~3mm) 1%混入

S K P 343

A  A'
A 81.30m A'

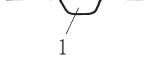
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性中
礫 (ϕ 2~5mm) 1%混入

S K P 346

A  A'
A 81.30m A'

1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり強 粘性中
地山土塊 (ϕ 1mm) 1%混入

S K P 350

A  A'
A 81.60m A'

1 黒色土 (10YR2/1) 粘土質
しまり中 粘性強

S K P 352

A  A'
A 81.70m A'

1 黒褐色土 (10YR3/2)
しまり強 粘性弱
地山土塊 (ϕ 1~2mm) 15%混入
2 灰黃褐色土 (10YR4/2)
しまり中 粘性弱
地山土塊 (ϕ 1~2mm) 25%混入

S K P 353

A  A'
A 78.50m A'

1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱
地山土塊 (ϕ 5~8mm) 20%混入

S K P 354

A  A'
A 81.60m A'

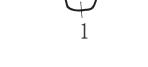
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱

S K P 358

A  A'
A 81.60m A'

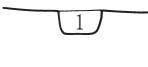
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱

S K P 360

A  A'
A 81.60m A'

1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱

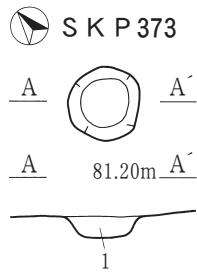
S K P 364

A  A'
A 81.30m A'

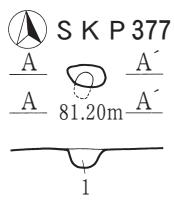
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性中
地山土塊 (ϕ 1~5mm) 5%混入



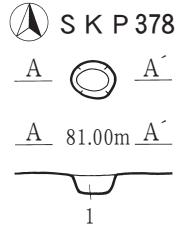
第65図 柱穴様ピット（時代不明3）



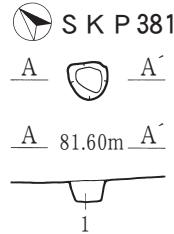
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性中
地山土塊 ($\phi 1\sim 3mm$) 3%混入



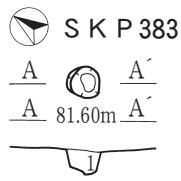
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性中
地山土塊 ($\phi 1mm$) 1%混入



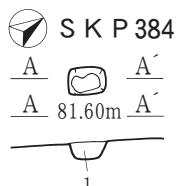
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性中
地山土塊 ($\phi 1mm$) 1%混入



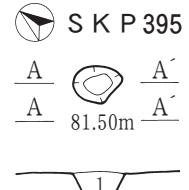
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



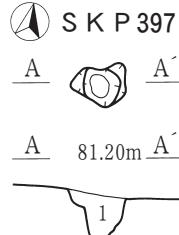
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



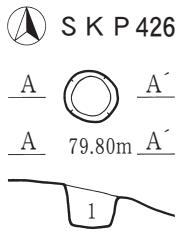
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱



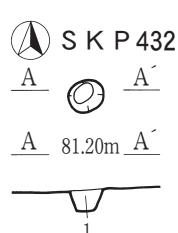
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



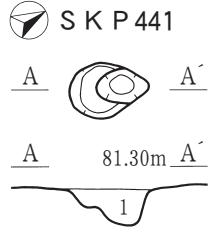
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱
地山土塊5%混入



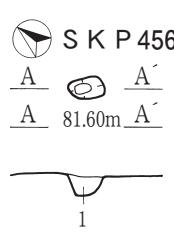
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり強 粘性なし
地山土塊 ($\phi 1\sim 3mm$)
1%未満混入



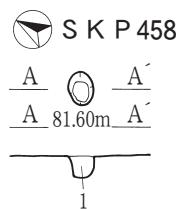
1 黒色土 (10YR2/2)
しまり中 粘性中
地山土塊 ($\phi 1mm$) 1%混入



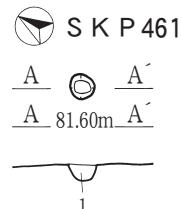
1 黒色土 (10YR2/1)
しまり中 粘性弱
地山土塊 ($\phi 1mm$) 3%混入



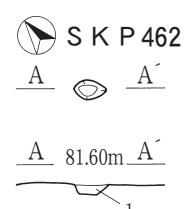
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



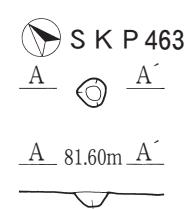
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



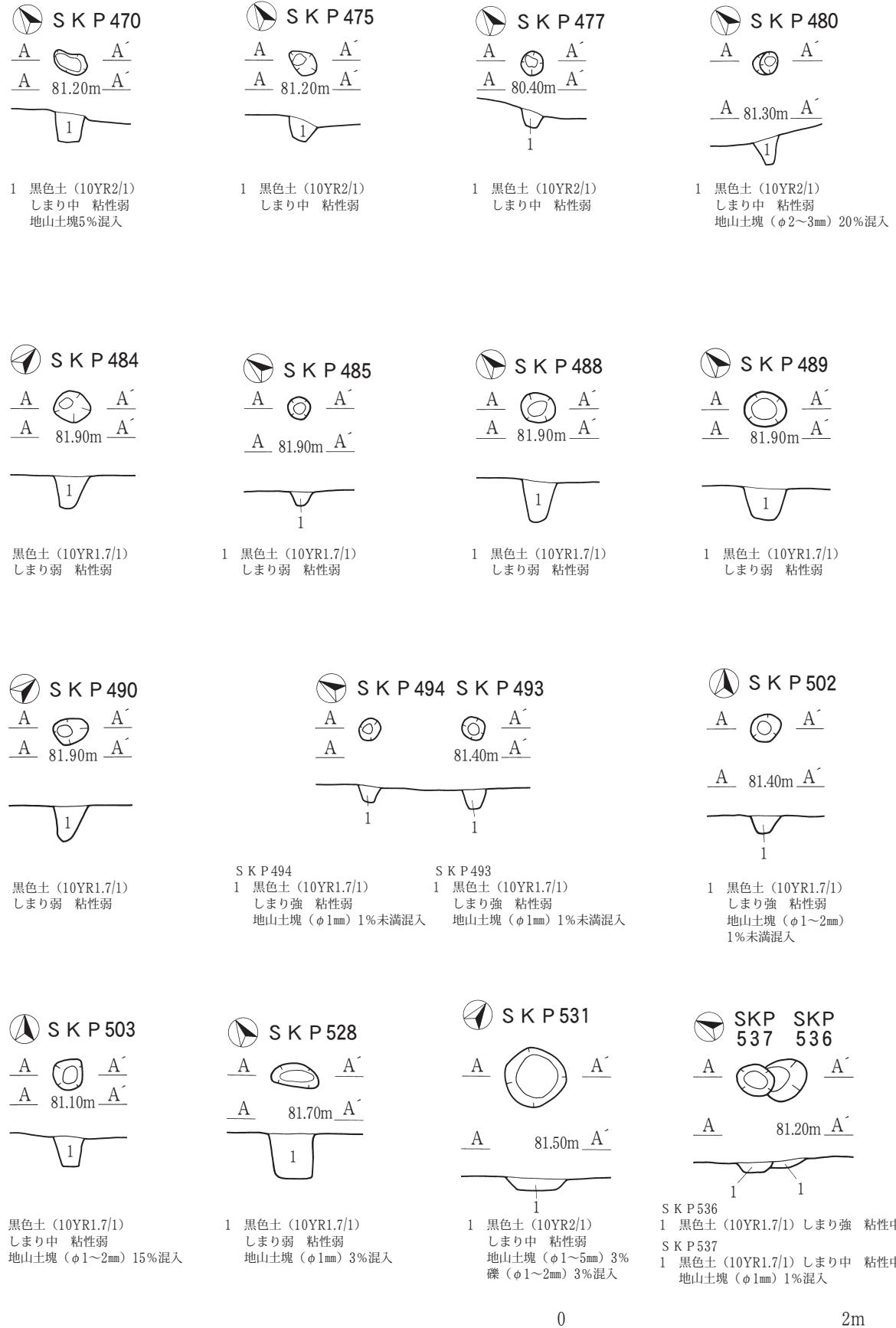
1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱
地山土塊 ($\phi 3\sim 5mm$) 15%混入



1 黒色土 (10YR1.7/1)
しまり弱 粘性弱



第66図 柱穴様ピット（時代不明4）



第67図 柱穴様ピット（時代不明5）

第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野崎遺跡は、秋田県大館市商人留字野崎に所在する。今回の発掘調査では、縄文時代と平安時代の竪穴住居跡及び中世の竪穴状遺構がそれぞれ検出されている。

今回の分析調査では、遺構の年代観、遺構利用状況、基本層序・遺構埋没の時期に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、リン・カルシウム分析、テフラ分析を実施する。以下、分析項目ごとに結果を述べる。

第1節 放射性炭素年代測定、樹種同定（図版21）

1 目的および試料

各遺構より検出された炭化材を対象として、各遺構の実年代を得ることにより、遺構群を交互に比較し、序列するための試料を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。また、炭化材の樹種も併せて同定し、木材利用状況に関する試料を得る。

分析試料は、SKI13、SI143、SI03、SI01から出土した炭化材5点（試料番号1-5）である。試料の詳細は、結果と合わせて表に示す。

2 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分) 850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸(HOX-?)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした

年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIO CARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler et al. (1998)、Richter et al. (2006) を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表29に、暦年較正結果を表30に示す。各炭化材の年代値は、SKI13の材西1（試料番号1）が 530 ± 30 BP、同じくSKI13のカヤ東側（試料番号2）が 530 ± 30 BP、SI143のP3（試料番号3）が $8,460 \pm 50$ BP、SI03のカマド袖（試料番号4）が $1,230 \pm 30$ BP、SI01のカマド下粘土床（試料番号5）が $1,230 \pm 40$ BPの値を示す。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、試料番号1はcalAD1,333–1,433、試料番号2はcalAD1,333–1,433、試料番号3はcalBC 7,576–7,516、試料番号4はcalAD 711–863、試料番号5はcalAD 716–である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表29に合わせて示す。試料番号3は、環孔材の道管配列を有する広葉樹材であることは観察できたが、小片で保存状態が悪いために電子顕微鏡を用いた組織の観察ができず、種類の同定には至らなかった。その他の炭化材は、針葉樹1種類(ヒノキ科)と広葉樹1種類(クリ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1–10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3–4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状

に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

4 考察

各遺構の年代観についてみると、中世とされる SKI13 出土炭化材の 2 試料はいずれも約 500 年前、縄文時代とされる SI143 出土炭化材は約 8,500 年前、平安時代とされる SI03 出土炭化材は約 1,200 年前、平安時代とされる SI01 出土炭化材は約 1,200 年前の年代値を示す。よって、今回の測定結果から見る限り各家屋は、約 8,500 年前、約 1,200 年前、約 500 年前の 3 つの時期に区分される。

縄文時代の竪穴住居跡から出土した炭化材は、環孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、種類の同定には至らなかった。縄文時代の建築部材で、環孔材となる広葉樹はクリが最も一般的であり、縄文時代前期の蟹子沢遺跡、池内遺跡、兵ヶ沢遺跡、狐森遺跡、縄文中期の小田IV 遺跡および小田V 遺跡、堀量遺跡、小袋岱遺跡、盤若台遺跡、金仏遺跡、古館堤頭II 遺跡、繫沢遺跡、茱萸ノ木遺跡、縄文後期～晩期の戸平川遺跡、深渡遺跡、桐内 C 遺跡、姫ヶ岱 D 遺跡、柏子所 II 遺跡、中屋敷 II 遺跡、茨野遺跡、十二遺跡で確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994, 1996a, 1996b, 1996c, 2000a, 2000b, 2004a, 2004b, 2005; 鈴木・植田, 1999; 株式会社古環境研究所, 1999a, 1999b, 2000a, 2000b, 2002, 2005; 植田, 2001, 2004a, 2004b, 2005; パレオ・ラボ株式会社, 2002）。これらの多くの遺跡では、クリが主体となっており、縄文時代の建築部材にクリが多用されていた様子がうかがえる。クリ以外の環孔材では、縄文時代前期でコナラ節、ケンポナシ属、縄文時代中期でコナラ節、ヤマグワ、キハダ、トネリコ属、ケヤキ、ニレ属、縄文時代後期～晩期でキハダ、ニレ属、ケヤキ、ヤマグワが確認された例がある。

一方、中世、平安時代の竪穴住居跡から出土した炭化材は、SKI13 でクリとヒノキ科、SI03 でクリ、SI01 でヒノキ科が認められ、クリとヒノキ科が利用されていたことが推定される。ヒノキ科は、本地域ではヒノキアスナロが一般的であり、ヒノキやサワラが分布していないことから、アスナロに由来する可能性がある。ヒノキ科は、全般的に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。一方、クリは、重硬で強度および耐朽性に優れた材質を有する。

秋田県内の調査例をみると、クリは西野遺跡、岱III 遺跡、からむし岱 I 遺跡、向様田 E 遺跡、物見坂III 遺跡等で建築部材に確認されており、比較的利用例が多い（株式会社古環境研究所, 2001, 2003; 植田, 2002, 2003a, 2003b）。一方、ヒノキ科は、これまで県内の竪穴住居跡から出土した例がほとんどない。クリとヒノキ科の加工性や材質が異なることを考慮すれば、クリとヒノキ科とで利用箇所・部位等が異なった可能性もあり、今後出土状況も含めて検討することが望まれる。

第 29 表 放射性炭素年代測定・樹種同定結果

試料番号	遺構名	位置	時代	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
1	SKI 13	材西 1	室町時代	ヒノキ科	530 ± 30	-28.01 ± 0.90	580 ± 30	9462-1	IAAA-61957
2	SKI 13	カヤ東側	室町時代	クリ	530 ± 30	-24.85 ± 0.87	530 ± 30	9462-2	IAAA-61958
3	S I 143	P 3	縄文時代	広葉樹（環孔材）	$8,460 \pm 50$	-26.77 ± 0.94	$8,490 \pm 50$	9462-3	IAAA-61959
4	S I 03	カマド袖	平安時代	クリ	$1,230 \pm 30$	-29.00 ± 0.86	$1,300 \pm 30$	9462-4	IAAA-61960
5	S I 01	カマド下粘土床	平安時代	ヒノキ科	$1,230 \pm 40$	-22.72 ± 0.82	$1,190 \pm 30$	9462-5	IAAA-61961

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) BP 年代値は、1,950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。

第30表 历年較正結果

試料番号	遺構名	位置	補正年代(BP)	历年較正年代(cal)						相対比	Code No.	
1	SK I 13	材西1	529 ± 33	σ	cal AD 1,333	-	cal AD 1,336	cal BP	617	-	614	0.044
				2σ	cal AD 1,398	-	cal AD 1,433	cal BP	552	-	517	0.956
2	SK I 13	カヤ東側	530 ± 32	σ	cal AD 1,319	-	cal AD 1,352	cal BP	631	-	598	0.221
				2σ	cal AD 1,390	-	cal AD 1,441	cal BP	560	-	509	0.779
3	SI 143	P 3	$8,461 \pm 47$	σ	cal BC 7,576	-	cal BC 7,516	cal BP	9,526	-	9,466	1.000
				2σ	cal BC 7,589	-	cal BC 7,465	cal BP	9,539	-	9,415	1.000
4	SI 03	カマド袖	$1,232 \pm 32$	σ	cal AD 711	-	cal AD 746	cal BP	1,239	-	1,204	0.328
				2σ	cal AD 766	-	cal AD 784	cal BP	1,184	-	1,166	0.165
5	SI 01	カマド下 粘土床	$1,228 \pm 35$	σ	cal AD 786	-	cal AD 826	cal BP	1,164	-	1,124	0.335
				2σ	cal AD 840	-	cal AD 863	cal BP	1,110	-	1,087	0.172
				σ	cal AD 688	-	cal AD 754	cal BP	1,262	-	1,196	0.349
				2σ	cal AD 758	-	cal AD 881	cal BP	1,192	-	1,069	0.651
				σ	cal AD 716	-	cal AD 744	cal BP	1,234	-	1,206	0.242
				2σ	cal AD 768	-	cal AD 829	cal BP	1,182	-	1,121	0.526
				σ	cal AD 837	-	cal AD 867	cal BP	1,113	-	1,083	0.231
				2σ	cal AD 688	-	cal AD 754	cal BP	1,262	-	1,196	0.311
				σ	cal AD 758	-	cal AD 885	cal BP	1,192	-	1,065	0.689

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、歴年較正曲線や歴年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第2節 リン・カルシウム分析

1 目的および試料

土器埋設遺構の内容物に関する情報を得ることを目的とし、リン酸、カルシウム分析を行う。

分析に用いる試料は、SR31の土器内埋土(試料番号6)、土器外地山のV層サンプル(試料番号7)、およびSR45の土器内埋土(試料番号8)、土器外地山のV層サンプル(試料番号9)の、計4点である。

2 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光光度法でそれぞれ行う(土壤標準分析・測定法委員会編, 1986)。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求めること。

3 結果

結果を表31に示す。SR31のリン酸含量は土器内埋土(試料番号6)で1.80P₂O₅mg/g、土器外地山(試料番号7)で1.52P₂O₅mg/g、SR45のリン酸含量は土器内埋土(試料番号8)で1.95P₂O₅mg/g、土器外地山(試料番号9)で1.34P₂O₅mg/gであり、両遺構とも地山試料と比較して僅かにリン酸が多く含まれている。

ただし、カルシウム含量は両遺構ともに地山試料と比較して土器内埋土では少ない傾向にある。

4 考察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが (Bowen,1983; Bolt・Bruggenwert,1980; 川崎ほか,1991; 天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土などの既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ (川崎ほか,1991) という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える場合が多い。

今回調査を実施した土器内埋土のリン酸含量は $1.34\text{--}1.95\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ であり、いずれも天然賦存量の範囲内にあることから、人為的な影響によりリン酸が富化された可能性は低いと思われる。なお、両遺構とも土器内埋土においてリン酸が若干多い傾向が見られているが、この理由としては土器外地山と比して土器内埋土の方が暗色化していることより、土壤有機物(植物遺体等)が多いことが原因と考えられる。

したがって、今回の分析結果から見る限り、遺構の内容物に関する情報を得ることは難しく、今後他の分析によって検証していくことが望まれる。

第31表 土壤理化学分析結果

試料番号	遺構名	層準	土性	土色	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)	備考
6	S R 31	埋土	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	1.80	2.24	
7		V層	SCL	2.5Y4/3 オリーブ褐	1.52	2.35	
8	S R 45	埋土	SL	2.5Y3/1 黒褐	1.95	2.17	
9		V層	SC	2.5Y4/6 オリーブ褐	1.34	2.91	

注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

(2) 土性: 土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。

SL…砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

SCL…砂質埴壤土(粘土15~25%、シルト0~20%、砂5~85%)

SC…砂質埴土(粘土25~45%、シルト0~20%、砂55~75%)

第3節 テフラ分析(図版21)

1 目的および試料

テフラの起源および降下年代を得ることにより、本遺跡の基本層序や遺構埋没の時期に関する情報を得ることを目的として、テフラ分析を実施する。

分析に用いる試料は、調査区中央付近よりやや南側で検出された溝跡のSD130の埋積層から採取された試料番号10、調査区南西端で作成された土層断面より採取された試料番号11の、計2点である。

なお、試料番号10は、黒色を呈する砂質の土壤いわゆる黒ボク土である。一方、試料番号11は、最大径約8mmの細礫を含むシルト混じりの極粗粒~粗粒砂であり、砂の主体は黄白色を呈する軽石粒であることが、肉眼でも確認できる。

2 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察

する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

3 結果

分析結果を表32に示す。スコリアはいずれの試料にも認められない。火山ガラスは、いずれの試料にも極めて微量認められた。試料番号10には無色透明の塊状の軽石型と無色透明のバブル型が認められ、試料番号11には無色透明の塊状の軽石型のみであった。軽石は、試料番号10に少量、試料番号11に多量認められた。軽石の特徴は両試料ともに同様であり、最大径7–8mmで粒径の淘汰は比較的良好、灰白色を呈し、発泡はやや良好～やや不良である。斜長石、斜方輝石および磁鉄鉱の各斑晶を包有するものも認められた。

なお、試料番号10の砂分の主体は、細礫と長石や石英などの鉱物片である。細礫には安山岩、流紋岩、凝灰岩、チャートなどの岩石片が認められた。また、試料番号11にも同様の岩石片からなる細礫が微量含まれている。さらに、いずれの試料にも微細な黒曜石の破碎片が認められた。

4 考察

2点の試料に認められた軽石は、その特徴が同様であることから、同一のテフラに由来すると考えられる。上述した特徴（色調や発泡度および斑晶鉱物など）と野崎遺跡の地理的位置、さらに、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか, 1981, 1984; Arai et al., 1986）、町田・新井, 2003など）および十和田カルデラを給源とするテフラの産状（例えば Hayakawa, 1985による大館付近の軽石の最大径など）との比較から、検出された軽石は、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると考えられる。なお、To-aの特徴として黒曜石の破碎片を伴うことが指摘されている（町田ほか, 1981）が、今回の試料でも黒曜石破碎片が認められていることは、これらの軽石がTo-aに対比することを支持する。

To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火碎流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火碎流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか, 1981）。また、その噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。

小池ほか編（2005）に記載された大館盆地の地形分類図によれば、大館盆地でもTo-aの火碎流（毛馬内火碎流）堆積物は確認されており、米代川左岸に広がる下川原の台地や扇田の台地が、その堆積面とされている。なお、同分類図では、大館市街の載る台地と野崎遺跡も位置する糸迦内の台地は、約1.5万年前に十和田カルデラから噴出した八戸火碎流の堆積面とされている。

今回の分析試料のうち、試料番号10はTo-aの軽石を少量含む黒ボク土であり、To-aの降下堆積物ではない。軽石は、SD130の埋積過程において、周囲より取り込まれたものである可能性が高い。し

たがって、SD130の構築年代とTo-aの降下年代との新旧関係を推定するためには、調査区内におけるTo-aの産状や遺構の掘り込み面などを確認する必要がある。一方、試料番号11は土壤化を受けてはいるが、To-aの降下堆積層であり、その層位は上述した西暦915年を示すとみてよい。

第32表 テフラ分析結果

試料番号	採取地点	注記	スコリア		火山ガラス			軽石			由来するテフラ
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径			
10	SD 130	61013	—	(+)	cl·pm, cl·bw	++	GW·sb ~ sg	7.0			
11	調査区南西端土層	調査区南西端土層	—	(+)	cl·pm	+++	GW·sb ~ sg	8.0	To-a		

凡例 — : 含まれない、(+) : きわめて微量、+ : 微量、++ : 少量、+++ : 中量、++++ : 多量。

B: 黒色。G: 灰色。Br: 褐色。GB: 灰黒色。GBr: 灰褐色。R: 赤色。GW: 白色。

g: 良好。sg: やや良好。sb: やや不良。b: 不良。最大粒径は mm.

cl: 無色透明。br: 褐色。bw: バブル型。md: 中間型。pm: 軽石型。

引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局 ,p28-36.
- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
- Bowen,H.J.M.,1979, Environmental Chemistry of Elements.[浅見輝男・茅野充男(訳),1983,環境無機化学－元素の循環と生化学－.博友社,297 p.]
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.,1976,SOIL CHEMISTRY.[岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行(訳),1980,土壤の化学,学会出版センター-, 309p.]
- 土壤標準分析・測定法委員会編,1986,土壤標準分析・測定法.博友社,354p.
- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 , 507-592.
- 早川 由紀夫・小山 真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－.火山,43,403-407.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I .木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II .木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III .木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV .木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V .木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 株式会社古環境研究所,1999a,小袋岱遺跡出土の炭化材の樹種同定.「秋田県埋蔵文化財調査報告書第285集 小袋岱遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,131-135.
- 株式会社古環境研究所,1999b,深渡遺跡出土炭化材の樹種同定,「秋田県埋蔵文化財調査報告書第286集 深渡遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,95-97,図版27.
- 株式会社古環境研究所,2000a,桐内C遺跡出土炭化材の樹種同定.「秋田県埋蔵文化財調査報告書第299集 桐内C遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,95-96,図版22-23.
- 株式会社古環境研究所,2000b,炭化材の樹種同定.「秋田県埋蔵文化財調査報告書第300集 姫ヶ岱D遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県

教育委員会,64-65,図版23.

株式会社古環境研究所,2001,樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第314集 倍I遺跡・倍II遺跡・倍III遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,109-110,図版19-20.

株式会社古環境研究所,2002,樹種同定第1次調査。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第333集 金仏遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,247-250.

株式会社古環境研究所,2003,西野遺跡出土炭化材の樹種同定。「秋田県文化財調査報告書第360集 西野遺跡 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII」,秋田県教育委員会,110-112,図版14-15.

株式会社古環境研究所,2005,柏子所II遺跡における樹種同定。「秋田県文化財調査報告書第398集 柏子所II遺跡 一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,43.

川崎 弘・吉田 澄・井上 恒久,1991,土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局,p23-27.

小池 一之・田村 俊和・鎮西 清高・宮城 豊彦編,2005,日本の地形3 東北.東京大学出版会,355p.

町田 洋・新井 房夫,2003,新編火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

町田 洋・新井 房夫・森脇 広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.

町田 洋・新井 房夫・杉原 重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺 直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.

農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.

パレオ・ラボ株式会社,2002,出土炭化材の樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第338集 古館堤頭II遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,161-163,図版63-64.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1994,小田IV遺跡発掘調査炭化材同定分析業務委託報告。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第243集 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVII」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,174-177.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996a,出土した炭化材の樹種。「秋田県文化財調査報告書第261集 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX蟹子沢遺跡」,秋田県教育委員会,74-78,図版31-33.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996b,炭化材の樹種。「秋田県文化財調査報告書第262集 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXI-小田V遺跡-」,秋田県教育委員会,175-178,図版37-38.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996c,茱萸ノ木遺跡から出土した炭化材の樹種。「北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」,二ツ井町教育委員会,109-111.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2000b,戸平川遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定。「秋田県文化財調査報告書第294集 戸平川遺跡東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,214-216.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2000c,自然科学分析。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第296集 兵ヶ沢遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,48-51.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2004a,狐森遺跡の自然科学分析。「秋田県文化財調査報告書第378集 狐森遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,165-167.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2004b,自然科学分析。「千畠町埋蔵文化財報告書第7集 十二遺跡・上飛沢遺跡」,千畠町教育委員会,64-66,図版14.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,放射性炭素年代測定。「秋田県文化財調査報告書第399集 繫沢遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,64.

第5章 自然科学的分析

ペドロジスト懇談会編,1984,土壤調査ハンドブック,博友社,156p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

鈴木 三男・植田 弥生,1999,秋田県池内遺跡出土木材の樹種。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第282集 池内遺跡遺物・資料編」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,730-749.

植田 弥生,2002,炭化材の樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第339集 からむし岱Ⅰ遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,112-117,図版29-32.

植田 弥生,2001,盤若台遺跡出土炭化材の樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第319集 盤若台遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,174-178.

植田 弥生,2003a,出土炭化材の樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第347集 向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,214-216,図版39-40.

植田 弥生,2003b,炭化材の樹種同定。「秋田県埋蔵文化財調査報告書第354集 物見坂Ⅲ遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,76-77,図版14.

植田 弥生,2004,樹種同定。「秋田県文化財調査報告書第367集 堀量遺跡 一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」,秋田県教育委員会,174-176,図版41-43.

植田 弥生,2005,中屋敷Ⅱ遺跡出土木材の樹種同定。「秋田県文化財調査報告書第384集 中屋敷Ⅱ遺跡」,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,308.

植田 弥生,2004b,炭化材の樹種同定(平成14年度調査分)。「茨野遺跡」,雄物川町教育委員会,167-170,図版32-35.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

註:本章で扱っている遺構の中で、整理作業中に遺構記号、遺構番号が変更になり、試料検出時とは異なった記号・番号になったものについては、編者の責任で変更後の遺構記号、遺構番号に置き換えた。

第6章 まとめ

今回の発掘調査は日本海沿岸東北自動車道大館北I.C～小坂J.C.T間建設事業に伴い、予想される遺跡範囲の南東部を調査した。調査の結果、南西部の第V層面を主に、縄文時代早期から後期の遺構・遺物を、中央部から北東部にかけて第III層面を主に平安時代の遺構・遺物を検出。中央部からは室町時代の遺構を検出した。約8,500年前の縄文時代早期の住居跡からはじまり、古代、中世そして現代まで長期にわたりこの舌状台地の上に人が住み続けていたのである。以下にこれらの遺構及び遺物について検討を加え、遺跡の性格を考察したい。

第1節 縄文時代

今回の調査で、縄文時代の遺構は竪穴住居跡1軒、フラスコ状土坑2基、土器埋設遺構2基、石器製作跡1か所、土坑8基、焼土遺構2基である。これらの遺構やその周辺からは、縄文早期中葉、前期後葉、中期中葉、後期前葉の土器が出土し、縄文時代を通して断続的に遺跡が営まれたことが分かった。以下は主として縄文早期・前期を中心に述べるものである。

野崎遺跡の縄文早期の土器について：縄文早期の土器は、土器型式を特定できるものが少ないが、あえて挙げるとすれば、(25図5)は物見台式土器が近いのではないかと思われる。それ以外の土器は粗製土器であると思われるので共伴する土器とともに検討しなければならないが、(25図3・4)を除いた土器は出土区域が近いことから関連があるものと想像する。

S I 143 竪穴住居跡と S Q 44 石器製作跡：覆土の観察から、縄文前期より古い住居跡と予想されたS I 143は、年代測定で縄文時代早期という結果であった。秋田県内の縄文早期の竪穴住居跡は、能代市寒川I遺跡、大館市根下戸道下遺跡が知られているが、野崎遺跡の南に隣接し同年度に発掘調査が行われた坂下II遺跡でも見つかっている。これらの発掘調査結果から、早期の竪穴住居跡は円形または楕円形で中央床面に楕円形の窪みがある構造であることが知られてきたが、S I 143は床面に4基の柱穴が認められる隅丸方形でこれまで見つかったものと違う様相を呈している。このS I 143は、床面全体から剥片が出土したことから石器製作に使用された竪穴住居跡と判断した。本遺跡においては、それ以外にもS I 143の南14mのところに、S Q 44 石器製作跡が見つかっていることから、S I 143とS Q 44を比較し、相互関係について検証する必要があるので以下に述べる。

S I 143とS Q 44のそれぞれでもっとも多く出土した石器の母岩は、褐灰色(10YR 4/1前後)の頁岩であり、S I 143出土の剥片とS Q 44出土の剥片は同質であることがわかった。このことからS Q 44の時期はS I 143と同時期である可能性がある。

それをふまえて両遺構の石器剥片の大きさ等を比較すると、S Q 44には、スクレイパーなどの製品とともに集中して見つかった5～8cm程の大きい剥片のグループと、約4mにわたって散乱して出土した1cm以下の碎片のグループがあるのに対し、S I 143は床面全体から1cmから6cm程度の剥片が満遍なく見つかっており、大きさでグループに分けることは出来なかった。S I 143・S Q 44両石器製作跡は、剥片の大きさから最初の粗割段階の作業によるものではない。石器製作の工程が進むにつれて、剥片は小さくなっていくことを考えると、S I 143の剥片は素材剥片を取り出す段階に出たもの、

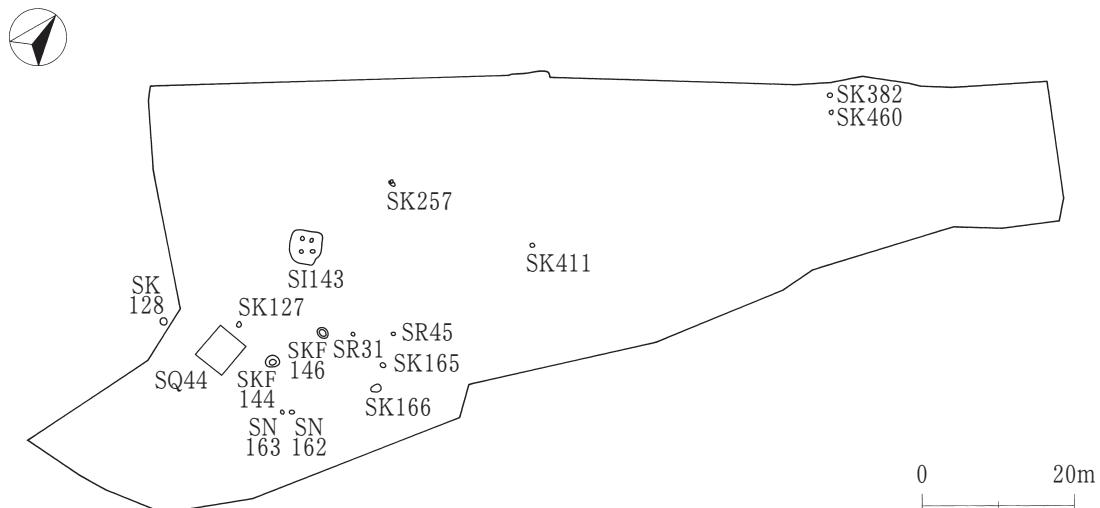
S Q44の1cm以下の碎片は石器製作の最終段階の調整で出たものである。また、S Q44の製品とともに見つかった大きい剥片のグループは、最後の調整を受けていない素材剥片であると考えられる。

この2つの石器製作跡が同時期に存在していたと仮定するならば、本遺跡の石器製作はその段階に応じて場所を変えて作業していたものと考えられる。

縄文前期の野崎遺跡について：本遺跡の台地縁辺部南側で、円筒下層d式期のフラスコ状土坑（SK F144）と土器埋設遺構（SR 31・45）が集中して見つかった。それらに隣接して見つかったSKF 146 フラスコ状土坑も、同時期と推定する。

底面から遺物が多く出土したSKF 144と、その近くで幼児の土器棺の可能性を疑われる土器埋設遺構が見つかったことから、当初この周辺は墓域であり、SKF 144は墓に転用されたものと推測した。しかし、SKF 144の遺物は副葬品として正置されておらず、特に3個体の土器がそれぞれ底面全体に散乱していたことから、SKF 144の遺物は遺構廃絶時に廃棄されたものと判断した。

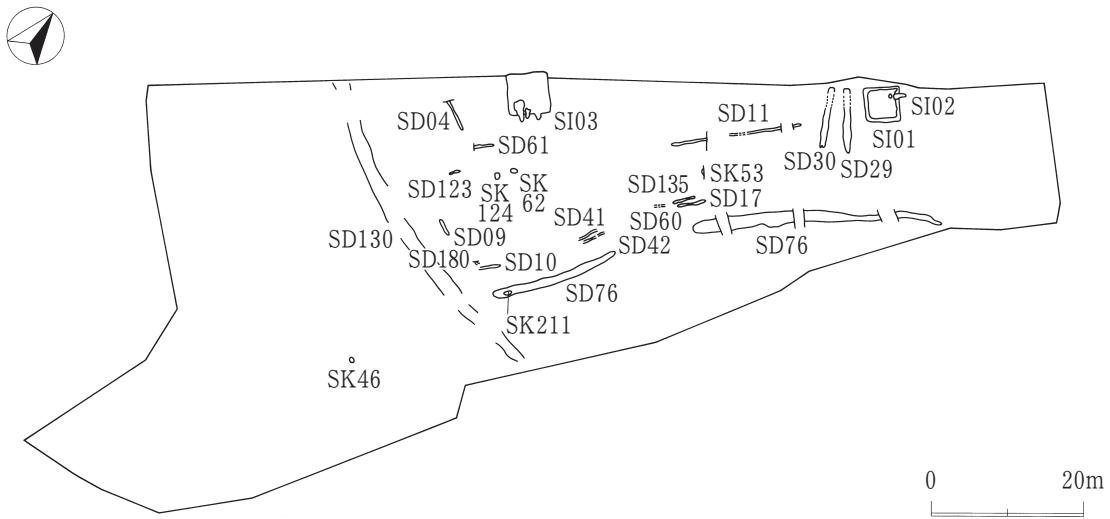
秋田県の縄文前期集落の構成は、大館市池内遺跡でみられるように、台地縁辺部に平行して列状に竪穴住居跡群、掘立柱建物跡群、フラスコ状土坑群等が並び、そしてその他の台地平坦面の多くを空閑地とする遺構配置が知られている。本遺跡の遺構の性格は不明な点もあるが、台地縁辺部に集中するという点において一致しており、これまで考えられてきた円筒下層期の集落の様相をさらに裏付ける一例になるものである。



第68図 縄文時代の遺構配置図

第2節 平安時代

平安時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、道路跡1条、溝跡15条、土坑5基を検出した。調査区範囲を北西方面から、南東の斜面を下り、円弧を描きながら横断する大きな溝跡を境に南には遺構は検出されず、平安時代の遺構の大部分が溝の北側にある。この溝から南東側はすぐに斜面になっており、南西側も若干の平坦地部分が延びてはいるが、埋没沢があり坂下II遺跡へ下る斜面となっている。調査区北側には、平坦地が延びており、現在も畑として広く使用されている。今回の調査では3軒の住居跡しか確認できなかったのだが、この地理的特徴と遺構の分布状況から、本調査区の北側に集落が広



第69図 平安時代の遺構配置図

がっていると想像される。今回の調査で明らかにできたのは野崎遺跡の集落の南東側のはずれ部分、集落への入り口部分だったと言える。また、時期特定に関する遺物や遺構の切り合いが乏しく、前後関係が不明な遺構が多い。しかし全体の印象からは、そのほとんどが十和田a火山灰降下前後のほぼ同時期にあったように思われる。

竪穴住居跡：平安時代の竪穴住居跡は基本的には2軒しかなく（S I 01はS I 02の拡張住居のため）、互いの切り合いもない。S I 01（02含む）は拡張による建て替えが行われ、S I 03はカマドの作り直しが行われ、2つのカマドが並ぶことが大きな特徴であった。共通点は、主軸方向が、北東－南西方向を向いており、東西南北に四隅がくることである。これは、近隣の坂下II遺跡、狼穴IV遺跡と共に通している方向であり、大館のこの地域の住民は異なる集落においても、住居の方向性は統一していたようである。これは、住居の方向性に対する造営基準が何か設けられていたのか、もしくは、風などの自然への対策に有効な方向なのかもしれない。S I 01とS I 03は、両者のカマドから採取した炭化材による放射性炭素年代測定の結果もB P 1200 ± 30～40とほぼ同時期である。埋め戻されたのは両者とも十和田a火山灰降下後に人為的に行われた様子で堆積土も似ている。カマドの作り方も使用している粘土や石の質や配置が同じであり、カマドを作り替えた後の火床部分に粘土を盛り上げる方法も酷似している。すぐ近隣にある坂下II遺跡で似た作り方のカマドをもつ住居は1軒しかなく、他17軒とは異なる印象を受ける。このことは、野崎に住んでいた人々の何らかの特徴となるものかもしれない。一方、両者のカマドの方向は異なっており、S I 01は北東壁に、S I 03は南東壁に設置されている。他の遺跡ではカマドの方向の違いで時期を分けているところも見受けられるが、野崎に関しては、ほぼ同時期である。住居の方向と違いカマド位置には規則性は見受けられない。S I 03では、黒色土の中に住居への入り口と思われるスロープを見つけることができた。

道路跡：野崎台地上面に登るSD76は、その堅くしまった黒色土の堆積土から道路跡と判断した。斜面沿いに緩やかに登るこの道は、年代決定が困難であった。北東部分と南西部分は地山土を掘り込んである溝状遺構だが、中央部や一部の地山面が急勾配な箇所では、黒色土の中にある椀形の断面を

もつ踏み固められしまった黒色土の状況で検出された。S D 130と交差するL P 53グリッド地点の土層から十和田a火山灰層より下面にあることがわかり平安時代からあるものと判断したのだが、この土は調査が始まる前にあった現代の道の土と酷似しており、当初は現代のものと思われた。表面から寛永通宝や陶磁器も出土しており、少なくとも江戸時代まで長期に渡って使い続けられたのだろう。現在も上の集落から道を下って平地に出ると前には広く平地の水田が広がっている。平安時代からこの光景は変わっていないのではないだろうか。

溝跡：野崎遺跡の南西方向には斜面を下って徒歩で5分もかかる所に坂下II遺跡がある。坂下II遺跡と野崎遺跡の間を遮るように大溝S D130が横たわり、野崎への侵入を妨げている。S D130は東斜面を下る部分まで掘られており野崎集落の境界線のように見える。防御には浅く狭すぎるため区画用と思われる。他の溝状遺構は用途不明のS D29・30を除くほとんどが斜面に沿うように平行に掘られている。これらは、薄く細長い形状から集落を囲み斜面から集落を隠す板塀であったと考えられる。

出土遺物：出土遺物は少なく、そのほとんどが破片であった。出土したのは土器、鉄器、鉄滓である。土器はほとんどが土師器の甕で、10世紀中葉のものである。大館ではよく見られる砂底が多く、そのほとんどが非口クロ整形で粘土紐巻き上げ痕を残しており、内面と口縁部はナデ、外面はケズリか無調整のもので、砂が多く混ぜられ歪みも激しく荒々しい作りのものばかりである。壺は1点しか出土していない。須恵器は甕の胴部破片が少量だが出土している。ほとんどが内面はヨコナデ、外面はタタキで作られている。鉄器は刀子がS I 01から出土している。また、遺構外から椀型鉄滓が出土しており、調査区内にはなかったが周辺に製鉄遺構があることが予想される。

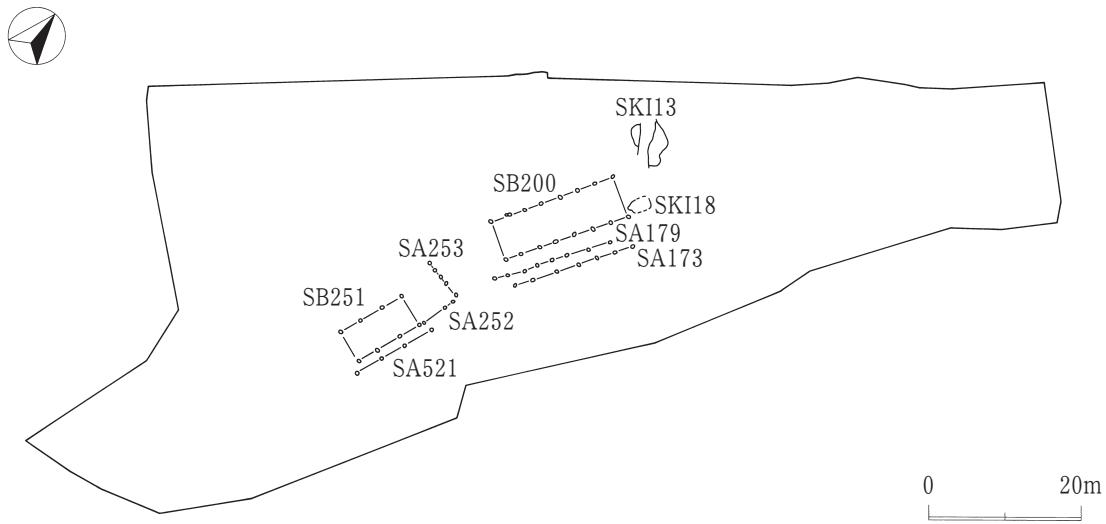
第3節 中世

中世の遺構は、掘立柱建物跡2棟、柱穴列5列、竪穴状遺構2基を検出した。調査区中央部の斜面際に集中しており、焼失建物跡であるSK I 13の炭化材の放射性炭素年代測定の結果や平安の遺構との差異、切り合い等から総合的に見て約500年前の室町時代のものと判断した。遺物は出土しておらず、堆積土は平安のものとほとんど変わらないため判断の材料にはできず、確証があるのはSK I 13のみである。しかし、焼失建物跡の存在はこの時期にも人が住み続けていた証拠であり、この野崎の台地の性格を表す証である。

掘立柱建物跡と柱穴列跡：斜面際に2棟検出した。2棟が同時にあったものは厳密には不明だが、SB 200では規模が約17m × 5.5m、SB 251は9.5m × 5mと比較的大きな建物である。両者の建物方位はややずれているのだが、これはすぐ東側に斜面の際があり、共に方位ではなくこの斜面の際に沿って建てられ、共に斜面側に板塀を建てていたと考えられる。この2棟の中間に、平安時代の集落を区画する大溝S D 130が横切っており、その中にこの2棟を隔てるよう板塀が建てられている。また、この時代にも使用されていたであろう道跡SD 76もちょうどこの地点で登りきり、集落への入り口であったことを窺わせる。周囲全体から見ると野崎の台地上に広がる平坦面の中では南端の位置であり、南東に広がる低地の平原を見渡せる位置である。

竪穴状遺構：調査区中央部に2基が軸方向は異なるが、並んでいる。SK I 13は焼失家屋で、炭化

材が多く残り土葺き屋根であったことが窺える建物である。約4.2m四方という大きさからカマドこそ見られないが住居であったように思える。対角が東西南北を向くのは変わらないが、平安時代の住居に比べると反時計回りに20度近く傾いている。逆にSKI13の南東4mにある竪穴状遺構SKI18は入り口の方向こそ違うが、各壁の軸方向はSKI13とほぼ平行である。これは隣接する掘立柱建物跡SB200とも揃っており、方角ではなく斜面の縁に合わせた軸方向なのである。SKI18は規模が小さく、床面に焼成面があることから何かしらの小屋であろうと考えられる。両者とも当時の遺物はなく人為的に埋め戻されているため用途は不明確である。



第70図 中世の遺構配置図

本遺跡は標高約80mの舌状台地の南端に位置する。野崎台地の上に立ち東を臨むと下に水田が広がり、その向こうにはあまり高くない獅子ヶ森の丘陵の山々が連なり、秋には紅葉が美しい。第一印象で住みやすそうな立地である。北に向かうと青森県八甲田山へとつながる深い森と山々が続いており、南には大館盆地が広がっていく。西には下内川が、東には乱川が流れている。今回の調査区は南端部分だけのため遺構、遺物とも少なく集落としての性格をつかむにはいたらなかった。しかし、数こそ少ないが、出土した遺構は縄文時代早期の住居にはじまり、縄文時代中期、後期、平安時代、室町時代までのバラエティに富んだものとなった。江戸時代以降は現在まで畠として利用されていたことを考えると、この台地は8,500年もの長期にわたり人が利用し続けたものと考えられる。集落としては大きくはないことが予想されるが、大館の地で長きに渡り人が生活し続けた場として、その生活の変遷を垣間見て想像することができる遺構群であった。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 『寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第167集 1988(昭和63)年
- 秋田県教育委員会 『根下戸道下遺跡』 秋田県文化財調査報告書第297集 2000(平成12)年
- 秋田県教育委員会 『池内遺跡』 秋田県文化財調査報告書第282集 2001(平成11)年
- 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センターレポート25』 2007(平成19)年

第6章 まとめ

- 小島 朋夏 小林 克 『第1回研究集会基礎資料集列島における縄文時代集落の諸様相』 2001（平成11）年
縄文時代文化研究会
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県北版）』 2006（平成18）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『根下戸 I・II・III遺跡』 秋田県文化財調査報告書第330集 2001（平成13）年
- 秋田県教育委員会 『狼穴IV遺跡』 秋田県文化財調査報告書第391集 2005（平成17）年
- 秋田県教育委員会 『田ノ沢山遺跡・谷地中遺跡』 秋田県文化財調査報告書第404集 2005（平成17）年
- 大館市史編纂委員会 『大館市史 第一巻』 1979（昭和54）年
- 大館市史編纂委員会 『大館の歴史』 1992（平成4）年



野崎遺跡全景（東上空→）



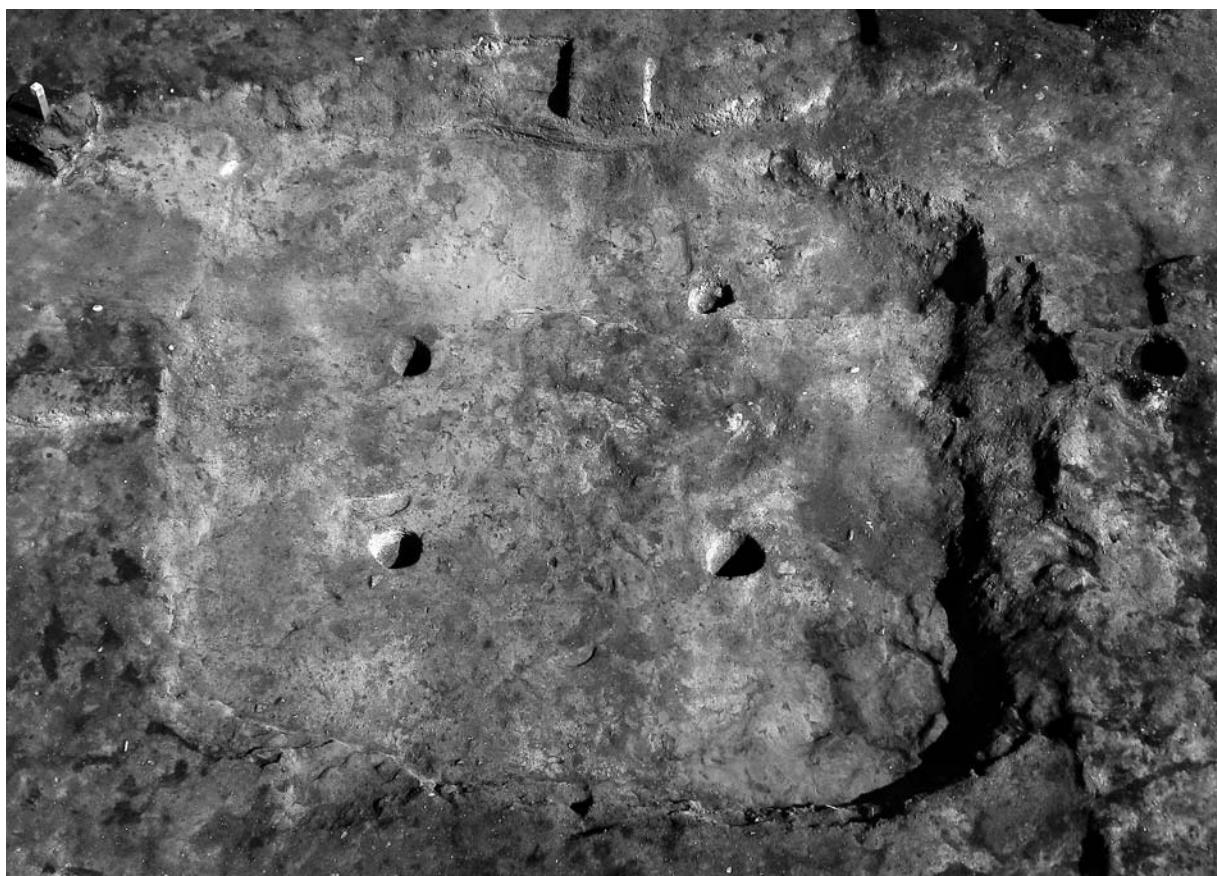
調査区近景（南西→）



調査前風景（北→）



基本土層（調査区南西端E-E' 北東→）



S I 143完掘（南西→）



S I 143剥片出土状況（南東→）



S I 143石器出土状況



S K F 144遺物出土狀況（北→）



S K F 146土層斷面（北→）



S R 31 (南→)



S R 45 (南→)



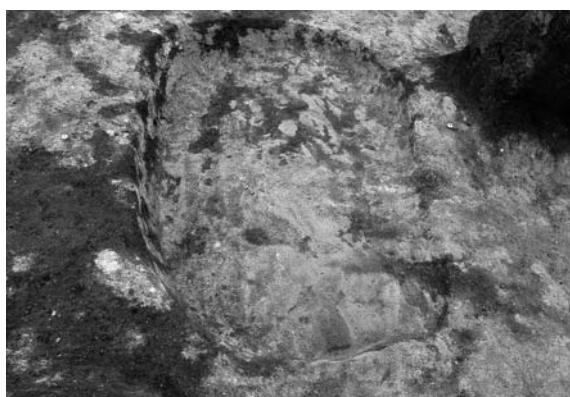
S Q44石器出土狀況 (南→)



S K 127完掘 (西→)



S K 128土層斷面 (西→)



S K 166完掘 (南→)



S K 411土層斷面 (北西→)



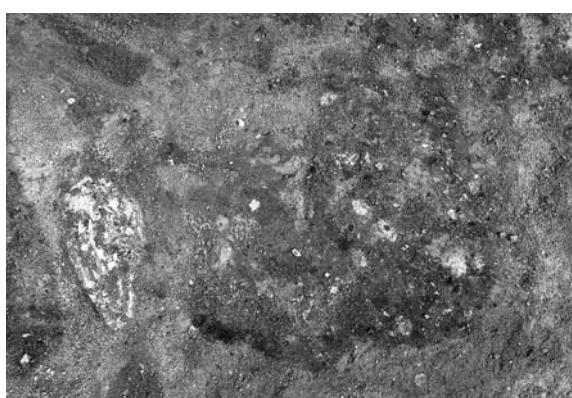
S I 01・02完掘（南西→）



S I 01確認状況（南東→）



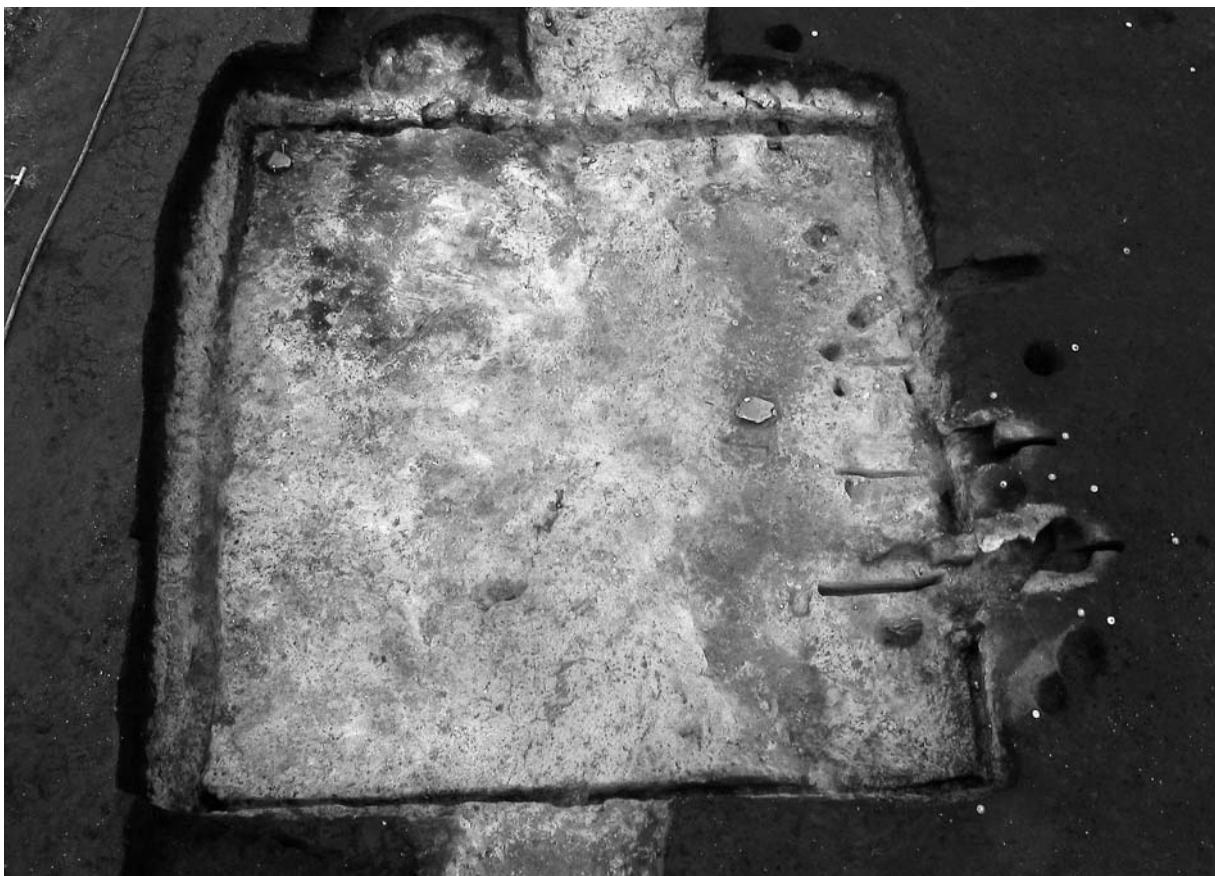
S I 01カマド残存状況（南西→）



S I 02カマド確認状況（南西→）



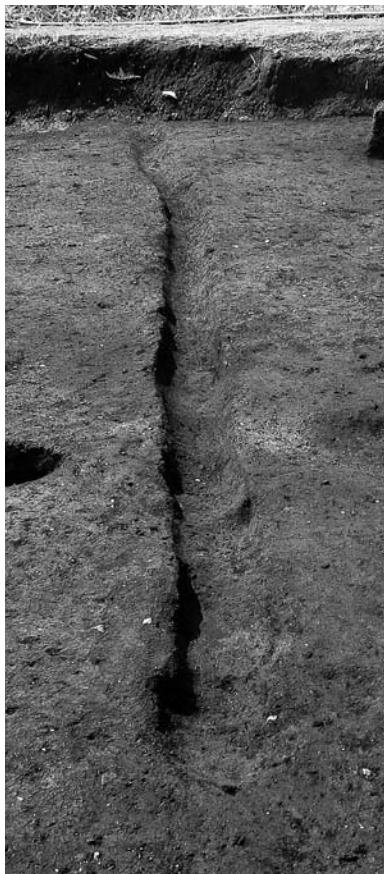
S I 01・02カマド位置関係（北→）



S I 03完掘（南西→）



S I 03カマド残存状況（北西→）



S D 04完掘（東→）



S D 41・42完掘（北東→）



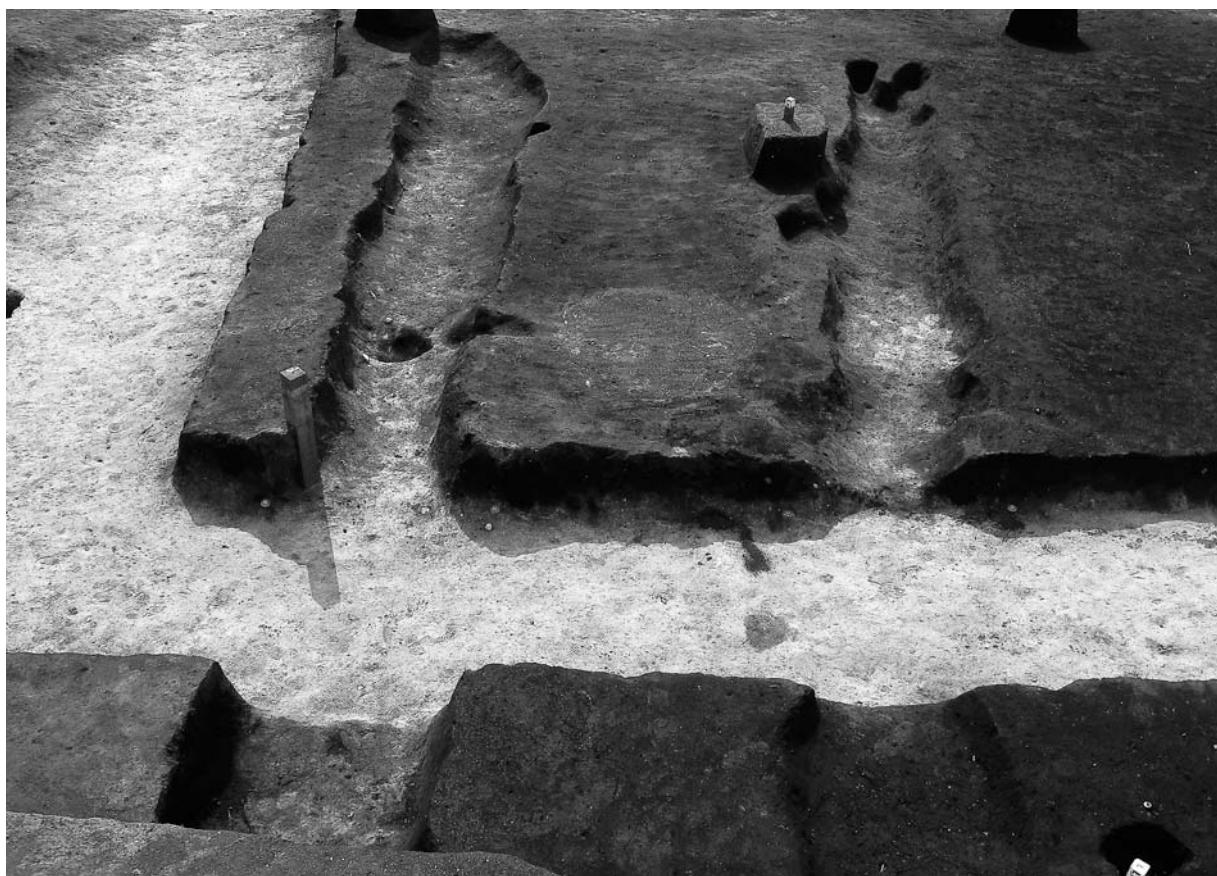
S D 09確認（南→）



S D 10完掘（南西→）



S D 123完掘（南→）



S D 29・30完堀（北西→）



S D 29遺物出土状況（南東→）



S D 11完掘（南西→）



S D 130完掘（北西→）



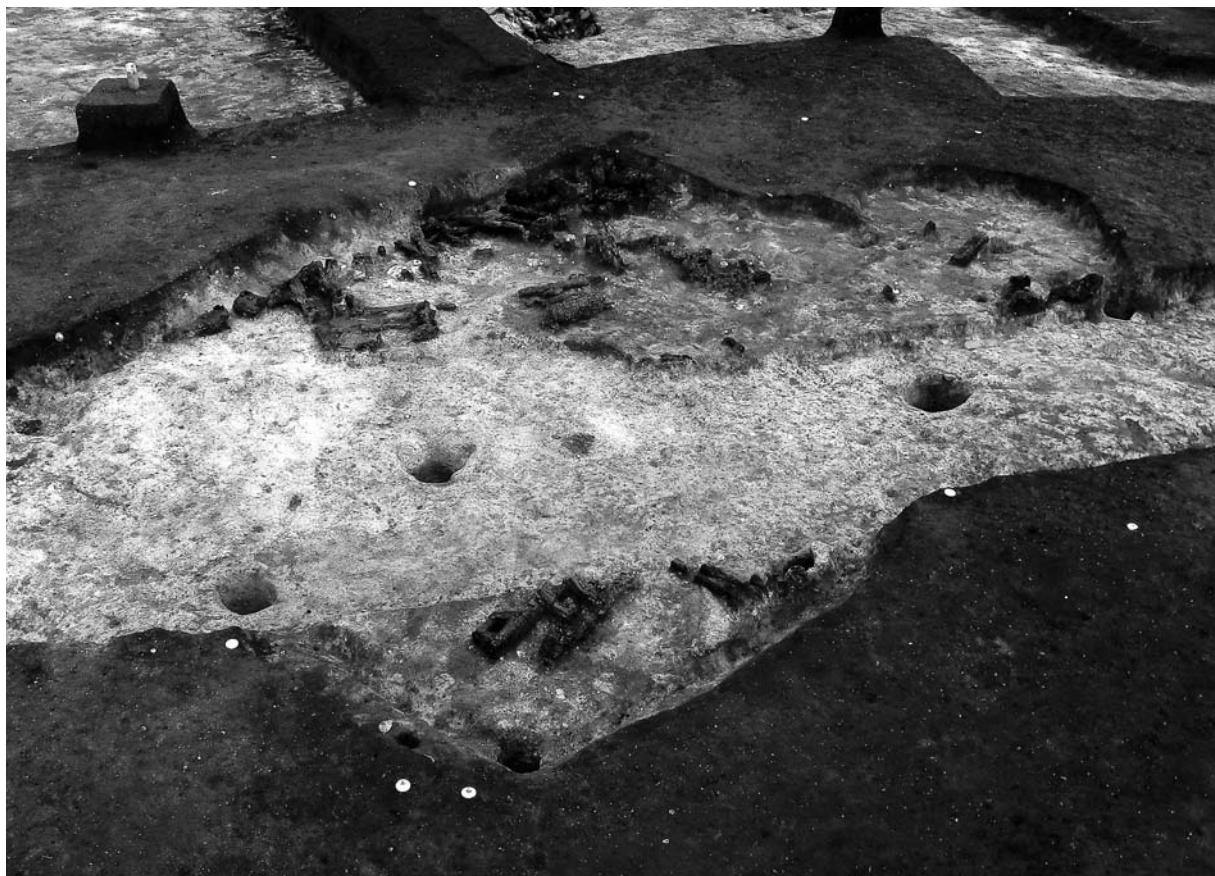
S D 76道跡（左上：南西→・左下：南端部北西→・右：北東→）



S B 200、S A 173・179 (北→)



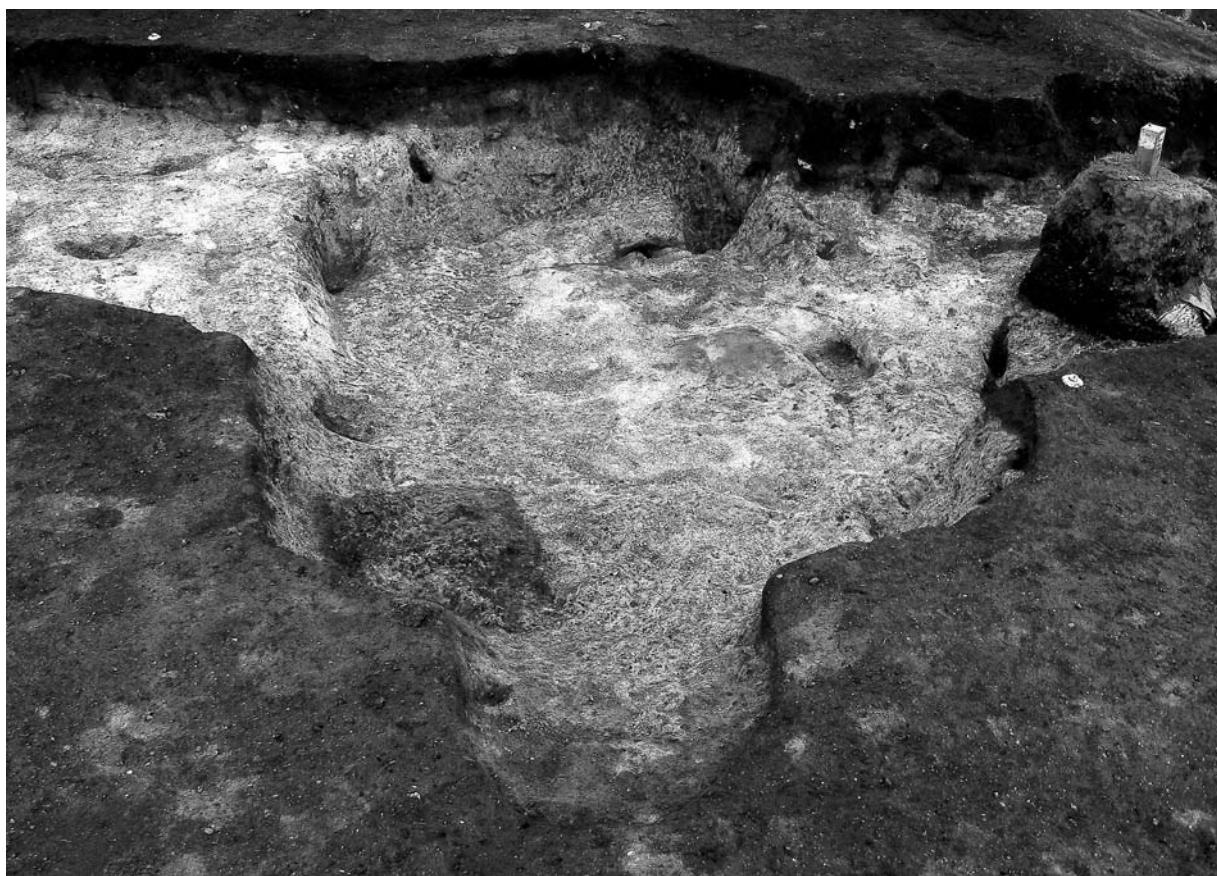
S B 251、S A 252・253・521 (南→)



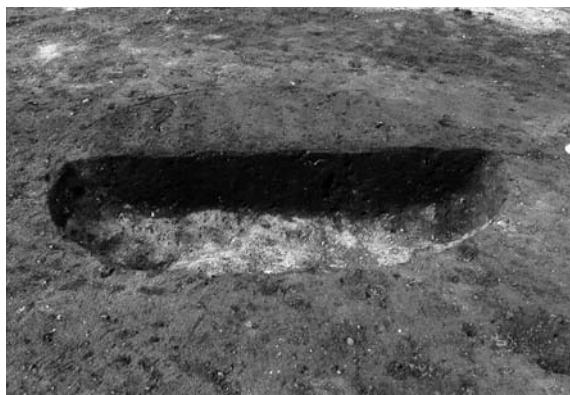
SK I 13炭化材検出状況（西→）



SK I 13屋根材堆積状況（南東→）



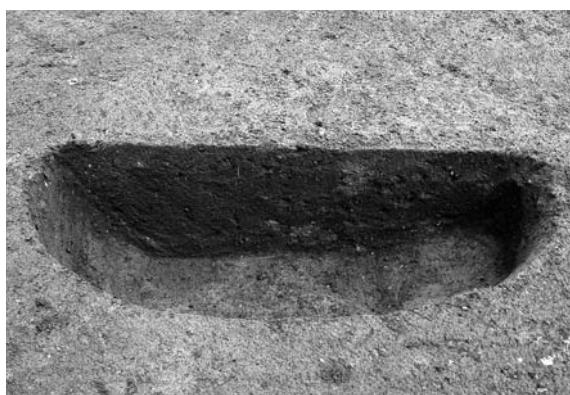
SK I 18完掘（南西→）



SK 46土層断面（南→）



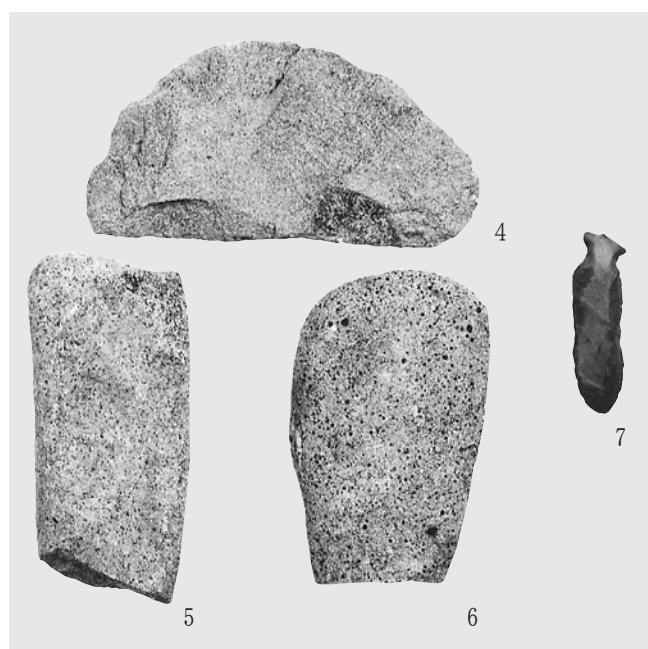
SK 53確認状況（北→）

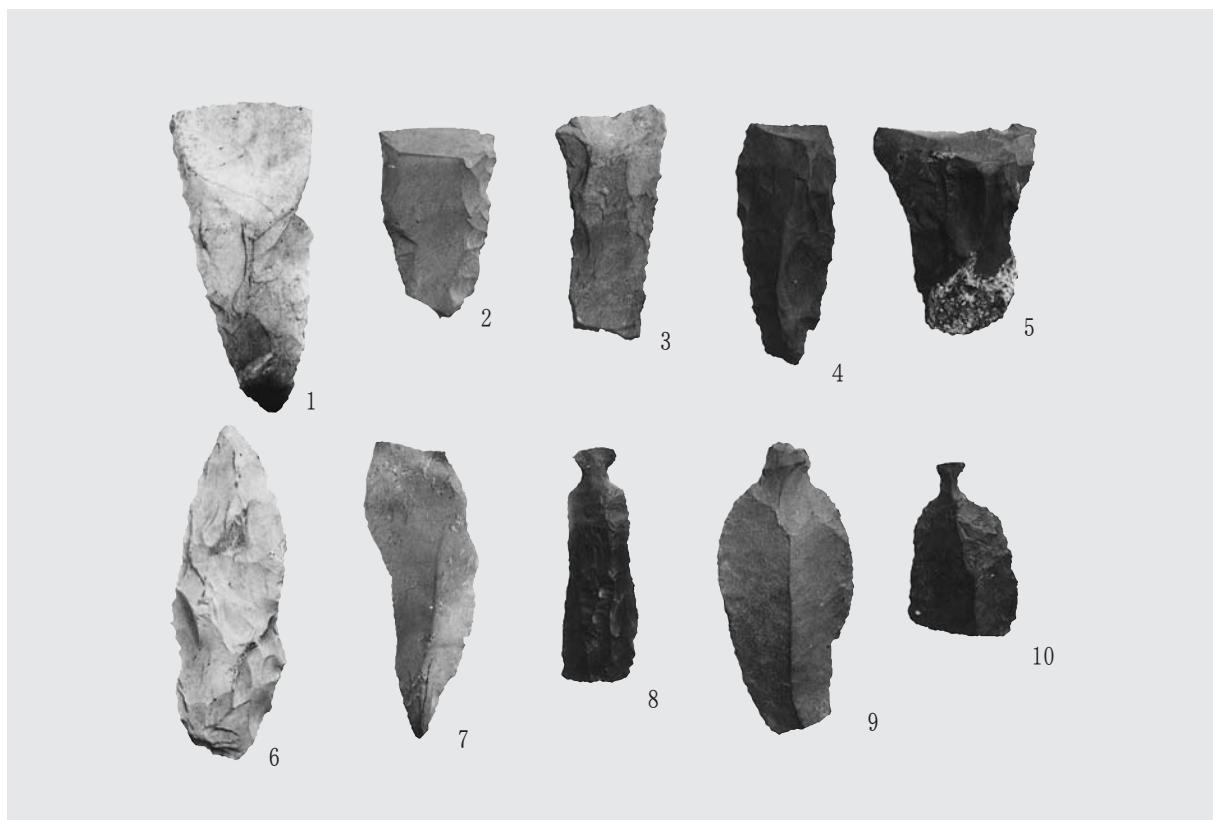


SK 62土層断面（東→）

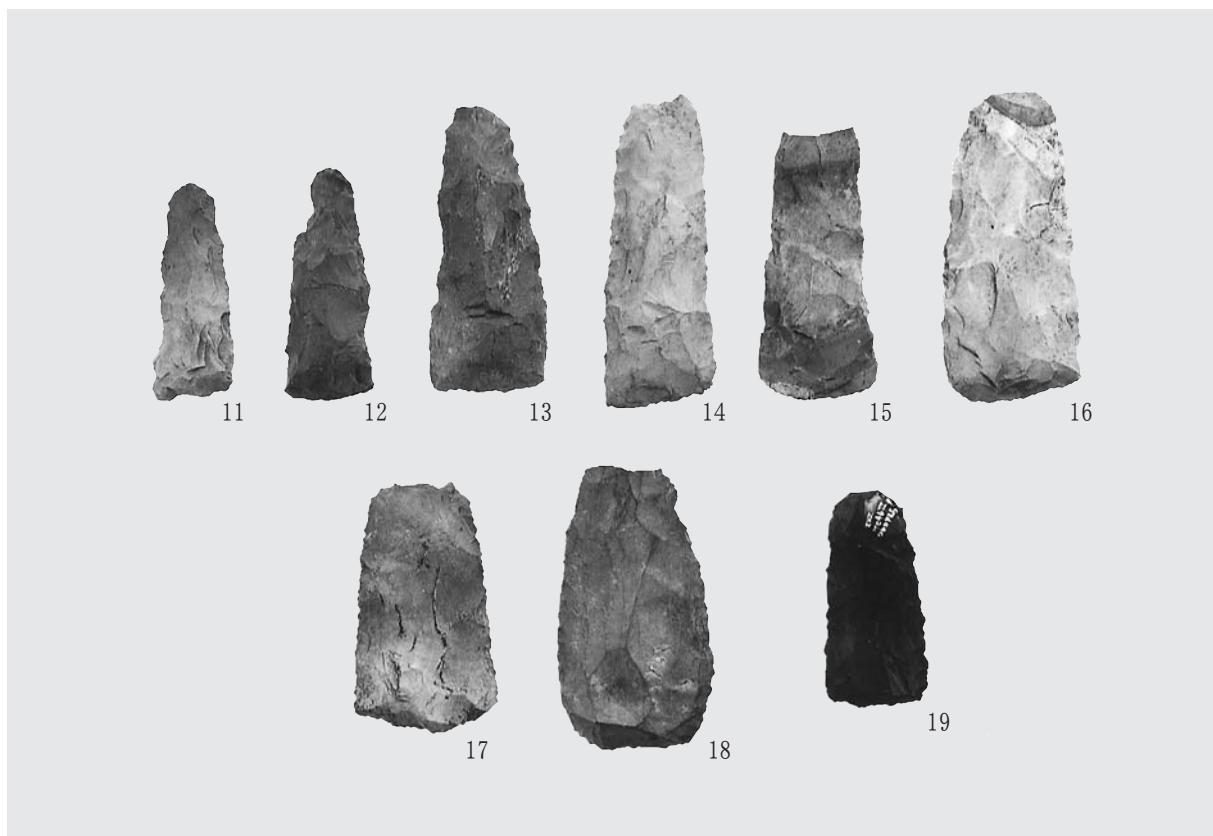


SK 211完掘（南東→）

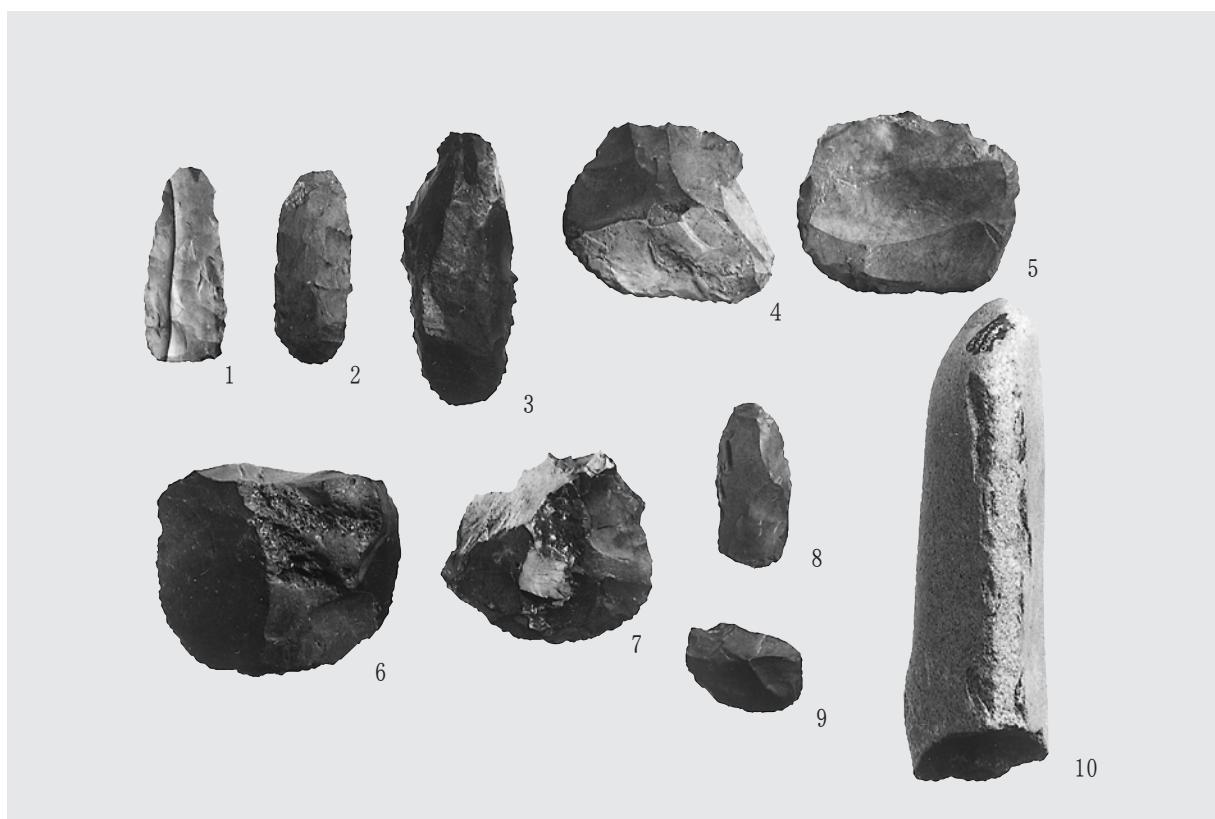




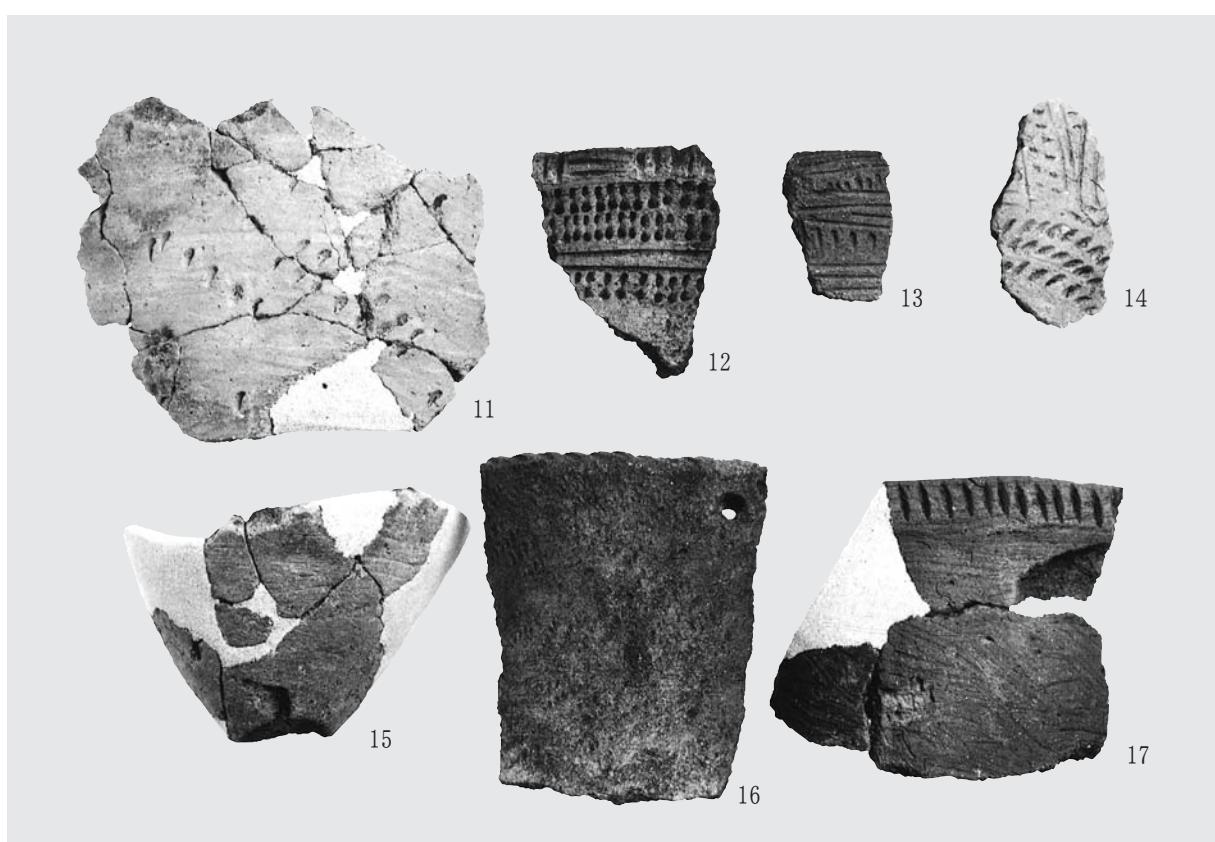
1 遺構外出土石器



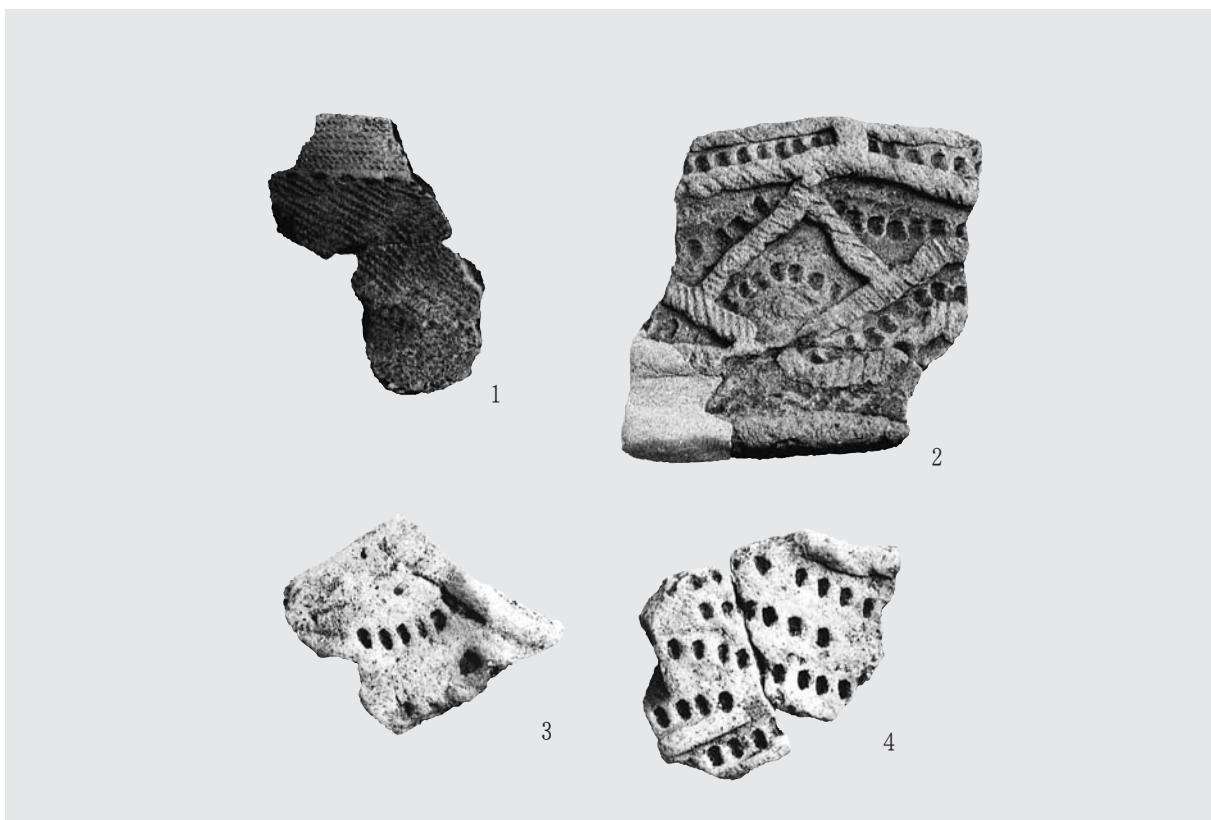
2 遺構外出土石器



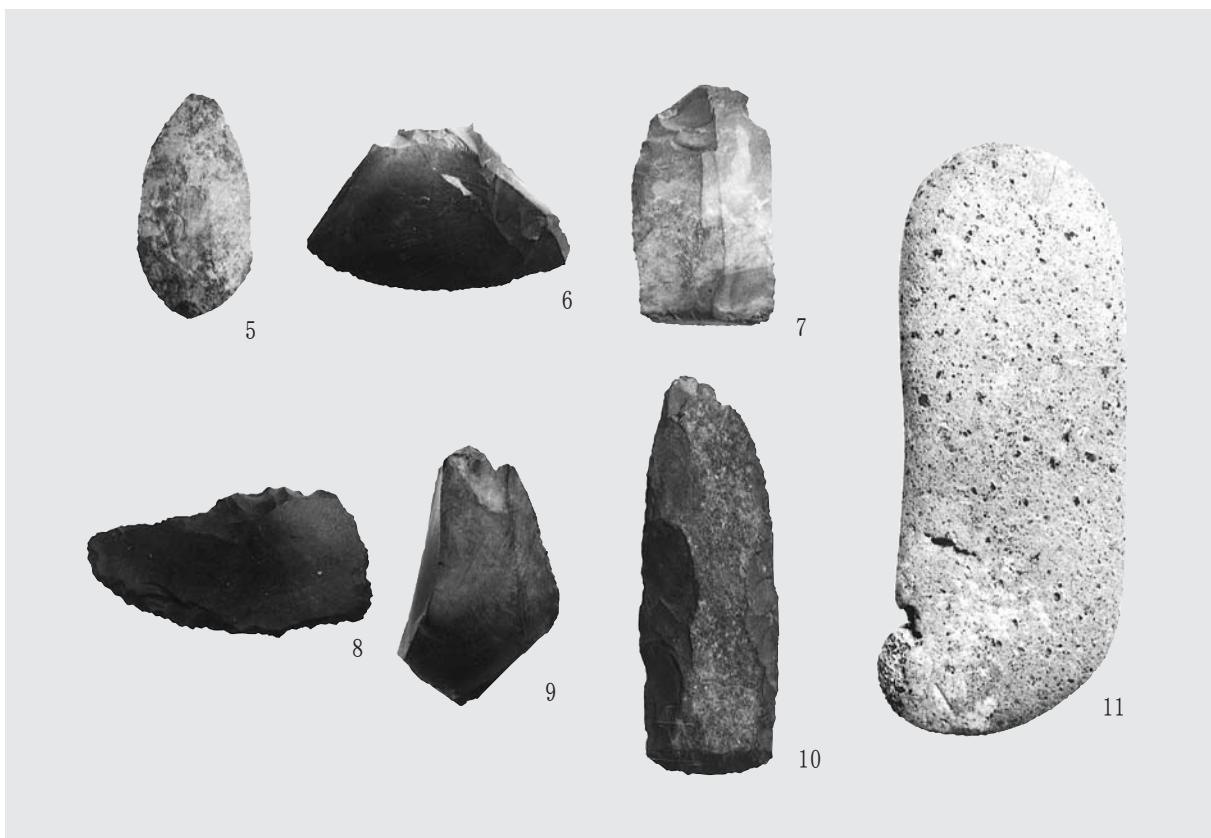
1 S Q44出土石器



2 遺構外出土土器（縄文早期）



1 遺構外出土土器（縄文前～中期）



2 遺構外出土石器



1

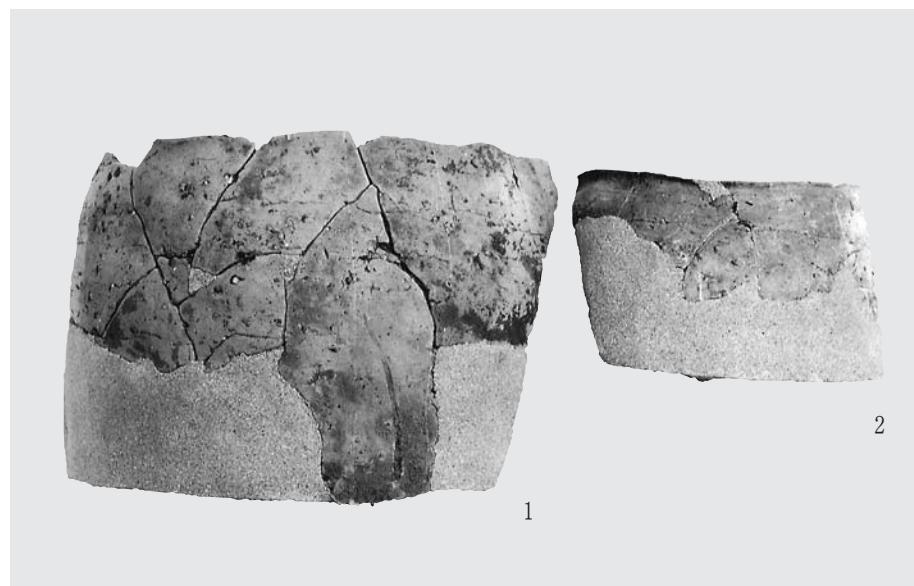
1 S I 01出土土器（支脚）



2-表

2-裏

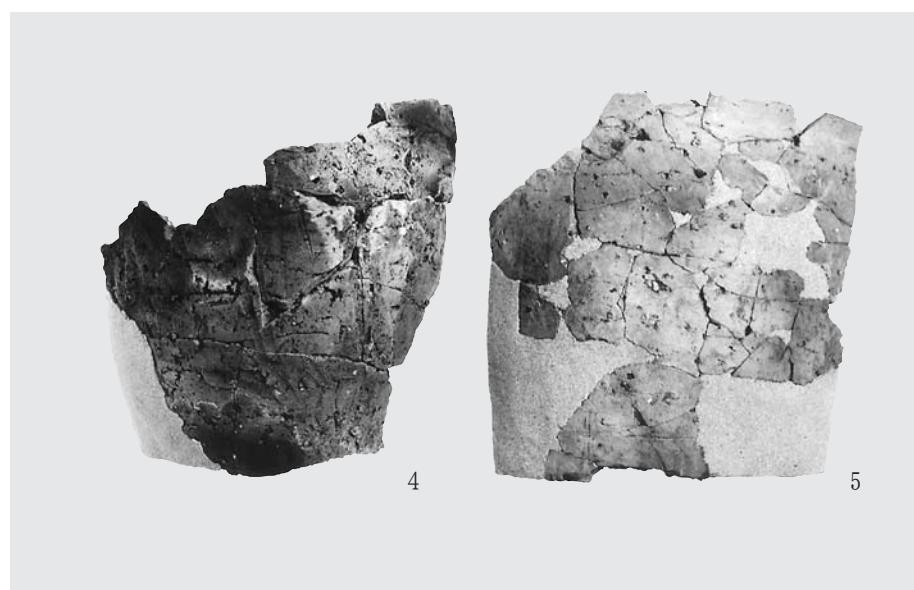
2 S I 01出土鉄製品（刀子）



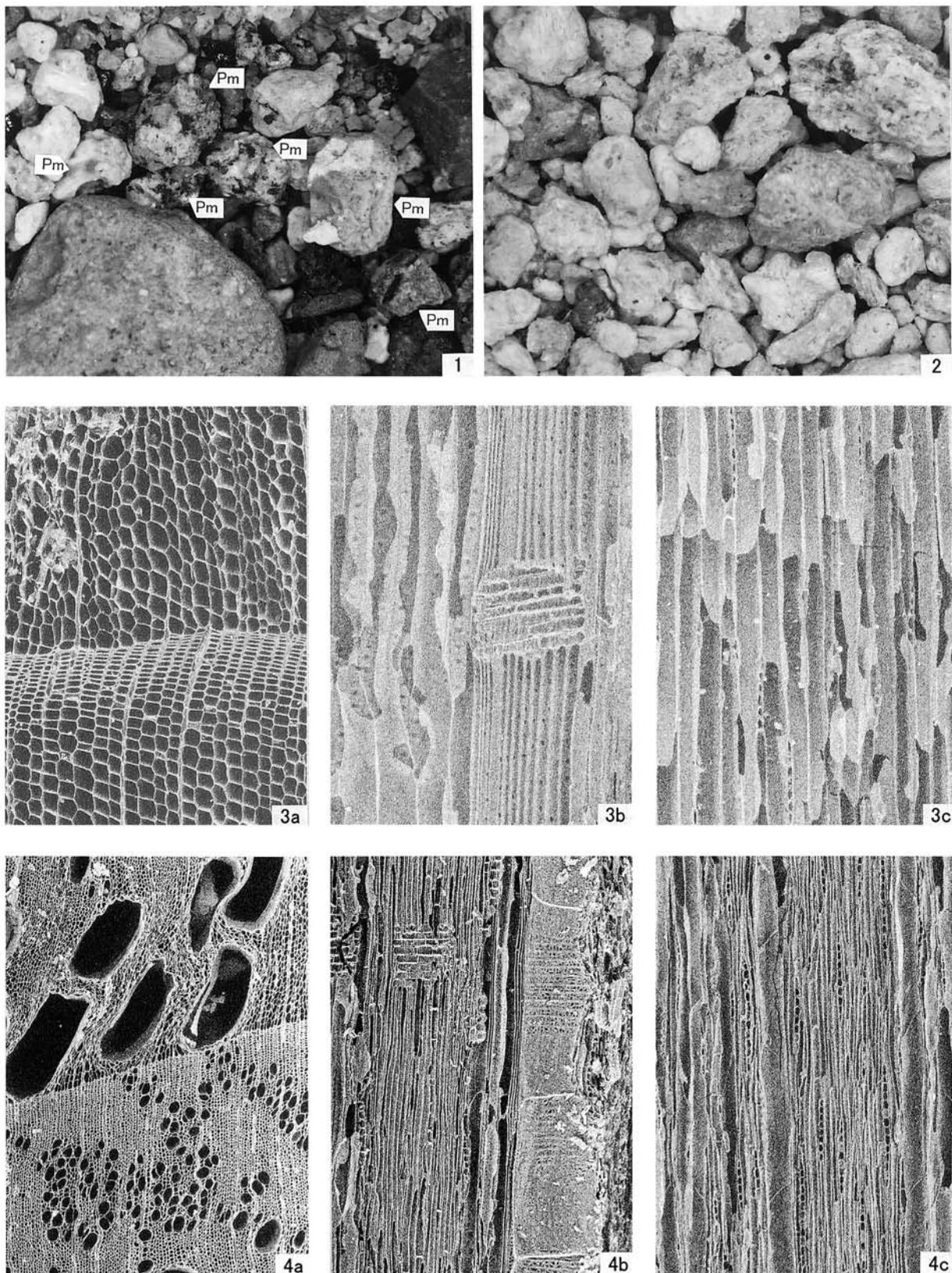
1 S I 03出土土器



2 S I 03出土土器



3 遺構外出土土器



1.To-aの軽石 (S D 130;10)

2.To-aの軽石 (調査区南西端土層;11)

3.ヒノキ科 (SK I 13材西1;1) a:木口, b:柾目, c:板目

4.クリ (SK I 13カヤ東側;2) a:木口, b:柾目, c:板目

3mm

(1·2)

200 μm

(4a)

200 μm

(3a·4b,c)

100 μm

(4b,c)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	のざきいせき							
書名	野崎遺跡							
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	XXVI							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第429集							
編著者名	袴田道郎・藤田賢哉・保坂麻実							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 電話 (0187) 69-3331							
発行年月日	西暦 2008年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺 跡 番 号	。	。			
のざきいせき 野崎遺跡	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 あきひとどめあざのざき 商人留字野崎 51-8外	05204	4-153	40° 18' 53"	140° 34' 53"	20060606 20061031	5,400 m ²	日本海沿岸 東北自動車 道建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
野崎遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡	1軒		縄文土器、石器	縄文時代、	
			フ拉斯コ状土坑	2基		土師器・須恵器	平安時代、	
			土器埋設遺構	2基		鉄製品・鉄滓	室町時代の	
			石器製作跡	1基			複合遺跡。	
			土 坑	8基				
			焼土遺構	2基				
			柱穴様ピット	59基				
		平安時代	堅穴住居跡	3軒				
			道路遺構	1条				
			溝 跡	15条				
			土 坑	5基				
			柱穴様ピット	31基				
		中世	掘立柱建物跡	2棟				
			堅穴状遺構	2軒				
			柱 穴 列	5列				
			土 坑	6基				
			焼土遺構	2基				
			柱穴様ピット	83基				
					計 230 遺構			

報 告 書 抄 錄

ふりがな	のざきいせき							
書名	野崎遺跡							
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	XXVI							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第429集							
編著者名	袴田道郎・藤田賢哉・保坂麻実							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 電話 (0187) 69-3331							
発行年月日	西暦2008年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北 緯 °' "	東 經 °' "	調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因
市町村	遺 跡 番 号							
のざきいせき 野崎遺跡	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 あきひとどめあざのざき 商人留字野崎 51-8外	05204	4-153	40° 18' 53"	140° 34' 53"	20060606 20061031	5,400 m ²	日本海沿岸 東北自動車 道建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野崎遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡	1軒	縄文土器、石器	縄文時代、 平安時代、 室町時代の 複合遺跡。		
			フラスコ状土坑	2基	土師器・須恵器			
			土器埋設遺構	2基	鉄製品・鉄滓			
			石器製作跡	1基				
		平安時代	土坑	8基				
			焼土遺構	2基				
			柱穴様ピット	59基				
			堅穴住居跡	3軒				
			道路遺構	1条				
		中世	溝跡	15条				
			土坑	5基				
			柱穴様ピット	31基				
			掘立柱建物跡	2棟				
			堅穴状遺構	2軒				
			柱穴列	5列				
土坑	6基							
焼土遺構	2基							
柱穴様ピット	83基							
計230遺構								

秋田県文化財調査報告書第429集

野崎遺跡

—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XXVI—

印刷・発行 平成20年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330

発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話(018)860-5193

印 刷 株式会社三森印刷

